

---

# バカとクロスとつたなき物語

三月語

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとクロスとつたなき物語

### 【Zコード】

Z9986

### 【作者名】

三月語

### 【あらすじ】

「バカとテストと召喚獣」を元にしたクロス小説！  
イメージ崩壊したくない人は回れ右することを推奨します。

ただ今、次の事を募集中！

1・バカテスト 問題と正答

1

感想に書いてください。

## キャラ説明（Fクラス編その?）

キラ紹介（Fクラス編その?）

キラ・ヤマト（SEED） 16、  
実力、Aクラス主席確定。

女子に好かれやすい。

召還獣は自身のB-を着た。

腕輪はH・M・F・Bとミーティア換装。たまに無双化して暴走する。

高町なのは（なのは） 16、

ルカのことが好き。理数系は強いが後からつきし。

召還獣はRHセットアップ状態、腕輪はSLB。魔王化する。

フェイ特・T・ハラオウン（なのは） 16、

キラのことが好き。そのためトンデモ行動をすることも。

召還獣はバルディッシュセットアップ状態。腕輪はジエットザンバー。雷光一閃！

アリシア・T・ハラオウン（なのは） 16、

フェイ特の双子の姉。キラのことが好きだが、フェイ特よりは暴走しない。

召還獣はストライクセットアップ。腕輪はフェイ特と同じ。

レオン（ピカ、）

昔、「黄刃纏いし死神」と恐れられた。実際お調子もの。

実力はAで召還獣の扱いもなかなかのもの。

召還獣は死神兵装。腕輪は換装、サイズ拡大、晶術詠唱など。無双化を制御できる。

## キャラ紹介（Fクラス編その2とAクラス編）と謝罪

どうも、三月語です。  
まず、謝罪を。

いきなりキャラ紹介で始めてすいません！PCがないためPSPで投稿できなかやつって少ない＆紹介ナシになってしましました。キャラ紹介はSEEED、なのは、ととモノ2、TOI、ポケモンしかしません。オリキャラは読めば分かるものばかりにしたためです。ただ、召喚獣は後々紹介します。

では、紹介続きです。

### Fクラス

#### レイン（プリン）

昔は「気弱な突撃槍」と呼ばれた。

鉄人か怖い。見たら泣く。召喚獣は重騎士鎧とゲイボルグ。

泉戸このは（ととモノ2、ヒューマン戦士科） 16、  
キラのことが好き。実際の実力はBクラス首席。

召喚獣はアルセリオン（武器形状、湾曲刀・双刃）セットアップ状態。腕輪は泉戸流剣術、豪火車の発動。

### Aクラス

#### アスラン・ザラ（SEEED）16、

キラの親友。はやてに堂々と恋人宣言された（告白済みで）

召喚獣はジャステイズ。腕輪はファトウム01射出、ミーティア化。

#### ルカ・ミルダ（TOI） 16、

キラ達の親友。しつかりしているが、臆病なところも。実力は本気をだせばキラと同等。

召喚獣は魔神アスラ。腕輪は魔王灼滅刃発動。

ハ神はやて（なのは） 16、

アスラン好きーな夜天の王。料理得意。

召喚獣はBジョセットアップしたもの。腕輪は広域型魔法発動。

ニコル・アマルフィ（SEED） 16、

アスランとは小学校以来友人。

召喚獣はブリッツ。腕輪はあるが、使わない。フルフェイスによる全強化。

## キャラ紹介（Fクラス編その2とAクラス編）と謝罪（後書き）

次回から本編、始まります。

次回、プロローグ「全ての始まり、振り分け試験」

2月25日、このはのデバイス・アルセリオンについて追加しました。

## プロローグ 「全ての始まり 振り分け試験」 その一（前書き）

三月語です。

また謝罪から始まつてすいません。

クロスなのにオリジナルになつてゐるといつ指摘があつたため修正しました。

ただの記入忘れです。

後、指摘の言葉はもう少し軟らかいものでお願いします。つらいので。

## プロローグ 「全ての始まり 振り分け試験」 その1

(明久)「これが難しいと評判の振り分け試験か……確かに難しいけど問題ない……」の程度なら……」

十問に一問は解ける！

朝日の朝。

「キラも大変だね、インフルエンザなんて。」

登校中そう言つたのはルカ・ミルダ。彼は友人—高町なのは、アスラン・ザラ、八神はやて、フェイト・T・ハラオウン、アリシア・T・ハラオウン、泉戸このは、レオンーと歩いていた。

「うん……フェイトちゃんもこのはちゃんもちゃんと試験受けてくれないと思う（が／けどなあ）。」……だよねえ……」

アスラン、はやてが無理だと口を挟む。

『そんなことない……と思う「アホか！（シパン！）」痛い（よ／、レオン）……』

フェイト、このはが否定したようなことを言い、レオンが制裁を与えた。

「二人ともさあ、キラと同じクラスに行きたくないの？」

『・・・』

「・・・あれ？」

「レオン、キラは『クラス確定だよ?』

「・・・Real?」

「レオン君。」

「何? なのは

「勉強・・・した?」

なのははレオンに然るべき」とを聞いた。だが、返ってきた答えは、「全くしてない！」

その返答にアリシアは、

「寝るつもりだね?」

と聞く。

「当然の理なり・・・」「当然じゃないよ!」 だつて昨日紛争根絶してきた「ゲームでの話だろ? それ。お前はじつせ深夜までやつてたんだろ?」 ちよつ、アスラン!」

さも当然だと言つがなのはにつけられ、言訳したらアスランに真実を暴露されるレオン。

数分後、「着いた。」

彼らは、「じゃ、放課後に。」 とレオンが言つたのを期に各自別れていった。

## プロローグ 「全ての始まり 振り分け試験」 その一（後書き）

おかしこじ」といふ、ありましたら指摘お願ひします。

2月25日、文章に間を開けるといいといいう助言をもらつたので修正しました。それにもない、文章を追加しました。

## プロローグ 「全ての始まり 振り分け試験」 その2

校門にて。

「よーし明久、テスト前の小手調べだー三権分立は・・・えーと・・・  
・「司法」と「立法」ともう一つは何で成り立つか?」

雄一は明久にそう問題をだした。

「ふ・・・あまり僕を見くびらないでくれよ雄一・・・」と明久は返す。

「・・・」つまでは絞れる。」「

「ほう(ー)(ー)・・・?」」「

「憲法」か「漢方」のどっちかだったはず・・・

自信満々にいう明久。

「「行政」だ／よ

「え?」「

「ちょっと心配だからアキ君に私も問題だすね?」

「夏美からも?」

「二酸化炭素の化学式は?  
「CH<sub>2</sub>」。」

明久は真面目に答えた。

「幼なじみの私でもアキ君がここまでバカなの知らなかつた……  
「そんなことないよ、夏美！」

「あ、それじゃウチからも〜！」

美波が明久に問題をだす。

（うわあ、追い撃ちだ。）と夏美は思った。

「では基礎問題！CH<sub>3</sub>COOHとは何でしょ〜？」

「・・・・・」

明久は何も言わない。汗もかきはじめた。そして・・・

「（ふいっ）」

「吉井？」

「・・・・・ 英語は苦手なんだ。」

「え・・・？これ英語じゃなくて化学」「じゃあ僕こいつちだから…  
ちょ、ちょつと吉井！あんた相当ヤバいんじゃ！？」

明久が走り去つた後、ある疑問を雄一に言った。

「アキ君、Eクラスになれるかなあ？雄一、どう思う？」

「無理だな。」

「やつぱり。」

「なのは、「メンー私早退するー」

「私も！」

「えー? なんでー?」

いきなり早退しようと二人に驚くのは。

『キラが心配だからー!』

「ちょっとー! 一人ともー!」

それを遠くから見ていたレオンとレイン。

「やつぱり。」

「Fクラスが3人に「4人よ。」木下姉か。」

「レオン? 姉つて?」

「だつて秀吉がいるじゃん?」

「あ、そつか。それで、4人つて?」

「優が休んだの。」

「なるほど。」

「それで、さつきのは?」

「キラのためにすつ飛んでつた。」

「納得したわ・・・」

で、最初に続く。

「20点は堅いな。」

ふらつ・・・・カツ！

「ん？ 姫路さ（ガタソー）姫路さん！？」

「吉井、静かに！」

「でも姫路さんが！」

「姫路、体調が悪いなら保健室に行くか？ ただし、試験中の退席は「無得点」扱いとなるが、それでいいかね？」

「はあつ・・・はあつ・・・」

「ちょ、ちょっと先生…具合が悪くなつて退席するだけでそれは酷いじゃないですか！」

「体調管理も実力の内だ。」

「でも…」

「・・・退席・・・します・・・。」

次回 第一問、「結果と紹介と戦争の引鉄」  
ひきがね

## プロローグ 「全ての始まり 振り分け試験」 その2（後書き）

次回から第一問が始まります。

それで、バカテストも書いていきますが、第十問で終わらなかつた場合、作者にネタがありません。そこでお願いですがバカテストに使える問題を募集します。内容としては、問題と正答を感想に書いていただければありがたいです（正答が解らないと困るので）。あと、携帯で化学式を打つ方法（酸素など）を教えてください！よろしくお願いします。

2010年3月31日までは木・土・日に更新が出来ません。

2月25日、修正と大幅な追加をしました。

## 第一問 「結果と紹介と戦争の引鉄」 その1（前書き）

時間ができたので出しました。

3 / 1 サブタイトル直しました。

## 第一問 「結果と紹介と戦争の引鉄」 その1

### 第一問

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが調理を始める時問題が発生した。毛のときの問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい。』

姫路瑞希・キラ、ヤマトの答え

『問題点・・・マグネシウムは火にかけると激しく酸素と反応するため危険であるという点。』

『合金の例・・・ジュラルミン』

### 教師のコメント

正解です。合金なので「鉄」では駄目という引っ掛け問題だったのですが一人は引っ掛けられませんでしたね。

レオンの答え

『合金の例・・・D u r a l u m i n』

### 教師のコメント

まさか英語で答えるとは思いませんでした。ただ、他の問題に回答がないのは何故ですか？

土屋康太の答え

『問題点・・・ガス代を払つてなかつたこと』

教師のコメント

や」は問題ではありますせん。

吉井明久の答え

『会員の例・・・未来会員（すいじゆへいん）』

教師のコメント

すごく強いと言われても。

桜咲く道を、見慣れた団体が歩いていた。

「フヒイトちゃん、もう済んだことだからカジカジしないでー。」

「でも・・・」

「やつこさんはのはれやは試験の出来、どうなん?..」

「Aクラスに行く自信があるー。」

「とこいけどな。」

「アスラン君ー。」

校門には鉄人こと西村先生がいた。

『西本先生（鉄人）、おはようござります。』

「皆、おはよう。レオン、鉄人といつなと書いてるだの？…これがお前の結果だ。」

ガサガサ・・・

「泉戸、ハラオウン、お前らは本当に信じられないことをしたな。何故あんなことを『キラが心配だつたからです』・・・全く・・・」

「ルカ君、どうだつた?」

アカデミー

「な、なのむちゅん！？ ピリしたん！？」

「私・・・私・・・」

それぞれの結果。

なのは、フロイト、アリシア、このは、レオン、レイン・・・

つまり・・・

「ルカ君とクラス離れたあ～～！」

「そして無残にも自信は裏切られたと。」

「アスラン、酷いと思いますよ？」

「レオン、お前テストの間寝てただろう！」

「鉄人、見逃して？」

「つたく、堂々と鉄人と言えるのはお前だけだぞ。そしてレイン、涙目になるな。」

彼らはそれぞれの教室へ向かった。

Fクラス。

「うつわ、ひつど！」

「設備・・・寂しいね。」「うつ・・・

一人まだ泣いてるが。

「まだ誰もいな「ワシだけじゃ。」秀吉ー。」

「意外な顔触れじやのう。そして、なぜ朝から高町が泣いておつて  
ハラオウンが慰める、という光景が見られるのじや？」

「実は、結果で・・・」

レオンが原因を説明した。

「・・・なんともわかりやすい理由じゃのう・・・秀吉が納得したとき、教室の戸が開いた。

「皆さんおはよー」さわ・・・けほつけほつ。」

「春原さん、風邪、大丈夫?」

「まだ完治とはいえないが・・・」のはなちゃん。  
「どうしたの、優?」

「朝の悲鳴?」の現状は何なんですか?」

「それは・・・」

現状説明中・・・

「なるほど。大体は・・・けほつー。」

「座った方がいいよ、優、まだ病み上がりでしょ?  
「そうさせてもらいます・・・」

次回、「結果と紹介と戦争の引鉄」その2

## 第一問 「結果と紹介と戦争の引鉄」 その1（後書き）

とこ「ハ」と第一問です。その一ですが。  
秀吉の翁言葉、はやての言い方に苦労しました。  
得にはやて。完全に関西弁でなかつたので。  
次もお楽しみいただけたら幸いです。

次回はついで、キラ・ヤマト登場です！

## 第一問 「結果と紹介と戦争の引鉄」 その2（前書き）

そんなわけでその2です。ちなみに第一問の、なので「バカテスト」はありません。

つまり、各問の始めにしかだないわけです。そこをお願いします。

## 第一問 「結果と紹介と戦争の引鉄」 その2

その頃、玄関付近では。

「吉井、遅刻だぞ。」

明久は玄関の前でドスのきいた声に呼び止められる。  
明久が声のした方を見ると、西本教諭が立っていた。

「あ、鉄じ・・・じゃなくて、西村先生。おはようございます。」

明久は軽く頭を下げる挨拶をする。

「今、鉄人つて言わなかつたか?」

「ははっ。氣のせいですよ。」

「ん、そうか?」

ちなみに鉄人とは、生徒の間での西本教諭のあだ名で、由来は趣味であるトライアスロンである。

「それにしても、普通に『おはようございます』じゃないだろ?」が。

「あ、すいません。えーっと・・・今日も肌が黒いですね。」

「・・・お前には遅刻の謝罪よりも俺の肌の色の方が重用なのか?」  
「そっちでしたか。すいません。」

「まったくお前といつやつは・・・いくら罰を与えても全然懲りな

いな。」

西村教諭は溜息混じりにつぶやいた。

「先生。僕、遅刻はあまりしてないですよ?」「遅刻は、な。ほら、受け取れ。」

西本教諭が箱から封筒を取り出し、明久に差し出した。宛名の欄には『吉井明久』と、大きく名前が書かれていた。

「あ、ビーもです。」

明久は一応、頭を下げながら受け取る。

「それにしても、どうしてこんな面倒なやり方でクラス編成を発表してるんですか?こうやっていちいち全員に封筒を渡さずに掲示板とかで大きく張り出しちゃえればいいのに。」

「普通はそうするんだがな。まあ、ウチは世界的にも注目される最先端システムを導入した試験校だからな。この変わったやり方もその一環ってワケだ。」

「ふーん。そういうもんですかね。」

明久は適当に相槌を打ちながら封に手をかける。

「吉井、今だから言うがな。」「はい、なんですか?」

「俺はお前を去年一年見て、『もしかすると、吉井はバカなんじゃないか?』なんて疑いを抱いていたんだ。」

「それは大いなる間違いですね。そんな誤解をしていくよ! ジヤ、さらに『節穴』なんてあだ名をつけられちゃいますよ?」

「ああ。振り分け試験の結果を見て、先生は自分の間違いに気がついたよ。すまなかつた。」

「そういうともらえると嬉しいです。」

なかなか開かないため、上側を破く。

「喜べ吉井。お前への疑いはなくなつた。」

明久は折り畳まれた紙を開き、書かれているクラスを確認する。

『吉井明久・・・Fクラス』

「お前は、正真正銘のバカだ。」

一方。

「・・・ら、起きる、おい、起きるつてー! キラー!」

「・・・あれ、ヴィータちゃん?」

「早く起きるー!」のままだと遅刻だぞー!」

「本当にー? ありがとう、ヴィータちゃん!」

「ちゃん付けはやめるー。それとアタシはフェイトに頼まれて起こしに来ただけだからなー！」

「助かったよー！」

「オメーはまだ病み上がりなんだから無茶すんなよー。」

「わかつた！」

その頃明久は。

「・・・なんだろう、このばかテカイ教室は。」

彼は三階にいた。

足を止めて中を覗いてみると、知的女性の代表のような教師がいた。

「あつー！あればリクライニングシートー？個人工アコンに、冷蔵庫、ノートパソコンまでー！」

羨ましがって見ていると誰かが前に行つた。

「彼女が代表なのかな？っと、こうしてはいられない。僕も自分のクラスに行かなきゃ。」

明久は走り出さない程度一廊下を急いで進んで行つた。

明久がクラスへ向かっている頃、玄関では。

「キラ、お前が最後だ。」

「西村……先生……、おはよっ……」いれています……。」

「試験前日にインフルエンザに罹るとは、哀しいな。ほら、結果『僕はFクラス……ですよね?』見なくても分かるか。」

「ええ、流石にそれは分かります……」

「全速力で走ったのだろう?お前はまだ病み上がりなんだから、少し休んでいけ。」

「そう……します……」

次回、第一問 「結果と紹介と戦争の弓鉄」 その3

第一問 「結果と紹介と戦争の引鉄」 その2（後書き）

今日中に最低あと?話分だします。

感想、指摘がありましたらお願いします。

第一問 「結果と紹介と戦争の引鉄」 その3（前書き）

第一問その3です。お楽しみください

## 第一問 「結果と紹介と戦争の引鉄」 その3

一年F組と書かれたプレートのある教室の前で明久は少しだけ躊躇していた。

「（遅刻なんてしてきて、皆に悪い印象を持たれたりしないかな・・・。嫌なヤツや痛いヤツはいないかな・・・）なんて、考えすぎかな。」

明久は勢いよくドアを開けてから愛嬌たっぷり言い放つた。

「すいません、ちょっと遅れちゃいました」

『早く座れ、このウジ虫野郎／凡骨！』

台無し・・・

『聞こえないのか？ああ？』

「雄一、レオン、何やつてんの？」

教壇に上がっていたのは明久の悪友、坂本雄一とレオンだった。

「先生が遅れているらしいから、代わりに教壇に上がってみた。」「僕はノリで。あれのせいでの少し鬱になつててね。ふい。スッキリ！」

明久が見た方には・・・

「なんでダメだったの～！？」

「な、なのは、落ち着こ？H R始まるよ？」

「ルカ君と同じクラスがよかつた～！フ H I T ハちゃんが羨ましきよ  
～！」

「なのはちゃん、ホントに落ち着こ？」

未ださめざめと泣き続けるのはを必死に慰めようとしているフ H  
イトといのはが見られた。

「・・・なるほど、高町さんが結果で絶望してたんだ。あ、先生の  
代わりつて、雄一が？なんで？」

「一応」のクラスの最高成績者だからな。」

「え？それじゃ、雄一がこのクラスの代表なの？」

「ああ、わかった。」

雄一は一矢つと口の端を広げた。

(雄一を説得すれば、このクラスを動かせるってワケだ。)

「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

明久が考え込んでいたら、不意に後ろから霸氣のない声が聞こえて  
きた。

「えー、おはようございます。一年F組担任の福原慎です。よろしくお願いします。」

福原先生は名前を薄汚れた黒板に書こうとして、やめた。  
チョークがない。

その後も、備品に不足はないか、と聞いた。

複数の生徒が不備を訴えたが、我慢しろ、等言っていた。  
「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします。」

福原先生の指名を受け、車座を組んでいた廊下側の生徒の一人が立ち上がり、名前を告げる。

「木下秀吉じや。演劇部に所属してある。」

木下秀吉。小柄で翁言葉が特徴。ぱっと見ても女子と見間違える。  
(じつくじ見ても同じである。)

「・・・と、いうわけじや。今年一年よろしく頼むぞい。」

(レオン・明久が慌ててら。後で弄る。)

「・・・土屋康太。」

土屋康太。口数は少ない。

「・・・です。海外育ちで、日本語は会話は出来るけど読み書きが苦手です。」

(レオン・お、！」の声は…)

「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は・・・」

「

(レイン・ま、まさか・・・)

「趣味は吉井明久を殴ることとレインを弄ることです」

(レオン・キターーーーー！)

(レイン・イイイイイイヤアアアアアアッ！)

レオンがヨツシャーッ！と言わんばかりに右手を上げ、レインはムンクの叫び状態になっていた。

「はうはうー。」

「・・・あう。し、島田さん。」

「吉井、今年もよろしくね。レインも。」

島田美波。明久、レインの天敵。

(レイン・僕、死んだ・・・)

淡々と自分の名前を告げていく。

「レオンです。皆よろしく〜。」

「兄者アアアアアア！（明久）」

「ちよつとまで！誰じや今兄者ついたのは！」

「次の人に、どうぞ。」

「あ、ひやい！（舌歛んだ。。。（

レインが立ち上がる。

えりと、レインです。よろしくお願ひ申し上げます。」

一  
囁  
ん  
だ

十五

一  
・  
・  
・次の人

「・・・コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』と呼んでくださいね」

【ダアアアアアアアリイイイイイン！】

「（不愉快だ……）……失礼、忘れてください。とにかくよろしくお願い致します。」

明久に吐き気が襲う。

「次の人どうだ。」

「アリシア・T・ハラオウンです。よろしくお願いします」

【俺と付き合つて「無理。」なぜ…?】

「理由は言えません」

「次の人。」

「あ、はー。泉戸このはです。私は告白したヤツは半殺しにします  
よろしくお願ひします」

（（怖つ……））

（このは、キラは渡さないから…）

（フハイトちゃん、私も渡す気はないからね…）

自己紹介が進んでいて、フェイト、このはの間の男子の紹介がすんだとき、ふいに教室のドアが開き、胸に手を当てた女子生徒、少し遅れてフラフラになりながら男子生徒が入ってきた。

「あの、遅れて、すいま、せん……。」

「遅れ、ました……。」

【えつ？】

誰からといふわけでもなく、教室に驚きがあがる。

そのとき、数少ない平然としている人物の一人、福原先生が姿を認め、一人に話し掛けた。

「丁度よかったです。今自己紹介をしてくるといふので一人もお願いします。」

「はい、はい！（キラ・はい。）あの、姫路瑞希といいます。ようしくお願ひします・・・」

「キラ・ヤマトです。ようしくお願ひします。」

キラが挨拶した瞬間フェイトといのはが一人の間にいる男子に（びけ！）と田で訴え他の席に座させていた。

次回、第一問 「結果と紹介と戦争の弓鉄」 その4

第一問 「結果と紹介と戦争の引鉄」 その3（後書き）

後1～2話は続きます。すいません。  
かなり粗削りしてはいますが、それでも他キャラやオリキャラの台詞があつて長くなってしまい、携帯なので長く打てないんですね。  
言い訳でした。

第一問 「結果と紹介と戦争の引鉄」 その4（前書き）

第一問その4です。  
うまくまとめられずにすいません。

## 第一問 「結果と紹介と戦争の引鉄」 その4

「はいっー質問です！」

既に自己紹介を終えた男子生徒の一人が高々と右手を擧げる。

「あ、は、はい。なんですか？」

いきなり質問が向けられ、姫路は驚く。その時の動き方はまるで小動物だった。

「なんでここにいるんですか？」

聞きようには失礼なのだが、クラス全体の疑問がだされる。何故学年主席のキラと、常に上位一桁に入っている瑞希がここにいるのか。

「そ、その・・・」

緊張した面持ちで体を硬くした瑞希が口を開く。

「振り分け試験の最中、高熱を出してしまって・・・

クラスの人々はその言葉で納得した。

試験途中の退席は〇点扱いとなる。彼女は昨年度に行われた振り分け試験を最後まで受けることができず、結果Fクラスに振り分けられてしまった、というワケだ。

「僕は試験前日、インフルエンザに罹って、来れなかつたんです。」

これにも納得。

そんな一人の言い訳を聞き、ちらほらと言い訳の声が上がる。

「そういえば、熱（の問題）が・・・」

「化学だろ？アレは難しかったな。」

「俺は弟が事故に遭つたと聞いて・・・」

「黙れ一人っ子。」

「前の晩、彼女が寝かせてくれなくて。」

「今年一番の大嘘をありがとう。」

バカばつか。

「で、では（では）、一年間よろしくお願ひしますー。」

瑞希は逃げるよう明久と雄一の隣の空いている席へ、キラはフェイトとこのはが開けた席へ半ば強引に座られた。

Side 明久

「き、緊張しましたあ・・・」

瑞希は席につきや否や、安堵の息を吐いた。

（今がチャンス！席も近いし・・・）

そんな妄想をして・・・

「あのや、姫……」

「姫路。」

声をかけようとしたが、雄一が明久の声にかぶせるように声をかけた。

明久の（自称）ドラマは終わりを告げた。

「は、はいっ。えーっと……」

瑞希はスカートの裾を直しながら、雄一の方を向く。

「坂本だ。坂本雄一。よろしく頼む。」

「あ、姫路です。よろしくお願ひします。」

瑞希は頭を深々と下げた。

「ところで、姫路の体調は今だに悪いのか？」

「あ、それは僕も気になる。」

明久は思わず口を挟んでしまう。

「よ、吉井君……？」

明久の顔を見て瑞希は驚く。

「姫路、明久がブサイクですまん。」

（え、なにコレ？僕の為を思つての雄一なりのフォローかもしだれな  
いけど、全然嬉しくないよ？）

「そ、そんな！目もぱっちりしてるし、顔のラインも綺麗だし、全  
然ブサイクなんかじゃないですよ！その、むしろ……」

「そう言わると確かに見てくれは悪くない顔をしているかもしないな。俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気もするし。」

「え？ それは誰「そ、それって誰ですかっ！？」

瑞希が明久の言葉を遮る。

「確か、久保……」

(久保?)

「・・・利光だつたかな。」

久保利光 (性別／オス)

(瑞希：ほつ・・・)

「・・・・・」

「おい明久。声を殺してさめざめと泣くな。」

(もう僕、お婿にいけない・・・)

「半分冗談だ。安心しろ。」

「え？ 残り半分は？」

「ところで姫路、体は大丈夫なのか？」

「あ、はい。もうすっかり平氣です。」

「ねえ雄二！ 残りの半分は！？」

明久はつい大声をだしてしまう。

「そこの人たち、静かにしてくださいね。」

先生から教卓を叩いての警告が。

「あ、すいませ・・・」

バキイツ バラバラバラ・・・

突如、教卓がゴミ屑と化す。

「・・・替えを用意してきます。」

本当に酷い。

「あ、あはは・・・」

瑞希は苦笑いしていた。

そんな瑞希を見て、明久は理不尽な処分に対する怒りが湧き、まともな設備を手に入れたいと思った。

「・・・雄二、レオン、ちょっといい?」

明久はあぐびをしているクラス代表とレイン弄りをしている奴に声をかける。

「ん?なんだ?」

「なに?」

「……話しへいから、廊下で。レオンはキラを呼んでくれない？」

「別に構わんが。」  
「いいよ？」

一人と一匹は立ち上がり、レオンはキラを呼び、三人と一匹は廊下に出る。

そのとき、フエイトといのは、少し悲しそうだった（レオン談）。

次回、「結果と紹介と戦争の引鉄」 その5

## 第一問 「結果と紹介と戦争の引鉄」 その4（後書き）

次回、第一問終了予定です。

次回はKirksideを書き、そして試合戦争開戦宣言、の予定です。

## ねむかわー（寝かわ）

今日、時間がでれ、卒業したこともあつたので、なまこねむかを創つてみました。

あと、本編で飛ばされた田口羅介を書きまく。

## ねめかわの1

1・作者卒業記念・りょくとした話

「じゅ、レオノです。」

作者の三円語です。

「おおすは卒業おめでとれ。」

どひゅ。

「聞きたい事があるんだけど、」  
なにかな？」

「卒業表彰でラジオをもらつたって本当？」

「ラジオ・・・ああ、県産業教育振興会から頂いたやつのことですね。  
本当ですよ。」

「マジでー?」  
「マジで。」

「ちよ、なんでー?」

全商系取得や日商簿記合格等いろいろありましたから・・・

「使え・・・」

・・・ないです。ラジオ入らないんです。あ、あと、木製漆器ももう  
らいましたよ。

「へーえ。」

・・・でかくて置き場所がなくて困りますが。

「・・・・・・といつ」とで、お相手はレオンと、」

作者の三円語でした。

(レオン・使えない)との方が驚きだ・・・)

2・自己紹介やむを得ず飛ばした人の分。

レオンが済んでから。

「次の人どうぞ。」

「鍵宮焰ひやまほだ。よろしく頼む。」

【鍵宮つて、まさか・・・?】

教室がざわつく。

「・・・静かにしてください。次の人。」

明久が済んでから。

「次の人。」

「は、はい。あの、春原優です。よ、よろしくお願ひします。」

優は緊張した感じでの自己紹介だった。

「彼女試験のときいなかつたから、Fクラスなんだ・・・  
「体弱かつたからな・・・同情するぜ。」

皆対応がまともだつた。

(明久：あれ、対応が違う？)

## ねめかわのー（後書き）

そんなことでも、さうでもこことと補完説でした。  
オリキャラ説明はいずれします！  
感想や募集していることは感想にお願いします。  
お待ちしております。

第一問 「結果と紹介と戦争の引鉄」 その5（前書き）

今回で第一問完結です！

## 第一問 「結果と紹介と戦争の引鉄」 その5

Side キラ

血口紹介後。

「キラ～！」

「うわわわわ～。」

「あ、あれ、フロイトちゃん！」のはちやん？？？ 笑顔が怖いよ。  
・？？」

一人にしてみれば笑つている。だがキラにしてみれば怖いのである。  
なぜか顔で

「うーに座らないと・？？」

と言つてこるような気がしたのである。

「ねえキラ君？」

「何？」のはちやん？？」

「なんでキラ君と姫路さんが同時に教室に入つてくるのかなあ・？？」

「あ、私も思つた。」

このはの間に、「アリシアが賛同する。  
フロイトは・？？」

「キラ・？？」

キラにまるで猫のように引っ付いていた。

「入るときには、たまたま一緒にただけだから……そのオーラ、下してくれないかなあ……」

「キラがそつと、このはは、  
「そつか。」

と言い、話は済んだかに見えた。

「それよりも、ちょっとフェイトちゃん？すくなく狡いんだけど？…と  
いうか、私もそれしたいんだけど……」

「やだ。」

「フェイト、かわって！』

「姉さんでも嫌！」

『か～わ～つ～て～。』

「や～だ～よ～！」

「（僕の意志はどうなんだろう……）なのせかやんは何があったの  
？」

「このは、そつちお願ひ！」

「わかつた！アリシアちゃんはそつちを！」

『フェイト（ちゃん）を一気に引きはがす！』

「い～や～だ～！」

「・・・話、聞いて・・・」

キラの話や意志を無視した取り合いか始まった。

そこへレオンが来る。

「キラ、明久が話あるつて。」

「話？わかつた。あのさ、呼ばれたから行かないと……」

『・・・むう。』

取り合いをしていた（フェイトを剥がした）一人は渋々離れた。

（レオン：なんか、嫌な役。）

Side out

「んで、話つて？」

現在HR中。廊下に人影はない。

「Jの教室についてなんだけど・・・」

明久が言ったこの教室とは言つまでもなくFクラスのことだ。

「Fクラスか。想像以上に酷いもんだな。」

「雄二に同じ。」

「僕も思うよ。」

「Aクラスの設備は見た？」

「ああ。凄かつたな。あんな教室は他に見たことがない。」

「そんな凄いんだ。」

「キラ、まだ見てないんだ。」

一方はチョークすら無いひび割れた黒板で、もう一方は値段もわか

らないほど立派なプラズマディスプレイ。これに不満のない人間はないはず。

「そこで僕からの提案。折角一年生になつたんだし、『試合戦争』をやつてみない？」

「戦争、だと？」

「うん。しかもAクラス相手に。」

「……何が目的なの、明久？」

「（警戒されてる？）いや、だつてあまりに酷い設備だから、『嘘をつくな。全く勉強に興味のないお前が、今更勉強用の設備なんかのために戦争を起こすなんて、そんなことはありえないだろ』が。」

「（うぐつ。相変わらず勘だけは妙に良いな。）そ、そんなことないよ。興味がなければこんな学校に来るわけが……」

「明久（君）／お前がこの学校を選んだのは『試験校だからこそ学費の安い』が理由だろ／でしょ？」

「（しまった。皆には僕がこの学校に来ている理由を話したことがあるんだつた。）あー、えーっと、それは、その……（言い訳が思いつかないつー）」

「……姫路の為、か？」

「（バクッ！）ど、どうしてそれを…？」

この頃。

「……いやつ…？」

「あ。」

「・・・あれ？今どうなってるの？」

「あ、なのは。もう大丈夫なの？」

「あ、うん。大丈夫。」

なのは、覚醒。

場所戻して。

明久が言いぐるめられていた。

「お前に言われるまでもなく、俺とレオンは、Aクラス相手に試合戦争をやろうと思っていたところだ。」「え？・どうして？雄一やレオンだつて全然勉強なんてしてないよね？」

「世の中学力が全てじゃないって、そんな証明をしてみたくてな。」

「????」

「それにAクラスに勝つ作戦も思いついたし・・・おっと、先生が戻ってきた。教室に入るぞ。」

「あ、うん。レオンは「ノリ。」・・・」

明久たちは教室に戻った。

「さて、復活した高町さんから自己紹介をお願いします。」

壊れた教卓を替えて（それでもボロだけビ）気を取り直してHRが再開される。

「えっと、高町なのはです。よろしくお願ひします。」

【つまあつ「ごめんなさい」早っ！そして何故！？】

「わ、私は、その・・・」

なのはは顔を赤らめ、言つた。

「ルカ君が・・・好きだから・・・」

【フられた！聖祥中美女全員にー】

Fクラス男子、憐れ。

「次の人。」

「フュイト・T・ハラオウンです。よろしくお願ひします。」

【・・・つ「無理です！」やはりかあああー】

学習しない奴ら、それがFクラス男子。

そして雄一の番に。

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ。」

「了解。」

雄一が席を立つ。

ゆっくりと教壇に歩み寄るその姿は、いつものふざけた雰囲気は見られず、クラスの代表として相応しい貫禄を見に纏っているようだつた。

「Fクラス代表の坂本雄一だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きのように呼んでくれ。・・・さて話題に一つ聞きたい。」

雄一は、全員の目を見て、その視線を教室の各所に移した。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしい  
が……」

一呼吸おいて、静かに告げる。

「……不満はないか？」

【大ありじやあつーー】

二年F組生徒の魂の叫び。

「どうう?・俺だつてこの現状は大いに不満だ。代表としても問題意識を抱えている。」

「そうだそうだ!」

「いくら学費が安いからといって、この設備はあんまりだー改善を要求する!」

「そもそもAクラスだつて同じ学費だろ?あまりに差が大きすぎるー!」

不満が堰を切ったかのようにあがる。

「みんなの意見はもつともだ。そこで、」

級友たちの反応に満足したのか、不適な笑みを浮かべて、

「これは代表としての提案だが・・・」

「これから戦友となる仲間たちに野生味満点の八重歯を見せ、

「・・・FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思  
う。」

Fクラス代表、坂本雄一は戦争の引鉄を引いた。

次回、第一問 「勝算と会議と宣戦布告」 その?

第一問 「結果と紹介と戦争の引鉄」 その5（後書き）

第一問 「結果と紹介と戦争の引鉄」、終了です！

次回、お楽しみに！

第一問 「勝算といふ議論と戦線布署」 その一（前書き）

第一問です。ロクラス戦に近づきました！

3／2、15：25、PVが5000、ニークが1000を越えました！ありがとうございます！  
これからもよろしくお願いします！

## 第一問 「勝算と会議と戦線布告」 その1

### 第一問

以下の英文を訳しなさい。

「This is the bookshelf that my grandmother had used regularly.」

姫路瑞希、キラ・ヤマトの答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強してますね。

土屋康太の答え

「これは  
」

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

高町なのはの答え

「これは私の祖母が。。。です。」

(this = これは bookshelf = had use  
d = 現在完了、経完了と書かれている。驗がうつすら残っている)

教師のコメント

回答欄外の記述からあなたの必死さが伝わりました。

泉戸 こののはの答え

「これは私の祖父が愛用していた本棚です。」  
(涙で少し湿つている)

教師のコメント

あなたは祖母を目の前で亡くした、と聞きましたが、そのせいで祖父としか書けないのを忘れていた先生を許してください。

吉井明久の答え

「 \* × 」

教師のコメント

できれば地球上の言語で。

前回。

雄一が戦争の引鉄を引いた。

Aクラスへの宣戦布告。

それはこのFクラスにとって現実味の乏しい提案にしか思えなかつた。

「勝てるわけがない。」

「これ以上設備を落とされるなんて嫌だ。」

「姫路さんがいたら何もいらない。」

そんな悲鳴が教室内のいたるところから上がる。

確かに誰が見ても、AクラスとFクラスの戦力差は明らかだった。  
誰かが瑞希に告白してたが。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる。」

そんな戦力差を知りながらも、雄一はそのまま言った。

「何を馬鹿なことを。」

「できるわけないだろ？』

「何の根拠があつてそんなことを。」

否定的な意見が教室中に響き渡る。普通は当たり前だ。

「根拠ならあるさ。」のクラスには試験召喚戦争で勝つとのできる要素が揃つてこる。』

こんな雄一の言葉を受け、クラスの皆が更にざわめく。

(明久：根拠がある？僕らはFクラスだよ？学年最下位グループだよ？)

「それを今から説明してやる。」

得意の不適な笑みを浮かべ、壇上から皆を見下ろす雄一。

「おい、康太。畠に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に  
来い。」

「…………（ブンブン）」

「は、はわつー？」

必死になつて顔と手を左右に振り否定のポーズを取る康太。

瑞希がスカートの裾を押さえて遠ざかると、彼は顔についた畳の跡を隠しながら壇上へと歩きだした。

「土屋康太。こいつがあの有名な、寡黙なる性識者だ。<sup>ムツツリー</sup>」

「…………（ブンブン）」

土屋康太の名前はそこまで有名じゃない。だが、ムツツリー<sup>ムツツリー</sup>という名前は別だ。その名は男子生徒には恐怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑を以つて挙げられる。

「ムツツリーだと……？」

「馬鹿な、ヤツがそうだとこいつのか……？」

「だが見る。あそこまで明らかに覗きの証拠を未だに隠そつとしているぞ……」

「ああ。ムツツリーの名に恥じない姿だ……」

「????」

畳の跡を手で押さえている姿が果てしなく哀れを誘う。ただ、瑞希だけは頭に多数の疑問符を浮かべているようだ。

「姫路や泉戸、春原のことは説明する必要もないだろう。既だつてその力はよく知っているはずだ。」

「えつ？ わ、私ですか？」

「ちょっと代表、私あまり戦力にならないんだけど？」

「え、あ、あの・・・わ、私もですか・・・？」

「泉戸、お前の実力がBクラス主席確定なものだと言つ」と知っている。三人がウチの主戦力だ。」

「そうだ。俺たちには三人がいるんだつた。」

「姫路さんや春原さんならAクラスにも引けをとらない。」

「ああ。姫路さんさえいれば何もいらないな。」

「木下秀吉だつていう。」

「ワシもか？」

木下秀吉。彼は学力ではあまり名前を聞かないが、演劇部のホープだとか、双子の姉のことなどで、有名だつたりする。

「おお・・・！」

「ああ。アイツ確か、木下優子の・・・」

「高町やハラオウン姉妹もいる。」

「ふえつ？」

「わ、私が？」

「私もなの？」

「三人は理数系が強い。特に高町は201問目から回答がズレていなければ、Aクラスだつたらしい。」

「おお・・・」

「当然俺も全力を尽くす。」

「確かになんだかやつてくれそうな奴だ。」

「坂本つて、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかつたか？」

「それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だつたのか。」

「実力は△クラスレベルが四人もいるつてことだよな！」

いけそう、やれそう、そんな雰囲気が教室内に満ちていた。  
気が付けば、クラスの士氣は確実に上がつていた。

「それに、吉井明久、鍵宮焰だつている。」

・・・シン・・・・・・

一気に士気が下がつた。

「ちょっと雄二…どうしてそこで僕らの名前を呼ぶのさ…全くそんな必要ないよね！」

「雄二…俺と明久を同格に扱うな！」

「誰だよ、吉井明久つて？」

「聞いたことないぞ？」

「鍵宮つてどこかで聞いたことがあるような…・・・

「忘れたな。」

「ホラ！折角上がりかけてた士氣に陰りが見えてるし！僕らは雄二たちとは違つて普通の人間なんだから、普通の扱いを・・・つて、なんで僕を睨むの？士気が下がつたのは僕らのせいじゃないでしょ

「うー。」

「いや、明久のせいだ。」

「焰！」

「そうか。知らないようなら教えてやる。ここからの肩書きは《觀察処分者》だ。」

雄一は言ってしまった。

「・・・それって、バカの代名詞じゃなかつたつけ？」

誰かが致命的な台詞を言つ。

「ち、違うよ！ちょっとお茶目な十六歳につけられる愛称で

「そうだ。バカの代名詞だ。明久のはな。」

「あの、それってどういうものなんですか？」

瑞希が小首を傾げて聞いた。

「それはな、学生生活を嘗む上で問題のある生徒に課せられる処分だ。まあ、具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそういう類の雑用を、特例として物に触れるようになった試験召喚獣でこなすといった具合だ。」

「それ以外は役に立たないけどね。」

「へえー、それって凄いですね。試験召喚獣って見た田と違つて力持ちって聞きましたから、そんなことができるなら羨ましいです。」

瑞希の目がキラキラと輝いている。若干の羨望と尊敬のこもった視線が明久に送られる。

「あはは。そんな大したものんじゃないんだよ。（ああっ！穴があつたら入りた～いつ！）」

「明久のは、って、じゃあ鍵宮君のはどう・・・」

「俺から言ひ。」

優の疑問を遮り、焰が言ひ。

「俺は・・・」

全員が焰を見た。

「・・・《特別観察処分者》だ。」

次回、

「勝算と会議と宣戦布告」

その2

## 第一問 「勝算といふ議と戦線布告」 その一（後書き）

次回、区切りよく終わらせたかったので少し少なくなりました。バカラスキャラにアニメ版の台詞を入れてみましたが、如何でしょうか？

自分ではかなりの無茶な気がしてしまって・・・

感想、お待ちします！

第一回 「勝算といふ議と戦線布局」 もの（前書き）

第一回その2です。  
少しけくなっています。

## 第一問 「勝算と会議と戦線布告」 その2

「と、特別観察処分者だと？」

「聞いたこともないぞ？」

クラスがざわめき始める。

「俺がこの処分を受けたのは一ひとつ理由がある。一つは、「風牙」。昔の俺の異名だ。」

「「風牙」だと……？」

「あの「悪鬼羅刹」と互角といわれる強さのか！？」

「それに尾鰭がついたこと。そしてもう一つが、……水河涼の存在だ。アイツの……アイツのせい……」

「水河涼？ Aクラスの？」

「まあ、そんなところだ。」

雄一が話を止めた。

「よく考えたら、『観察処分者』ってことは、試合戦争で召喚獣がやられると本人が苦しいってことだろ？」「だよな。それならおいそれと召喚できないヤツが一人いるってことになるよな。」

「気にするな。明久はどうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ。」

「雄一、そこは僕をフォローする台詞を言つべか？」

「ただ、焰が戦えないので少し辛いな。焰は・・・Aクラスの実力がある。」

「スゲエ、まだいたのか、Aクラス！」

「うわ、すつごい大胆に無視された！」

(雄二)、言いやがった・・・

クラスの士気が再び上がった。

「最後に、このクラスの切り札だ。キラ、レオン、来てくれ。」

「僕はいいんだけど・・・キラ、動けないよ？」

「何？」

雄二が見た先には、立ち上がるうとしてビュジョウもなくなつているキラと、そのキラに抱き着いているフェイト・このはの姿があった。

「フェイトちゃん、このはちゃん、あのわ、離れてくれないかな?  
前、行きたいんだけど・・・」

「嫌。」

「私も嫌。」

雄二はその光景に溜息をついた。

「はあ・・・キラ、ビうにか来れないか?」

「くつ・・・ゴメン、無理だ。」

なのはも離さうとした。

「二人とも離れて～！」

『や～だ～！』

「キラ君困つてると～！抱き着くのは後でもできるでしょ～！？」

『今抱き着いていたいの～！（フェイトのみ：「待つてられないの

～～」）』

「仕方ない。ここで言つが、切り札はキラと、レオンだ。まずキラだが、アイツの実力は知つてるだろ？　ただ、アイツも迂闊に召喚できぬといふ問題点がある。」

「そんなん！」

「あの主席確實と言われたヤマトが迂闊に戦えないだと～？」

「何故！？」

クラス内に疑問が出る。

「僕が言つ。OK？雄二？」

「かまわん。言つてくれ。」

レオンが説明をする。

「去年の実習を見た人は分かるかもしないけど、キラの召喚獣はフィードバックが強いんだ。点数が高すぎるため、と言わてるけど、実際は不明。召喚獣の受けたダメージの八割がキラに来る。そういうわけなんだ。」

「やうだつたのか・・・」

理由は複雑だつたが皆納得した。だが・・・

「キラ、何で言つてくれないのー?」

「いや、心配かけなくなつたし「いきなり傷ついたほうが心配するー」・・・ゴメン。」

フェイトがキラに問いただしていた。そして・・・

「今日しばらぐのままにさせとー」

「なんでー?」

「言つてくれなかつた罰!」

キラが何気に罰を受けていた。

「話が逸れたが、レオンはいつもはこんな飄々としたヤツだが、本当は凄いヤツなんだ。召喚獣につく腕輪の数が5個あるらしい。あと、「閃光纏いし死神」の異名は、一度くらい聞いたことはあるだろ? 正体はこいつだ。実力も十分にある。」

「腕輪が5個だとー?」

「「閃光纏いし死神」とともに戦えるとはー。」

「いけるぞー!」

クラスの士気は高まつた。

「まずは俺たちの力の証明として、Dクラスを征服してみよつと思つ。・・・皆、この境遇は大いに不満だろ?」

『当然だあー!』

「ならば全員筆を執れ！出陣の準備だ！」

『おおっ！』

「俺達に必要なのはこんな設備ではない！Aクラスの設備だ！」

『うおおおおーー！』

『お、おー・・・』

瑞希と優は、クラスの雰囲気に気圧されたのか、小さく拳を作り掲げていた。

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になつてもらひ。無事大役を果たせ！」

「・・・下位勢力の宣戦布告の使者つてたいてい酷い目に遭つよね？」

「映画の見すぎだ。」

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思つて行つてみろ。」

「・・・本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思つていい。」

わずかな逡巡すらなく、力強く断言する雄一。

「大丈夫、俺を信じろ。俺は友人を騙すような真似はしない。」

更に追い打ちの一言。

「わかつたよ。それなら使者は僕がやるよ。」

「ああ、頼んだぞ。」

クラスメイトの歓声と拍手に送り出され、明久は使者らしく毅然とした態度でクラスに向かつて歩きはじめた。

「雄一、レオン。」

『何（だ？）』

「明久とハサミは使いよう、だな。」

「だよね。雄一、ナイス！」

次回、「勝算と会議と宣戦布告」 その3

第一回 「勝算といふ議と戦線布告」 その2（後書き）

次回は、昼休みパーティ中心です！  
ドイツ語で書けないとこれはアルファベットで補つておるのを「」  
承ぐだれい！

## 第一回 「勝算といふ議と戦線布石」 その3（前書き）

その3です！

前回の後書きに「画休みが止める」と書きましたが前フリだけになつてしましました。

## 第一問 「勝算と会議と戦線布告」 その3

「騙されたあつ！」

命がけで廊下を走り、自分の教室に転がり込む明久。

息を切らせ床にへたりこむ明久に雄一とレオンが視線を落とし、

『やはりやつぱりやつきたか。』

平然と言い放った。

「やはりってなんだよ！やつぱり使者への暴行は予想通りだつたんじゃないか！」

「当然だ。そんなことも予想できないで代表が務まるか。」

「少しば悪びれろよ！」

「疑わない明久が悪いんじやない？」

「僕のせい！？僕のせいなの！？」

「吉井君、大丈夫ですか？」

ところどころ制服まで破れている明久の有様を見て、瑞希が駆け寄つてくる。

奥ではキラから離れたフェイトが、

「キラに使者を任せたら許さないから・・・」

と、雄一に言つていて、雄一は、

「分かつた、キラには使者を頼まない。だからそれをひつこめる。」

と言っていた。

「あ、うん。大丈夫。ほとんどかすり傷。」

「吉井、本当に大丈夫？」

美波もきた。

「平氣だよ。心配してくれてありがとう。」

「そう、良かつた・・・。ウチが殴る余地はまだあるんだ・・・」

「ああっ！もうダメ！死にそうー！」

明久は慌てて腕を押されて転げまわる。

島田美波、油断ならない。

「そんなことはどうでもいい。それより今からマーティングを行つぞ。」

他の場所で話し合いをするつもりらしく、雄一は扉を開けて外に出た。

(明久…もう少し友人に優しさを見せても良くない?というか、雄一って、本当に僕の友達なんだろうか?前から週に七回ほど気になつてるんだけど・・・)

「キラ、来てくれ。お前にも出てほしいんだ。」

「あ、うん。分かった。」

雄一に呼ばれて、キラが出る。  
つまり?

「キラ、待つて！私も行く！」

「私も参加しよ。作戦聞いておいた方がいいし。」

「私も。」

「なのははちゃん、ひょっとしてルカ君に会えると思つてる？」「ち、ちがうよ！」

「高町さん、そう思われても仕方がないですよ？いつもの行動とか、朝の光景を見てれば……」

「ふええ、春原さんも酷いよ～……」

フェイトやなのは、アリシアたちが出る。（フェイトのみ理由が不純だが）

「あの、痛かつたら言つて下さいね？」

瑞希はそつ告げて、小走りに雄一の後を追つた。

「大変じゃったの。」

秀吉が明久の肩を叩いて廊下に出る。

「・・・・・（サスサス）」

自分の類の辺りをさすりながらムツツリーが続く。

「ムツツリー、覗いていた時の畳の跡ならもう消えてるぞ？」

「・・・・・！（ブンブン）」

「いや、今更否定されても、ムツツリーが何なのは知つてるから。」

「・・・・・！（ブンブン）」

「いやまあでバレているのに否定し続けるなんて、ある意味凄こと思ひ。

」

「…………（ブンブン）」

「……何色だ／だつた？」

「みずいろ。」

即答か。

「やつぱつマッシュローーは色々な意味で凄いよ。」

「…………（ブンブン）」

やつぱつてのんびり話をしつづると、

「ほり吉井。アンタも来るの。」

美波が明久の腕を引張った。

「（むか。面倒な話しあになりそつだから逃げよつと思つていたの。）あー、はいはい。」

「返事は一回ー。」

「へーい。」

「……一度、Das Brechen……ええと、日本語だと・

・

美波が言ひよどむ。

（明久：Das Brechenってなんだらうへ。少分ドイツ語だと思ひよど。）

「…………調教。」

「そう。調教の必要がありそうだね。」「

「調教つて。せめて教育とか指導つて言つてくれない?」「

「じゃ、中間とつてZuchtbüro…・・・」

「・・・・・それはわからない」

「日本語だと「折檻」だ。」「

焰が口を挟む。

「そう、それ。」「

「それ悪化してない?」「

「そう?」「

「なんかさ、この際Inhaftierungしたほうがいいんじやないの?最悪、Ausführungすれば?」「

「レオン、アンタえげつないわね・・・」「

「そう?」「

「なんなの、やつきの?」「

「・・・・・どちらもわからない。」「

美波はレオンの言ったことに引いていた。明久とムツツリーはわからない、といった顔をしている。

「最初のは、「監禁」。」「

「・・・・・師匠!」「

ムツツリーが、レオンの手を握る。

「後のは・・・言つてほしい? (ニヤリ)」「

「なんか聞いたらいけない気がするけど・・・何?」「

全員が、固唾を飲む。

「・・・処刑。」

「レオン、それはまずい！駄目だ、それを言つたら島田が・・・や  
りかねない！明久が死ぬ！」

「ちょっとーウチはそんなことしないわよー。」

「・・・・・・・・流石、死神。」

レオンの発言に慌てる焰。  
それに言い返す美波。

死神の異名を静かに讃えるムツツリーー。

「かなり酷くなつてない？・・・といつか、ムツツリーーもレオン  
もどうしてそんな言葉を知つてゐるの？」

「・・・・・・一般教養。」

(明久：なんて嫌な一般教養なんだ。「折檻」とかの普通の言葉は  
わからないというのに。)

「企業秘密。」

(明久：何といふ話ー。)

「相変わらずムツツリーーは性に関する知識だけはズバ抜けてるね。」

「・・・・・・（ブンブン）」

そんな会話をしながら校内を歩いていると、先頭の雄一が屋上に通  
じる扉を開けて太陽の下に出た。

雲一つない空から眩しい光が差し込む。

春風とともに訪れた陽光に、風ではためく瑞希や優のスカートを注視しているムツツリーニを除いて、全員目を細めた。

次回、「勝算と会議と宣戦布告」 その4

第一問 「勝算といふ議と戦線布告」 その3（後書き）

次回は昼休み、明久の弁当話と・・・？です！

感想、お待ちしております！

## 第一回 「勝算といふ議と戦線布告」 やの4（前書き）

今回、後半でかなりキャラ崩壊します、とにかくせました！  
では、どうも！

## 第一問 「勝算と会議と戦線布告」 その4

「明久。宣戦布告はしてきたな？」

雄二がフェンスの前にある段差に腰を下ろす。

「一応今田の午後に開戦予定と告げてきたけど。」

それにならつて各自腰を下ろす。

「それじゃ、先にお昼ご飯ついてことね？」

「そうなるな。だが・・・」

雄二の視線の先には、

『』

「ゴメン。」

キラに抱き着いて満悦そうにしているフェイト、このはがいて、キラはちよつと申し訳なさそうにしていた。

「いやつくな、ハラオウン妹、泉戸。ハラオウン姉も・・・」

「ねえ坂本、私、名前の呼び捨てでいいよ？ フェイトと同じだから、苗字だと困るし。皆もお願い。」

「ああ。・・・しかし、姉妹でも違うんだな。容姿はソックリなのに全然違う。」

「フェイトの場合仕方ないよ。7年の恋の結果があれだから。」

一方、奥では。

「はつきり行動できる人って羨ましいです……」

「瑞希ちゃんにも好きな人がいるんですか？」

「え！？あ、その、えっと……はい……。優ちゃんはどうなんですか？」

「私もいるんですが……（キラの方を見る）」

と話していた。

「まあいいか。明久、今日の昼ぐらいはまともなものを食べなよ。」「そう思うならパンでもおじいちゃんと嬉しいんだけど。」「

「えっ？吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

優との話を終えた瑞希が驚いたように明久を見る。

「（姫路さんはきっと規則正しい生活をしているんだね）な。いろいろと発育も良さそうだし。）いや。一応食べてるよ。」「……あれは食べていると言えるのか？」

雄一の横槍に入る。

「何が言いたいのや？」

「いや、お前の主食って……水と塩だらけへ。」

焰の哀れむような声。

「なんて失礼な。僕を馬鹿にするにも程があるー。きちんと砂糖だつて食べているさー。」

「あの、吉井君。水と塩と砂糖つて、食べるとは言こませんよ……」

「舐める、が正解じゃね。」

「水と塩と砂糖つて・・・調味料でしょ？あれ。」

「いやはは・・・」

「・・・。」

（明久：なんか、皆の目が妙に優しいのが逆に辛い・・・）

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな。」

「し、仕送りが少ないんだよー。（趣味つてお金がかかるよね。）」

「あの、よかつたら私がお弁当作つてきましょうか？」

「え？」

「明久、字が違う字が違う。」

（優：み、瑞希ちゃん、大胆だなあ・・・わ、私も・・・）

突然の優しい言葉。

「（お弁当？女の子の？手作りの？）本当にいいの？僕、塩と砂糖以外のものを食べるのなんて久しぶりだよー。」

「はい。明日のお皿で良ければ。」

「良かつたじゃないか明久。手作り弁当だぞ？」

「うんー。」

「・・・ふーん。瑞希つて随分優しいんだね。吉井だけに作つてくれるなんて。」

面白くないさそうな美波の言葉。

（明久：そんな棘のある言い方をして、「やつぱりやめます」なんて言われたらどうしてくれるんだ！）

「あ、いえ！その、姫さんにも……」

「俺達にも？いいのか？」

「はい。嫌じゃなかつたら。」

(明久：おお、雄二にも作ってあげるなんて。いい子だな。)

「それは楽しみじゃのう。」

「…………（「ククク）」

「……お手並み拝見ね。」

「あ、瑞希ちゃん『メン。私お弁当あるから。』

「俺も頼む。」

「わかりました。それと、アリシアちゃんたちは……」

「……今取り込み中のようだな。後にしとけ。」

「あ、はい。それじゃ、姫に作ってきますね。」

たくさん作ることになつたのに瑞希は嫌そうな顔をしない。

「姫路さんつて優しいね。」

「そ、そんな……」

「今だから言つけど、僕、初めて会う前から君のこと好き」「おい明久。今振られると弁当の話はなくなるぞ。」……こしたいと思つてました。（フツ。失恋回避成功。）君のこと好きです」と言い切る前だったからこそ取れる空前絶後の回避運動。流石は僕の判断力だ。）

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じやぞ？」  
(明久：恨むぞ僕の判断力！)

「明久。お前はたまに俺達の想像を超えた人間になる時があるな。」

「雄一、はるかに、が抜けたぞ。」

「だつて……お弁当が……」

明久は泣いた。

その後のことだった。

いきなり「なのはああああああああ！」と、フェイトがなのはに飛び掛かつってきた。

「え、フェ、フェイトちゃん！？」ちゅ、きゅっ！（バタン）何があつたの！？」

「私が説明するね。実は……」

アリシアがいきさつを話した。

それまでのいきさつ。

「あ、あの……。」

「？？？」

優が行動に出た。

ちなみにフェイトはいない。

「春原さん、何？」

「（思いを伝えなきや……）あの……その……」

「恥ずかしいなら代わりに話すよ。どうか？」

アリシアが提案。しかし、  
「いえ、自分で……」  
と言った。

「あの、貴方のことが……す……す……好きです！付合つ  
てください！」

沈黙。

「え、あ、えっと……い、いつから……？」  
「三年前に助けてもらつてから……です。」

また沈黙。

「ねえ、どうなつてゐるの？」「あれ？」

フロイト、帰還。

アリシアがフロイトに説明する。

「フロイト、落ち着いて聞いて。やつと優が告訴したの。」

「……。」

「フハイトっー、フハイ「なのはああああーー」あーフハイ  
トー。」

説明完了。

(瑞希・優ちやん、皆田じたんだ・・・)

「で、いつなつたと。」

「私、フられたのかなあー・・・どうしたらここの・・・なのはああ  
あ・・・。」

「おお落ち着いて、フハイトちやん?」

「これほもう暴走じやな。しかし、朝と逆の状態を見るとは思わな  
かつたぞい。」

「キラは、・・・止まつてゐる。」

呆れてその光景を見るしかなく、会議は脱線していた。

「優もキラが好きだつたんだ。」

「うん。このはちやん」め「優、私、負けないから。・・・私も、  
負けませんー。」

キラ争奪が激化した瞬間だつた。

次回、  
「勝算と会議と宣戦布告」  
その5

第一回 「勝算といふと戦線布石」 その4（後書き）

如何でしょ'つか？

今迄の崩壊より酷いと思しますが・・・

感想、お待ちしております！

第一問 「勝算といふ議と戦線布署」 その5（前書き）

PVアクセスが10000を突破いたしましたー皆さん、ありがとうございます！

今後もより多くの方に読んでいただけるよう努力いたしますので、どうぞよろしくお願ひいたします！

第一問その5です！

少し短くなつたのでちょっとしたオマケ入れました！

それでは、どうぞー！

## 第一問 「勝算と会議と戦線布告」 その5

「さて、話がかなり逸れたな。試召戦争に戻ろ。高町は後でフェイントに（アリシアに許可もらった）伝えておいてくれ。」

「うん、分かった。」

「じゃ、僕はキラ起こすね。ちょっと離れて。」

全員離れる。なお、これはをアリシアが押さえる役目をしていたが。

「魔力循環、異常無し。四散魔力、必要量、確保。TRANS - A Mシステム、起動！キラああああ！起きろおおおおー！」

『え、ちょ、レオン。それダメだああ！』

赤く光ったレオンは、サイズを振りかぶり、キラに向かって突進した。

「うわーー！」

キラ、避けた。

「あれ、僕は……？告白されてからの記憶が……」「話を進めたいんだつて。それで起こした。」「あれで？あ、返事……」

「全てが済んだらにしておいた。それまでに考えておきな。」「あ、う、うん。」

「まあ、まあ起きたから試召戦争に戻ろ。」

「雄一。一つ気になつていったんじゃが、どうしてDクラスなんじゃ？段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」

「そういえば、そうですね。」

「まあな。当然考えがあつてのことだ。」

雄一が鷹揚にうなづく。

「どんな考え方なの？」

「色々と理由はあるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな。」

「た、戦うまでもないって……」

「え？ でもでも、私たちより上のクラスだよ？」

「ま、振り分け試験の時点では確かに向こうが強かつたかもしだれない。けど、実際のところは違う。明久、オマエの周りにいる面子を見てみろ。」

「えーっと……」

明久は雄一に言われたとおりその場にいるメンバーを見回してみる。

「ふむふむ。この場には、美少女七人と馬鹿が一人と天才が一人と不良が一人と泣き虫が一人とムツツリが一人いるね。」

『誰が美少女だと！？』

「ええっ！？ 雄一と焰が美少女に反応するの！？」

「・・・・・（ポツ）」

「ムツツリー！ まで！？ どうしよう、僕だけじゃツッコミ切れない！」

「まあまあ、落ち着くのじゃ、代表に瘤にムツツリー！」。

(明久・美少女と言えば姫路さんに秀吉に高町さんにはラオウンさんたちに春原さんに泉山さんに決まつてゐるじやないか！)

「ま、要するにだ。」

「ホン、と咳払いをして雄一が説明を再開する。

「姫路やキラ、春原に問題のない今、正面からやり合つてもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦つても意味が無いってことだ。」

「? それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの?」

「ああ。確実に勝てるとは言えないな。」

「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ。」

「初陣だからな。派手にやって今後の景気づけにしたいだろ？それに、やつき言いかけた打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな。」

「

「あ、あの！」

瑞希にしては珍しい大きな声。

「ん? デリした姫路?」

「えつと、その。やつき言いかけたって・・・吉井君と坂本君とレオン君とヤマト君は前から試合戦争について話しえつてたんですね？」

「ああ、それが。それはつこせつき、姫路の為について明久に相談さ

れて・・・「それはそうとー。」

明久は雄一の余計な台詞を遮るより、わざと大きな声を出す。

「さつきの話、Dクラスに勝てなかつたら意味がないよ。  
負けるわけないさ。」

明久の心配を笑い飛ばす雄一。

「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる。」

(明久：勝てる？僕らが？試召戦争で？)

「いいか、お前ら。ウチのクラスは・・・最強だ。」「いいわね。面白そうじやない！」「楽しそうね！」「そうじやな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの。」「天下、か。」「・・・・（グッ）」「私も頑張ろ！足引っ張らないよつー。」「私も・・・頑張ります！」  
「が、頑張りますっ！」

全員がこの戦争への意気込みを言った。  
そして。

「あれ、私・・・」「フエイトちゃん。落ち着いた？」  
「うん、ゴメン、なのは。今どつなつてるの？」

「えーっと・・・

なのは、説明中・・・

「と、いつ考えなの。」

「・・・る。」

「フュイトちやん?」

なのははつぶやき始めたフュイトを見る。

「私、頑張るー・キラを守つてみせるー・絶対傷つけさせないー・

「フュイトちやん、クラスのためにも・・・ね?」

「さうか。それじゃ、作戦を説明しよう。」

涼しい風がそよぐ屋上で、全員が勝利の為の作戦に耳を傾けた。

オマケ：作戦会議後

「ねえ、レオン。」

「何?」

「キラを起こすとき、赤く光つてなかつた?」

「(マズイーあれば知られたくない!) . . . What's up,

akihis a?

Everything goes

so

w e l l . . .

「い」まかした?」

「・・・企業秘密へ！」

「ええつー!?

レオンはにげだした!

次回、第三問 「初陣と犠牲と召喚戦争」

## 第一問 「勝算といふ議と戦線布告」 その5（後書き）

次回から第三問、つまりクラス戦です！

バカテスメンバーはもちろん、なのはや優、焰の活躍やレオンのチートっぷり、フェイトはキラを守れるか、などをご期待ください！

感想や募集中のことがありましたらどうぞ！

第二問 「初陣とい犠牲とい還戦帝」 その一（前書き）

第三問です！

今回、後書きに発表があります！

## 第三問 「初陣といはれども、その一

### 第三問

以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『（1）得意なことでも失敗してしまひといと。』
- 『（2）悪いことがあった上に更に悪いことが起きたの喩え。』

### 姫路瑞希の答え

- 『（1）弘法も筆の誤り』
- 『（2）泣きつ面に蜂』

### キラ・ヤマトの答え

- 『（1）猿も木から落ちる』
- 『（2）弱り田に弱り田』

### 教師のコメント

正解です。他にも（1）なら『河童の川流れ』、（2）なら『踏んだり蹴つたり』などがあります。

### 泉山こののはの答え

- 『（1）ヒースも空から墜つる』

### 教師のコメント

ヒースや空の意味はよく分かってませんが、なんとなく正解に近い回答でした。

フエイト・T・ハラオウンの答え

『（2）フラれた上に奪われる』

（解答用紙が湿っている）

教師のコメント

あなたが何故そんな回答に至ったかを知りたいです。何があつたんですか？

レオンの答え

『（2）動けぬ敵に魔王のS・L・B』

教師のコメント

S・L・Bが何の略か教えてください。また、何故高町さんが魔王なのがも教えてください。

土屋康太の答え

『（1）弘法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

『（2）泣きつ面蹴つたり』

教師のコメント

あなたは鬼ですか。

前回の話。

雄一が作戦を話した。  
そして戦争が始まった。

「吉井！木下たちがロクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ったわよ！」

美波が駆けてくる。

（明久：改めて見ると、背は高くて脚も綺麗なのに、どこか女性としての魅力に欠ける。一体何が足りないんだろう。）

（焰：島田には女性としての魅力がどこか足りない。なんだ？）

「な、何よ、一人ともウチのことじろじろ見て？」

美波は一人の視線にそう言った。

『ああ、胸か。』

「アンタ等の指を折るわ。小指から順に、全部綺麗に！」

（焰：ゲッ！）

「（マズい。何かのスイッチに触れたっぽい…）そ、それよりもほら、試召戦争に集中しないと…」

今前線にいるのは、秀吉、アリシア率いる先行部隊だ。

明久が前線部隊の先頭の様子を聞くと、

「さあ来い！この負け犬が！」

「て、鉄人！？嫌だ！補習室は嫌なんだつ！」

「黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！終戦まで何時間かかるかわからんが、たっぷりと指導してやるからな！」

！」

「た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐え切れる気がしない！」  
「拷問？そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは一富金次郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやろう。」

「お、鬼だ！誰か、助けつ・・・イヤアアアアア・・・（バタン、ガチャ）」

「（よし、試召戦争の雰囲気はだいたい分かつた！）島田さん、焰！中堅部隊全員に通達！」

「ん、なに？作戦？なんて伝えんの？」

明久の出した指示は、

「総員退避、と。」

「分かつ！」の意氣地無し！「ぐああつ！」

二人を殴った。明久はチョキで。

「目が、目があつ！」

「目を覚ましなさい、この馬鹿！アンタは部隊長でしょう！臆病風に吹かれてどうするのよ！鍵宮もすぐに伝令に行こうとしないで！」

（明久：その覚ますべき目に激痛が！そういった台詞はせめてグー

かパーで殴った後に言つて欲しい！）

「いい、吉井？ウチらの役割は木下とアリシアの前線部隊の援護で  
ショウ！アイツらが戦闘で消耗した点数を補給している間、ウチら  
が前線を維持する。その重要な役割を担つてゐるウチらが逃げ出し  
たりしたら、アイツらは補給ができないじゃない！」

「（島田さん、君はなんて男らしいんだ！なぜか涙が止まらないよ  
！あと激痛も！）『ごめん。僕が間違つていたよ。補習室を恐れずに  
この戦闘に勝利することだけを考えよう。』」

「ええ。それに、そこまで心配することもないわ。個別戦闘は弱い  
かもしれないけど、これは戦争なんだから多対一で戦えば良いのよ。」

「やうだね。よし、やるぞ！」

「うん。その意気よ、吉井！」

「頑張れ！」

「鍵宮もやるのー！」

やれるーと意氣込んでいたと、美波のところに報生筋がやつてきた。

「島田、前線部隊が後退を開始したぞー！」

「総員退避よ。」

「島田、わざわざつてゐることが違う気がするが俺の氣のせいか？」

美波、撤退を決定。

「吉井、総員退避で問題ないわね？」

「よし、逃げよう。僕らには荷が重すぎた。」

「そうね、ウチらは精一杯努力したわ。」

「何のだ？」

振り返った先には、横田がいた。

「横田、どうした？」

「代表、参謀両名から伝令があります。」

横田はメモを見ながら、

「『逃げたらコロス』」

とハキハキとした声で告げた。

「全員突撃しろおおおお！」

「退いたら死ぬぞおおお！」

明久たちは戦場に向かつて走っていた。

ところ変わつてFクラス。  
伝令が飛ぶまで。

「では、始めてください。」

と、先生が言ったのを機に、キラ、フュイト、このは、優、瑞希が  
テストを始めた。

「ねえ坂本君。何で私を後方にしたの？私が運動ダメなの知ってる  
よね？」

「高町をここにしたのは、フェイントを止めるためだ。」

「・・・フハイトちゃんを止めるため?」

「ああ。」

「・・・理由が分かった気がする。」

「(カリカリカリ) 雄一。」

「なんだ?」

「(カカカカカカカツー) 伝令、出して。」

「あ、ああ。何て言つ?」

「逃げたらコロス。」

「ああ。横田! 伝令頼む! 内容は、「逃げたら「コロス」だ!」

「了解!」

横田は走っていった。

「しかし、すいこね。キラ君もレオン君も。」

「(ヒュヒュヒュヒュツー) そつかな? 普通だと思ひたびど。」

「(表記できないほど速く紙が舞っている) そんなことはないよ。凄くないと思うよ? 先生、全て終わりました!」

「で、では採点しますのでヤマト君は待っていてください。」

キラは全て解き終えていた。

その他。

優

キラ終了時、半分は片付けていた。

フェイト

化学、数学では驚異的な速さで解いていたが、文系で遅くなつた。  
キラ終了時、半分消費。

このは

キラ終了時、四分の一は終了。

瑞希

フェイト、優と同じ。

レオン

終了してから数秒後、完了。

次回、「初陣と犠牲と召喚戦争」 その2

## 第三回 「初陣と犠牲と召還戦争」 その一（後書き）

如何でしょ'うか？

それでは、発表です！

1、Dクラス戦後、キャラを増やすことが決定！  
メイン化します！

出すキャラは「ルミナスアーク」の2・3、とモノノ2のキャラです！

（2のキャラのヒント。秀吉と同じ声優です！）

2、第一巻分終了後にあるキャラが出演！

なお、ここでは詳しく語りません！活動報告に出すキャラが書いてあります！

お楽しみに！

あと、それに伴つお願ひです。

バカテストの募集ですが、第一次〆切を設けたいと思います。〆切は第二問その5投稿した日にさせていただきます。  
まことに勝手ですがよろしくお願いします。

感想などもどうぞ！

第二回 「初睡と犠牲と凶運戰帝」 ものの（前書き）

第三回その2ですー。

では、どうぞ。

## 第三問 「初陣と犠牲と召還戦争」 その2

「明久たちが走つていると、前方から走つてくる人が。

「明久、焰！援護に来てくれたんじゃな！」

「た、助かった・・・」

「秀吉、アリシア、大丈夫？」

「うむ。戦死は免れてある。じゃが、点数はかなり厳しいところまで削られてしまつたわい。」

「私も。化学はホントにかうづじて残つてる感じ。後は際どいわね。」

「

秀吉、アリシアが現状を説明する。

「そつなの？召喚獣の様子は？」

「もうかなりへ口へ口じやな。これ以上の戦闘は無理じや。」

「秀吉と同じ。次で戦死は確実よ。」

「そつか。それなら早く戻つてテストを受け直してこないと。」

「そうじやな。全教科を受けている時間はなさそうじやが、一、二教科でも受けとるとしよう。」

「皆、頑張つて！」

言つた否や、秀吉とアリシアは教室に向かつて走つていつた。その後ろに前線部隊に配置されたクラスメイトが続く。出陣した時より人数が少ないのは補習室に連行されているからだ。

「吉井、鍵富！試召戦争のルールは覚えている？その科目の教師がないないと召喚はできないからね！」

「わかつてる！」

「当たり前だ！」

なお、ルールは割愛させていただきます。BY作者

今回は学年主任が立会いをしている。  
だが。

「吉井、見てー！」

美波が叫ぶ。

「五十嵐先生と布施先生よ！Dクラスの奴ら、化学教師を引っ張つ  
てきたわね！」

「島田さん、化学に自信は？」「

「全くなし。60点台常連よ。焰は？」

「・・・聞くな。」

「よし、それなら五十嵐先生と布施先生に近付かないように注意し  
ながら学年主任のところに行こう。」「

「高橋先生のところね？」了解！」「

既に戦闘が行われている渡り廊下で目立たないよう隅へ移動する  
三人。しかし。

「あっ、そこにいるのはもじや、Fクラスの美波お姉様！五十嵐先  
生、こっちに来て下さい！」「

「くつ！ぬかつたわ！」「

「・・・お姉様？」

Dクラスの一人に美波が見つかった。化学担当の五十嵐教諭を伴つて近付く。

「よし、島田。ここはお前に任せた！俺達は先に行く！」

「ちょっと・・・普通逆じやない！？』ここは俺に任せて先を急げ！」

『じゃないの！？』

「そんな台詞、現実世界じゃ通用しない！」

「よ、吉井！このゲス野郎！」

「お姉様！逃がしません！」

「くっ、美春！やるしかないうことね・・・！」

明久と焰は、五十嵐教諭から10メートル以上離れてからゅつくりと美波の様子を窺う。相手は既に試験召喚獣を呼び出していた。応えるように美波も声を出す。

「・・・試<sup>サモン</sup>獣召喚つ！」

美波の足元に幾何学的な魔法陣が現れる。教師の立会いの下にシステムが起動した証だ。そして、姿をみせる召喚獣。

その姿は、簡単にいえば『デフォルメされた召喚者』である。どちらも同じようなものだからだ。

「お姉様に捨てられて以来、美春はこの日を一日千秋の想いで待つてました・・・」

「ちょっといい加減ウチのことは諦めてよー！」

「ところで島田さん、お姉様つて・・・」

「嫌です！お姉様はいつまでも美春のお姉様なんです！」

「来ないで！私は普通に男が好きなの！？」

「嘘です！お姉様は美春のことを愛しているはずです！」「このわからずや！」

(明久：・・・なんだか、島田さんが遠い。)  
(焰：有り得んモノを見た。あの美春つてやつ、同性愛者つてのか  
！？)

「行きます、お姉様！」

ついに戦闘が始まった。

「はあああつ！」  
「やあああつ！」

二人の気合いが廊下に響く。

それぞれの召喚獣が、武器を構えて正面からぶつかり合い、力比べ  
が始まつた。

「」・・・のつ！  
「負けません！」

鎧迫り合いを繰り広げる二人の召喚獣。

「島田！向こうが点高いんだ、真正面からぶつかつたら不利だ！」  
「そんなこと言われなくてもわかつてること、細かい動作はできな  
いのよつ…」

直後、均衡が崩れる。美波の召喚獣が、力負けして得物を取り落と  
した。

「EJ」までですっ！」

「くうつー！」

そのままの勢いで美波の召喚獣が押し倒される。その頭上には参考として二人の戦闘力（点数）が浮かび上がっていた。

『Fクラス	島田美波	VS	Dクラス
清水美春			
化学	53点	VS	9

4点

（明久：島田さん、サバ読んでたな。本当は60点にすら届いてないじゃないか。）

（焰：俺以下だと・・・！？）

「さ、お姉様。勝負はつきましたね？」

刀を喉元に突きつけられる美波の召喚獣。腕や足を刺された程度なら点数が減るくらいで済むけど、首や心臓をやられたら即死・・・つまり補習室行きだ。

「い、嫌あつ！補習室は嫌あつ！」

「補習室？・・・フフッ。」

楽しそうに笑いながら、美春が美波の手を引っ張る。だが、その行き先は保健室・・・。

「ふふつ。お姉様、この時間ならベッドは空いてますからね。」「よ、吉井、鍵宮、早くフォローを！なんだか今のウチは補習室行きより危険な状況にいる気がするのー！」

(明久：「うだうだうね。僕から見てもそんな気がするよ。でも、）

「殺します・・・。美春とお姉様の邪魔をする人は、全員殺します・・・。」

・・・。」

（明久：「ごめん、僕にソコに飛び込む勇気はない。）

「島田さん、君のことは忘れない！」

「ああっ！吉井！なんで戦う前から別れの台詞を！？」

「・・・こちら鍵宮。任務を遂行する。」

「アンタはそんな人間じゃないでしょっ！？鍵宮」

「じゃあ何をしろと！？あんな殺害衝動丸出しの奴に！？」

「邪魔者は殺します！」

次回、第三問 「初陣と犠牲と召喚戦争」 その3

第三問 「初陣とい犠牲と召還戦争」 その2（後書き）

今回、かなり苦戦しましたよ。  
募集中のことなんですが、その2について。  
キャラリストを作つてここに表示します。

Fクラス

なのは フロイト アリシア このは 優  
(Dクラス戦後の話の後書きに再掲載します。キャラが増えるので。)

Aクラス

はやて 夏美 涼

感想と共に、お待ちしています！

とこうか、募集していることが無視されてるような・・・？

第二回 「初陣とい機知とい凶戦術」 やのわ（前書き）

第三問です。

今回は半分から本陣で、キャノン壊してますー。

それでは、どうぞ。

## 第三問 「初陣と犠牲と召還戦争」 その3

「邪魔者は殺します！」

美春は、美波の召喚獣に攻撃をして動けなくすると明久たちに向かつてきた。

「吉井、鍵宮、危ない！・・・試<sup>サモン</sup>獣召喚<sup>サモン</sup>つ！」

「この戦闘に入れる！試<sup>サモン</sup>獣召喚<sup>サモン</sup>つ！」

脇から割り込む声。

（明久：須川君とレイン！）

（焰：た、助かつた・・・。）

『Fクラス	須川亮&レイン	VS	清水美春
化学	76点&100点	VS	41
点			

二人の召喚獣が敵を斬り倒す。

先の戦闘で美春が消耗していたからだろう、あっさり終わつた。

「島田、大丈夫か？」

「ええ、助かつたわ須川君。本当にありがとうございます。補習の鉄じ・・・西村先生、早くこの危険人物を補習室へお願いします！」

「ひうう・・・。」

「おお、清水か。たっぷりと勉強漬けにしてやるぞ。こっちに来い。そしてレイン、いい加減慣れろ。」

美並と違つて召喚獣に止めを刺された美春は補習室に連行されるとになる。これが通称『戦死』だ。

「お、お姉様！ 美春は諦めませんからー！」のまま無事に卒業できるなんて思わないで下さいね！」

「な、なんていう同性愛発言…警察呼ぶ？」

「…まあ？」

いろいろと危険な捨て台詞を残し、美春は補習室へ連行された。

「吉井、鍵宮。」

「島田さん、お疲れ。とりあえず一度戻つて化学のテストを受けてくるといこうよ。」

「そうしろ。そのままだと死ぬぞ。」

「吉井、鍵宮。」

「さ、須川君、行こ。戦争はまだまだこれからだ。」

「吉井いっ！」

「は、はいっー。」

「…ウチを見捨てたわね？」

「…記憶にございません。」

(焰・流石戦場。殺気が凄いな。…明久の後ろの島田かうの。)

しばしの沈黙。

「死になさい、吉井明久！試獣召<sup>サモ</sup>・・・」

「誰か！島田さんが錯乱した！本陣に連行してくれ！（冗談じゃない。今補習室に連れて行かれたら、さつきのおかしな子と席が隣になっちゃうじゃないか！）」

「島田、落ち着け！吉井隊長は味方だぞ！」

須川が美波を羽交い締めにしてなだめる。

「違うわ！こいつは敵！ウチの最大の敵なの！」

「（・・・否定できない。）す、須川君、レイン、よろしく。」

「了解／なり。」

「こら、放しなさい須川、レイン！吉井！絶対に許さないんだからね！」

「は、早く連れていくて！なんかその禍々しい視線だけで殺されそうだ！」

「ちょっと、放し・・・殺してやるんだからああああつ！」

「・・・物騒<sup>ハラハラ</sup>だな、オイ。」

「よし、とにかく秀吉たちが補給をしている間、前線を維持するんだ！一歩も進ませないよつに！」

明久が怒号や悲鳴が飛び交う廊下で大声を張り上げる。

「させるなー前線さえ突破すれば、後ろにいるのは補給中の連中ばかりだ！攻め落とせ！」

明久の指示に対抗するかのように、Dクラス前線部隊の指揮官らしき人物の命令が響き渡る。

一方本陣。

「…………わー…………て！」

「お、美波の、こ帰還だね。なんかキレイてるが。」

テストが終わり待機していたレオンが言った。

「このはちやん、生きてる？」

「うふふ・・・燃え尽きた・・・あ、お花畠が見える。この川を渡れば行けるのかな。」

「その川は渡っちゃダメ！このはちやん！戻つて来てー！」

「雄一、美波の話聞いたげて？こちは蘇生かけないと。」

「おう、任せた。」

レオンは蘇生を始めた。

「須川、何が「吉井のヤツ、ウチのこと見捨てやがったのよー」・・・わかった。」

雄一は納得した。

一方レオンはこのはの耳に近づき囁いた。

「このは、その川渡つたらキラと・・・や・・・できなによー。フヒイトとかにキラ取られるよ？」

「それだけはダメえええええつ！（ガバッ！）」

このは、飛び起きる。

「ね、ねえレオン。な、何囁いたの？」

「私も、気になるなあ・・・」

「〇へ、死者蘇生しようとしたら魔神まで蘇生させちゃった」

てへ と舌を出すレオン。

「何を言つたか教えて・・・？」

「無理。それよかフェイト？キラ守らなくていいいの？」

「はつ！で、でもまつて。私がキラを傷つけてしまえばキラは私のモノ・・・（ブツブツブツ・・・）」「

フェイトは独り言を始めた！

「・・・・・・！」（ブシャアアアアアア）

ムツツリーは鼻血を吹き出した！

「レオン、蘇生した・・・つむづむつー？」

雄一は驚いた。

「ムツツリー、何故鼻血を！？」

「な、なにがあつたのじや！？」

「・・・・・俺の聴覚を・・・薦めるな・・・。」

「土屋、その状況だとその台詞、情けなく聞こえるわ・・・」

「高町！フェイトを止めろ！」

「うええ！？わ、私が！？」

「急げ！」

「う、うん…フロイドちゃん、もつまつてきてー！」のままだと十厘君が！」

しかし。

「私が補習[至]行く覚悟でやるしかないのかな…？」それでキラを傷つけられたら私のモノだと主張できるけど…。（ブツブツブツ・・・）」

「ダメー！止まらないよー！」

「なら僕が。」

レオンがである。

「そうするしか「静まりなさい（ズス）！」あつー。」

レオンはフロイドの首に一撃加え、気絶させた。

「どうする？」

「キラの横に置いとけば？ 起きたときの反応楽しみー！」

（全員：ぐ、黒い…・・・）

なお、そのキラは、

「すう…・・・」

寝ていた。

おまけ

囁いたのは？

「レオン、本当に何を囁いたの？」

「うい？ デートとかキスとかができない」と、キラを他の誰かに取られるぞ、と。

「本当・・・？」

「That's True！」

「レオン君、恐ろしい・・・」

次回、第三問 「初陣と犠牲と幻喰戦争」 その4

第三回 「初陣とい犠牲とい還戦帝」 その3（後書き）

感想など、お待ちしています！

返信とか後書き「一々一的的なもの作った方がいいのかな・・・？」

第二回 「初陣とい犠牲とい邇戦帝」 やの4（前書き）

その4です！  
どうかできあがつたので投稿しました！

## 第二問 「初陣と犠牲と召還戦争」 その4

「吉井隊長！ 横溝がやられた！ これで布施先生側は残り一人だ！」  
「五十嵐先生側の通路だが、現在俺一人しかいない！ 援軍を頼む！」  
「藤堂の召喚獣がやられそうだ！ 助けてやってくれ！」

明らかな劣勢だ。

「（本陣に援軍を要請したいけれど、そんなことをしたら作戦にしき込む戦力がなくなってしまう。）こはなんとか僕らだけで持ちこたえるしかない！」 布施先生側の人達は召喚獣を防御に専念させて！ 五十嵐先生側の人は総合科目の人と交代しながら効率よく勝負をするように！ 藤堂君は可哀相だけど諦めるんだ！」

『了解！』

クラスが明久の指示に従つて陣形を組み始める。一応隊長として扱つているようだ。

「Fクラスめ、明らかに時間稼ぎが目的だ！」  
「何を待つているんだ！？」

Dクラスが意図に気づき始めた。

「た、大変だ！ 斧候からFクラスに世界史の田中が呼び出されたって報告が！」 「せ、世界史の田中だと！？」  
「Fクラスのヤツら、まさか長期戦に持ち込む気が！？」

（明久：Dクラスの偵察部隊に、ウチのクラスにテストの採点でや

つてきた田中教諭が見つかったか！）

「吉井。Dクラスは数学の木下を連れ出したみたいだ。」

先ほど美波を連行した須川が報告した。

「（僕らの作戦のためにはそろそろ簡単に突破されるわけにはいかない。僕が雄一から『えられた役割は唯一つ。とにかく前線を長く保つこと。その為には・・・』須川君！」

「なんだ？」

「偽情報を流して欲しいしいんだ。時間を稼ぐために。」

「偽情報？それは構わないけど、スグにバレるんじゃないか？Dクラスで前線の指揮をとってる塚本は声が大きいから、うまくいってもあつと言ひ間に混乱を収められてしまうぞ？」

「でも大丈夫。対象はDクラスじゃないから。」

「と言ひうと？」

「先生たちに流すんだよ。他の場所に向かってくれるよう！」

「・・・なるほど。それは確かに効果的だ。」

「でしょ？？」

「ああ。流す情報の内容は任せてくれ。確實に騙してみせよう。」

「うん。よろしく。」

須川はそう告げると、駆け足でこの場を離れていった。

「僕らは一対一じゃ勝てないからね！」コンビネーションを重視して

「！」

明久の指示が飛んだ。

その思惑は彼しか知らない。

「だりやりやりやりやあああああああああつー。」

「レイン、下がつて！」

「わかつた！」

「まだいける？」

「十分！まだ何十人はいける！」

「明久、人数が少ない場所があるぞ！」

「焰、そっちに行つて！」

焰、レインもまた、頑張つていた。

一方、Fクラス。

タツタツタツ・・・

「お、誰か走つてるな？（ガラツ）」

走つていたのは須川だった。

「参謀！」

「What's happen, Mr. Sugawa?」

「吉井隊長から偽情報を流してほしいと言われて。」

「内容は？」

「まだ考えておりません！」

「雄一、何か希望はある？」

レオンが雄一の方を向き、聞いた。

「いや、特に希望はないな。」

「他の誰は?」

他の全員にも聞く。

「私は・・・ないかな?」

「私も。」

レオンはもう聞いて少し考え出した。

「・・・参謀?」

「・・・よし、須川隊員、耳を貸しなさい。絶対効果がある内容だから。」

「はい。」

レオンは須川に耳打ちした。

「・・・これなら確かにやれます!」

「一言半句間違うなよ?」

「了解!」

須川はまた走つていった。

「雄一、僕もそろそろ暴れたいんだけど?」

「待つてろ。切り札は、とつておくべきだろ?」

「そうだったな。わり、忘れてた。そんじゃ、キラ起こう。」

レオンが起こうとして、一斉に、

『やめて／＼…』

と言つた。

「今度は大人しくやるつもりだったのに…」

レオンは落ち込んだ！

「しようがない、キラ、起きて。」

レオンはキラを揺すつた。

「う・・・ん・・・・。レオン。戦況は？」

「今は前線部隊が撤退、補給中。明久率いる中堅部隊が交戦中。  
「わかつた。けど、なんでフェイトちゃんが横で寝てるの？」  
「暴走した+あれの原因だから当て身かまして氣絶させた。  
「あれって・・・な、なるほど。」

キラは見た光景に睡然とした。

「あ、それと、もちょっとフェイトの傍にいて？」

「いいけど・・・なんで？」

「慌てふためくフェイトが見たいから。」

「あ、あはは・・・」

キラは苦笑するしかなかつたとか。

「とにかくレオン君、なんて内容なの？」

「それは・・・おつと、今は言わない。」

なのははレオンが指示した内容を聞いた。が、はぐらかされた。

「教えてくれてもいいじゃない。」

「放送までのお楽しみ、ということで。」

「むう。でもレオン君、策士なんだね、本当に。」

「敵を騙すには先ず味方から、つてね。騙すわけではないけど。それに、僕は策士じゃないよ？あの一人に比べれば全然。」「伏龍、鳳雛に比べれば、かな？そんなわけないと思つけど……」

「そりかん・・・・・元気にしてるかな・・・・一人とも・・・・。」

「

レオンの弦きは、誰にも聞こえなかつた。

次回、第三問 「初陣と犠牲と召喚戦争」 その5

## 第三回 「初陣と犠牲と召還戦争」 その4（後書き）

今回、実はまたキャラ増やしたいなー、と思つたので一人ほど布石をしました。

いつ出すか、はDクラス戦後のは確定です！

次回から後書きコーナーを作ろうと思います！  
司会などはブリーチのアルス君に頼んであります。

## 第二回 「初陣といはれども、その5（前編）」

その5です。  
今回から後編も「一ノ一」を作ります！

## 第二問 「初陣と犠牲と召還戦争」 その5

「塚本、このままじゃ埒があかない！」

「もう少し待つていろ！今数学の船越先生も呼んでいる！」

しばらく拮抗した状況を続けていると、Fクラスにとつて好ましくない会話が聞こえた。

（明久：さてどうしよう。いよいよ僕も戦闘を行わないといけないかもしない。）

明久がそう考えていると、

ピンポンパンボーン。

『連絡致します。』

校内放送が流れ出した。

（明久：この声は須川君！ そうか、職員室に直接向かつたら先生を呼びに来たDクラスの生徒に見つかる可能性があるから放送室に行つたのか！ ファインプレイだよ須川君！）

『舟越先生、船越先生、』

（明久：しかも呼び出し相手は丁度話題に上がった船越先生。最高だよ須川君！）

『吉井明久君が体育館裏で待っています。』

（明久：・・・あれ？ 須川君？）

『生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです。』

(明久：ひいいい！なんて危険なコトを！相手はあの舟越女史だよ？わかつてゐる？婚期を逃して、ついに生徒たちに単位を盾に交際を迫るようになった、あの舟越女史だよ？確かに体育館裏に向かってくれるだらうし、僕が来るまで何時間でもその場を離れないだらうけど、その分僕の貞操が大変なことに…)

「吉井隊長……アンタあ男だよ！」

「ああ。感動したよ。まさかクラスの為にそこまでやつてくれるなんて！」

「明久……君、凄いよーやっぱり隊長だ！」

前衛部隊の仲間たちが感動にむせびながら明久に握手を求めてくる。

(明久：違う、違うんだよ！僕はそんな指示を出してはいけない！)

「おい、聞いたか今の放送。」

「ああ。Fクラスの連中、本気で勝ちにきてるぞ。」

「あんなに確固たる意志を持つてる奴らに勝てるのか……？」

Dクラスからそんな呴きが聞こえてくる。

(明久：お願い！戦場に良い影響を「えないでーどんづん否定しつくくなつてしまふー）

「お前らー明久の死を無駄にすんじゃねえぞー。」

「絶対に勝つぞー！」

「おおおおおおおつー。」

(明久：ああーうちのクラスの士氣にまで良い影響をーもつやめてえつー）

「隊長、この勢いで押し返しましょー！」

• • • • •

「……隊長？」

一  
・  
・  
・  
す  
」

—  
す?  
「

「須川あああああああつっ！」

放送があつてのFクラス。

ピンポンパンポーン。

— · · · THREE

レオンはカウントを始めた。

『連絡致します。』

「レオス、何のカウントだ？」

品威先生、并品威先生 //

「……〇二〇、じきに結果がでるから、待つて。」

卷之三

『吉井明久君が体育館裏で待つてます。』

卷之二

卷之三

レオンの叫びとともに、Fクラスに笑いがこだました。

「れ、レオン、これ、最高！」

「これはまだ序の口！」

『生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです。』

「ヒィイイイイイツハアアアアアアアアツ！やつてやつたぜえええ！」

「れ、レオン、お前、たつた少しの時間であれをかー？」

「ふくく・・・当たり、前だよ。あははははー！」

笑いは止まらない。

「美波、どう？君の怨みを込めたこの放送は？」

「最高！」

ただ。

「よ、吉井君が・・・・・そんな・・・・・」

その一言が笑いを止めた。

「み、瑞希！？」「冗談だから、冗談！」

「え、あ、そうだったんですか！？」

「信じ込んでたみたいだね・・・

「一途・・・なのかなあ？」

そして。

「ん・・・」

フェイト、復活。

「あ、目が覚めた？」  
「キラ・・・? なんで田の前にいるの・・・あれ、私・・・キラが・・・田の前に・・・? ・・・っ! (覚醒) もやああああああああつ!」

フェイト、  
絶叫。

「フエ、フエイトちゃん・・・?」

卷之三

アリシアとののはが聞く。

「エイトは顔を赤くして俯いたまま、「キラに・・・寝顔・・・見られたよ・・・//」と、言った。

「恥ずかしいことなのかな・・・」

「どうなんでしょう……？私は恥ずかしいですけど……。」

「のは、優はそう話していた。」

レオンは、

「フリートの覚醒ドックリ、成功！やたつ！」

などと喜んでいた。

そして。

「よし、明久の死は無駄にするな！弔い合戦で行くぞ！」

「ああ―――っ。」

わい。

【須川ああああああああああ】

明久の叫び声。

皆、また笑い出した。

「なのは、聞きたいコトがあるんだけど、いいかな?」「なに?」

「あの血の池って、誰が作ったの?」

フュイトはムツツリーーーが作った血溜まりをみて言った。

「誰が・・・って、フュイトちゃんだよ?」「えつー?」

なのはの答えに驚くフュイト。

そして。

「フュイトちやん、すうじに妄想してたよ?心配するくらうだったよ?」

「う、嘘・・・」

フュイトは腰が抜けた。

次回、第三問 「初陣と犠牲と召喚戦争」 その6

## 第二二問 「初陣と犠牲と召還戦争」 その5（後書き）

「後書き」「コーナーっす！」

「はい始まりましたッス。メインはオレ、アルスっす。」「アシストのレインです。」

「今日は最初だから説明だね。」

「そつなるツスね。じゃあ、お願ひするツス。」

「はいはーい。まずはキャラ説明コーナー。専らメインはこれになるかな？ 読んで字の「」とく、キャラ説明だよ。ただし、オリジナルに関して、だけど。

次に、質問「コーナー。これはくるかわからんけど・・・きたらやるね。でも、一回につき一、三通くらいかも。ネタバレはしないからね。」

最後に、結果紹介「コーナー。これは行われている募集の現状を伝えるものだよ。」

「今日は結果コーナーっす。」

今募集しているのは二つあるツス。そのうちの「バカテスメンバー以外で誰に酔わせるか」について発表ツス！

現在の投票は一票で、アリシアに入ってるツス！

まだまだ募集中ツス！

感想、質問も待ってるツス！

「そしてSAK工様、ありがとうございます！」

「それでは次回、またお会いしましょーツス！」

「それでは！」

第二回 「初陣とい機知とい凶魔戰帝」 やの（前書き）

その6ですー少し長くなりました！

今後は原作と少し変えていきますので。

第二二問 「初陣と犠牲と召還戦争」 その6

「よし、明久たちの援軍に行くぞ！」

「雄一、僕もOK？」

「レオン、お前だけだ。高町、先行していけ！」

「あ、うん！」

なのはは走つていった。

「俺たちも行くぞ！」

「おおおおおおおおつー！」

「僕は残るんだ。まずフュイトちゃん起しけなわや・・・・・

キラは残り、フェイトを起した。

「フュイトちゃん？ フュイトちゃん？ 起きて？

「はつ！」

「気がついた？」

「う、うん。皆は？」

「明久君たちを助けに行つた。」

「皆、大丈夫かな・・・・？」

フェイトは心配していた。

キラ命といつてもだ。

「大丈夫だよ。」

キラは無事を確信していた。

廊下。

「工藤信也、戦死！」

「西村雄一郎、総合残り40点です！」

「森川が戻つてこない！やられたか！？」

盛り上がつた士気のまま戦うことしばし、残念ながら戦力差の影響が現れ始め、次々と景気の悪い報告が出始めた。

工藤・森川が戦死（補習室送り）。明久の部隊は残り7人になってしまった。

（明久：そろそろ限界だろうか？）

「吉井君、後少し持ちこたえて！今は私だけだけど、後ろに坂本君とかがいるから…」

明久が撤退を考え始めていると、そんな声が聞こえてきた。

明久たちの後方にはの姿があった。

「援軍か！合流される前に吉井たちを全滅せろ！面倒なことになるぞ！」

（明久：マズい！まだ距離がある！合流する前に全滅させられたら僕らは全員補習室送りだ！）

「西村雄一郎、戦死！」

あと6人。

(高町さんは・・・後少し!)

「五十嵐先生、Dクラス鈴木が召喚を行います!」  
「負けるか! Fクラス田中も行きます!」

(明久：くつ！田中君も捕まつたか!)

『Dクラス

鈴木一郎

VS

Fクラス

67

田中明  
化学

92点

VS

点

刃の餌食になる田中の召喚獣。

これで残り5人。

「ま、間に合つた・・・」

なのは、到着。

そして、

「試験召喚!  
サモン

(明久：レオン?ビニに?)

「どんどん行くぞおつ!」

Dクラスも突つ込んでくる。

『Dクラス

鈴木一郎

VS

Fクラス

柴崎功

点 化学 25点 VS 66

『』

鈴木、撃破。

「先生、Dクラス 笠島圭吾 行きます！試験召喚！」サモン

（明久：更に相手が！疲弊している柴崎君じゃ押さえきれない！）

「Fクラス 高町、 笠島君に勝負を挑みます！試験召喚！」サモン

「Fクラス レオン、複数名の召喚獣を討伐しまああああっす！」

なのはが 笠島に、レオンが 多数の相手に戦いを挑んだ（レオンは特攻と言つべきだが）。

（明久：柴崎君が生き残った！）

『』	Dクラス	笠島圭吾	VS	Fクラス
高町なのは				
化学	99点	VS		
365点	『』			
『』	Dクラス	生徒 × 5	VS	Fクラス
レオン				
化学	計539点	VS		
『』				
		3570点		

「なんだあの点数は！？」  
「3000点オーバーだと！？」

Dクラスの生徒たちは驚きを隠せなかつた。

「いっけえええつ！」

「おらおらあ！死神サマのお通りだあつ！」

なのは、レオンが倒した。

そのとき、中野が明久の所に突っ込んでくるできた。

「吉井明久！その首級貰つた！」

「負けてたまるかああつ！」

敵召喚獣が助走をつけて突っ込んでくるのに合わせ、

「試獣召喚！」

叫んだ直後、足元に現れる魔法陣。

そして現れる、特攻服に身を包んだ明久の召喚獣。

「Fクラス中堅部隊隊長、吉井明久！貴公の相手を……あ  
があつ！」

明久の肩にいきなりの激痛。

(明久：痛いつ！何も敵が突っ込んでくる正面に出てこなくともいいじやないか！痛みのフィードバックつて結構辛いのに！)

「この部隊長はバカだ！俺一人で充分だから、皆は残りを！複数で囲んで戦え！」

バカにした言い方。

「くたばれ吉井！」

「そろはいくかつ！(ヒヨイツ)」

「なつ！？」

豪快に転ぶ中野の召喚獣。

「（相手が驚いている今がチャンスだ！）ああっ！霧島さんのスカートが捲れているっ！」

『なにいっー？』

ロクラスの男子はおろか、エクラスの男子、更にはロクラスの女子まで振り返った。

明久は次の行動に出る。注意が逸れた一瞬を利用して、近くの窓に思いつきり上靴を投げつけた。

ガシャアーン！

破碎音とともに、窓が砕け散る。

「な、なんだ！？なにごとだ！？」

突然の出来事にその場の全員の注意が更に逸れた。

「うわっー・島田さん！そんなものをどうする気だよー！」

明久は自分の身の保身のための小芝居をつむながら、壁に備え付けられている消化器を掴み取り、安全弁を引き抜く。

ブシャアアツ！

景気の良い音と共に溢れ出る消化器の粉末。

「う、うわっ！なんだ！？」

「ペッペッ！こりゃ消化器の粉じゃねえか！」

「前が見えない！」

視界が遮られた。

「島田さん、キニはなんて」とを…」

明久、もう一芝居。

「Fクラスの島田め！なんて卑怯な奴なんだ！」

「許せねえ！彼女にしたくないランキングに載せてやるからな！」

「そうだ！在学中には彼氏のできない状況にしてやる…」

「そんなのあつたんだ…」

「…でも、男らしくてステキ…。お姉様…。」

「ど、同性愛…？」

(明久……なんだか骨の一、一本じや済まない事態を引き起こしてしまった気がする。す、済まない、島田さん。君の犠牲は無駄にしない…)

明久は少し自分の行動を後悔した。

「だあああつ！」

明久は粉を吐き出しつづいて空になつた消化器を天井のスプリンクラーめがけてブン投げる。

ガン！ シュワアアア…。

スプリンクラーにあたり、作動した。水滴が辺りに舞う粉を落とし始める。

「待たせたな、吉井！鍵宮！五十嵐先生！Fクラス、近藤吉宗が行きます！試験召喚！」

『Dクラス	中野健太	VS	Fクラス
近藤吉宗			
化学	43点	VS	91
点	『		

「ぐつーーには退くぞ！全員遅れるなー！」

敵部隊長、塚本の撤退命令がすぐ近くから聞こえた。

「深追いはするな。俺達も明久の部隊や高町たちを回収したら一旦戻るぞ。」

こちらは雄一の指示。

「さて、無事なようだな。明久。」「うん、まあね。」「敵は・・・僕の敵はどこだあつ！」「退いたぞ？」「嘘つ！？」

彼らは部隊を立て直す為、荒れに荒れた戦場を後にした。

次回、第三問

「初陣と犠牲と召喚戦争」

その7

## 第三二問 「初陣」と犠牲と召還戦争 その6（後書き）

「後書き」「一ナーツす！」

「後書き」「一ナーティス！」

「今日は前回と何も変わってないからキャラ紹介です。」

「今日は・・・優を紹介するツス！」

春原 優

16、

黒髪、髪の長さは肩にかかるくらい。

実力はAクラス中堅。

運動、料理は普通。

ランクは、翔子と同じランク。（何のランクかはアニメで。）  
キラが好きになつた理由は後ほど。

「・・・以上ツス！」

「次回は・・・このは？あれ、オリキャラじゃないはずなのに・・・

「とモノ2のキャラとはいえ名前だけだから・・・らしいツス。  
詳しい紹介をするツスよ！」

「感想や投票など、お待ちしてまーすーといつか、お願ひしますー。  
では、また次回ツス！」

第三回 「初陣とい犠牲といだ戦争」 やのへ（前書き）

そのへです。  
長くなりました。

今回は後書きコーナーはちよつと違います。

では。

## 第三二問 「初陣と犠牲と召還戦争」 その7

教室に戻り。

「明久、よくやった。」

雄一がらしくもない言葉を口にした。

（明久…どういう風の吹き回しだらう…）

明久は疑問に思いながらその顔を見る。

晴れやかな顔だった。

「校内放送、聞こえた？」

「ああ。バツチリな。」

「（やつぱり！僕の不幸を喜んでやがる！許せん！今すぐにでも窓から突き落としてやりたいけど、今の僕は雄一に構っている暇はない。もっと肅正を加えるべき重要な人物がいるんだから。）雄一、須川君がどこにいるか知らない？」

「もうすぐ戻ってくるんじゃないかな？」

「（おおっ！もうすぐ戻つてくれるんだ！よし、落ち着け僕。大丈夫、大丈夫。包丁は家庭科室からパクつてきたし、靴下には砂も詰めた。）やれる、僕なら殺れる……！」

「やるなつての。」

「即席でBを作んなつて。」

明久はおかしかつた・・・

「ちなみにだけど。」

レオンが言つが明久は聞いていない。

「あの放送を指示したのは僕だよ。」「シャアアアアツ！」

明久、レオンを襲う。

「あ、船越先生。」

「ちいっ！」「

明久、掃除用具入れに隠れる。  
障害物を全て倒して。

「さて、馬鹿は放つておいて、そろそろ決着をつけるか。」

「そうじやな。ちらほらと下校してある生徒の姿も見え始めたし、  
頃合じやろう。」「

「・・・・・（口クコク）」「

「よし！Dクラスの連中を絶滅危惧種にしてやるぞー！

「しなくていいと思いますが・・・」

「とにかく、Dクラス代表の首級を獲りに行くぞ！」「

『おうつー..』

皆教室から出ていく。

(明久：僕も行きたいけど、船越文史がいるからいけないー・くそつ  
！このままではレオンを取り逃がしてしまうー)

「あ、あのね吉井君。」

フェイントは明久に声をかける。

「船越先生が来たのは……嘘だよ？」  
(明久……嘘?)

そして。

ダアン！

「ひやつ！？」

「逃がすか、レオン！」

明久が掃除用具入れの扉を蹴り開け、廊下に飛び出した。そのとき、フェイントが驚いた。

「キラあ～・・・怖かつたよお～・・・」

「だ、大丈夫だから。(レオン、また敵作っちゃったな・・・)」

フェイントは半泣きでキラに抱き着き、キラは慰める一方、レオンを中心配していた。

廊下。

「下校している連中にうまく溶け込め―取り囲んで多対一の状況を作るんだ！」

雄一の声が廊下に響く。

「そつちから回り込め！俺はこいつに数学勝負を申し込む！」

「なら、俺は古典勝負を・・・」

「日本史で・・・」

Fクラスの連中がDクラスの連中を取り囲んでいる姿が見られる。

『Dクラス塚本、討ち取つたり！』

一際大きな声があがる。

塚本が討ち取られたのだ。

しかし、明久には関係ない。

「レオン、どこだ！」

明久はレオンを探す。

「（奴は背が低いから見つけにくいけど・・・いたつ！）レオン、首を洗つて・・・」

明久がレオンのところに駆け寄ろうとしたとき。

「援護に来たぞ！皆、落ち着いて取り囲まれないように周囲を見て動け！」

「Dクラスの本隊だ！ついに動き出したぞ！」

Dクラスの本隊が動いた。

これで双方の主戦力が（Fクラスはそうでもないが）集っていることになる。

「本隊の半分はFクラス代表の坂本雄一を獲りにいけ！他のメンバ  
ーは囮まれている奴を助けに行き、高町や泉戸を討ち取るんだ！た  
だし、レオンには挑むな！」

平賀の号令の下、あつという間に雄一やなのは、このはの周りがD  
クラスメンバーで囮まれる。

（明久：雄一が敵に囮まれているから、僕がレオンに近づけない！  
くそあつ！僕の憎き敵があつ！）

「Fクラスは一度撤退しろ！人ごみに紛れて攪乱するんだ！」

よく通る雄一の声。

「逃がすな！個人同士の戦いになれば負けはない！追い詰めて討ち  
取るんだ！」  
しかし。

「Dクラス大野姫子、Fクラス泉戸さんに古典勝負を挑みます！」  
「しまつ・・・！」

召喚される大野の召喚獣。

『Dクラス

大野姫子

V S

Fクラス

泉戸このは

V S

58点

『

古典

98点

点差がある。

(「のは…ま、負けちゃう…」)

「Fクラスキラ・ヤマト、泉戸「のはの代わりとして」の勝負を受けます！試験召喚！」

キラがついに参戦した。

『Dクラス

大野姫子

VS

Fクラス

キラ・ヤマト

VS

古典

98点

VS

4586点

』

「Fクラスフェイト・T・ハラオウン、Dクラス青野君に総合科目で勝負を挑みます。試験召喚！」

『Dクラス

青野洋一

VS

Fクラス

フェイト・T・ハラオウン

VS

総合科目

1035点

VS

3865点

』

フェイトも同時に参戦をした。

「なのは。大丈夫？」

「ありがと、フェイトちゃん。文系だったから危なかつたあ～。」

「大丈夫？」

「キ、キラ…君…。」

キラ、フェイドがこののは、なのはへと駆け寄る。

「なんだ、あの一人は！？」

「Aクラスが一人！？」

「ヤマトの召喚獣、なんて姿なんだ！」

「あんな姿、見たことないぞ！」

キラ、フェイドの登場に、慌てだすDクラスの本隊。

「Fクラスの皆はすぐに退いて！この戦域にいるDクラスの人々に総合科目で挑ませていただきます！」

キラ、一対多の宣言。

「向かうなーあいつには敵わない！」

しかし、退いている生徒を追うDクラス。

『Dクラス	生徒×15	VS
Fクラス	キラ・ヤマト	
総合科目	計1470点	
45829点		』

「やめる、もうー！」

そうキラが叫んだ瞬間、キラの召喚獣の腕輪が光った。

「なつ・・・」

その声が聞こえた頃には、突っ込んでいった15人全員の召喚獣が両肩と腰、手に持つライフルの計五門から放たれた閃光によつて、

全滅していた。

次回、第二問

「初陣と犠牲と戦闘戦争」

その8

第三二回 「初陣と犠牲と召還戦帝」 その二（後書き）

「後書き」「一ナーツす！」

「はい始まりました、後書き」「一ナーツす！」

「今日は予定を変更しまして・・・」

「なにがあるツスか？」

「実は前（3／14）に山田花太郎さんの小説の感想におじやましたときに、レオンの」と伝えて、お見舞いについて・・・これを・・・貰つたんだ・・・。」

「な、なんスかそれ！？」

「シャマル&リフィル作クッキー・・・」

「ヤ、ヤあそんなどでレオンに来ていただきましたツス！」

「お見舞い貰つたって聞いたけど・・・」

「うん、これ。」

「クッキー？ま、いつただつきまーす！」

「おお、豪快にいつたツス。」

「ふむふむ。表面はザクザク、中はぐちゅぐちゅ、甘すじがす、辛す  
ぎる味わいが・・・んゴパツ」

「ザヤあああああツス！殺人ツスか！？」

「だ、大丈夫！？」

「ふ、大丈夫。あの川を渡ればいいのだるひつへ」

「ダメー！（ドスツー！）」

「はつー！」

「あ、蘇生したツス。」

「い、今なら瑞希の化学兵器も大丈夫な気がする・・・。レイン・

・覚悟。」

「え、ちよ、まつ・・・」

「インフェルノディバイダー！」

「わああー！」

「許さん！」

「ま、また次回おあいしましょーツスー！」

第二回 「初陣とい犠牲といぬ戦争」 やの8（前書き）

その8です。

今回ま少し短いです。

では、どうぞ。

## 第三問 「初陣と犠牲と召喚戦争」 その8

そのころ、明久は。

(明久：あ、あれは！近衛部隊がいないほどに防備が薄い！チャンス！)

明久は素早く平賀の下に駆け出す。

「向井先生！Fクラス吉井が・・・」

「Dクラス玉野美紀、試験召喚。サモン」

「なつ！近衛部隊！？」

突如現れたのはDクラスの女子。

(明久：いくら下校中の生徒に紛れているとは言え、やつぱりFクラス所属に見えるヤツの動きには注意しているのか！)

「残念だつたな、船越先生の彼女クン？」

勝ち誇った平賀の顔。

「ち、違う！あれはレオンが勝手に・・・」

「そんなに照れなくてもいいじゃないか。さ、玉野さん、彼に祝福を。」

「わかりました。」

「ちくしょう！後一步でDクラスを落とせるのに！」

「何を言つたと思えば、彼氏クン。いくら防御が薄く見えても、さすがにFクラスの人間が近づいたら近衛部隊が来るに決まっている

だらう？ま、近衛部隊がいなくてもお前じや無理だらうナビ。」

平賀がフンッと鼻を鳴らして明久を一瞥した。

(明久…つうつ、ムカつく…)

明久はそれに対抗して、片目をつむって応えた。

「それは同感。確かに僕には無理だらうね。だから・・・」

もつたuibつて一息入れて、

「姫路さん、よろしくね。」

「は？」

「何をいってるんだ、この馬鹿は？」といった顔をしている平賀。

「あ、あの・・・」

そんな彼の後ろから、申し訳無れりと瑞希が肩を叩いた。

「え？あ、姫路さん。どうしたの？Aクラスはこの廊下は通らなかつたと思うけど？」

今だ現状を理解できていない平賀。瑞希がFクラス所属だなんて普通は誰も思わない。

「いえ、そうじゃなくて・・・」

もじもじと言ごづりそうに体を小さくする瑞希。

「Fクラスの姫路瑞希です。えっと、よろしくお願ひします。」「あ、こちらこそ。」

「その……Dクラス平賀君に現代国語勝負を申し込みます。」

「……はあ、どうも。」

「あの、えっと……さ、試験召喚ですっ。」

サヨン

『Fクラス	姫路瑞希	VS
Dクラス	平賀源一	VS
現代国語	339点	VS
129点	『	

「え、あ、あれ？」

戸惑いながらも召喚獣を構えさせ、相対する。

「『』、『』めんなさいっ！」

その獲物に似合わず素早い動きで相手に肉薄する瑞希の分身。相手の反撃も許さず、一撃でDクラス代表を下して、この戦いの決着となつた。

それまでの戦闘ライン。

「フヒイトちゃん、皆退いた？」  
「レオンと吉井君以外は！」  
「わかった！・・・・・痛つ！」  
「！」

キラの召喚獣がなにがしらダメージを受けたのだろう、キラの頬に傷がついて血が流れていた。

「ええっ！？ちよ、キラ君！？」

「やつぱりフィードバックが強いね・・・」

「俺や明久以上に強いな。」

「俺や明久以上に強いな。」

キラや焰、優が話していたら、

「・・・・・誰？キラを傷つけたのは、（ピピピピピピ・・・）」

フェイトの後ろに修羅がいた。

「レオン！ フェイトを止めてくれ！ あれだと誰か殺しかねん！」

「くつ！ 全員、フェイトと僕の間、それと後ろに立たないで！ 最悪氣絶するぞ！」

レオンがそう叫んだ瞬間、道が開いた。

「フェイト（バチバチバチバチ・・・）・・・少し（バチチチチチ・・・）・・・（気絶してろおおおおつー（ドオオオオオオン！）」

音が聞こえた瞬間、フェイトの前にレオンがいて、フェイトがそのまま前のめりに倒れた。

「レ、レオン、一体何をしたのじゃ！？」

「気絶させた。腹部に一撃食らわせて。」

「えげつないのお・・・」

その一瞬で全員が、

「ヤマトテナガセキセキヨウヒヨウヒ・・・

と、思ったとかどうとか。

次回、第二問 「初陣と犠牲と召喚戦争」 その9

第三二問 「初陣と犠牲と召喚戦争」 その8（後書き）

「あ、後書き」「一ナーツす……」

「前回、レインがもらつたお土産で、大変なことになつたツス。それで、今の現状は……」

「ガントレットハーディス！」

「ほぼ一人になるつ！」

「カーネージ・・・シザーッ！」

「超スピード！」

「・・・」んな感じになつてるツス。」

「今日は泉戸このはについて、説明するツス。」

泉戸 このは

16、

姿はととモノ2の戦士科女子の姿だと思つていただければ。  
ただ、髪は長めで、腰くらいはある。  
実力は紹介で述べたとおり。

フェイトにある部分で劣等感を持つている。

キラに好意を持った理由は別の小説で。

「・・・以上ツス。次回は焰を紹介するツス。」

「どつっせい！」

「「ふつー！」

「レイン・・・落ちたツスね。じ、じゃあ今回はこのへんで。また次回ツス～！」

三月語です。

新しくモンスターハンターものの小説を書き始めました！

そちらの方もよろしくお願いします！

第二回 「初陣と犠牲と亞修戰帝」その9（前編）

皆さん、お久しへりです！

お待たせしました！

そして、ロクラス戦終了です！

そのためこまくなりましたが・・・

では、どうぞ！

## 第三問 「初陣と犠牲と召喚戦争」その9

Dクラス代表 平賀源一 討死

『つおおおおおおつー』

その知らせを聞いたFクラスの勝鬨とDクラスの悲鳴が混ざり、耳をつんざくような大音響が校舎内を駆け巡った。

「凄えよ！本当にDクラスに勝てるなんて！」  
「これで畳や卓袱台ともおさらばだな！」  
「ああ。アレはDクラスの連中の物になるからな。」  
「坂本雄一サマママだな！」  
「やつぱりアイツは凄い奴だつたんだな！」  
「レオンも凄い奴だぜ！」  
「坂本万歳！レオン万歳！」  
「姫路さん愛しています！」

代表である雄一、参謀を勤め果たしたレオンを褒め称える声がいたるところから聞こえてきた。

さつきまで雄一やレオンがいた方を見ると、がっくりとうなだれているDクラス生徒たちの奥でFクラスの皆で囲まれている姿があった。

「あー、まあ。なんだ。そう手放しで褒められると、なんつーか。  
恥ずかしいから。止めてくんない？」

頬をポリポリと搔きながら明後日の方向を見る雄一と頭を搔くレオ

ン。

照れている。

「坂本！握手してくれ！」

「レオン！俺と握手を！」

二人はもう英雄扱い。この光景を見れば、どれだけ皆が教室に不満  
があつたかがわかる。

「レオン！」

「明久？」

明久は颯爽と駆け寄つて、

「僕もレオンと握手を！」

手を突き出した。

「ぬおおつー！」

ガシイツ。

「雄一……ビリして握手なのに手首を押さえるのかな……」「押さえるに……決まっているだろうが……フンッ！」

「ぐるりー」

手首を捻りあげられ、悲鳴を上げ持つていた包丁を取り落としてしまった。

• •  
• •  
• •  
○ ○

「雄一、レオン、皆で何かをやり遂げるって、素晴らしいね。」

「僕、仲間との達成感がこんなにもいいものだなんて、今まで知らな全身にとてつもない痺れがあああっ！」

「今、何をしようとした？」

「誰かー。ベンチあるかー？あれば持ってきて！」

「す、ストップ！ 僕が悪かつた！」

(明久：か、解放された・・・。尋常じやないほど痛かつた・・・。  
というか、ペンチを何に使つ氣だつたんだろう？）

「・・・ブツブツ・・・。」

なにかつぶやくレオン。

「・・・生爪・・・。」

(明久：一度と逆らわない！)

その遙か後ろでは。

「ねえ鍵宮君、キラ君・・・どうしたの？」  
「保健室連れてつたが？」  
「今頃、屋上にいるね・・・」  
「私、連れてくる！」  
「わ、私も！」

フェイト、優が屋上に向かって走って行った。

「あの歌、歌つてるよ・・・きっと。」

「レイン、なにか知ってるの？」

レインがキラについてつぶやいたとき、アリシアが聞いた。

「うん。たまにだけ、歌つてる時があるの。聞いていたけど、かなり悲しい曲だつたな・・・。」  
「私たちも行ってみよ?」

なのは、アリシア、「」のはも行つた。

Side 屋上

屋上には、キラがいた。

「・・・・・・・・・・・・荒れ果てた道、傷付いた身体・・・・・・・・・・・・  
羽を休める、ことはいらない・・・・・・」

そして、歌つていた。

悲しい雰囲気の歌を。

「（カチャ・・・・）キラ・・・・？」つーフェイトイちゃん・・・？」

フェイト、優が屋上に来た。

「ねえ、さつきの歌……何?」

「今のは……『メン、言えないや。』

「何か……あるんですね……」

「うん……。」

歌の題名、歌う理由を言はず、俯くキラ。

「じゃあ……、続きを……聞かせてください。」

「えつ……?」

「私も……聞きたないな……。」

一人から続きを聞きたいと言われ、戸惑いつき。

「……いいよ。でも、最初からでいいかな?」

『(うんへはい)。』

キラは歌つことにし、キラの提案に「了承する」人。

「じゃあ……。……」

そして屋上に一つの歌が聞こえた。

「凄い悲しい歌だよ・・・ぐすり。」

「涙が・・・止まらない・・・」

ドアの後ろで聞いていたのは、アリシア、このまま、その歌の雰囲気についていた。

Side end

「まさか姫路さんやマト君がFクラスだなんて・・・信じられない。」

ヨタヨタと歩み寄る平賀の声。

「あ、その、わざはすみません・・・」

瑞希が違う方向から駆け寄る。

「いや、謝ることはない。全てはFクラスを甘く見ていた俺達が悪いんだ。ルールに則つてクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日で良いか？」

平賀が可哀相に見える。だが、仕方がないのだ。勝てば英雄、負ければ戦犯。それが代表なのだ。

「もちろん明日で良いよね、雄一ー？」

明久はそう聞いた。

「いや、その必要はない。」

雄一は誰もが予想し得ない返事をした。

「え？ なんで？」

「Dクラスを奪う気はないからだ。」

それが当然だと叫つかのように叫びげる雄一。

「雄一、それはどうこいつ」と? 折角普通の設備を手に入れることができたのに。」

「忘れたのか? 僕達の田標はあくまでもAクラスのはずだろ?」

打倒Aクラス。それが明久と雄一の到達点。

「でもそれならなんで標的をAクラスにしないのさ? おかしいじゃないか。どうせ敵に回すのだからこんな回りくびことしなくても・・・」

「少しば自分で考えたら? そんなだから、明久は近所の中学生に『馬鹿なお兄ちゃん』なんて言われるんだよ?」

「なつ! そんな半端にリアルな嘘をつかないでよ!」 「レオン、近所の小学生じゃなかつたか?」

「・・・人違いです。」

「まさか・・・本当に言われたことがあるのか・・・?」

(明久:み、見ないで! そんな田で僕を見ないで!)

明久に対しある種の恐怖の田を向ける雄一。

「と、とにかくだな。Dクラスの設備には一切手を出すつもりはない。」

「それは俺達にはありがたいが・・・それでいいのか?」

「もちろん、条件がある。」

当然だ。

「一応」「一応などと言つたあ、おのれは何様のつもりだ?」  
「聞かせてくれ。」

レオンが齧したため、平賀は言い方を改めた。

「レオン、齧すな。そんなに大したことじやない。俺が指示を出したら、窓の外にあるアレを動かなくしてもらいたい。それだけだ。」

雄二が指したのはDクラスの窓の外に設置されているエアコンの室外機。

「Bクラスの室外機か。」

「設備を壊すんだから、当然教師にある程度睨まれる可能性もあると思つが、そう悪い取引じやないだろ?」

その話もごもつともである。

事故に見せられれば厳重注意で済み、三ヶ月もの間最低設備で過ごすという状態から逃れられるのだから。

「それはこいつらとしては願つてもない提案だが、なぜそんなことを？」

「雄一の作戦の一いつでしょ？」

「ああ。次のBクラス戦の作戦に必要なんでな。」

「・・・そうか。ではこちらはありがたくその提案を呑ませて貰おう。」

「タイミングについては後日詳しく話す。今日はもう行つていいぞ。」

「ああ。ありがとう。お前らがAクラスに勝てるよう願つてこらるよ。」

「ははっ。無理するなよ。勝てっこないと思つているだろ？」

「それはそうだ。AクラスにFクラスが勝てるわけがない。ま、社交辞令だな。」

そしてロクラス代表、平賀は去つていった。

「さて、皆一。今日は『』苦労だった！明日は消費した点数の補給を行うから、今日のところは帰つてゆっくりと休んでくれ！解散！」

『あじやじやしたー。』

雄一が号令をかけると、皆雑談を交えながら帰りの支度を行つた。

そこへキラたちが戻ってきた。

「あ、キラーケガ、大丈夫?」

「あ、うん。平氣だよ。」

「といひで高町たちはなぜ泣いてゐるのじやへ。」

「ひっく・・・だつてえ・・・」

「キラが・・・キラがあ・・・ぐすり。」

なぜ泣いているのかを泣きながらなのはとアリシアが説明した。

「それは・・・泣ける話じやのひ・・・」

「だよね・・・ひっく・・・」

「も、もつ泣き止んで、止ひ。」

「でも～・・・」

「ふええええ・・・」

キラが宥めよひとするも、全く意味は成さない。

一番酷いのは優だ。号泣と言つても過言ではないに泣き方になつて

る。

「キラの囁ひとおつじゅ、泣き止んだ方がよいぞ。」「うん・・・  
べぐすり・・・」

なのほやアリシアは泣き止んだが、優だけはまだ泣き止んでいかなかつた。

「雄一、僕らも……」

明久が雄一に帰らうと言おうと雄一に話しかけたが、雄一は瑞希と話していた。

瑞希はまっすぐに雄一を見ていた。

二人とも明久に気付いていないかのようだ。

(明久：あれ？ もしかして・・・僕は存在を認識されていない？ まさか眼中にないとか？ ちくしょう！ それだったら・・・スカート捲り放題じやないか！)

『チャンスだぜ明久。 パパッと捲つちまえよ。 あんな可愛い子のスカートの中なんて、 そろそろ揉めるもんじやねえぜ？』

(明久：はっ！？ お前は僕の中の悪魔！？ くそつ！ 僕を悪の道に誘惑しに来たな！ 犯めるなよ！ 僕の正義の心が負けるものか！)

・ · · · · · · · · · ·

(明久：・・・あれ、 天使は？ 僕の中の天使は！？ ちょっと、 出できてよ！ これじや僕には悪の心しかないみたいじやないか！)

明久が悶絶しているうちに雄一と瑞希の話が終わつたらしく、雄一が明久に近寄つてきた。

明久は、自分の天使が一向に出でこないと疑問を感じていた。

「さて明久。そろそろ帰るぞ。」

「あ、うん。姫路さんとはもういいの？」

「ああ。これで決心も固まつただろうし、な？」

「ひやつ！？」

雄一が問い合わせると、ボンッと音が聞こえてきそうなほどに瑞希の顔が真っ赤になつた。

「ふーん、そつか。よくわからないけど、それじゃ帰ろつか。姫路さん、またね。」

「あ、はい！ わよつならー！」

顔を赤くしたまま見送手をブンブンと振る瑞希に見送られて、明久と雄一は教室を後にした。

『・・・捲つても、いいんじゃないかな？』

(明久：僕天使、出でぐるの遅いよ！しかもスカート捲り肯定して  
るし！)

ピリリ・・・

キラの携帯になにかが届いた。

「メール？誰からだろ・・・」

From レオン

Subject 待ち人あり

「れ、レオン・・・いつの間に帰つてたんだ・・・。でも、待ち人  
つて言われてもな・・・」

キラは内容を見た。

## 本文

今玄関の前にめっちゃ人がいる。  
僕鍵ないから早く来てくり。

あと、妹、Sもいるよ。

「妹、Sつて・・・あれ？エルルは料理学校行つてるはずだしアル  
ティは管理局にいたはず・・・。とりあえず急がないと…皆、ゴメ  
ン！先に帰るね！」

「え、ちひ、キラー！」

行かないで、と黙つまひなフュイットを置いて、キラは帰つた。

「……ちひ。私だけじゃどうもなによ……」

フュイットは残されたメンバー（なのは・このは・アリシア・優）を  
ざつまとめるかに困つていた。

「それにしてもらお。」

「ん？」

「ロクラスとの勝負つて本当に必要だったの？別にヒアコンなら他の  
の方法でも壊せたと思うけど……」

「ああ、そのことか。」

帰り道。

「理由は他にある。クラスの皆を試合戦争に慣れさせる為だと、  
他のクラスにプレッシャーをかける為だと、自信をつけて士気を  
上げる為だとかな。」

「ふーん。それじゃ、Dクラスの設備を手に入れなかつたのは？」  
「目的はあくまでAクラスだからな。Dクラスの設備を手に入れる  
ことで一部の奴らが満足して試合戦争に反対し始めるかもしない  
だろ？うそうならない為と、不満によるモチベーションを維持する  
為だ。」

まさに、神童再び、という感じだ。

「Aクラスに勝てるかな？」  
「無論だ。俺に任せておけ。」  
「・・・ありがとう。僕のわがままの為に。」  
「別にそんなわけじゃない。試合戦争は俺がこの学校に来た目的そ  
のものだからな。」

ふと雄一が遠くを見る。

「目的の為にも、明久にだつてきつちつ協力してもらつからな。と  
りあえずは明日の補給テストで。」  
「・・・・・ぐう。（やういえは明日はテストを受けるんだつた。  
）」  
「ゲームばかりしてないで、寝る前に少しきらい勉強もしておけよ  
？」  
「はいはい。教科書くらいは読んで・・・ん？」

明久は自分の鞄の軽さに気付いた。

「あー教科書、卓袱台の下に置いたままだつた！」

「・・・あほ。さつさと取つて来い！」

「うう・・・。んじや、先に帰つていいよ。」

「もちろんだ、待つてるわけがないだろ。」

「わかつていたけど、薄情もの。」

明久はあと少しで家に着くところで学校へ引き返した。

「あああほ。・・・ん、キラ。どうしたんだ、そんなに慌てて。  
「はあ、はあ・・・。さつきレオンからメールが来て・・・はあつ・・・  
・

キラは雄二にメールを見せた。

「待ち人つてなあ、おい。しかも妹、Sなんてひとつべつにするか  
?」

「レオンだからね・・・」

「それなら仕方ないな。早く行つてやれ。」

「ありがとう、また明日!」

キラは再び走つて行つた。

「忙しいな。さて、俺も帰るとするか。」

雄一も帰路についた。

「はあ、やれやれ。」

明久は学校に着いた。

「たつだいまー。・・・なんて・・・・・」

「よ、吉井君！？」

「あれ、姫路さん？」

我が家のように入った教室にいたのは、瑞希がいた。

「ビビビビビしたんですか？」

瑞希は慌てている様子。

明久は座っている席（？）を見た。

卓袱台の上には可愛らしげ便箋と封筒が置いてあった。

「あ、あのっ、これはっ・・・」

(明久・まるで雄一へのラブレターに使うよつた便箋と雄一へのラブレターに使うよつた封筒を用意しているみたいだけ、使い道がわからない。)

『現実を見る。明らかにラブレターだ。』

(明久・黙れ僕の中の悪魔！僕はそんな虚言に騙されはしない！だいたい、そこまで言つからにはこれがラブレターだという証拠はあるのか！？)

「これはですね、そのっ・・・」

「うんうん。わかってる。大丈夫だよ。」

「えつと・・・ふあつ！？」

卓袱台にまづき転げる瑞希。

その拍子に懶そうとしていた手紙が明久の前に飛んできて、その一文が目に入る。

『あなたのことが好きです。』

「・・・。」

『・・・これ以上ない物的証拠だと思つが？』

「・・・。」

『わかつただる？これが現実だよ。』

「…………。」

『さ、諦めて認めようぜ？』

明久は飛んできた手紙を綺麗にたたみ、瑞希に返した。

そして一言。

「変わった、不幸の手紙だね。」

『「トイツ認めない氣だ！」』

（明久：何を言つたんだこの悪魔めー…もつ驅されないからなー…？）

「あ、あの、それはそれで凄く困る勘違いなんですけど……」「そんなことしないでも、言ってくれたら僕が直接手を下してあげるのに。ああ大丈夫。スタンガンなら隣のクラスの山下君に借りてくれるから。」

「吉井君。これは不幸の手紙じゃないですから。」

「嘘だ！それは不幸の手紙だ！実際に僕はこんなにも不幸な気分になっているじゃないか！」

「吉井君。」

瑞希が暴れる明久を抑えようとして手を握っていた。

「落ち着いてください。そんなに暴れると身体をぶつけて怪我をしちゃいますよ？」

明久の中に望まない現実が浸透し始める。

「・・・仕方ない。現実を認めよう・・・」

がっくりと膝をつく明久。

「その手紙、相手はウチのクラスの・・・  
「・・・はい。クラスメイトです。」

顔を真っ赤にしながらも迷いなく答える瑞希。

相手は雄一という、明久の考えは確定した。

「・・・そつか。でも、そいつのどこがいいの？そりや確かに、外見はそれなりだとは思うけど。」

「あ、いえ。外見じゃなくて、あつ、もちろん外見も好きですけど！」

「憎いつ！あの男が心底憎い！」

「そう、ですか・・・？」

「うん。外見に自信のない僕には羨ましくて。」

「え？ どうしてですか！？ とっても格好良いですよー。私の友達も結構騒いでいましたし！」

「え？ ホント？」

（明久：自分で言つのもなんだけど、なんて醉狂な友達なんだ。）

「はい。よくわからないんですけど、坂本君と一緒にいる姿を見ては『たましい坂本君と美少年の吉井君が歩いているのって絵になるよね』ってよく言つてました。」

「良い友達だね。仲良くしてあげてね。」

「『やつぱり吉井君が受けなのかな？』とも。」

「前言撤回。その友達とは距離をおこす。姫路さんにはまだちょっと早いと思へ。（僕が雄一と……おやつ。）……それにしても、外見もつてことは、中身が良いの？」

「あ、えーっと……はい……」

「やうだね。肝臓とか頑丈そうだね。」

高く売れそうである。

「それは身体の中身です。」

「じゃ、まさかありえないとは思ひけど、やつつの性格が？」

「ありえなくあつませんっ！」

瑞希にしては大きな声。

「（や）まで雄一に好意を寄せているなんて……）……そいつ

の性格のどこがいいの？」「や、優しいところとか・・・」

「（や、優しい？僕を騙してロクラスにボコらせた、あの性格が優しいと？）今から番号を教えるから、メモの準備はいい？大丈夫、とっても腕の良い脳外科医だから。」「別に気が変になつたわけじゃありません！」

（明久：そんな馬鹿な！？あんな性格を優しくと評するなんて、姫路さんはどんな酷い環境にいたんだ！？）

「優しくて、明るくて、いつも楽しそうで・・・私の憧れなんです。」

その真剣な口調からは、茶化すなんてできそつにもない程の強い想いが感じられた。

「その手紙・・・」「は、はい。」

「・・・良い返事が貰えるといいね。（とても邪魔できるワケがない。そこまで好きになつた相手なら、クラスメイトとして応援してあげたいくらいだ。）」「はいっ！」

うれしそうに笑う瑞希を見て、明久は雄一を心の底から本当に羨ましいと思つた。

次回、  
第EX問  
「客と妹と同居人」

## 第二回 「初陣と犠牲と亞修戰帝」その9（後編）

今回でロクラス戦終了しました！

次回はEX話で待ち人（ビヨレオン）の話をします！

次回をお楽しみに！

第EX話「客と妹と同居人」（前書き）

今回は番外編です！

前からお知らせしていたメンバー、それと突然に追加したメンバーが出来ます！

では、どうぞ！

## 第E×話「客と妹と同居人」

明久が瑞希と話していた頃。

「はあっ、はあっ・・・れ、レオン・・・  
「近くまで来て待つてたよ。」

キラは自宅の近くまで来ていた。

息絶え絶えだが。

「！」から客は見えると思つけど？」「  
「あ、客？・・・あ、あの尖つた帽子やポニー・テール、特徴のある  
あの髪型は・・・」

キラは急いで階段を駆け上がつた。

「や、やつぱり・・・  
「あ、義兄さん！  
「久しぶりー！」

キラに最初に気がついたのはアルティとエルル。

「『』、『』主・・・じゃなくて・・・、キラ！」

「え、ええと・・・」

「キラ！」

「（兄様／キラ）、お帰りなさい！」

「はわわ、『』、『』主人様、お帰りなさいまちえ！」

「朱里ちゃん、『』主人様はダメだつて・・・」

桃香、愛紗、凪、蓮華、流琉、朱里、離里がそれぞれの言葉でキラを迎えた。

「あ、あの・・・や、どうして皆が『』に？・・・といつか、僕の家なのに僕が客になつた氣分だ・・・」

「エルルと流琉以外は皆長期間休暇を貰つたから、皆で『』たちに來たんだ」

桃香がキラに説明する。

「エルルと流琉以外は・・・って、じゃあ一人は？」

「私は飛び級しすぎて卒業扱いになつちゃつて・・・」

「私もともとエルル姉様と一緒にいましたから・・・」

「つまり、行く当てを無くしたから来た・・・」

『（「ク。）』

一人の話を聞き、キラは自分の意見を言つ。

その意見に肯定の意を示すよつて領ぐ一人。

「ねえキラ？上がつた方が乐じやない？」

「あ、そ、そうだね。」

キラはレオンに言われて慌てて鍵を開けた。

『お邪魔しま（～）す（失礼します・・・）一』

家の中。

「踏は、これからどうするの？」

突拍子にレオンが聞いた。

「私は義兄さんと同じところへ行きたいなあ・・・」

「あ、私もいいかな！？」

「私も！」

アルティが自分の要望を言い、ヒルルと桃香がそれに同意する。

「学園長の許可が貰えるならね・・・。愛紗と風と蓮華はどうするの？」

「私は・・・一緒に行きたいわ・・・」

「私もです・・・。ですが・・・」

「どう名乗ればいいのか・・・」

全員が同じ悩みを持つていた。

「真名は・・・ダメだよね・・・。一番『まかしやすい』といえば『

まかしやすいけど・・・』

「それ、いいと思うけどなあ・・・』

「ダメです！真名を呼ばせるなどー！」

キラが真名の使用を考えたが否定。

桃香がすぐに意見を肯定するが、愛紗がダメだしをした。

「真名なら史実の人物と被らないからいいんじゃない？」

「うつ・・・それはそうだけど・・・」

「我慢は大事。この世界は皆の世界と違うんだから。」

「・・・朱里と雛里はどう思う？」

「えと、そのほうがいいと思しますよ。」

「わ、私もそう思います・・・」

「・・・軍師がそう言つなりませ、仕方ないな。」

レオンの意見に言葉を詰まらせる蓮華。

それから追い撃ちをかけよつとして、愛紗を追い詰める。

愛紗は朱里・雛里に意見を求め、あつそり肯定され、意見に乗ることにした。

「学校行く組を優先するね。桃香と愛紗と蓮華は楽。姓と真名で名前作れるから。問題は・・・」「わ、私ですか・・・?」

レオンは、凪を見据えた。

凪は急に振られたために少し戸惑つた。

「だつて、真名が1文字しかないんだよ?」「うぐ・・・」

レオンが凪を弄つていた間。

「樂・・・進・・・文・・・謙・・・。ダメだ、名前が思い浮かば

ない・・・

キラが凪の偽名を考えていた。

「一番マシなのは楽文だと思つよ?」

「楽文 凪か・・・」

「わ、私はそれでいいです!」

レオンが出した案に焦りを見せつつも肯定した凪。

「とりあえず、学校行く組はこれで決定だね。後は留守番組だけじゃ、桃香たちみたいなので」まかしきくな。OK?」

『(口ク)』

レオンが留守番組の名前案を出し、その同意は得られた。

「それで、この荷物は・・・」

「え、これ? 服とか料理道具とか。」

「いや、中身じゃなくて・・・。」

「一緒に住むからだよ?」

「・・・それはそれで困る気が・・・」

ピンポーン。

「誰だれ? はーーー!」

キラは玄関に向かつた。

力チャ。

「あれ、 フェイトちゃん? ビーハしたの?」

「さつきクロノから連絡があつて、 アルティたちがここに来たっ・・・て・・・」

来ていたのはフェイトだった。

フェイトは玄関を見て言葉を詰まらせた。

「ふ、 フェイトちゃん?」

「キラ、 なんで女の子の靴が沢山あるの! ? . . . もしかして私、 捨てられちゃうの! ?」

「す、 捨てるって・・・」

「捨てないで! お願ひ!」

「いや、 なにか勘違いしてない?」

「キラ～？なに騒いでるの・・・ってフェイトか・・・」「蓮華あ～！なんなのこの靴はあ～！？私、私・・・捨てられちゃうのー？」

「あ、あの、フェイト・・・落ち着いて？捨てられないからー」「じゃあこの靴は！？女の子の靴は誰のなのー？」  
「全員知っている人のだから！」

フェイトの暴走を止めるのに10分かかった。

翌日から桃香・愛紗・凪・蓮華・アルティ・エルルは学校へ行くことになった。

「・・・これをどう説明すればいいんだろうか・・・。FFFが気になるな・・・」

キラは明日以降のこの事態の説明に困っていた・・・。

「ところで、来たのは「これだけ？」  
「いえ、天和と蒲公英が来てますが・・・」「いないよ？」  
「探してきます！」

愛紗と凪が二人を探しに行つた。

数分後、連れて來た。

「ごめんね～。」

「あはは・・・」

「悪氣ある？」

二人を責めるレオン。

天和が涙目になってしまったので皆で止めた。

ついでに天和が学校に行く組に加わった。

次回、第四問 「編入と脱走と必殺料理」

## 第E×話「客と妹と同居人」（後書き）

名前の紹介です。

基本的には、姓 真名としました。

例：朱里の場合

諸葛 朱里

こんな感じです。

眞の場合は、ちょっと特殊です。

彼女だけ揃りました。

次回からちゃんと出ますし、Bクラス戦までになります。

第四問「編入と脱走と必殺料理」その1（前書き）

今回、また新キャラが出来ます！

ちなみにそのキャラ、布石ありましたが気づいた人いますでしょうか？

では、どうぞ！

#### 第四問「編入と脱走と必殺料理」その1

Dクラスとの戦いがあつたその翌日。

明久はいつも通り学校に向かつた。

「おはよー。」

「おっす、明久。」

「おう明久。時間ギリギリだな。」

「ん、おはよう雄一、焰。……あれ、なんか皆ソワソワしてるね。なにがあつたの?」

明久が教室に着いた時、雄一が英語の教科書を持ったまま、焰が寝転がつたまま挨拶をした。それを返した明久。同時にクラスメイトの雰囲気がいつもと違うことに気付く。

「俺は知らん。」

「あー、これな。今日、転入生と編入生が来るらしいからな、女子だと願つていてるんだよ。」

「なるほど・・・あ、雄一、皆には何も言われなかつたの?」

「ん? 何がだ?」

「Dクラスの設備のこと。折角勝ち取つたのに占領しないから普通は不満に思うよ?」

「ああ。皆にもきちんと説明をしたからな。問題ない。」「ふーん。」

クラスメイトが素直に「いつ」と聞いたのは、昨日の雄一の働きを評価したからだろう。

「それよりお前らはいいのか？」

「何が？」

「は？」

「昨日の後始末だ。」

（明久：はて、昨日の後始末……。ああ、レオンを殺ることか。）

明久は雄一の話にレオンのこと気にがついた。

焰は別のことで顔が青ざめた。

「うん。いくら僕でも、生爪を剥がされたり黒焦げにされると分かつていながら行動するなんてありえないよ。」

「いや、レオンの始末じゃなくて……」

「明久、一人で大人しく殺されようぜ……」

「一体何が言いたい……」

「吉井っ！鍵宮っ！」

「「」ぶあつ！」

「おふうつ！」

明久の台詞が突然の拳で遮られる。

焰は同時に殴られた。

「し、島田さん、おはよつ・・・」

「よ、よお、島田・・・」「おはよつでもよおでもなこわよつ・・・」

随分とこきつたつている美波。

倒されている明久の位置からは美波のパンツが見えそうだ。

焰の位置からは確実だ。

「アンタたち、よくも昨日はウチを見捨ててくれたわね！吉井、アンタはそれだけじゃ飽き足らず、消化器のいたずらと窓を割った件の犯人に仕立てあげたわね・・・！」

(明久：・・・おお、そういうば。)

「・・・酷いな、お前。」

「おかげで彼女にしたくないランキングが上がっちゃつたじゃない！」

「そんなんあつたんかい・・・」

(明久：まだ上がる余地があつたことが意外だ。)

「・・・と、本来は掴みかかっているんだけど、」

美波が急に冷静になる。

(明久：掴む前に殴つているから充分だと思つんだけど……)

「アンタたちにはもう充分罰が与えられているようだし、許してあげる。」

「うん。さつきから鼻血が止まらないんだ。」

「いや、そうじゃなくてね？」

「ん？ それじゃ何？」

「一時間目の数学のテストだけど、」

「・・・おいおい、明久死ぬな、これ。せりば、明久。お前のことは忘れない。」

「えー？ な、何々！？ 何で別れの言葉を！？」

美波が楽しそうに、本当に心から告げる。

焰は明久の命の終わりを悟つたらしく、すぐに別れの言葉を言った。

それに焦る明久。

「監督の先生、船越先生だつて。」

明久はそれを聞いた瞬間、扉を開けて廊下を疾駆した。

「あと鍵宮、アンタには『嫁』が来てるわよ。」

「はあっ！？ そんなのいるわけ『焰』！…………な…………い…………」

「

スパン！

勢いよく扉が開けられた。

開けられた扉の先にいたのは自称「焰の嫁」の水河 涼だった。

「ほ～む～らあ～！」

ドスッ！

「ねこげんきつ！？」

飛びついた涼の頭が焰の鳩尾に直撃、焰は不思議な悲鳴を発して倒れた。

「ようやく見つけた……！ なんで焰が『クラスにいるのー？』

「だ、誰のせいだと思っているんだ……？」

「え、誰？」

「お前だ……」

「てへつ

「

涼が舌をちらつと出した瞬間、クラスの連中がいつの間にか黒衣を身に纏っていた。

「これより、異端審問会を始める・・・。罪人、鍵宮焰・・・お前はAクラス女子・水河涼とつきあつていることを我々の目の前で堂々と曝した。諸君、この事実に相違はないな?」

『相違ありません!』

「相違だらけだあ!つか、須川あーなにしてんだあー第一、俺はこ

んなペタンコは好きじゃねえ!」

「ペ、ペタンコゆーな!」

焰は突然始まった異端審問会に猛抗議した。

その時に出た「ペタンコ」という言葉に涼が抗議した。

「被告、言い残すことは?」

「知るかあああああああ!」

「きやつ!」

焰は自分に乗つかつていてる涼を払いのけ、廊下を疾駆した。

『鍵宮焰あー貴様は許さんぞおおおおおつ!』

FFFも焰を追つて廊下を疾駆した。

その頃生徒用玄関では。

キラが学校に到着した。

「時間ギリギリ・・・・・・って、何で下駄箱の形が変わってるん  
だろう・・・」

キラの下駄箱は膨れ上がっていた。

「考えてても仕方ないか・・・（カチャドザザザザザザ）うわあ  
ああああ・・・」

下駄箱を開けた瞬間に出てきたのは、何故ここまで詰めたのか分

からない程の手紙だつた。

(ちなみに全部ラブレターである)

その手紙でキラは埋まってしまった。

そして数秒後。

「ま、間に合つたあ・・・」

「ぎ、ギリギリ・・・」

『はあ、はあ・・・』

ルカ、なのは、フェイト、アリシアが到着した。

少し苦しそうなのは、走ってきたからだ。

「・・・?あの山・・・なんだろ・・・」

なのはは不自然に出来上がつた山(エロ キラ)に気がつく。

「あれ、開いている下駄箱つて・・・」

ルカがそう言つた瞬間。

「ちょっと待つでね！」

「すぐに助けるから！」

アリシア・フェイトが手紙の山を崩し始めていた。

「一体何の騒ぎ……うおっ！？」

鉄人、登場。

「に、西村先生！キラが、キラが……」  
「ヤマトがどうした……！まさかこの中にいるといふのか！」  
「そのまさかです！」

「よし、手伝おう！」

鉄人も加わって、キラ救出は進んだ。

三分後、キラは無事救出された。

「一体何なんだこの手紙の量は？」

「 も、 まあ・・・」

この事態に呆れる鉄人と、鉄人の疑問に微妙な答えで返したルカ。

「 ね、 姉さん、 キラが、 キラが目を覚まさないよー・?・じ、 デウシヨ  
う!・?・じ、 人口呼吸するしかないのかな!・?」

「 お、 落ち着いてフェイト! 気を失つただけだからその必要はない  
よー・」

「 こやはは・・・」

一人の前では、 ハラオウン姉妹が慌てており、 なのはが苦笑いをする、 という光景が見られた。

#### 第四問「編入と脱走と必殺料理」その1（後書き）

今回も後書きコーナーはお休みします。

前々回キラが歌っていた歌について説明します。

キラが歌っていたのは、cheerful+cool+funの「生マレタ理由」（違つていたらごめんなさい）です。

他にも候補はありましたが、キラの状況に合っているの(?)の曲かな・・・と思つて・・・

次回、ついに転入します！

第四問「編入と脱走と必殺料理」その2（前書き）

第四問その2です！

今回、ついに転入（ついに」として扱つて良いのだらうか・・・）します！

そして・・・おっと、いいから先はお楽しみ。

では、どうぞ！

#### 第四問「編入と脱走と必殺料理」その2

「えー、今日はテストの前に編入生の紹介です。皆さん、入ってきてください。」

福原先生の紹介で、ぞろぞろと教室に入ってくる。

『うおおおおおおおおつー』

男子勢が叫ぶ。

何せ、入ってきたのは女子ばかりだったからだ。

「はい、ようやく全員入りましたね。では、自己紹介をお願いします。」

「じゃあ、私から・・・。アルティ・ヤマトです。好きなことは・・・」

「・」

アルティを先頭に、エルル・桃香・愛紗・凪・蓮華・天和が自己紹介をした。

アルティとエルルが名を出した瞬間、机に突つ伏したキラに視線が集中した。

紹介が終わり。

「き、キラ、あの二人、兄妹なの？」  
「義理の……ね……。うああ……」

美波はすぐにキラに聞いた。

キラは朝のダメージが残っているのか、言葉少なに答えた。

「ねえ義兄さん、レオン、このクラスって、いつもあんななの？桃香とか蓮華とかが告白されても撃沈させてるけど……」

アルティが指差したその先では……

「り、劉さん、僕と付き合つてください！」  
「『めんなさい。（笑顔で）』  
「フラれたああああ！でも許せる笑顔だああああああ！」  
「孫さん、俺と……」  
「無理よ。」  
「『ふあつーでもそのシンシンした性格がまた……』

たつた今、二人が撃沈した。

「キラはこんだから僕が答えるね。いつも・・・だよ。女子が少ないからね、女に食えているから。」

「そ、そこまでなんだ・・・」

アルティはキラとレオンに質問をした。

レオンがすぐに答え、エルルはその答えに笑うしかなかつた。

「ところでヤマト姉妹、今日テストがあるの知ってるよな？」

雄一が一人に聞いた。

「一応。あ、私のことはアルティって呼んで？」

「私はエルルって呼んでくれないかな？」

「わかった。知つてるようなら大丈夫だな。」

「でも、勉強なんて全然出来ないわよ？」

「私も・・・」

勉強できないことに不安になる一人。

「大丈夫だ。明久というバカでもここにいるんだから。」

「どれだけバカなの？」

「至高のバカだな。」

「いや、究極のバカじゃな。」

「・・・・・完全なバカ。」

「ちょっと！？皆してバカバカって言わないで！？」「うわわっ！  
ど、どこから・・・？ていうか、そ、そこまでバカって言われるな  
んて・・・」

いつの間にか秀吉とムツツリー二が来ていた。そして明久のバカについて自分の意見（？）を言った。

その後、どこまで走っていたのか分からぬ明久がいきなり突っ込んだ。

エルルは登場とそのことに驚いた。

そしてテストが始まった。

「うあー・・・づがれだー・・・」

明久は卓袱台に突つ伏す。

とりあえず四教科が終了した。

ただでさえテストは疲れるのに、明久は船越先生と一緒に着あつたため余計に疲れていた。

ちなみに明久は船越先生に近所のお兄さん（三十九歳／独身・・・お兄さん？）を紹介してあげていた。  
ついでに昨日の呼び出しもその件だということにした。

「うむ。疲れたのう。」

いつの間にか明久の近くに秀吉が来ていた。

「・・・・・（口クコク）」

ムツツリー一モ。

「よし、昼飯食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすつかな。」

勢いよく立ち上がる雄一。

昼食のメニューが素晴らしい重そうだ。

「ん？ 吉井達は食堂に行くの？ だつたら一緒にいい？」  
「ああ、島田か。別に構わないぞ。」  
「アルティやエルルとかも誘うけど……」  
「問題ない。少しくらい増えても構わないさ。」  
「それじゃ、混せてもらうね。」  
「…………（口ク口ク）」

ムツツリーが頷いているのは下心のせいだろう。

（明久・ムツツリー、島田さんに下心を求めて無駄だといつのに。）

「吉井、なんかウチの悪口考えてない？」  
「滅相もございません。（な、なんて恐ろしい勘なんだ。）」「まあいいわ。とりあえず旨を呼んでくるね。」

美波は旨を呼びに行つた。

「アルテイ～！エル・・・ル・・・」

な、何が起こったの！？

美波が見たもの。

「あ、あはは・・・やつたよ、私、燃え尽きたよ・・・」

「エルル！まだ燃え尽きちゃダメ！義兄さんにお昼食べてもうりん  
でしょ！？」

「・・・そなんだけど・・・体が・・・」

それは、真っ白に燃え尽きたエルルとどうとか復活させようとする  
アルティだった。

「あ、アルテイ・・・。エルル・・・どうしたの？」

「あ、美波・・・。エルルがテストで燃え尽きたのよ・・・」

エルル、勉強嫌いみたいね・・・

「あ、美波。エルルどうしたの？  
燃え尽きたって・・・」

アリシアも来た。

「た、高町さんん！？」

「なのはー!?」

「いやはははは・・・だ、ダメ、動けない・・・あ、お花畠だあ・  
・・わい、幸せだよ～・・・」

「おま、アリサ岬に迷ひ入った

「な、なのは～！ルカと結婚できなくなるよ～・・・」

「おはようございます。お昼なのです。  
モニタングみたいですね。」

優とフロイトの声がしたのでそっちを見るとソリでも燃え尽きが。

「なのはまで燃え尽きたつて……」

「あ、といひで一緒にお昼食べに行かない？食堂で。

あれ、瑞希がお弁当作ってくれるで、でなかなに

そうだった！瑞希が料理作つてくるんだった！

「忘れてたわ。アリシア、ありがとう。」

「何かしたわけじゃないのに・・・まあいいか。あっちの監査やキラに言えばいいんだよね?」

「お願い！」

「わかった。皆で先行つてて。」

「アリシア、ありがとう！」

美波は雄一達の方へ行つた。

「お弁当の約束？」

「うん。瑞希が作ってくれるって。」

二人は、このあと起る惨劇を知らないでいた。

Side end

「アリシアから聞いたけど、瑞希が料理を作ってくれるって話を忘れてるわよ？」

「そうだったか？俺はてっきり明久に作ってくれるって思っていたんだが・・・」

「そんなわけないよ。」

「あ、あの。皆さん・・・」

瑞希が話しかけた。

「姫路さん、どうしたの？」

「あの、お皿ですけど、その、昨日の約束の・・・」

瑞希はもじもじしながら皿を見る。

「たつた今話題に上がっていた弁当かの？」  
「は、はいっ。迷惑じゃなかつたらどうぞっ！」

瑞希は身体の後ろに隠していたバッグを出した。

「迷惑なもんか！ね、雄二ー！」  
「ああ、そうだな。ありがたい。」  
「そうですか？良かつたあ～・・・」

瑞希は安心したのか、ほにやつとした笑顔を作った。

「むー・・・・。瑞希って、意外と積極的なね・・・」

美波は明久を親の仇のように睨んできた。

「それでは、せっかくの」馳走じゃし、こんな教室ではなくて屋上  
でも行くかのう？」  
「そうだね。（こんな腐った畠と男の臭いしかしない場所で頂いて  
良いものじゃない。）」  
「そうか。それならお前らは先に行つてくれ。」  
「ん？雄二ーはどこか行くの？」  
「飲み物でも買つてくる。昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな。」  
「あ、それならウチも行く！一人じゃ持ち切れないでしょ？」

「明久からすれば」珍しく気遣いを見せる美波。

「悪いな。それじゃ頼む。」

「おつけー。」

雄一は疑うことなく受け入れた。

(明久：僕だつたらそのまま連れて行かれてボコられるのを警戒するんだけど。)

「きちんと俺達の分をとつておけよ？」

「大丈夫だつてば。あまり遅いとわからないけどね。」

「そう遅くはならないはずだ。じゃ、行つてくる。」

雄一と美波は財布を持って教室を出ていった。

「僕らも行こうか。」

「そうですね。」

「ワシは燃え尽きた者を連れて来るつもりじゃ、少し遅れるかもしれん。」

「あまり遅くならないようにね～。」

「わかつてある。アルティ、アリシア。燃え尽きた一人を屋上に運んでくれんかのう?」

「いいわよ。あ、でも一人じゃ無理だから誰かに手伝つてもらわな

「いと・・・愛紗ー！手伝つてー！」

「はい、今行きます！」

「エルルちゃんとなのはちゃん、大丈夫かなあ・・・」

「そ、それは私に聞かれても・・・」

アルティは愛紗に協力を頼み、桃香、凪がそれに続いた。

蓮華や天和も一緒にいる。

フェイトはキラについていた。

「キラ、大丈夫？」

「平気・・・」

ちなみに焰は。

「来るなあああああ！」

「いーじやん別にー！私も料理作つてきたんだよーーー？」

「前にお前の料理で死にかけたんだ、今更食えるかよ、んなもん！」

「食べてーー！」

「断るー。」

涼と校内で追いかけっこ(?)をしていた。

第四問「編入と脱走と必殺料理」その2（後書き）

「後書き」「一ナーツす！」

「みなさん、ほんつとーにお久しぶりッス、アルスっす！今日はオレ一人ツス。」

「まずは投票状況ツス！」

現状、アリシアだけが・・・と思つたら、キラにも一票入ったツスか！？

お、驚きツス・・・

と、いうわけで、男子部門も急遽開催ツス！

機嫌は女子部門と一緒にツス！どしどし応募するツス！

そして今回は焰の紹介ツス！

鍵宮 焰

男、17（誕生日が4月2日）

元「風牙」。力が強く、頭も（本当なら）良い。

水河 涼が大嫌い。理由としては、勝手に婚約者として扱われたこと、料理が出来てしなくマズイこと、がある。

以上ツス。

次回は未定ツス！

それでは、また次回お会いしましょ「ツス！」

第四問 「編入と脱走と必殺料理」 その3（前書き）

第四問その3です！

瑞希の料理がついに炸裂！  
犠牲者多発！

誰かは本文で！

第四問 「編入と脱走と必殺料理」 その3

遅れていた秀吉が追いつき、屋上に着いた。

「天気がよくてなによつじや。」

「そうですねー。」

絶好の弁当口和。

ちなみに燃え尽き組は・・・

「・・・空はこんなに青いのに・・・」

「私たちは真っ白・・・」

「こ、これ、もう重症じゃないですか?」

どこかで聞いたことがあるような台詞を言っていた。

「じゃあ、なのはだけ治療してみるね。」

「高町さんだけ・・・?」

優はフェイトがなのは「だけ」を治療すると聞いたことに疑問を感じた。

「なのはー。ルカが来たよー。」

「ルカ君がー?どこー?どこー?」

「うん、治療終了」

「だ、騙すのが治療・・・ですか・・・」

「なのはちゃんはルカ君に『熱心だからね。名前聞いたら飛び起きるよ?夜だろ?』と。」

「そ、そこまで・・・」

なのは、復活。

事実と「なのはの話に睡然とする優。

「・・・あれ、ルカ君は?」

「『めんね、なのは。あれ、嘘なの。』

「もー!フェイトちゃん!」

「痛つ!痛い痛い!な、なのは、痛いから・・・」

なのははフェイトをポカポカと叩いた。

「あとは、エルルだけだね。」

「私が無理矢理復活させてみましようか?」

「愛紗ちゃんだといけない気がする・・・」

「寧ろ殺してしまいそうな気が……」「なつ！？そつ、そんなこと私がするわけが……」

エルル復活方法に愛紗が提案する。

すかさず桃香と凪が否定した。

「・・・よし。・・・あーーど二かで見たことがある気がする俺様主義な人が弁当を捨てようとしてるーー」「あー！ダメー！捨てないでーー」「ダメえええええええ！」

ドンッ！

「ヴあーちえ！」「

アルティが俺様主義な人が弁当を捨てようとしているという嘘をつき、このはがそれに便乗した。

それを阻止しようとしてエルル復活。

犠牲はレオン。

「・・・あれ？俺様主義な人は？」

「嘘。そんな人いないよ。」「

「そつかあ。良かった……」「

「それよりもエルル、今なにか下敷きにしてるのわかる?」  
「え?」

このはに言われ、エルルは自分の体の下を見た。

「んむーーむーー!」  
「わあああー!レオン、ごめーん!」

衝突した反動でレオンはエルルの下敷きになつていた。

エルルがすぐにどいたため、レオンは無事だった。

「ゼはー、ゼはー・・・。某戦略シミュレー・ショ・ンゲームのキャラ  
の台詞を真似るかもしれないけど・・・胸で溺れ死ぬかと思った・・  
・」  
「レオン、小さいからね・・・」  
「ホント、生きててなによりね。」  
「ていうか、その表現はどうなのかな・・・」

レオンの無事に安堵する旨。

何気にアルティがつっこむ。

「つかエルル、帰つたら勉強推定2時間な・・・」

「やめてーーそんな」としたら真っ白ビンのか死んじゃつよ~ー！」

「す、推定・・・」

「私、レオンがエルルの勉強嫌いを肅正しようつといふのこー..」

「どこの赤い人の真似してもダメー！」

レオンがエルルに勉強せると言つた（エルルからすれば死刑宣告）。

「おーい、早くしないとなくなつちやつよー・・・「・・・・・・・・  
(ヒョイ)」つて、ずるいぞマッシュリーー!!」

明久が燃え広きた組を呼んだとき、動きの素早いマッシュリーーがエ  
ビフライをつまみ取つた。

そして、流れるように口に運び・・・

「・・・・・（パク）」

バタン！

ガタガタガタガタ！

豪快に頭から倒れ、小刻みに震えだした。

「・・・」  
「・・・」  
「・・・」  
「・・・」

明久と秀吉とレオンとレインが顔を見合わせる。

「わわっ、土屋君ーー?」

瑞希が慌てて、配りうとしていた割り箸を取り落とす。

「え、な、何があつたのーー?・・・って、土屋君ーー?」

なのはが騒動に気付く。

「・・・・・(ムクリ)」

(レイン…おお、起き上がったー)

「・・・・・(グツ)」

(レイン…お、親指を立てた!)

(レオン・ムツツリーーーあんた、あんたあ男だ!)

多分、『凄く美味しいぞ』と伝えたいのだろう。

「あ、お口に合いましたか? 良かつたですっ!」

ムツツリーーが伝えたいことが伝わったのか、瑞希が喜ぶ。

(明久・ムツツリーー、それならなぜ足が未だにガクガクと震えて  
いるんだい? 僕にはＫＯ才前のボクサーにしか見えないよ。)

「良かつたらどんどん食べてくださいね?」

瑞希は嬉しそうに勧める。

明久的には目を虚ろにして身体を震わすムツツリーーが忘れられない。

(明久……秀吉、レオン、レイン。あれ、どう思つ? )

明久は瑞希に聞こえないくらい小さな声で秀吉・レオン・レイン

に話しかける。

(秀吉…どう考えても演技には見えん。)

(レイン…いや、あれはマジだよ。)

(明久…だよね。ヤバいよね。)

(秀吉…お主らは身体は頑丈か?)

(明久…正直胃袋に自信はないよ。食事の回数が少なすぎて退化してるから。)

(レイン…同じく。てかさ、あれは頑丈どうの話でないと思うのは僕だけ?)

(レオン…いやいや、僕もそう思ってたから……)

ちなみに、表情は笑顔のままだ。

瑞希にこの会話と驚愕を気取らせるわけにはいかない。

(秀吉…ならば、ここはワシに任せてもいいわ。)

男氣ある秀吉の台詞が囁かれる。

(明久…そんな、危ないよ!)

(レオン…死ぬよ!?)

(秀吉…大丈夫じゃ。ワシは存外頑丈な胃袋をしていてな。ジャガイモの芽程度なら食つてもびくともせんのじゃ。)

(レイン…た、タフな内蔵……あれ? ジャガイモの芽つて確かに毒だったと思うよ……)

(明久…でも……)

(秀吉・安心せい。ワシの鉄の腰袋を信じて……)

外見は美少女でありながら、誰よりも男らしく台詞を言おうとしたところで、

「おう、待たせたな！へー、こつや皿そりじやないか。どれどれ？」

雄一登場。

「あつ、雄一。」

止める間もなく素手で卵焼きを口に放り込み、

パク。

バタン！・・・ガシャガシャン、ガタガタガタガタ！

ジュースの缶をぶちまけて倒れた。

「さ、坂本！？ちょっと、ビリしたのー？」

遅れてやつてきた美波が雄一に駆け寄る。

「四人……間違いない。コイツは、本物だ……」

その前、向こうでは……

「義兄さん、今日お弁当作つてきたんだ。」

「……失敗作……ないよね？」

「大丈夫……だと思う……」

「え、エルルちゃんは料理上手だから大丈夫だよ。」

エルルがキラに弁当を食べてもらっていた。

「じゃあ、この卵焼きから……」

パク。

バタン！

突然キラが頭から倒れた。

「え、義兄さん！？」

「エルル、一体何をしたの！？」

「特に何もしてないよー！な、なんでー？私も食べてみるー。」

パクッ！

ふらあ・・・

「お塩だと思っていたのに・・・」

ぱた。

キラとエルルが同時に倒れた。

「キラあー！目を、目を覚まして！」

「エルル、死んだらダメー！生きて、生きて義兄さんに料理を作つてあげるんでしょー！？」

フェイドとアルティがそれぞれを揺する。

『まさか・・・塩酸と水酸化ナトリウムの化学反応塩（塩酸風味）（が使われていた／だった）なんて・・・』

二人ともそう言って氣を失った。

「あー、もー！なんでキラばっかりこんな目に『ガシャン！』なつ、なに！？」

アリシアが愚痴を漏らしていたとき、なにか金属質のものが落ちた音がしたのでそっちを見た。

なにがあつたのか。

それは、雄一が倒れたときに出た音だった。

「ええー！？あつちでは坂本君があー！？」  
「さつきの土屋君、そして坂本君・・・」  
「もしかして！」  
「いやいや、毒はないな・・・」

なのはが驚き、フロイト・ンのは・アリシアがそれぞれの推理を出し合っていた。

「『ごめんなさい・・・義兄さん・・・』

「え、エルルが悪いわけじゃないよ・・・うぐつ・・・」

「今度は、ちゃんと確認しよ・・・ガク。」

キラとエルルが同時に倒れ、意識を失った。

明久達はムツツリー二同様激しく震える雄一を見る。

すると、雄一は倒れたまま明久達の方をじっと見て、田でこう訴えていた。

『毒を盛つたな?』

と。

『毒じゃないよ、姫路さんの実力だよ。』

『僕らがいつ毒を盛るの? そんな暇あるかい?』

明久達も田で返事をする。

いつも一緒に行動しているが故にできる技。

こんな時便利だ。

「あ、足が……繋つてな……」

瑞希を傷つけないよう逆にウソをつく雄一。

「あはは、ダッシュで階段の昇り降りしたからじゃないかな?」

「うむ、そうじゃな。」

「うん、そうだね。そうに違いない。きっとやうだろ?」

「やうなの? 坂本ってこれ以上ないくらい鍛えられてると思つけど

?」

事情がわかつていらない美波が不思議そうな顔をする。

(明久:余計なことを言ひ出さないうちに退場させた方がいいかも  
しないな……)

明久がそう思ったとき。

「あ、美波、今右手をついてるあたりだけどさ、  
「ん、何レオン?」

(明久・レオン?)

「せつときまで虫の死骸があつたよ。(嘘よん)」  
「ええつー?早く言つてよ!」

美波が慌てて手をよける。

(明久・)「いらくんは一応女の子みたいだ。それにしても、レオン、  
ナイス!」

「Sorry, You should washing you  
hand.」  
「れ、レオン?何て言つたの?」  
「ごめん、手を洗つてきた方がいいよ、つて。」  
「もう、英語で言わないでよ!でも、やつするね。ちょっと行つて  
くる。」

(明久・ひ、秀吉、レオン何て言つたかわかる?)  
(秀吉・ワシに聞くでない。ワシにもわからんのじゃ。)  
(レイン・確かに、『ごめんなさい。あなたは手を洗つてくるべきで  
すよ。』だったはずだよ?)  
(明久・秀吉・さすがレイン(じゃ)ー)

明久達がレオンの英語で議論していたとき、美波が席を立つた。

「島田はなかなか食事にありつけずにあるの?」

「全くだね。」

「可哀相に、ね。」

はっはっは、と男三人と一匹で朗らかに笑う。

「皆、もつ毛からじうしたの?・・・ってお弁当だ。私ももつね。」

「私も気になつてたんだ。私ももつね。」

「瑞希ちゃん、私にもちょーだい!」

そんな中、なのはとアリシア、天和が来て瑞希の弁当に気付く。

「えつ!?

「た、高町!?

「や、やめ・・・」

『いただきまーす。』

パク。

『あつ・・・』

バタン！

ガタガタガタガタ。

なのはもアリシアも天和も頭から倒れ、全身をガタガタと震えはじめた。

「た、高町さん！？アリシアさん！？張さんも！？」

（明久：ま、間に合わなかつた・・・）

（秀吉：もうダメじやな・・・。これは絶対ばれたのう・・・）

（レオン：なのはのバカあ！アリシアのバカあ！天和のバカあ！）

それぞれがばれたと思つた。

しかし・・・

「高町さん、アリシアさん、張さん、大丈夫ですか？」  
「にやはは・・・美味しくて氣絶しちやつただけだから安心して・・・」

「いんなおいしいお弁当、食べたことなくて・・・」「そ、そうだ・」

よ。だから安心して！」

「そ、そうですか？ よ、良かつたあ・・・」

（レイン：か、回避した！ 瑞希に対してもいい感想を言った…）

（雄一：さすが高町とアリシア、そして張…）

なのはとアリシアと天和がいい感想を言ったので瑞希は安心した。

そんな一人に驚く五人（といつても三人と二匹）。

（レオン：一人ともよく堪えたね・・・）

レオンが例のひそひそ話をなのはとアリシアと天和にした。

（なのは：だつて、本当のこと言つたら瑞希ちゃん傷ついちやうから・・・）

（アリシア：皆のために作つてきたんだもん、マズイなんて言えないよ。）

（天和：マズイなんて言つたら傷ついちやうからね。）

三人が瑞希を気遣つた発言をした。

一方、その後ろでは明久達が必死に作戦会議を行っていた。

(雄二：明久、今度はお前がいけ！)

(明久：む、無理だよ！僕だったらきっと死んじゃう！)

(秀吉：流石にワシもさつきの姿を見ては決意が鈍る・・・)

(レオン：僕は嫌だからね！)

(レイン：僕も絶対食べないから！)

(アリシア：私、絶対食べないから！)

(なのは：私も嫌だよ！) (天和：私も嫌かな？・・・)

(明久：雄二がいきなよ！姫路さんは雄二に食べてもらいたいはずだよ！)

(秀吉：そうかのう？姫路は明久に食べてもらいたいそうじゃが？)

(明久：そんなことないよ！乙女心をわかつてないね！)

(なのは：そんなことないよ！)

(レイン：わかつてないのはむしろ明久の方だと・・・)

(明久：ええい、往生際が悪い！)

明久がついに動いた。

「あつ！姫路さん、あれはなんだ！？」

「えつ？なんですか？」

「何々？」

明久の指した明後日の方向を瑞希が見る。

天和も釣られて見た。

(明久…おひあつー)

(雄一…もじああつー?) (なのは・アリシア・ええええつー?)

その隙に明久は雄一の口の中一杯に弁当を押し込んだ。

なのはとアリシアが行為に驚く。

田を白黒させていたため、明久とレオンが顎を掴んで租借するのを手伝う。

「飯はよく噉んで。

「ふう、これでよし。」「危機は去った・・・」「・・・お主ら、存外鬼畜じゃな・・・」「え、えげつないなあ・・・」「もう死んじゃつたんじゃないかな・・・」

秀吉やなのは、アリシアが何か言つてるが気にしない一人。

雄一が更に激しく震えているが気にしない。

「『めん、見間違いだつたよ。』

「あ、そうだつたんですか。」

「そうなのー?」

こんな古典的な手にもひつかかる瑞希と天和。

純粹すきて不安にもなる。

「お弁当美味しかったよ。」馳走様。」

「うむ、大変良い腕じゃ。」

「愛紗に学ばせたい腕だね。」

遠くで「へへしつー」と、愛紗のくしゃみが聞こえた。

「あ、早いですね。もう食べちゃつたんですか?」

「うん。特に雄二が『美味しい美味しい』って凄い勢いで。」

視界の隅で倒れている雄二がフルフルと力無く首を振る。

「ですかー。嬉しいですっ。」

「いやいや、『ちらり』そありがとうございました。ね、雄二?」

明久が倒れている雄二に水を向ける。

意識があるから思えられたはずだわ！」

「う・・・う・・・。あ、ありがとうな、姫路・・・」

雄一の台詞を聞いた皆が一斉に

ヤバい、目が虚ろだ。

そう思った。

「やういえば、美味しいと言えば駅前に新しい喫茶店が・・・」「ああ、あの店じやな。確かに評判が良いな。」「え？ そんなお店があるんですか？」

明久は話題逸らしにかかる。

「評判といえど、海鳴の『翠屋』といつ喫茶店も評判が良いと噂じや。」

「へえー。」

「あ、私の実家、そこまで有名なの？」

「嘘つ！？」

「嘘じやないよ。なのはの所喫茶店だから。結構有名だよ？」「

「そりなんだ。今度今日のお礼に雄一がおじいてくれるってや。」

「てめ、勝手なこと言つなつての。」  
「いーじゃん。」

作戦成功・・・？

「あ、そうでした。」

瑞希がポン、と手を打った。

「ん？ どうしたの？」

「実はですね・・・」

『じそ、』と鞄を探る。

「デザートもあるんです。」

「ああっ！ 姫路さんアレはなんだ！？」

「明久！ 次は俺でもきっと死ぬ！」

雄一が命がけで明久の作戦を止めるにかかる。

(雄一：明久！ 俺を殺す気か！？)

(明久：仕方がないんだよ！ こんな任務は雄一にしかできない！)

「は任せたぜっ！」

（なのは：む、無責任だ……）

（アリシア：逃げたね……）

（雄二：馬鹿を言つた！そんな少年漫画みたいな笑顔で言われても  
できんもんはできん！）

（明久：この意気地なしつ！）

（雄二：そこまで言つならお前にやらせてやる！）

（明久：なつ！その構えは何!? 僕をどうする気!?）

（雄二：拳をキサマの鳩尾に打ち込んだ後で存分に詰め込んでくれ  
る！歯を食いしばれ！）

（明久：いやあああ！殺人鬼いいい！）

（なのは：だつ、ダメ！）

（アリシア：それはマズイ！マズイって！）

（天和：皆仲良くしなきや！）

（レイン：天ちゃん、的外れなこと言つてる気がするよ?）

（天和：あれ?）

雄二が拳を握り、あわや肉弾戦というところで、秀吉がすっと立ち  
上がった。

（秀吉：・・・ワシがいこう・・・）

（明久：秀吉！？無茶だよ、死んじゃうよ！）

（雄二：てめえ、俺のことは率先して犠牲にしたよな!?)

（なのは：確かに率先して犠牲にしてたね。）

（アリシア：明久ひどい！鬼畜！）

（秀吉：大丈夫じゃ。ワシの胃袋はかなりの強度を誇る。せいぜい  
消化不良程度じやろ？）

そこまで言ひと、確かに毒までも無効化する秀吉なら大丈夫かもしれないと思えて来る。

「どうかしましたか？」

「あ、いやーなんでもない！」

「あ、もしかして・・・」

瑞希が顔を曇らせる。

（その場にいる全員・・もしかして嫌がつてているのがバレたー・?）

「「」みんなさーっ。スプーンを教室に忘れちゃいましたっー。」

容器に入つてこるトザートはヨーグルトと果物のミックス(のりつに見えるもの)だ。箸で食べるにはほほ無理だ。

「取つてきますね。」

スカートを翻し、階下へ消える瑞希。

チャンス到来。

「では、」の間に頂いておくとするか。」

戦場に向かう戦士のよう!秀吉が容器を手に取る。

「・・・すまん。恩に着る。」

「「」あん。ありがとう。」

申し訳なさで俯きがちな明久達にフツと軽く笑いかけ、秀吉は言つた。

「別に死ぬわけではあるまい。そつ~~風~~にするでない。」

「や、それもそうだね!」

「ああ!秀吉、頼んだぞ!」

「木下君、頑張つて!」

「つむ。任せておけ。頂きます。」

容器を傾け、一気にかきこむ秀吉。

「むぐむぐ。なんじや、意外と普通じゃござまつー。」

また一輪、花が散った。・・・命といつ、傷い花が。

「・・・木下君・・・」

「・・・雄一。」

「・・・なんだ?」

「・・・さつきは無理矢理食べさせて『ゴメン』。

「・・・わかつてもらえたならいい。」

自称『鉄の胃袋』は白田で泡を吹いていた。

容器にまだ半分ほど残して。

「あれ? 隅どりしたの? 秀吉なんて白田向いて・・・デザートも残

してんじゃない。私がもううね。」

「アルティちゃん! ダメえええ!」

なのはの制止も虚しく、アルティはヨーグルトもどきを食べた。

「美味しいじゃない。ちょっと酸味が強いくせもあるつー。」

また一輪、命という儂い花が散つた。

その頃の焰。

「うおお、動けない！」

「ち、食べて？」

「食つか！」

「はい、あーん」

「ぐむあつ！」

涼は焰の口を無理矢理開けてワインナーを押し込んだ。

「・・・なんだ、上達し『ばあつ！』

ドサッ！

「あれ、どうしたの焰。・・・焰、焰あ！」

「昔と・・・変わってねえ・・・」

そう言い残して氣を失う焰だった。

第四問 「編入と脱走と必殺料理」 その3（後書き）

今回は3カ所で被害が  
どうでしょうか？

あと、本当に投票をお願いします！  
一票だと寂しいので・・・

それでは、また次回！

第四問 「編入と脱走と必殺料理」 その4（前書き）

お待たせしました、第四問その4です！

今回、お願いとお知らせが後書きにありますので。

では、どうぞ！

#### 第四問 「編入と脱走と必殺料理」 その4

「そういえば坂本、次の目標だけど・・・」

「ん？ 試合戦争のか？」

「うん。」

激しい昼食を終え、復活した皆でのんびりお茶をする。

特に秀吉とアルティには大量にお茶を飲ませている。  
お茶には殺菌成分があるらしい。

ちなみに美波はお茶にしかありつけていない。本人は憤慨していたが、明久達からとしては感謝してもらいたいくらいだった。

当事者の一人のはずのレインは、奥の方で何かしていた。

「え・・・い・・・に打たれ・・・、あ、テンポ違う・・・」

「レイン、何してるの？」

「ほわあっ！」

「きやつー！」

後ろから話し掛けられ、悲鳴をあげるレイン。

「な、なんだ、天ちゃんか・・・。驚かすなよお・・・」

「『めーん。それで、何してたの？』

「実は、去年先輩が『清涼祭』でバンドやつててさ、やりたいなって思つてね・・・それで、今覚えた曲をドラムだけ演奏してたの。」

「ふうーん・・・」

「レイン、バンドやりたいの？」

「おおう！？・・・フェイトか。うん、そうなんだ。去年の先輩のやつ見てね。・・・あ、天ちゃんとフェイトにちょっとお願いがあるんだけどさ、ボーカル頼めない？」

『え？』

フェイトも話に参加した。

レインはふと思つた頼みを一人に聞いた。

「ダメかな・・・」

「私はいいよ？」

「私は・・・ちょっと考えさせて？」

「いいよ、頼んだのこいつちだし。」

天和は快く承諾。フェイトはちょっと迷つた。

「じゃ、早速練習しよ？」  
「いやせ、次戦争よ？抜けていいの？」  
「雄一君に頼んでくる！」  
「作戦会議が終わつてからね・・・」

天和がすぐに動いたとしたのでレインは止めた。

「ところで、ボーカルとドラムは決まつたけど、あとは？」

フェイトが思つた疑問を出した。

「キーボードはキラに頼んだんだ。ホントに。  
「ボーカルやるー！」

フェイト、ボーカル希望。

「キラ、キラー！」

「う・・・ん、レイン・・・？」

「起きた。バンドだけじゃ、ボーカルが決まつたよ。  
」

レイン、報告。

「へえ・・・。誰？」

「天ちゃん」とフェイト。

「フェイトちゃんが！？」

フェイトがボーカルやることを聞いて驚くキラ。

「うそ。後で練習するけど、時間ある？」

「あるけど・・・」

レインのバンド立ち上げの話は進んでいた。

「相手はBクラスなの？」

「ああ。そうだ。」

「どうしてBクラスなの？目標はAクラスなんでしょう？」

（明久：僕らの目標はAクラスだ。通過点に過ぎないBクラスを相手にする理由がわからないんだな。僕もわかんないし。）

「正直に言おう。」

「雄一が急に神妙な面持ちになる。

「どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てやしない。」

戦つ前から降伏宣言。雄一らしくない。

「それには理由がある。まずは・・・」

雄一が勝てない理由を説明した。

「ちらの方が点が少ないこと。

上位十三人が特にヤバいこと。

「それじゃ、ウチらの最終目標はBクラスに変更ってこと?」

「いや、そんなことはない。Aクラスをやる。」

「雄一、さつきと言つてることが違うじゃないか。」

明久が美波の台詞を引き継ぐように間に入る。

「クラス単位では勝てないと思う。だから一騎打ちに持ち込むつもりだ。」

「一騎打ちに?どうやって?」

「Bクラスを使う。」

(明久・使う? Bクラスを? なににどうやって?)

「試合戦争で下位クラスが負けた場合の設備はどうなるか知っているな?」

「え? も、もちろん! (知らない。)」

「え? も、もちろん! (知らない。)」

(瑞希・吉井君、下位クラスは負けたら設備のランクを一つ落とされるとですよ。)

瑞希の助け舟。

「（なるほど、そうだったのか。）設備のランクを落とされるんだよ。」

「・・・まあいい。BクラスならCクラスの設備に落とされるわけだ。」

「そうだね。常識だね。」

「では、上位クラスが負けた場合は？」

「悔しい。」

「ムツツリーー、レオン、ベンチ。」

「了解、爪切りもあるなり。」

「・・・準備万端。」

「ややつ？僕を爪切り要らずの身体にする動きがっ！」

「相手クラスと設備が入れ替えられちゃうんですよ。」

また瑞希のフォロー。

「つまり、うちに負けたクラスは最低の設備に入れ替えられるわけだね。」

「ああ。そのシステムを利用して、交渉をする。」

「交渉、ですか？」

「Bクラスをやつたら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと

攻め込むよう交渉する。設備を入れ替えたらFクラスだが、Aクラスに攻め込むだけならCクラス設備で済むからな。まずうまくいくだろう。」「

「そうすればうまくいくね。」「

「・・・黒いね・・・」

「ふんふん。それで?」

「それをネタにAクラスと交渉する。『Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』といった具合にな。」

「なるほどねー。」「

「一番手と戦つた後に休む暇なく連戦。勝っても何も得られず。戦略としても最高ですね。」

雄一が説明、明久・アリシア・愛紗が賛同する。

なのはは何を言えばいいのかわからずただ感想を言った。

「じゃが、それで問題はあるじゃろう。体力としては辛いし面倒じやが、Aクラスとしては一騎打ちよりも試召戦争の方が確実であるのは確かじゃからな。それに・・・」

「それに?」

「そもそも一騎打ちで勝てるのじゃろつか?こちらに姫路やキラ、ハラオウン姉妹にレオンがいるのは既に知れ渡っていることじゅうう?」

FクラスがDクラスに勝つたわけを知りうと、当然注目が集まる。

瑞希やキラ、レオンやフロイトにアリシアなどの存在は周知の事実

だ。

そつなれば相手も対策を講じてくるはず、である。

「言われてみればそうだよねー。」

「そのへんに關しては考えがある。心配するな。」

皆の不安とは対照的に自信満々な雄一。

「とにかくBクラスをやるんだ。細かいことはその後に教えてやる。  
「ふーん。ま、考えがあるならいいけど。」

勝算がなければこんなことは言ひ出せないだろう。

「で、明久。」

「ん？」

「今日のテストが終わったら、Bクラスに行って宣戦布告して来い。」

「断る。雄一が行けばいいじゃないか。レインとかに行かせればいいじゃないか。」

(明久・今更ビの面トゲてそんな」とを。)

「レインはびつやう打ち合わせしているようだ無理みたいだな。・  
・ やれやれ。それなりジャンケンで決めないか?」

「ジャンケン？（問答無用で行かざれるよりはマシか。）OK、乗つた。」

「よし、負けた方が行く、で良いな？」

明久は雄一に「クリとつなづいて返す。

「あ、じゃあ僕も参加していい？」

「珍しいな、おまえが参加するなんてな・・・まあ、いいだろ？」

「

レオン、参加。

「ただのジャンケンでもつまらないし、心理戦ありでこいつ。」

そんな雄一の提案。

「わかった。それなら、僕はグーを出すよ。」

明久はジャンケンの構えを取りながら雄一に告げる。

「そうか。それなら俺は・・・」  
「僕は・・・」

(明久：さて、二人はどう考えるだろ？僕がそのまま正直にグーを出すと思うのか？それとも裏をかいてくると思うのか？)

「明久がグーを出さなかつたらブチ殺す。」

「明久がグーを出さなかつたら感電死させる。」

(明久：ちょっと・・・！その心理戦！？)

『ジャンケンポン！』

「わああっ！」

パー（雄一）、レオン）　　グー（明久）

「決まりだ。行つて来い。」

「絶対に嫌だ！」

「Dクラスの時みたいに殴られるのを心配しているのか？」

「それもある！」

「それなら今度こそ大丈夫だ。保証する。」

真つすぐな目で雄一が明久を見る。

(明久：騙されるもんか！そりやつてまた酷い役割を押し付ける気なんだ！)

「なぜなら、Bクラスは美少年好きが多いらしい。」

「そつか。それなら大丈夫だねつ。（これは僕にしかできない任務だ。責任重大だぞ。）」

「でも、お前不細工だしな・・・」

「そうだね・・・」

溜息混じりに雄一とレオンが呟く。

「失礼な！365度どこからどう見ても美少年じゃないか！」

「5度多いぞ。」

「実質5度じゃな。」

「5度だね。」

「しょぼー！」

「皆嫌いだつ！（一年間の日数365日と混ざりちゃつただけなのに、人のちょっとした間違いを馬鹿にして…ちくしょーー。）」「とにかく、頼んだぞ！」

明久は雄一の言葉を背中に受け、行ってしまった。

「やういえば、さつきからレイン達は何を打ち合わせしているんだ？」

「僕は知らないなあ。」

「高町は？」

「全然知らない。」

「近くに行く？」

「そうだな。」

雄一・レオン・なのはがレイン達に近づいていった。

「あとはベースとギター・・・

「あれ、雄一?」

(レイン・ギクウツー)

「何してるんだ?」

「あ、坂本君。実は、レインがバンドやりたいんだって。」

「ちょつ! 天ちゃん!」

「いざれ言うんだから、結局ばれるんだよ? 隠す意味ある?..

「.. . . ない。」

「バンドか・ . . 。そういう系のアニメでも見たんだ?..」

「いや、去年の『清涼祭』で・ . . 」

「なるほど。で、あと何が不足してるんだ?」

「ベースとギター。」

「四人いて不足」「つ! ?」

「フェイトと天ちゃんがボーカル、キラがキーボード、僕がドラムだから。」

「ボーカル一人・ . . 」

「ベースなら畠に聞いてみる。あいつなら確かやれたはずだ。」

「ギターなら僕がやるよ。」

「雄一、レオン、ありがとつー。」

「成功しうよ?」

「必ず!」

レインと雄一との間に、『バンドの成功』という約束が交わされた。

第四問 「編入と脱走と必殺料理」 その4（後書き）

前書きに書いたお願いとお知らせです。

まずはお願いから。

レインたちのバンドで、「この曲演奏してほしー！」というリクエストを募集します！

（基本、アニソンでお願いします。）

予定としては、フュイトソロ1、天和ソロ1、ツイン3としています。

それで、お知らせですが、これと、前から募集していた『バカテスマンバー以外で誰に酔わせるか』についての投票を、5月18日に締め切ります！

リクエストや投票、お待ちしています！

第四問 「編入と脱走と必殺料理」 その5（前書き）

第五問です！

いつもより短くなってしましました。

では、どうぞ！

第四問 「編入と脱走と必殺料理」 その5

「この後レインはどうにか縁と会うことができ、バンド協力、しかもベースで頼むことができた。

「・・・言い訳を聞こうか。」

午後のテストも無事終了し、放課後。

明久はBクラス生徒の暴行で千切れかけた袖を手で押さえながら雄二とレオンに詰め寄った。

『予想通り（だ。）』

「くきいー！殺す！殺し切るー！」

「落ち着け。」

「ぐふあつ！」

（明久：み、鳩尾強打・・・）

「喋んな、貧乏人。」

「あがばばばばばばばば！」

(明久：そして電気ショック・・・。あんまりだ・・・)

「先に帰ってるわ。明日も午前中はテストなんだから、あまり寝てるんじゃないぞ。」

「眞面目に勉強しろよ。」

爽やかに言い残して教室を出ていく雄一ヒレオン。

「（げ、外道め・・・。）うう・・・腹が・・・、身体が」

明久の腹がズキズキと痛み、身体は痺れている。両方の効果が切れるまで動けそうにない。

（明久：誰も心配して保健室に連れて行ってくれないなんて、僕つて嫌われているんだろうか？姫路さんなら駆け寄つてくれそうな気がするんだけど。）

明久が首だけ巡らすと、瑞希がまだ教室に残っているのが見えた。

鞄を抱え込んでキヨロキヨロとあたりを見回している。かなり拳動が不審で、何かを警戒しているように見える。

「（・・・ああ、そういうえば昨日手紙を書いていたんだっけ。もしかして、それをどこに置くべきか考えているのかな？）よ、よいし

よ・・・

明久は、それ以上見たら悪い気がして、匍匐前進で教室を後にした。

(音楽室)

「初練習だけど、フェイトも天ちゃんも大丈夫?」

「だ、大丈夫!」

「なんとかなるよー!」

レインの声掛けに答える一人。

「二人とも、落ち着いて。」

キラが落ち着かせる。

「今日はボーカルの練習が主かな? やるのは『恋華大乱』だよ。歌詞、これね。」

『・・・』

「じゃ、他のところで練習していくわ。」

「後で合わせるからねーー！」

「わかつてるとよー！」

フェイントと天和は歌詞を見て話しあじめた。

焰は別行動で練習を開始した。

ちなみに、音楽室の使用許可を取つた相手は鉄人だ。  
許可を貰つた時、鉄人は

『お前らの成功、祈つてるぞ。』

と激励していた。

「ねえレイン、歌詞分担できないかな？」

「どういうこと？」

「一番をどつちかが、二番は歌わなかつた方が歌う、という感じで。

「いいかも。それで、どうわかるの？」

「一番が天和で、二番が私。サビは基本的に一人で歌つて、最後の  
サビを先に天和、そして私が歌つて三行目から二人で。どうかな？」  
「・・・いいかも！でもフェイント、二番、歌詞だいぶ難しいよ？」  
「頑張るー！」

そして練習が始まった。

「『～～～』・・・よし！歌えた！」

「天ちゃん覚えるの早いなー。音程も合ひしゅ。」

「えへへー。」

「『真紅の・・・』・・・なんて読むのこれ？」

「これは・・・薔薇ばらだよ。」

「じゃあもつ一回サビから・・・『～～・・・～～』『ビ、ビリカ

な・・・』

「うん、いこよ。間違えてない。」

「良かったあ・・・」

練習を続け、6時。

「よし、覚えたぜーこつでもこかねー。」

焰、帰還。

「お、やつとるな。」

「西村先生。」

「今から合わせてみるのやひよと聞こてもうりやます？」

「いいだろ？。」

そして、ギターは無いが出来上がった歌を聞いてもらつた。

(都合上、最後のサビだけですB Y 作者)

『～・・～・・～』

パチパチパチパチ・・・

「・・・たつた3時間でここまで出来るのは・・・流石だ。」

鉄人は拍手をしていた。

「お前らなら成功できる。そう祈ってるぞ。」

『はいっー。』

鉄人は激励をし、去つて行つた。

「今日は遅いし、帰ろつか。」

「そうだね。」

「お腹すいた～！」

「天ちゃん、帰つたらご飯あるんだから、我慢我慢。」

「そうだね・・・お腹すいたあ・・・」

練習が済み、帰宅した。

次回、第五問 「戦争と卑怯と『万死に値する一』」 前編

第四問 「編入と脱走と必殺料理」 その5（後書き）

今回、バンド曲を1曲だけ出しました。

『真・恋姫無双～乙女大乱～』のOP、『恋華大乱』です。

従つて、募集するのはあと4曲となりました。

ご協力、お願いします！

次回からBクラス戦、開戦です！

第五回 「戦争と卑怯と『万死に値する』」 前編 セー（前編）

今回からBクラス戦です！

タイトルの山詞は、ちゃんと意味があるんですよ。

では、どうぞ！

## 第五問 「戦争と憲法と『万死に値する』」前編 やのー

### 第五問

次の憲法の（ ）を埋めなさい。

『何人も、（ ）の定める手続きによらなければ、その（ ）若しくは（ ）を奪はれ、またはその他の（ ）を科せられない。』

姫路瑞希、キラ・ヤマトの答え

『何人も、（ 法律 ）の定める手続きによらなければ、その（ 生命 ）若しくは（ 自由 ）を奪はれ、またはその他の（ 刑罰 ）を科せられない。』

教師のコメント

正解です。これは憲法第二一条の法廷手続きの保証の問題です。

レインの答え

『何人も、（ 法律 ）の定める手続きによらなければ、その（ 生命 ）若しくは（ 自由 ）を奪はれ、またはその他の（ 賞罰 ）を科せられない。』

教師のコメント

正解・・・と言えますが、最後だけ間違えてしまいましたね。

### 吉井明久の答え

『何人も、（人）の定める手続きによらなければ、その（権利）若しくは（良識）を奪はれ、またはその他の（刑）を科せられない。』

### 教師のコメント

当然といえば当然ですが。

### フェイド・T・ハラオウンの答え

『何人も、（キラ）の定める手続きによらなければ、その（行動）若しくは（活動）を奪はれ、またはその他の（自由）を科せられない。』

### 教師のコメント

なぜヤマト君が出てくるのが不思議です。

### レオンの答え

『何人も、（魔王）の定める手続きによらなければ、その（意思）若しくは（行動）を奪はれ、またはその他の（全力

全壊な一撃（）を科せられない。』

なのはの「メント

なぜ私が魔王なのかな、じつくり聞かせてほしいなあ・・・

「さて皆、総合科目[テスト]」苦勞だった。」

教壇に立つた雄一が机に手を置いて皆の方を向いている。

今日も午前中がテストで、つこさつき全科目のテストが終わつたところだ。

総合科目勝負なんてやつたものだから、補給のテストが多くなつた。

「午後はBクラスとの試合戦争に突入する予定だが、殺る気は充分か？」

『おおおおおおおおつー。』

一向に下がらないモチベーション。Fクラスの唯一の武器と言える。

「今日は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない。」

『おおおおおおおおつ！』

「そこで、前線部隊は姫路瑞希、高町なのは、レオンに指揮を取つてもらう。野郎共、きつちり死んで来い！」

「が、頑張ります！」

「う、うん！頑張る！」

男のノリについていけない若干引き気味な一人が一步前に出る。

『つおおおおおおおつ！』

一緒に戦えるとあって、前線部隊の士氣は最高潮に達しようとしていた。

とりあえず今回は廊下での戦闘は勝ちに行くらしい。戦力もFクラス66人中52人を注ぎ込む。

ここにはAクラスの実力を持つ瑞希やなのは、『死神軍師』レオンがいる。廊下での戦闘はまず取れるだろう。

「System A11 Clean - ZERO - SYSTEM -  
Standby Ready . . .  
「レオン、なにしてるの？」

目を閉じ、自分の中にシステムがあるかのよつた発言をするレオン。

天和が気になつて話しかける。

「天ちゃん、今レオンに話しかけるのはダメ。  
「え、そつなの？」

キーンゴーンカーンゴーン。

昼休み終了のベルが鳴り響く。

ついにBクラスとの決戦が始まった。

「よし、行つてこい！ 目指すはシステムデスクだ！」

『サー、イエッサー！』

「NERO - SYSTEM , START ! 行くよ、なのは、瑞希

！」

「は、はい！」

「わかつた！」

敵を教室に押し込むことが目的。

それには勢いが重要になる。

前線部隊52名はほぼ全力でBクラスへと向かう廊下を駆け出した。

今回のFクラスの主武器は数学。Bクラスは比較的文系が多いのと、なぜか長谷川先生は召喚可能範囲が広いというのが理由だ。一気に勝負をかけたい時にはありがたい先生だ。

他にも英語のライティングの山田先生と物理の木村先生もいる。

立ち合いの教師を多くして一気に駆け抜ける作戦だ。

「いたゞ、Bクラスだ！」

「高橋先生を連れているぞ！」

正面を見ればゆっくりとした足取りで歩いてくるBクラスのメンバーの姿があった。

人数は十人程度。あくまで様子見といったところか。

「生かして帰すなーっ！」

物騒な台詞が皮切りとなり、Bクラス戦が始まった。

『Bクラス

野中長男

V S

F

クラス

近藤吉宗

1943点

V S

764点

総合

『

(明久：なつ！？なんて強さだ！まさに桁が違う！)

『Bクラス	金田一裕子	VS
Fクラス	武藤啓太	VS
数学	159点	
69点		
『Bクラス	里井真由子	VS
Fクラス	君島博	VS
物理	152点	
77点		
『		
VS		
VS		
VS		

圧倒的な実力差に第一陣が「じ」とくやられていく。

止めを刺される前にフォローをしないと戦力が激減してしまつ。

明久がきちんとフォローがされているか、戦力は分断されていないかを確認していると、

「お、遅れ、まし、た・・・。」  
「「め、んな、さい・・・」  
「「め、んね・・・。遅れ・・・。ちやつた・・・」

息を切らせて瑞希となのはがやつってきた。

「来たぞ！姫路瑞希と高町なのはだ！」

Bクラスの誰かが叫ぶ。

その声を聞き、Bクラス生徒の目つきが変わった。

明らかに一人を警戒している。

「姫路さん、高町さん、来たばかりで悪いんだけど・・・」

「は、はい。行って、きます。」

「い、行つて、くるね。」

そのまま戦場に紛れ込む二人。

「長谷川先生、Bクラス若下律子です。Fクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込みます！」

「あ、長谷川先生。姫路瑞希です。よろしくお願いします。」

「Bクラス金田一裕子、高町なのはさんに数学勝負をー。」

「え、私？」

二人とも早速勝負を挑まれる。

「律子、私も手伝う！」「金田一、援護するぞ！」

その後ろから、さらに一人ずつ召喚を開始。

よほど警戒だ。

『サモン試験召喚！』

喚声に答えて魔法陣が展開。

敵はそれぞれ、剣と槍、斧と双剣を構え、瑞希のは大剣を軽々と持ち、なのはのは杖だった。

そつくりな召喚獣。ただし、

「あれ？姫路さんと高町さんの召喚獣ってアクセサリーなんてしてるんだね？」

「あ、はい。数学は結構解けたので・・・」

「私は理数系が強いから、結構解けたんだ。」

「？結構解けると、アクセサリーをしてるの？」

デフォルメされた二人の召喚獣は武器の他に左手首に腕輪をしていた。

「そ、それって！？」

「私たちで勝てるわけないじゃない！」

「ヤバい、逃げよう！」

「ダメ、勝てっこないわ！どうすればいいの…？」

(明久…あ、そういうえば腕輪をしているってことは…)

「じゃ、いきますね。」

「これ、どう使うんだろ?」

瑞希は手をキュッと握り込む。その動きに合わせて瑞希の召喚獣が左腕を敵の方に向けた。

なのははその動きを真似てみた。

なのはの召喚獣は持っている杖を前に向けた。

「ちょっと待つてよ！？」

「律子、とにかく避けないと！」

「ヤバい、なにが来るかわからない！」

「避けるべきよね！？」

大げさなくらい横に跳ぶ敵四人の召喚獣。

その直後、瑞希となのはの召喚獣の腕輪が光を発した。

キュボツ！

「あやああああつ！」

「り、律子！」

瑞希の召喚獣の左腕から光線がほとばしったかと思った瞬間、逃げ遅れた敵の召喚獣の一体が炎に包まれた。

『Fクラス 姫路瑞希 VS  
クラス 岩下律子＆菊入真由美

数学

412点

VS

189点

&

151点

』

なのはの方は、杖の前に桜色の球体ができていた。

「な、なんだあれ！？」  
「あ・・・あ・・・」

二人は震えた。

「いっけえええつ！」

桜色の球体が一体に向かつて放たれた。

その砲撃は『スターライト・ブレイカー』そのものだつた。

「うわあああああああ！」

「いやあああああああー！」

一体の召喚獣とともに一人の犠牲者が出た。

『Fクラス  
Bクラス  
数学  
153点  
&  
435点  
VS  
野中長男＆金田一裕子  
90点  
VS』

同時に。

「うわわわわっ！」

「危なっ！なのはあーもつと周りを見てよー！」

「ごめーん！」

なのはが放った砲撃が、アルティとエルルに直撃しかけた。

腕輪をしているということは、特殊能力を持っているということだ。

「うー、ごめんなさい。これも勝負ですのうー！」

大きく避けてバランスを崩した敵に肉薄し、大剣を振り下ろす瑞希の召喚獣。

相手の武器」と一刀両断し、決着は一瞬でついた。

「い、岩下と菊入が戦死したぞ！」

「金田」と野中もだ！」

「なつ！そんな馬鹿な！？」

「姫路瑞希、高町なのは、噂以上に危険な相手だ！」

Bクラスの残り六人に驚愕の表情が浮かぶ。無理もない。

(明久：「…といふか」一人とも、強すぎ。)

「み、皆さん、頑張ってください！」

「皆、頑張つて！」

二人の指揮官らしくない指示。だが、効果は絶大だ。

「やつたるでえーつ！」

「姫路さんサイゴーッ！」

「高町さんサイゴーッ！」

信者急増中。

「一人とも、とりあえず下がって。」

「あ、はい。」

「うん。あ、皆！『死神軍師』到着したよー。」

「来たか！我等が軍師！」

「負けることはもつないぞー。」

レオンの到着で自軍の士気は上がり、敵の士気はさつきのと相まって大きく下がった。

「中堅部隊に入れ替わりながら後退！戦死だけはするな！」

そんな相手の指示が聞こえてくる。

狙いは成功した。

「十数名残してすぐに前線部隊は撤退！敵の代表は根本恭一だ！」

「根本だと！？」

「あの卑怯野郎か！？」

レオンの撤退に理由。

「ねえ秀吉。根本って、あの根本恭一ー？」

「うむ。」

根本恭一。

とにかく評判が悪い。

『カンニングの常連』、『球技大会で相手チームに一服盛つた』、  
『喧嘩に刃物は当装備然<sup>デフォルト</sup>』など。

「なるほど。戻つておいたほうが良さそうだね。  
『雄』に何かあるとは思えんが、念の為に。」

レオンの撤退命令に、十数名残しての撤退が始まった。

第五問 「戦争と卑怯と『万死に値する』」前編 その1（後書き）

ようやくBクラス戦が開戦、なのはと瑞希の召還獣の腕輪が力を見せました。

次回、教室に事件が・・・

お楽しみに！

第五問 「戦争と卑怯と『万死に値する』」前編 その2（前書き）

第五問その2です！

今日は がキレます、黒くなります！

では、どうぞ！

第五問 「戦争と卑怯と『万死に値する』」 前編 その2

「……うわ、こりゃ酷い。」

「まさかこうくるとはのう。」

「卑怯、だね。」

教室に引き返した明久達を迎えたのは、穴だらけになつた卓袱台とヘシ折られたシャーペンや消しゴムだった。

「酷いね。これじゃ補給がままならない。」

「うむ。地味じゃが、点数に影響の出る嫌がらせじゃな。」

「根本つてヤツ、器小さいなあ……」

「あまり氣にするな。修復に時間がかかるが、作戦に大きな支障はない。」

「雄一がそう言つなりいけど……（なんか微妙に気になる。）」

そんな中。

「ああっ！」

「フロイト？」

「どうしたの、フロイトちゃん？」

フロイトは自分のシャーペンを持って、

と言ふ、泣き出しちしまつた。

「あれ、私のシャーペン、無事だ。」

「なんでなのほちやんのだけ無事なんだろう?」

「… オレ、私が魔界でどうして生き残った？」

「 そのまんが～のい～みで～すよん。」

少しへんの頭冷せをいか?

夕ノなのはちゃん我慢して！今レモン君を殺したら戦力が湧減しちゃう！

「放して！ レオンにお仕置きしないといけないの！」

なのはが暴走、それを止めるこのは。

「うわああああああああ・・・」

「フェイト……落ち着いて？私もシャーペン折られたから……」

「だからって、だからってこんな仕打ち酷いよ・・・」

泣き崩れるフェイトと慰めるアリシア。

「それはそうと、どうして雄一は教室がこんなになつてゐるのに気づかなかつたの？」

昼休みまでは戦闘開始から今までの間にやられたであろう嫌がらせ。

それなら教室にいたはずの雄一が気づかないわけがない。

「協定を結びたいという申し出があつてな。調印の為に教室を空にしていた。」

「協定じやと？」

「ああ。四時までに決着がつかなかつたら戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。ってな。」

「それ、承諾したの？」

「そうだ。」

「でも、体力勝負に持ち込んだ方がウチとしては有利なんじゃないの？」

「姫路や高町や春原以外は、な。」

（明久：あ、そつか。）

「あいつ等を教室に押し込んだら今日の戦闘は終了になるだらう。そうすると本番は明日ということになる。」

「そうだね。この調子だと本丸は落とせそうにないね。」

「あ、明日……ですか？」

「その時はクラス全体の戦闘力よりも姫路や春原、キラにレオンの個人の戦闘力の方が重要になる。」

局所的な戦闘になるか瑞希などが止めを刺すか。

「だから受けたの？皆が万全の態勢で勝負できるよ！」

「そういうことだ。」この協定は俺達にとってかなり都合が良い。

（明久：そつか。それならいいけど。でも、そうすると何かがおかしい。いくら机に嫌がらせをしたいからといって、その為だけに僕らと対等な条件の協定を申し出してくれるなんて。根本恭一はそんな甘い男なのだろうか。僕にはとてもそりは思えない。）

「明久。とりあえずワシらは前線に戻るぞ。向こうも何かされているかもしれん。」

そのままいつと、秀吉は教室を駆け足で出て行った。

「ん。雄一、あとよろしく。」  
「おう。シャープや消しゴムの手配をしておう。」  
「吉井、私も一緒に行くよ。」  
「待てフェイト！ 戦力をあまり削りたくない！？」  
「根本恭一……。絶対に、絶対に許さない……私の大切な物を壊した報い、必ず受けてもらう……！」  
「なのはちゃん、フェイトちゃんが怖いよ……。」  
「わ、私もあそこまで怒ったフェイトちゃん見たことないよ……。」

「

フェイド、激怒。その怒りは味方ですら恐怖した。

「あ、明久。連れてってくれ。」のまま教室においていたら何を  
しだすかわからんからな。」

「わ、わかった。」

雄一達に背を向け、一人は走り出した。

そこまで全力で走っていなかつたのか、秀吉にすぐ追いついた。

「なんか、まだまだ色々やつてそうだね。」

「そうじやな。」の程度で終わるとは思えん。気を引き締めた方が  
良さそうじや。」

（明久：次はどんな姑息な手段で来るのだろうか？全く、そっちの方  
が戦力が上なんだから、正面から来てくれてもいいのに。）

「ところで明久よ、」

「ん？ なに、秀吉？」

秀吉が見た先には・・・

「根本・・・、許さない・・・！」の怨み、絶対に晴らす・・・！」

かなり黒い感情に染まつたフェイトがいた。

「なぜハラオウン妹がいるのかが知りたいのじゃが……」  
「さつきの事態でね、雄一が連れてけ、ってさ。」  
「なるほど……。放置しておくと何をしていいか全くわからんからのう……」

秀吉も理解した。

そうしているうちに戦場が見えてきた。

「では、くれぐれも用心するんじやぞー。」  
「秀吉もね！」  
「明久、気をつけてねー。」  
「レオン！ なんだここにー？」  
「暇だから。それとフェイトのストップバーで。」

秀吉、レオンと警告し合い、それぞれの部隊に戻る。

「吉井！ 軍師殿！ 戻ってきたかー！」

出迎えたのは須川。

「待たせたね！戦況は？」

「かなりマズいことになつていてる！」

「え！？どうして！？」

向こうから本隊が出てきた様子もない。

「島田が人質にとられた！軍師殿対策もとつたようだ！」

「なつ！？」

「僕対策？」

(明久：今度は人質か！卑怯な手段の王道じやないか！)

(レオン：なんだ・・・つて！ま、まさか・・・、あの姿は・・・！？)

「おかげで相手は残り四人なのに攻めあぐんでいる。どうする？」

現在、敵と睨み合いになつてている。

「・・・そうだね。とりあえず戦況を見たい。」

「まざどうなつて・・・『この声はレオン様！？』・・・（ルナと  
リルの声だ・・・最悪。）すまない、逃げるわ。」

「レオン！？なんで・・・」

明久が気になつて聞いた。

答えはすぐわかつた。

『レオン様〜！！』  
「来るなあ〜っ！」

レオンは逃げ出した！

敵にいた二匹のポケモンが追いかけて行つた。

「・・・あとで異端審問会を開こう。」  
「了解した。戦況を見たいなら前に行こう。そこで敵は道を塞いでいる。」

須川が前を歩き、明久が後に続く。

部隊の人垣を抜けると、そこには須川が言つたとおり一人のロクラス生徒と捕らえられた美波及びその召喚獣の姿があった。

そばには補修担当講師もいる。

「島田さん！」

「よ、吉井ー」

まるでドラマだ。

「そこで止まれーそれ以上近寄るなら召喚獣に止めを刺して、この女を補修室送りにしてやるぞー！」

美波を捕らえている敵の一人が明久を牽制していく。

(明久：・・・そつか。数少ないウチの女子前線メンバーをただ戦死させるんじゃなく、人質にとつて補修室送りをちらつかせ、こちらの士気を挫く作戦か。うまいやり方だ。

このまま攻め込めば、僕らが相手を倒す前に島田さんに止めを刺され、補修室送りにされて辛い思いをさせてしまひ。

・・・問題ないな。 )

「・・・隊長？」

「総員突撃用意いいいいつー」

「・・・了解。」

「隊長それでいいのか!? ハラオウン妹もやめろ!」

(明久：仕方ないさ！ 戦争に犠牲はつきものなんだー決して日頃痛め付けられている仕返しじゃなく、これは指揮官として必要な判断なんだー！)

「ま、待て、吉井！」

敵から待ったコールがかかる。

「こいつがどうして俺達に捕まつたと思つていい?」

「馬鹿だから。」

「殺すわよ。」

(明久：え? 何? どうして人質にされている島田さんに僕が気圧されているの?)

「・・・私の獲物<sup>ターゲット</sup>の策略に嵌つたから・・・」

「くつ・・・。ハラオウンはわかつていたか・・・。こいつ、吉井が怪我をしたつて偽情報を流したら、部隊を離れて一人で保健室に向かつたんだよ。」

(明久：なんだって!?)

明久、驚く。

「島田さん・・・」

「な、なによ?」

美波の顔が心なしか赤い。

「怪我をした僕に止めを刺しに行くなんて、アンタは鬼か！」

「違うわよー！」

（明久：恐ろしい。これじゃオチオチ保健室で昼寝もしていられない。）

「ウチがアンタの様子を見に行つちや悪いってのー？これでも心配したんだからね！」

「（え・・・？）島田さん、それ、本当？」

「そ、そうよ。悪い？」

ふいっと顔を背ける美波。

（明久：そつか。僕のことを見配してくれたのか。あの島田さんが・・・）

「くっ。やつとわかつたか。それじゃ、おとなしく  
「総員突撃いいいいいつー！」

「了解！」

「どうしてよー？ フェイントも止めてよー！」

（明久：どうして？ そんなの決まっているじゃないか！）

「あの島田さんは偽者だ！ 変装している敵だぞー！」

（明久：変装する相手を間違えたな！ あの島田さんはそんな優しさがあるわけがない！）

「嘉々として僕を殺りにくるに決まっているじゃないか！」

「おい待てって！」「イツ本当に本物の島田だつて！」

### 狼狽するBクラスの生徒。

「黙れ！見破られた作戦にいつまでも固執するなんて見苦しいぞ！」

「だから本当に・・・」

「倒す・・・」

「や、やめ・・・」

『Bクラス 鈴木一郎 VS

クラス フェイト・T・ハラオウン F

英語 W 33点

110点

『Bクラス 吉田卓夫 VS

クラス 須川亮 18点

59点

死にかけ一人はすぐに撃破された。止めも。

「ぎやあああー・・・」  
「たすけてえー・・・」

近くにいた補修講師に連行される一人。

「（さて、残りは・・・）皆、気をつける！変装を解いて襲い掛か  
つてくれるぞ！」

明久曰くの美波もどきだ。

「よ、吉井、酷い・・・。ウチ、吉井のこと本当に心配していたの  
に・・・」

「まだ白々しい演技私のを続けるか！」の大根役者め！（島田さん  
はそんな台詞を吐いたりはしない！）

「本當だよ！本当に心配したんだから！」

「取り囮むんだ。いくらBクラスでも、この人数なら勝てるから！  
「本当に、『吉井が瑞希のパンツ見て鼻血が止まらなくなつた』つ  
て聞いて心配したんだから！」

「包围中止！コレ本物の島田さんだ！（こんな嘘に騙されるのは彼  
女以外いない。）

「えつ！？」

「・・・島田さん、大丈夫だった？」

床に座り込む美波に手を差し伸べる。

フェイトは我を取り戻した。

(明久：ぐそつ。Bクラスめ、なんて卑怯な真似を。)

「・・・」

素直に明久の手に握まり、立ち上がる美波。

「無事で良かつたよ。心配したんだからね。」

「・・・」

「教室に戻つて休憩するといいよ。疲れているでしょ?」

「・・・」

「それにしても、卑怯な連中だね。人として恥ずかしくないのかな

?」

「・・・」

「（なんか、やりにくい。）あー、島田さん。実はね?」

「・・・なによ?」

やつとリアクションを返した美波。

明久はそのことに大してお礼の気持ちを込めて、最高の笑顔を作つた。

「僕、本物の島田さんだつて最初から気付いていたんだよ?」

明久は殺されかけた。

「美波……」「めんね？ 私、気が動転してて……」「フェイト……。いいわ、気にしてないし。フェイトに何かあつたんでしょう？」

「うん……」

「理由は聞かない。謝ってくれたんだし、それでいいわ。」「……ありがとう。」

明久の死体（笑）の隣でフェイトが美波に謝っていた。

第五問 「戦争と卑怯と『万死に値する』」 前編 その2（後書き）

ついにフェイドがキレました。

新登場のポケモンの説明です。

ルナ ピッピ

お月見山に築かれた国の姫。  
レオンに一目惚れして今は追っかけ。  
Bクラス。

リル ラルトス

まだ『なきごえ』しか使えないときにポチエナの群に襲われ、そこ  
をレオンに助けられて惚れた。  
『レオンのため』に技を拾得した。

Bクラス。

二人とも追っかけです。

次回は秀吉が・・・  
レオンが・・・  
レインが・・・

お楽しみに！

**第五問 「戦争と卑怯と『万死に値する』」 前編 やのう（前書き）**

またまたお久しごりの投稿です、遅くなつてしまい申し訳ありませんでした！

今回は明久・美波・レオン逃追劇の始まりです。

では、どうぞ！

第五問 「戦争と卑怯と『万死に値する』」 前編 その3

「…………」「？」

明久が目を覚ますと、明久の視界に汚い天井が入った。

「あ、気が付きましたか？」

近くから聞こえる可愛らしい声。

声の主は瑞希だった。

「心配しましたよ？吉井君つてば、まるで誰かに散々殴られた後に頭から廊下に叩きつけられたような気がをして倒れているんですから。」

その後方では、レオンがくすくす笑っていた。

「明久ざまあ・・・くくくくく・・・  
「レオン一笑はないで！？（でも姫路さん、それ正解。）  
「いくら試合『戦争』じゃからといって、本当に怪我をする必要はないんじやぞ？」

(明久：いや、あれは戦争といつよりは一方的な虐殺だったような。)  
・。)

「ちょっと色々あつてね。それで試合戦争はどうなったの？（身体の節々が猛烈に痛い・・・）」

「今は協定どおり休戦中だよ。続きは明日になるね。」

「戦況は？」

「一応計画通り教室前に攻め込んだ。もつとも、こちらの被害も少なくはないがな。」

雄一がFクラスの被害を書いたメモを読み上げる。

すべて予想の範疇だが、Fクラスの被害もかなり大きい。

廊下戦は圧勝に見えるけどそれはFクラスがほぼ全力を注いだ結果で、全体としては決して良い状態ではない。

「ハプニングはあつたけど、今のところ順調ってわけだね。」

「まあな。」

相手は『あの』根本恭一、絶対に何か企んでいると踏む。

「・・・・・軍師。（トントン）」  
「ムツツリーー、何か変わったことはあつた？」

全員が気がつけばムッシリーがレオンのそばにいた。

「の日はムッシリーは情報係で、先頭には直接参加せずに周囲を警戒していた。相手の動きを逃さずチェックするためだ。

「…………」

「…………」

「…………（ノクリ）」

ムッシリーの話はこうだ。

「クラスが試合戦争の用意を始めてくるとのこと。

「漁夫の利を狙つつもりか。いやらしい連中だな。」

「卑怯にも程があるわね。」

「本当だね・・・」

「雄一の言つことに賛同するアリシアとなのは。

（明久：雄一の言つとおりこの戦争の勝者を相手に戦つつもりなのだろう。疲弊している相手ならやりやすいだろうから。）

「雄一、レオン、どうするの？」

「んー、そうだなー・・・・」

「そりゃあ・・・・」

雄一とレオンはひりひりと時計を見る。

四時半。

まだそんなに遅い時間じゃない。

「Jクラスと協定を結んだほうがいいね。」

「Dクラス使って攻め込ませるぞ、とか言つて脅してやれば俺たちに攻め込む気もなくなるだろ。」

「だよねー。ですわよねー。」

「レオン、オカマになつてるよ・・・」

「Jクラスが僕らと協定を結ぶのはそつ難しくない話ではないかもしないね。」

「よし、それじゃ今から行つてくるか。」

「そうだね。」

明久は痛む身体に力を入れて立ち上がる。体に異常はないさそうだ。

「秀吉とキラは念の為残つてくれ。」

「ん?なんじや?ワシやキラは行かなくて良いのか?」

「秀吉、お前の顔を見せると、万が一の場合にやううとしている作

戦に支障があるんだな。キラは、制圧のための戦力温存だ。

「よくわからんが、雄一がそつ言つのであれば従おつ。」

「う、うん。わかつた。」

素直に引き下がる秀吉と、少し引き気味なキラ。

(明久：でも、雄一の言ひ念の為つて何を想定してのことだらうへ。)

「じゃ、行くぞや。これとこりとあほレインを盾にしてこいへ。」

「酷つ！？」

秀吉・キラ・このはを残して、明久・雄一・瑞希・ムツツリー・フェイト・なのは・レオン・レインというメンバーでクラスに向かつた。

「吉井、アンタの返り血にびりついて洗うの大変だつたんだけビ。どうしてくれんのよ。」

「それつて吉井が悪いのか？」

廊下に出たところで、ハンカチで手を拭つている美波とカバンを肩に担いでいる須川に会つた。

「あ、島田さんに須川君。ちょつとよかつた。じクラスまで付き合つてよ。」

明久は万が一自分が使者をやっている時のようにクラスの生徒にボコられそうになった時、この人数では心もとないし、瑞希を守るために人材も必要だと考えた。

だから一人の友人に声をかけたのだ。

「んー、別にいいけど？」

「ああ。俺も大丈夫だ。」

盾、もとい仲間ゲット。

「急がんとこのクラスの代表が帰ってしまうぞい。」

「うん。急げ。」

こうして更に美波と須川を加えた十人でこのクラスへと向かうことになつた。

「Fクラス代表の坂本雄一だ。このクラスの代表は？」

教室の扉を開くなり、雄一がそこにいる全員に告げた。

Cクラスにはまだかなりの人数が残っていた。

ムツツリーーの情報通り漁夫の利を狙つて試合戦争の準備をするのだね。」

「私だけど、何か用かしら？」

明久達の前に出てきたのは、まじりつけの無い黒髪をベリーショートにした気が強そうな女子、小山。

「Fクラス代表としてクラス間交渉に『雄二』、待ちな。』レオン、何かあるのか？』

「根本恭一・・・お前のやうにしていることはまるとお見通しだ！諦めて出てこ！』

「何い！？』

レオンが根元がCクラスにいるといふ。

「確か協定では試合戦争に関する行為を一切禁止すると言つたはずなのにね・・・。どこかに隠れて不意打ちをしようとするなんてバカのとる行動だよ？』

「ぐつ・・・』

「おお、本当にいた！」

「そしてそこには誰か先生がいるはずだよね、きっと。それこそそ  
つちが協定を破つたことになるね。さあ、不可侵を破つたと認めろ  
！」

「ちっ……。だが、代表は最前列にいる！坂本を打ち取れ！」

根元が叫ぶと同時に取り巻きが動き出した。

その背後には先ほどまで戦場にいた、小柄な数学の長谷川先生がい  
た。

「長谷川先生！Bクラス芳野が償還を……」

「させるか！Fクラス須川が受けて立つ！試験召喚……！」

Bクラス芳野が雄二に対して攻撃しようとしたところを、間一髪で  
須川が身代わりになる。

須川のファインプレイだ。

「くっ、逃げるぞ皆……！」

「くそっ……！」

「須川、ここは任せたぞ……！」

「了解です、軍師殿……！」

「須川君、僕も手伝う……！」

「レインは残るな……！」

「ああああああ……！」

戦闘を開始した須川に背を向け、明久たちはCクラスから離脱しようと駆け出した。

『Bクラス	芳野孝之	VS	Fクラス
須川亮			
数学	161店	VS	41点
』			

「逃すな！坂本を、せめてレオンを打ち取れ！」

背後から聞こえてくる根本の指示と複数の足音。

はつきりと言づと不利。

根本はさつきの戦いで瑞希が数学を消費していることを知っている  
だろう、効果的な戦法だ。

「・・・あ、僕西村先生に呼ばれていたのを思い出した！」  
「鉄人に！？なんで！？」  
「訳あり！」

レインは階段で一人別れて行つた。

「一人別れたぞ！あつちを一人追うんだ！」  
「来るなあー！」

一人だけレインを追つて行つたらしい。

「はあ、ふう・・・」  
「はあ、はあ・・・」

「瑞希、大丈夫？」

廊下を走つていると、瑞希となのはが遅れ始めた。二人とも運動が得意でない上に瑞希のみ身体が弱いからこの全力疾走は厳しそうだ。

「あ、あの、さ、先に・・・行つて、ください・・・  
「お、お願ひ・・・」

息絶え絶えに二人が言つ。このまま一人を連れていたら確實に追いつかれる。

Fクラスとしてはここで一人を失うわけにはいかない。

主戦力の瑞希や理数系に強いなのはがいなくては明日の戦争がどうなるかわからない。

「雄一、レオン！」

「なんだ明久！」

「ここは僕が引き受けろ！一人は姫路さんや高町さんを連れて逃げてくれ！」

明久はその場に立ち止まり振り向いて、遅れて走つてくる雄一、瑞希、なのは、レオンとすれ違う。

（明久：まさかこの僕がこんなことを言つ田がくるなんて。男らしくて格好良いかな？）

「よ、吉井君、私のことは、気にしないで」

「だ、大丈夫、だから」

「・・・わかった。ここはお前に任せる。」

瑞希となのはの言葉を遮り、雄一が答える。

さすが雄一、感情に流されず、今必要な処置を正しく把握している。

「・・・・・（ペタッ）」

「いや、ムツツリーも逃げてほしい。多分明日はムツツリーが戦争の鍵を握るから。」

一緒に立ち止まつたムツツリー一。

(明久：気持ちはありがたいけど、ムツツリー一にも重要な役割があるはず。ここで失うわけにはいかない。)

「んじゃ、ウチは残つてもいいのかしら。隊長殿？」

「僕は？」

明久の隣には一緒に立つて立ち止まつた美波とレオンがいた。

「島田さん、頼めるかな？ レオンはみんなを送り届けてほしいんだ。」

「はーいはーい。お任せあれっど。」

「雄一に任せりやいいでしょ。雄一ならやつてくれるなら。」

笑いながら追つ手が来る方向を見つめる美波と明らかに任せつけりなレオン。

「・・・・・（グッ）」

ムツツリーーは明久たちに親指を立てて走り去った。

「……さて、どうするの、隊長どの？」

「……何も考えてなかつた……」

「はあつ！？」

立ち止まつたはいいが、無策だつた明久。

「大丈夫、僕に策がある。少しだけでも時間を稼げるいい策がね。

」

レオンが自信満々に言った。

「いたぞ！Fクラスの吉井と島田とレオンだ！」

「ぶち殺せ！」

正面から追つ手がやつてくる。長谷川先生も一緒だ。

「Bクラス！そこで止まれ！」

相手の気勢を削ぐように、明久は強い口調で呼び止め。

「いい度胸だ。たつた三人で食い止めようとしてのか？」「いや、その前に長谷川先生に話がある。」

レオンが強い語調で話をする。

(美波・レオン、策つて何？長谷川先生に訴える気？)  
(明久・そうだよ！何をする気なのさー？)  
(レオン・見てて、相手の弱みを突いて見せるから。『死神軍師』の本領、見せてあげるぞ。)

心配する美波と明久と小声でやり取りするレオン。

「なんですか、レオン君。」

長谷川先生が前に出てきた。

「Bクラスが協定違反をしていることはご存知ですよね？」  
「いえ、Fクラスが協定違反をしたと聞いてただけですよ？Bクラスは何もしてないですし……」

あくまでじらを切る作戦に出る。

(美波：あの根本のことだからつまら言ってあるでしょうね。)

「それに、休戦協定を先に破りに来たように見えましたが・・・。  
そこで『反撃を受けて協定違反を訴えるのは戦争云々以前に人としてどうかと・・・』

先生の少々厳しい意見。

(明久：ここまでは予想通りだけど、どうするの?)

「では少し先生に聞きましょう。相手が協定違反をするかも知れないとして教室に潜入・待ち伏せを仕掛け、僕が気付かなかつたら協定違反だと訴えてそのまま雄一を打ち取ろうとした。それこそ協定違反なのではないでしょうか?そして、あの場に教師が潜んでいたことが決定的なBクラスの協定違反の証拠としてあげられないのですか?明らかに戦闘の意思を持ち、協定を破ろうとしている気のあらほうを守ろうとするなんて、審判を務める者としてどうなんですか?公平性を保つべき立場の者がそんな不公平な扱いをするなんて、審判失格ですね・・・」

一気にたたみかけるようにレオンが言つ。

その言い方は、相手に何も言わせないよう、すべての弱みを完全に突き切るという感じだった。

「くつ・・・かかれーつ！」

全ての弱みを握られてしまったBクラスの生徒が向かってきた。

教室。

「坂本君、吉井君は、大丈夫、なんですか・・・？」

「もちろんだ。ほかのやつらならともかく、明久ならなんとかなる。  
それに、レオンもいるからな。」

「でも・・・」

「確かにアッシュは勉強ができない。でもな、学力が低いからといって、全てが決まるわけじゃないだろ？・・・？」

「そ、それは、どういう・・・？」

「あのバカも、伊達に『観察処分者』なんて呼ばれてないってコトだ。それに、『死神軍師』だつている。そう簡単にやられると思うか？」

「そうですね。」

そのじるのラインは・・・

「おっしゃあーつー全滅させたあーつー・・・西村先生、話つて何ですか?」

「あー、バンドの件なんだが・・・」

「まさか無理になつたとか・・・?」

「課題曲込みのコンテスト方式になつた。課題曲はそれぞれのバンドで違つらしく、どれだけ原曲に近づけるかが勝負らしい。」

「でも、なんで変つたんですか?」

「そればかりは俺も知らん。」

「マジですか・・・」

第五問 「戦争と卑怯と『万死に値する』」 前編 その3（後書き）

さて、明久らが追われ始めました。

『死神軍師』はどう動くのか・・・

お楽しみに！

少し短い今回の話、明久が頑張つてます！

レオンが役に立つてませんが・・・

では、どうぞ！

第五問 「戦争と卑怯と『万死に値する』」 前編 その4

『<sup>サモン</sup>試験召喚！』

追つ手が声を揃えて召喚獣を呼び出す。

走つて逃げてはいるが、この先は行き止まり。明久たちが戦闘区域に入るのは時間の問題だ。

「吉井、レオン、ビーヴィーのよーー！」

「どうするって言われても、ビーヴィーーー！」

「僕が囮になる？」

「それはダメ！いいから何か考えなさいーー！」

美波と明久とレオンが怒鳴りあつよつて会話をする。

「よし、こいつよう！まず島田さんが四人を引き付けるーー！」

「ふんふん、それで？」

「僕が逃げ易くなる。」

「馬鹿。」

「・・・アンタとは一度決着をつける必要がありそうね。」

廊下の終わりが見えてきた。この先には壁と窓しかない。

「それじゃ島田さんが召喚獣を喚んで、」

「喚んで？」

「僕の盾になる。」

「死になさい！」

「うわ、突然どうしたのー？ キレる十代ー！？」

「十代でなくともキレるよ、それ・・・」

明久は走りながらも起用に拳を打ち込んでくる美波をいなす。

ついに行き止まりになった。

壁を背にして振り返ると、走つてくる敵の姿が見えた。

「ちゅうちゅう逃げ回りやがって。疲れるだろ？ がー。」

「どうか、別にこいつらを追いかける必要はなかつたんじやないか？」

「いや、意味はある。今ここに『死神軍師』レオンがいるからな、あいつを打ち取れば戦況は一気にこちらに傾くぞ。」

「雑魚二人はさつさと片付けて、本命を倒さない？」

明久たちが逃げ切れないことがわかると四人は好き勝手なことを言い始めた。

「ちゅうと、好き勝手言つてくれるじゃないの。」

好き勝手言つ相手に食つてかかる美波。

「だつて・・・なあ？」

「だつて、なによ？」

「お前ら、最低クラスじゃん。」

(明久：なんてことを言つんだ！）（は言い返さないと！）

「クラスは最低じゃないぞ！メンバーが最低なだけだ！」

『（吉井／明久）は（黙つてなさい／黙つてろ）！』

(明久：あれ？ フォローしたのに怒られたよ？)

「Fクラスだからつて甘く見ないことね。」

「そうか？ 所詮Fクラスだろ？」

「なら、自分で確かめることね！ 試験<sup>サモン</sup>召喚つ！」

美波が喚び声をあげる。

それに応えて、何度か見た小さな美波が現れた。

「上等だ！ 実力差を思い知らせてやるー！」

美波と言っていたBクラスの男子が召喚獣を動かした。刀を手にしての突進。

細かい動作ができないための単純な攻撃だが、威力は十分だ。

「このおつ！」

美波も同じように召喚獣を突っ込ませた。

（明久：ああ、島田さんの召喚獣が力の差で倒され……）

『Bクラス	工藤信一	VS	Fクラス
島田美波			
数学	159点	VS	171点
	』		

「お前、本当にFクラスか……？」

（明久：いや、対等にやり合つてやる…どういづことだ！？）

「ふふつ。数学を選んだのが間違いだったわね。これなら漢字が読めなくともなんとか解けるのよ…」

(レオン…おお、美波が格好良い!)

「ちなみに島田さん。古典の点数は?」

「一桁よ。」

(レオン…言い切った…これはこれで男らしいぞ!?)

「工藤君、フォローしようか? こんなので補修室送りにはなりたくないでしょ?」

「…・・・ぐつ。頼む。」

悔しそうに唇を噛む工藤。確かにFクラス相手にこれは屈辱だろ。

そして美波はいよいよ苦しくなった。

鍔迫り合いで身動きが取れない今、敵が増えたら勝ち目はないだろう。

「島田さん、フォローしようか? こんなので補修室送りにはなりたくないでしょ?」

「足手あとこよ。」

「酷いつ。」

悔しくて唇を噛む明久。

(明久：扱いが悪いですっ!)

しかし、明久にも遊んでいる暇はなくなつた。痛みや疲労があらうとも、逃げることはできなくなつた。

「・・・試<sup>サモソ</sup>獸召喚。」

明久の足下に見慣れた魔方陣が描かれていく。数学の点数に応じた強さを持つ明久の召喚獣が徐々に姿を現し始めた。

精悍な顔立ち。

しなやかな形態。

軽やかな動き。

喚び出すために感じる絶対的な強さが顯現する。

「吉井は構うな！見るからに雑魚だ！」

「返せっ！僕の格好良い描写を返せ！」

「どきなさい雑魚でヘナチヨコー！」

「島田さん、君は僕の味方じゃないの！？あと、全く関係ない罵倒も混ざってるよ！（確かに持てる武器が木刀だし、弱そうに見えちゃうかもしれないけど・・・。この状況はまさに四面楚歌（うち一人はクラスメイト）だ。）」

「この状況はキツいわね・・・」

美波が表情を歪ませる。

勝っているとは言え、点数は僅差、当然皆見の召喚獣も消耗が激しい。

「それじゃ、やよつながら。」

そこに切り込むBクラス女子。

美波の召喚獣は攻撃を避けられる状態じゃない。

「（こ）は僕の出番だ！）えい、足払い！」

召喚獣を走らせ、横から敵の足を引っ掛ける。

「ああっー。」

明久を無視していた上に、召喚獣の扱いに慣れていない相手は簡単によひめいた。

「更につー。」

明久の召喚獣が敵に木刀を叩き込み、完全に体勢を崩させる。

「いいよいしょおーつ！」

明久の召喚獣が勢いよく倒れこむ敵の後頭部を？み、地面に叩きつけた。

ゴン、と硬い音が廊下に響いた。

『・・・え？』

その場の皆の口から驚きの声が漏れる。

「さて、明久に火がついた。僕の仕事は・・・追跡部隊の殲滅だ。二人が逃げ切った後、『死神』の力をお見せいたそう・・・」

喧騒の中、レオンはそう呟いた。

第五問 「戦争と卑怯と『万死に値する』」 前編 その4（後書き）

明久がかなり頑張つてました！

レオンの最後の意味深な台詞、その内容が『死神』の由来です・・・

まあ、次回はついに（色々な意味で）長かった第五問、終わります  
！

第五問 「戦争と卑怯と『万死に値する』」 前編 その5（前書き）

明久と美波の仲が進展した（？）その5です。

地味にキラがいなくなつてますが、そこは気にしない方向で・・・

では、どうぞ！

第五問 「戦争と卑怯と『万死に値する』」 前編 その5

『Bクラス	真田由香	VS	Fクラス
吉井明久			
数学	166点	VS	51点
	』		

先程の戦闘の参考用の点数が表示された。

(明久：は、恥ずかしい！トリプルスコアですよ！？)

「なんでだよ！真田の点数の方が高いはずだろ！？なんであんな弱  
そうな召喚獣にやられてるんだよ！」

Bクラス工藤が先生に問いかける。

「・・・別に先生が何かしているわけじゃないけどね・・・」

レオンが何気に呟いた。

「あれ？私の召喚獣、まだ生きてる。」

先程地面に叩きつけられた真田の召喚獣が起き上がった。

「明久の召喚獣の攻撃の威力、全然ないね・・・」

「吉井、どういふこと?」

「んー・・・まあ、『観察処分者』の数少ない利点つてトコかな? (Dクラス戦で最初に皆の戦闘を見て思い出したことがある。それは、召喚獣の操作は難しこうことだ。)」

力が異常に強い上に手足の長さは本来の自分とは違つ召喚獣、この感覚にはそう簡単に慣れるもんじやない。

だからこそ、基本的に突撃とかの単純操作しかできずには点数の差で勝敗が決定してしまう。

「利点つて?」

「要するに、召喚獣を使うのに慣れてるつてことかな?」

明久には『観察処分者』として幾度となく召喚し、痛みや疲労のフィードバックを受けて感覚を共有してきたといふアドバンテージがある。

他よりは多少細かい動作をさせるのも可能だ。

「ぐ、偶然よ!」

敵が再度刀を構えて突撃してくる。

「（さつきので怯んでくれると嬉しかったんだけど。）うつやつ。」

振り下ろされる刀に対して、明久の召喚獣は横から合わせるように木刀をぶつける。

点数でもわかるように力の差は三倍以上、正面からやりあつたら木刀語と真つ二つだから、必然的に明久の召喚獣の防御方法は力を流すような形になる。

「・・・っく！」

相手の刀が外に外れる。隙だらけになった。

「はああっ！」

駆け抜けるように胴を薙ぎ、そのまま一回転して追撃の面。

『Bクラス 吉井明久 数学 126点	VS	Fクラス 真田由香
-----------------------------	----	--------------

表示される点数に若干の修正が入った。

(明久：やつぱり僕の召喚獣は弱いなあ・・・)

「・・・本気でやつた方がいいな。」

「Fクラス相手に四対二つていうのも嫌だけど、そもそも言つていられないな。後ろの『死神軍師』も落とさないといけないしな・・・」

後ろの二人が前に出てくる。

「あ、いや、できれば一対一のままだといいな、なんて・・・」

「吉井、違うわ。四対一じゃないわ。」

「ん？ 援軍でも来てくれたの？」

「五対一よ。」

「島田さん、この状況で君は僕を裏切るつていうのかい？ そしてレオン、君は手伝ってくれないの！？」

「今戦況計算、同時に殲滅用の装備を考案中・・・」

(明久：一体僕はどこまで嫌われているんだ？)

「行くぞコラア！」

チンピリっぽい掛け声とともに切りかかってくる敵召喚獣。それを屈んで召喚獣によけさせる明久。

「……のっ！」  
「ちよこまかとー！」

（明久：ひいりつ！更に一体が追加された！これはよく聞くリンクつてやつでは？）

敵同士が一直線上に並ぶように召喚獣を動かす明久。

相手を倒すことよりも囮まれないことの方が重要だ。

「一撃当たれば倒せるのに……！」  
「全然当たる気がしねえ……」  
「メタルス イムみたいなヤツだな。」  
「（そこまで弱くはないやいつー）……んしょつ、とー！」

ムキになつて大振りになつた敵の懷に飛び込み、パンチを食わせる。

同時に殴つた明久の拳が痛む。ダメージのフィードバックだ。

・・・命中！

「さて。ウチらも続きを始めましょうか?」

「・・・くつ。悪い! いつたん引かせてもらひー。」

一対一となれば勝ち田の薄い工藤が撤退していく。

鍔迫り合いで消耗もしていたようで、賢明な判断。

「（）れで三対二。いや、レオンは戦おうとしないし島田さんも消耗しているから三対一か。）島田さん、アレを！」

手が空いた美波に指示を出す明久。

目線の先にあるのは前にも使った消火器だ。

「了解!」

抱え上げ、安全弁を引き抜く美波。

（明久：これで逃げ切れる・・・）

「・・・」

「（・・・はずなのに、彼女は全く動かない。なんで？）は、早く  
使って…」

「うーん。どうしようかな～？」

凄く楽しそうな笑顔を作る美波。

「し、島田さん！何が望みなの…？（こ）、こんな時に島田さんの本性が出てきた！いつまでも三対一なんてキツいのに…」

「望み？うーん、そうね～…」

「今なら大抵の言つことは聞きます！」

「それじゃ、まずは呼び方から変えてもいいこまじょつか。」

「変える…変えさせて頂きます…」

「じゃ、今後ウチはアンタのことを『アキ』って呼ぶから、アンタはウチのことを『美波様』って呼ぶよ！」

「み、美波様！これでいい！？」

「今度の休み、駅前の『ラ・ペティス』でクレープ食べたいな～？」

「おのれ！僕が塩水で生活しているといつのになんという贅沢を…  
・ああっ…おじります！おいらせて頂きますから置いてかないで美  
波様！」

責める美波にレオンは…

「おおう…・美波が黒いね…・怖いね…・・・

なんて言つていた。

「よろしい。じゃ、最後に・・・」

「まだあるの！？もういいでしょう！？」

美波、とつでも楽しそう。

「ウチのことを愛してるって、言つてみて？」

「（くううつ！調子に乗つて！あとで覚えてるよ！）ウチの」と  
を愛してゐる！」

明久的に一言一句間違いなく復唱する。

（明久：これで文句ないだろ？…）

「・・・ばか。」

ブシャアアツ！

噴き出す消火剤。

粉まみれになりながら、明久たちは脱出に成功した。

(明久：それなのに、島田さんの機嫌がとても悪かったのはなんでだろう？)

教室。

「キラ、いるか？」

「アスラン？」

アスランがFクラスに立ち寄った。

「例の腕輪が完成したんだ。実験も兼ねてになるが、早速修正に入るか？」

「うん。今ままじゃ足手まといになるからね・・・」

「・・・屋上の方が今の時間、誰もいないはずだよな・・・」

「多分ね・・・」

「キラ、アスラン、一体何の話をしているんだ?」

キラとアスランが話をしているところに焰が割って入る。

「ああ、これは・・・」

「僕の過剰ファイードバック修正用の腕輪なんだ。」

「なるほどな・・・。キラは仕方ないよな・・・。」

「だから、ちょっと行ってくるね。」

「ああ。」

キラはアスランに連れられて教室を出た。

廊下。

消火剤の粉がすべて落ち切った後・・・

「・・・おい、『死神軍師』がただ一人残っているぞ?」「こいつ、自殺願望か?」

レオンに対し好き勝手に言う二人。

「僕が自殺願望者だと言いたいのかい・・・?」

「じゃなかつたら何だつていうんだよ?」

「じゃあ・・・教えてあげるよ・・・。僕は・・・」

「お前らを殲滅する殺戮希望者だ!」

この瞬間、その三人の補修室送りが確定した。

その三人は鉄人に補修室に連れて行かれている間、

『アイツは死神じゃない・・・。『閻魔』だ・・・。

といつ、うわ言を全員が言っていた。

「あー、疲れたー・・・」「よ、吉井君！無事だつたんですね！？」

明久が戸をあけると瑞希が駆け寄ってきた。

「（揺れる胸部がとても眩しいな・・・）うふ。このくらいになると  
もいだあつ！」

明久が感じた爪先を踏み抜かれる感触。

（明久：今日は特に扱いが悪い気がする。）

「ふんっ！」

「し、島田さん。僕が何か悪いことでも・・・」

「（キツー）」

「あ。い、いや。美波。」

射殺すような眼光で明久を睨む美波。

（明久：さすがに『様付けはしなくてもよい』とは言われたけど、

呼び方は変えなきや いけないらしい。呼び慣れないから困るなあ。（

「・・・随分二人とも仲良くなつたみたいですね？」

「え？ これで？（仲良しは脅迫を受けた拳句足を踏みつけられたりはしないはず。）」

「お。戻つたか。お疲れさん。」

「無事じやつたようじやな。」

「ん。ただいま。・・・あれ、キラは？」

雄一と秀吉が明久に近づいてくる。ムツツリーも明久を見て小さく頷いていた。

あまり心配はしていなかつたみたいらしい。

そんな中、明久はキラがいないことに気がついた。

「キラは明久が戻つてくるちょっと前にアスランと一緒に屋上に向かつたぞい。何か、「キラの召喚システムの問題の修正」の為だと言つておつたのう・・・」

「『召喚システムの修正』・・・。あ、フィードバックの問題の修正かな？」

「たぶんそうだろ。それを知つているのか、フェイトも泉戸も移動していないしな。」

「私たちもいますが・・・」

「あ、そういうえば関たちもいたな。・・・さて、お前ら。」

「ん？」

今この場に残る全員を見回して雄一が告げる。

「こいつた以上、Cクラスも敵だ。同盟戦がない以上は連戦という形になるだろうが、正直Bクラス戦の直後にCクラス戦はきつい。

」

（明久・向こうもそれが狙いなのだから、僕らが勝ったとしたら間違いないく憲つぐ暇をとえず攻め込んでくるだろ。）

「じゃあどうするの？」のままじゃ勝つてもCクラスの餌食になっちゃうから

「やうじやな・・・」

「心配するな。」

頭を悩ますのはや秀吉に雄一が野性味たっぷりの活き活きとした顔で告げる。

「向こうがそつ来るなら、こっちにだって考えがある。」

「考え？」

「ああ。明日の朝に実行する。田には田を、だ。それに、さつきのことだが、レオンが追っ手を秒殺殲滅したらしく。」

『うわあ・・・』

全員がレオンの殲滅報告に引いたのを最後に解散となり、続きは翌

日へと持ち越しになつた。

次回、第六問 「戦争と卑怯と『万死に値する一』」

後編

第五問 「戦争と卑怯と『万死に値する』」 前編 その5（後書き）

レオンがついに、『死神』の片鱗を見せました。

明久は相変わらず弄られていますが・・・

次回はいよいよ後半に入ります！

お楽しみに！

第六問 「戦争と卑怯と『万死に値する』」 後編 その一（前書き）

第六問、Bクラス戦後半です！

雄一の作戦とは・・・？

では、どうぞ！

## 第六問 「戦争と卑怯と『万死に値する』」 後編 その1

### 第六問

以下の問いに答えなさい。

『good及びbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希、キラ・ヤマトの答え

『good - better - best  
bad - worse - worst』

教師の「メント

その通りです。

吉井明久の答え

『good - gooder - goodest』

教師の「メント

まともな間違え方で先生驚いています。

goodやbadの比較級と最上級は - erや - estをつけるだけではダメです。覚えておきましょう。

『bad - butter - bust』

### 教師の「メント

『悪い』『乳製品』『おっぱい』

### 高町なのはの答え

『 ま 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 』

### 教師の「メント

『良い』『神』『 ま 〇 の過去分詞』  
消し跡が残っていたので苦し紛れに書いたことがよくわかります。  
よく頑張りました。

### レオンの答え

『先生、僕日本ピカチュウだから英語できなくてもいいじゃん?』

### 教師の「メント

あとで職員室に来るよ!』。

「嘘…大変なことになった…」

朝、レインが沈痛な面持ちで告げた。

「今回の清涼祭、バンドコンテストになつた…」

『嘘つ！？』

「本当。西村先生が言つたからね。」

「鉄人が言つたんじや信じるしかないね…」

「でも、なんでだろうね？」

「この学園の軽音部があまりにもダメだからじゃないのか？練習もしないし、目立つた活動や成績すらないから…」

『さもありなん…』

「とつ、とりあえず今日は戦争の途中なんだし、練習は終わつてからで…」

「そつ、そつだね、終わつてからの方がいいね。」

音楽室での話だった。

「昨日言つていた作戦を実行する。」

同日朝、教室に登校した明久らに雄一は開口一番そつ告げた。

「作戦？でも、開戦時刻はまだ先よ？」

現時刻：午前八時半。開戦予定時刻は九時。

「坂本殿、氣でも狂いましたか？」

「関、さり気なく酷いことを言つた。作戦実行先はBクラス相手じゃない。Cクラスの方だ。」

「なるほどな。それで、一体何をする気だ？」

「秀吉にコイツを着てもうう。」

そつ言つて雄一が鞄から取り出したのは文月学園の女子の制服。

「ねえ坂本君、それ、どう手に入れたの？」

「まさか・・・」

「高町もアリシアも変な想像をするなー！」

「まあ、それは別に構わんが、ワシが女装してどうするんだじゃ？」

(明久：いや、男としては大いに構つた方がよさそつな気がする。  
けど、秀吉だし。)

「くくく・・・雄一、あんたもなかなか策士だなあ・・・

「れ、レオン？」

「レオンは分かつたみたいだな。秀吉には木下優子として、Aクラ  
スの使者を装つてもらひつ。」

『なんで?』

雄一の作戦が分からず、頭を捻る面々。

「レイン、秀吉をちょっと外させてくれ。」

「い、いいけど・・・」

「作戦の意味がよく分からんのじゃが?」

「わかんないけど・・・とにかく。」

レインは秀吉をトイレまで誘導した。

「さて、Jの作戦の意味を僕から説明するよ。さつきの女子の制服。  
もともと秀吉は女子に近いでしょ? そんなものを着たらますます秀  
吉は女子の子らしくなって、Aクラスの木下優子と見分けがつかなく

なる。秀吉と彼女は一卵性双生児かと思つほどよく似てゐるし、違うのはせいぜいテストの点数と話し方ぐらいしかないはず。それが狙いなのさ。』

『な、なるほど……』

「といひでレオン、昨日一人で何をやつていたんだ?』

「ん?・・・無双。』

『む、無双!?』

雄一の聞いにせりつと答へるレオン。その答へに一瞬に引き氣味になるFクラス面々。

「昨日は楽しかったなあ・・・。一瞬で全員を補修室送りにできたんだもん・・・」

『し、『死神軍師』だ・・・』

全員に訪れた戦慄と安心感。

もしレオンが敵に回つてこたら・・・と想ひ、がつとかかる話である。

「と、とつあえず秀吉を連れてきてくれ・・・

「り、了解しました。』

・・・

「とりあえず作戦は分かったのじゃが・・・、これとか不安じゃのう・・・」

「と、いうわけで秀吉。用意してくれ。」

「う、うむ・・・」

「ちょい、ちょいと木下君ー!？」

「い、いじで着替えるのー?」

「・・・はつ（ふらあ・・・）」

「お、おい、春原！・・・ダメだ、気を失った・・・」

雄一から制服を受け取り、その場で生着替えを始める秀吉。

その瞬間、焦り始めたなのはとフェイト、氣を失った優。

さらば・・・

(明久：な、なんだかひのきの胸のときめきは。相手は男なのに田が離せない！)

「・・・・・!」(パシヤパシヤパシヤパシヤー)」

明久は秀吉から眼を離せなくなつており、ムツツリーーに至つては、指が擦り切れるんぢやないかといづくらに凄い速さでカメラのシャッターを切つていた。

ときめいているのは明久だけじゃなかつた。

「よし、着替え終わつたぞい。・・・ん？皆どりついた？」

（明久・きつと僕らは皆とても複雑な表情をしているんだろうな・・・）

「さあな？俺にもよくわからん。」

「おかしな連中じやのう・・・」

（男子の殆ど・いや、絶対おかしいのは（秀吉／木下）の外見だつて…。ビリしてそんなに色っぽいんだ！？）

「んじゃ、iclassに行くぞ。」

「つむ。」

雄一が秀吉を連れて教室を出ていく・・・前に。

「あ、ちよい待ち。」

「レオン？」

「これ付けてつてくれ。何が起きているのか教室の奴らに伝えないとね・・・」

レオンは秀吉の制服の首筋に小さなマイクを付けた。

「・・・あ、僕も行くよ。」

明久もその後を慌てて追いかけた。

しばらく歩き、Cクラスを目の前にして立ち止まる明久たち。

「さて、ここからは済まないが一人で頼むぞ、秀吉。」

Aクラスの使者になります以上、Fクラスの明久や雄一が同行するのはまずい。

よつて、明久らは離れた場所から様子を窺つことにする。

「気が進まんのう・・・」

あまり乗り気ではない様子の秀吉。

「そこを何とか頼む。」

「むう・・・仕方ないのう・・・」

「悪いな。とにかくあいつらを挑発して、Aクラスに敵意を抱くよう仕向けてくれ。お前ならできるはずだ。」

秀吉は演劇部のホープで、演技が達者である。勉強は苦手だが、他の面に抜群に秀でているのだ。

「はあ・・・。あまり期待はせんしてくれよ・・・?」

溜息と共に力なくクラスマに向かう秀吉。

「雄一、秀吉は大丈夫なの？ 気が重そうだし、うまくいくか分かないし・・・。別の作戦を考えておいた方が・・・」「多分大丈夫だろう。」

「（本当かなあ・・・。どうにも乗り気でない秀吉が気になるんだけど。メンタル面の影響が演技に出なければいいけど・・・）心配だなあ・・・」

「シツ。秀吉が教室に入るぞ。」

雄一が口に指を当てる。

一人のいる地点から声は聞こえたりはしないだろうが、念の為明久は指示に従うこととした。

ガラガラガラ、と秀吉がCクラスの扉を開ける音が聞こえてくる。

『静かになさい、この薄汚い豚ども!』

(明久・うわあ・・・)

「さすが流石だな、秀吉。」

「うん。これ以上ないつてほど<sup>の</sup>挑発だね・・・」

開口一番豚呼ばわり。もうこれ以上何も言わなかろうがCクラスの敵意は間違いなくAクラスに向かうだろう。

〈な、なによアンタ!〉

〈話しかけないで! 豚臭いわ!〉

(明久・自分から來たくせに豚臭いって・・・。もつ突っ込みどころが多すぎだよ秀吉・・・)

〈アンタ、Aクラスの木下ね? ちょっと点数良いからつていいい氣に

なってるんじゃないわよー何の用よー♪

知名度としては秀吉よりも断然Aクラスの優子の方が高い。

今の秀吉は女装しており、見分けがつくはずもない。

まして相手は怒つており冷静な観察力を保っているわけもない。

完璧な作戦である。

<私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！貴女達なんて豚小屋で充分だわ！>  
<なつ！？言うに事欠いて私たちにはFクラスがお似合いですって！？>

(明久：別にFクラスとは言つてないぞ小山さん…)

<手が穢れてしまつから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達をふさわしい教室に送つてあげようかと思つた。>

(明久：ねえ雄二、演劇部つてここまで出来ないとダメなのかな?  
それとも、うちの学校が異常なのかな?)  
(雄二：…聞くな。俺にだって分からん。)

くちゅうど試験戦争の準備もしているようだし、覚悟しておきなさい。近いうちに私達が薄汚い貴女達を始末してあげるからー。>

そう言い残し、靴音を立てながら秀吉は教室を出てきた。

「これで良かったのかのう？」

どこかスッキリした顔で明久たちに近寄る秀吉。

「ああ。素晴らしい仕事だった。」

↙Fクラスなんて相手にしてられないわ！Aクラス戦の準備を始め  
るわよー。>

(明久：うわあ、小山さんのヒステリックな声が聞こえてくる・・・。  
。作戦もつましくいったようだけど・・・。なんだろうこの罪  
悪感は。)

「作戦もつまくいったことだし、俺たちもBクラス戦の準備を始め  
るだ。」

「あ、うん。」

「レオン…そつちも準備を始めてくれ…」

雄一が秀吉の首筋につけられたマイクに向かってそう言った。

十分後に試合戦争が始まる。

明久たちは早足で上クラスに向かつた。

教室

「なあレオン、お前わざを秀吉に何したんだ？」  
「まあまあ焦るな焦るな。これ聞いてりや分かるわ。」

レオンが教卓の前に置いたのはスピーカー。

そこから・・・

『はあ・・・あまり期待はせんでくれよ・・・（ガラガラガラ）』

秀吉が気乗りじやないままドアを開ける音がした。

「これって……」

フュイトが何かに気づいた様子。

「さあ、昨日の雪辱を晴らす瞬間だ。」

レオンがそう宣言した瞬間……

『静かになさいー』の薄汚い豚どもー。』

『……これ、木下（君）だよ（な／ね）……？』

スピーカーから聞こえた声に啞然とした面々。

『な、何よアンター』

『話しかけないで！ 豚臭いわ！』

「ふくく……あつはははははははは！ ひい～っ！ ははははは……」

「

秀吉の罵倒に笑うレオン。

「れ、レオン、笑うのはちょっとといけないんじゃないかな・・・？」  
「そ、そうだよ・・・。さすがにこれは酷過ぎるよ・・・」  
「なのはもフェイトもじクラス代表に嵌められたの忘れちゃった?」  
『そんなことないけど・・・』

レオンの意見に言い返せないのはトフェイト。

「私はどうなったのか知らないけど、嵌められたのなら言ひ返せないよね・・・」

その場にいなかつたのはレオンの意見に賛同していた。

「とこりで兄さんは?」

不意にアルティがキラの所在を聞く。

「キラなら多分、屋上にいるんじゃないかな・・・?」  
「屋上に?なんでだろ・・・?」

「多分『例の腕輪』と召喚獣の調整でもしてるのかもね、アスラン  
と。」

「やつか・・・」

キラのいない理由を知り安堵するアルティ・エルル。

そして・・・

《レオン！そつちも準備を始めてくれー》

雄一の連絡が。

「・・・我らが大将の命令だ！野郎ども！戦いの準備じゃあっ！  
『おおおおおおおつ！…！』

レオンの掛け声に一斉に殺る氣になる。

「俺たちが負けるはずねーんだ！」  
「こっちには『死神軍師』がいるんだ！」  
「Bクラスがなんぼのもんじやー！」  
「うわ、江戸っ子らしいのが混ざってる・・・」

その事実に何気に引いたアリシアだった。

午前九時となり……

そして……

Bクラス戦が開戦した。

第六問 「戦争と卑怯と『万死に値する』」 後編 その一（後書き）

今回はレオンが笑わせたと思います。・・・スピーカーでね！

次回、『万死に値する』がついに出来ます！

誰が言うかは・・・

お楽しみに！

第六問 「戦争と卑怯と『万死に値する』」 後編 その2（前書き）

第六問その2です。

今回、『万死に値する』を誰かが言います。

それが誰なのがは本文で。

では、どうぞ！

## 第六問 「戦争と卑怯と『万死に値する』」 後編 その2

「ドアと壁をうまく使うんじゃー戦線を拡大させるでないぞー！」

秀吉の指示が飛ぶ。

九時から開戦したBクラスとの試合戦争は、FクラスがBクラス前という位置から進軍を開始した。

レオンの指示は、『敵を教室内に閉じ込める、何人戦死んても構わない』

そんなわけでレオンの指示を遂行しようと戦争をしているわけだが、Fクラスに一つ問題があった。

瑞希の様子がおかしい。

本来は前線部隊総司令官であるはずの彼女だが、一向に指示を出す気配がない。

それどころか何も参加しないようにして居るよつこ、明久の眼に映つた。

「勝負は極力単教科で挑んで！補給も念入りに！」

そんなわけで今指揮をとっているのは副司令の秀吉と副司令補佐のアルティ。

この数時間はレオンの指示通りつまくやれている。

「左側出入り口、押し戻されています！」

「古典の戦力が少ない！援軍を頼む！」

押し戻された左の出入り口にいるのは古典の竹中先生。

Bクラスは文系が多いため、強力な個人戦力で流れを変えないと一気に突破させる可能性が出てくる。

「姫路さん、左側に援護を！」

レオンの作戦では午後に瑞希が担う重要な役割があるとのこと、明久的にはそうそう瑞希に頼るわけにはいかないが、この場合仕方ないと諦める。

「あ、そ、そのつ・・・・・」

その肝心の瑞希が、戦線に加わらず泣きそうな顔をしてオロオロしている。

(明久：マズい！突破される…)

明久が突破の危険を感じた瞬間・・・

「明久、瑞希が動けない原因は他にあるみたい！僕が竹中先生を排除してくるから瑞希の心のケアを頼むね！」

「レオン！？大丈夫なの！？」

「おやおや～？『死神軍師』の力を見誤っているようだね～？」

「いや、そういうわけじゃないんだけど・・・」

「じゃ、任せた！」

レオンは明久に瑞希のことを任せ、竹中先生の所へ向かつた。

レオンは人込みの間を縫つように走り、竹中先生の耳元でこう囁いた。

「・・・先生、ジラ、すれてますよ・・・・」

「つーーー？」

頭を押さえて周囲を見回す竹中先生。

そして・・・

「少々席を外します！」

レオンの田論見通り少しの間が出来る。

「古典の点数が残っている奴は左側の出入口へ！消耗した野郎は補給に戻りやがれ！・・・『レオンの脅迫辞典／国語分類編』を使うことになるうとはね・・・」

何気なくぼそつと呟いたレオン。

だが、レオンの行動によりFクラスは少し持ち直したはずだ。

「姫路さん、どうかしたの？」

明久は瑞希に声をかける。

（明久：なんだか分からぬけど様子がおかしいし……この原因がはつきりしないと動きが取れないし……）

「そ、その、なんでもないですっ！」

ブルブルと大きく首を振る瑞希。

あまりに大きな動き故に、本当に何かあつたことがバレバレだ。

「そうは見えないよ。何かあつたなら話してくれないかな。それ次第では作戦も大きく変わるだろ？」「ほ、本当になんでもないんです！」

そう言つ瑞希の顔は相変わらず泣きそうな顔のままだ。

（明久：・・・絶対におかしい。）

「右側出入口、教科が現国に変更されました！」  
「数学教師はどうした！」  
「Bクラス内に拉致された模様！」  
「おいおい・・・、これじゃBクラスの思うつぼだね・・・」  
「私が行きますっ！」

そう言つて瑞希が戦線に加わるゝとしたが……

「あ・・・」

突如動きを止めうつむいた。

(明久：なんだろう、何かを見て動けなくなつたようだけど……)

(レオン：瑞希の見ていた方に何が……?)

明久とレオンが瑞希が見ていた方を眼で追つた。

その先には窓際で腕を組んで一人を見下ろす卑怯者の姿があった。

根本恭一

(明久：根本君がどうかしたのかな?)

(レオン：根本に何かあるのかな?)

見にくいが目を凝らして観察する。レオンに至つては千里眼状態になつていた。

『つーー』

二人は、彼が手にしている物を見た。

何の変哲もない、手に入れようと思えば普通に手に入る物だが、逆にいくらお金を出しても買えない物もある。

彼が持っていた物・・・

それは三日前の放課後、瑞希が恥ずかしがって明久から隠した、あの封筒だった。

「……なるほどね……。そういうことか……」「……酷いことを……。昨日の協定からおかしいと思っていたんだ……。あいつが、あの卑怯者が対等な条件の提案をするとかさ。」

「

つまり、あの時点で瑞希の無力化の算段が立っていた訳になる。

「姫路さん。」「は、はい……？」「具合が悪そだからあまり戦線に加わらないようにしてね。」「試召戦争はこれで終わり、なんてわけじゃないんだから、体調管理に気をつけないと。」「

「・・・はい。」

「じゃ、僕たちは用があるから行くね。」

「あ・・・っ！」

瑞希が何か言いたげだったが、明久とレオンはそんなことを気にせず背を向けて駆け出す。

大事な用ができたからだ。

「面白いことしてくれるじゃないか、根本君・・・」

「女の子の想いを踏み躡るような行動をするとかあ・・・。味な真似をするね・・・」

思わずそんな台詞が口からこぼれる。

「あの野郎、ブチ殺す・・・っ！」

「根本恭一・・・貴様は・・・、貴様はあ・・・っ・・・」

『貴様は万死に値する！…否、死してその罪を永劫後悔するがいい！』

レオンがここからは殆ど隠れて見えない根本に口啖呵を切った。

ふざけではない。悪口でもない。冗談でもない。

彼がこの言葉を発した理由は・・・

純粹な他者を思いやる心とそれを踏み躡られたことに対する怒りだつた。

第六問 「戦争と卑怯と『万死に値する』」 後編 その2（後書き）

今回、レオンと明久が根本恭一に啖呵切りました。

彼らはどんな行動をとるのか・・・?

次回、一人のキーが動きます。  
レオンがキーではありません。

お楽しみに！

第六問 「戦争と卑怯と『万死に値する』」 後編 その3（前書き）

第六問その3です。

今回はレオンと明久が決断を！

では、どうぞ！

第六問 「戦争と卑怯と『万死に値する』」 後編 その3

「雄一つー！」

「お？ どうした明久にレオン？ 脱走か？ チョキでシバくぞ。」

二人が教室に飛び込んだら、雄一はノートに何か書きこんでいた。

「雄一、それって両方の勢力の現在戦力状況を書いたものだよね？」

「ああ。一人ともどうしたんだ？」

「・・・話があるんだ。」

「・・・とりあえず、聞こうか。」

明久たちは今、雄一のジョークに構っている余裕はなかつた。

雄一もそれを察したのか、真面目な顔で一人の方を向いた。

明久たちも真面目な顔で向き合つ。

「根本君の着ている制服が欲しいんだ。」

「・・・お前に何があつたんだ？ レオン、分かるか？」

「いや、聞かないでほしいな。分かるわけないじゃん。」

「（し、しまつた！ これだと僕はただの変態だ！） ああ、いや、その。えーっと・・・（本当は制服の中にある手紙が欲しいんだけど、そんな事情は話せないし・・・。どうしよう、このままだと僕は男なのに男が着ている制服を欲しがる変態だと思われちゃうー。）」

明久は墓穴を掘つたことを焦つていた。

「まあいいだろう。勝利の曉にはそれくらい何とかしてやろう。」

（明久：受け入れられた！？貴様、なんだそのリアクションは！まるで『お前にそういう趣味があつたとしても不思議は無い』とでも言わんが借りじゃないか！）

とはいへ、明久は詳しい話をするわけにはいかない。

（明久：くうう・・・。かなり辛いけど、今はその誤解を甘んじて受けよう・・・）

「で、それだけか？」

呆れたよつに明久を見る雄一。もちろんそれだけではない。

「それと、姫路さんを今回の戦闘から外して欲しい。」

「雄一、それは僕からもお願ひする。」

「理由は？」

『言えない。』

いすれば伝わることなのかも知れないが、明久やレオンが口にするものじゃない。

「どうしても外さないとダメなのか？」

「うん。どうしても。」

雄一が顎に手を当てて考え込む。

明久やレオンはかなりの無理を言っている。

瑞希が抜けると、戦力はキラ・レオンが最高戦力だが、キラは戦いに参加させられず、戦えるのは実質上レオンだけになる。

フェイトやなのは、アリシアや優も戦うのは可能なのだが、万能型ではなく、優の場合は長時間の戦闘も無理だ。

それに、レオンのポジションは代表補佐、つまり軍師なのだ。

従つて公に戦うわけにいかないのだ。

万一なのはやフェイト、優やアリシアが戦死（補修室行き）した場合、レオンが戦うことになり、多対一の構図が強制的に出来上がってしまう、ということになる。

「頼む、雄一！」

「僕からもお願ひだ！雄一！」

明久とレオンは雄一に深く頭を下げた。

身勝手な話である。

二人の頼みで雄一が得るものは何もなく、リスクだけは満載の話、理由も話さない頼みは普通受けることはないだろ？

「・・・条件がある。」

「条件？」

「姫路が担う予定だった役割をお前らがやるんだ。どうやってもいい。必ず成功させる。」

が、雄一は一人の願いを聞いてくれた。

「もちろんやつてみせる！絶対に成功させるぞ！」

「良い返事だ。レオンは？」

「やりたいのはやまやまだけど、僕つてほら、公に戦えないし・・・」

「おっと、レオンも作戦があつたな・・・」

「だったらその話、僕に任せてくれないかな・・・？」

「キラ・・・」

キラが教室にいた。

「キラ、大丈夫なのか？」

「完全に大丈夫、とは言えないけど、流石に貢献しないと……ね。

」

キラの言葉に雄一は口の端を上げた。

「それで、僕たちは何をしたらいい？」

「タイミングを見計らって根本に攻撃を仕掛ける。科目は何でもいい。」

「皆のフォローは？」

「ない。あつてせいぜいキラだけだ。しかも、Bクラス教室の出入り口は今の状態のままだ。」

「・・・難しいことを言つてくれるね。」

「こんなことを姫路さんによらせんつもりだったんだろうか・・・」

二人がちょっとした愚痴をこぼす。

今戦闘はBクラスの前後の扉の一か所で行われており、場所の条件から常に一対一となっている。これは少しでも時間を稼ぐためと、雄一の作戦に必要な行動らしい。

そんな中で教室の奥に陣取つている根本に近付く為には圧倒的な個人の火力が必要となる。

それが瑞希であり、キラであり・・・

「もし、失敗したら？」

「失敗するな、必ず成功させろ。」

いつになく強い口調。

どうやら失敗はそのまま敗北につながるとみて間違いないな、とふむ明久。

(明久…せじべいするへ…どうやって目的を達成する?)

「それじゃ、うまくやれよ。レオン、作戦場所に向かってくれ。  
「了解。」

考え込む明久を置いて、雄一が教室を出ようと立ち上がる。

「え? どこが行くの?」

「ロクラスに指示を出してくる。例の件でな。」

例の件とは室外機の件だ。

(明久…それよつべいひよつうか…。どうして姫路さんの代わりを…)

「明久。」

教室を出る直前、雄一は明久達の方へ振り向かずにこう言つた。

「確かに点数は低いが、秀吉やムツツリーー、キラやレオンのように、お前にも秀でている部分がある。だから俺はお前を信頼している。

「・・・雄一。」

「うまくやれ。計画に変更はない。」

そう言い残し、雄一は教室を後にした。

続いてレオンも教室を出た。

「（僕の、秀でている部分・・・？狭い場所での戦闘になつているから、細かい動作なんて役に立つわけないし・・・）。あ。」

「・・・明久君？」

突然声を出した明久の顔をキラが覗き込んだ。

明久は特別優れているわけじゃない。

が、他の人とは違う明久だけの特別が一つだけあった。

点数の低い明久にできる、数少ない方法が。

「・・・痛そーだなあ・・・」

想像しただけで明久の身体に痛みが走った。

が、覚悟はすんなりと決まった。

「・・・よっしゃーあの外道に眼に物見せてやる！キラ、協力してくれ！」

「明久君・・・?何を手伝ってくれって言うんだい・・・?」

キラは即座に聞き返した。

「僕と召喚獣で勝負をして欲しい。」

「冗談じゃなくて、本気で・・・なんだね・・・?」

「冗談抜きだ。」

「分かつた。」

明久とキラは、一人でロクラスへ向かった。

第六問 「戦争と卑怯と『万死に値する』」 後編 その3（後書き）

「後書き」「一ナーツす！」

「どうも、お久しぶりツス！アルスつす！

今日は投票についてまたお願ひツス！

今回、「酔わせるか投票」をやつたツスが、一票しかなくてしかも割れたので決選投票を行うツス！

対象は、

アリシア

フェйт

の二人ツス。

期間は一週間ツス！

よろしく頼むツス！」

第六問 「戦争と卑怯と『万死に値する』」 後編 その4（前書き）

Bクラス戦終了の第六問その4です！

今日はそれしか言えません！

では、どうぞ！

第六問 「戦争と卑怯と『万死に値する』」 後編 その4

「本当に、やるんだね・・・」

向かいにいる明久に再度問いただすキラ。

「ああ。」

「フィードバック、物質干渉状況は・・・」「僕基準してくれ。」

「・・・分かった。・・・Setting Bracelets tart . Material interference level and Feedback level set 30% . (訳: 腕輪のセッティング開始、物質干渉レベルとフィードバックレベルを30%に。)」

キラが自身の腕輪のセッティングを始める。

(明久・・・何を言っているのか全く分からぬ・・・)

「・・・Setting finish , bracelet , Get set ! (訳: セッティング終了、腕輪、起動!)」

キラの腕輪が召喚フイールドを開いた。

召喚フィールド、物理干渉レベル・フィードバックレベルとともに30%で展開されている。

「す、すごい……」

明久は思つたことをそのまま口に出してしまった。

「さあ、明久君、行くよ！（君の作戦、乗った！）  
「・・・ああ！」

二人は大きく息を吸つて、腹の底から声を出した。

『試験召喚！』

毎度おなじみ明久の召喚獣と、キラの召喚獣。

明久的には『観察処分者』として雑用をやっていた時はただただ面倒なだけだったが、感謝していいもいかといい気がしている。

『行け！』

二人の召喚獣が相手目掛けて駆け出した。

明久の召喚獣は拳と一体となれと言わんばかりに木刀を強く握りしめさせる。

（明久：行けええ！）

壁を背にしたキラの召喚獣に対し、駆ける勢いを乗せて大きく拳を振るつた。

ドンッ！

「ぐ・・・・うつ！」

モーションの大きなその動作は、キラの召喚獣にいとも容易くかわされた。

そして、壁を殴りつけた召喚獣の痛みが、明久にフィードバックする。

「行けえっ！」

キラもお返しに、と言わんばかりのモーションの大きい攻撃を準備する。

（明久：腕輪の力を使うのか！？）

明久が見たのは、キラの召喚獣の両肩の砲門クスィファイアスと腰の砲門バラエーナ、ライフル一丁が壁を殴りつけた直後の明久の召喚獣の背中に向けられた瞬間だつた。

数秒後、その五つの砲門から・・・

バシュウウウウウウウウウツ！

『H·M·F·B（High Mat Full Burst、ハ

イマット・フルバースト）』が放たれた。

が、こちらも簡単にかわされた。

「・・・んのおつ！」

更に力を込めた一撃を明久の召喚獣が放つ。

キラの召喚獣は上昇して避け、拳はまたも壁を打つ羽目になつた。

「つう・・・つ！」

再び痛みが明久の拳に響く。

教室を揺るがすほどの力を込めた一撃だから、その反動は半端ではない。

「明久君、時間が！」

キラが壁に掛けてある時計を見上げて告げた。

現在時刻は午後二時五十七分。

作戦開始まであと三分となつた。

<お前らしい加減諦めろよな。昨日から教室の出入口に人が集まりやがって。暑苦しいことこの上ないっての。>

遠くからBクラス代表・根本の声が聞こえた。

「どうした？軟弱なBクラス代表サマはそろそろギブアップか？」

対するは雄一の声。瑞希が戦闘に参加できない分、彼が率いる本体も出動したのだ。

「うあつ！」

明久は再び召喚獣を動かす。

大振りの攻撃はキラの召喚獣には当たらない。

まるで学習能力がないかのように壁に叩きつけられた拳。

先程の痛みがまだ抜けないうちに新しい痛みが明久の拳に訪れる。

「うおおつー」

そしてキラもまた壁に『H・M・F・B』を放つ。

キラの持ち点も一度『H・M・F・B』を放つ度に大量の点数が消費されていく。

<はア？ギブアップするのはそつちだろ？>  
<無用な心配だな。>  
<そうか？頼みの綱の姫路さんも調子が悪そつだぜ？>  
<・・・お前ら相手じや役不足だからな。休ませておくぞ。>  
<けつ！口だけは達者だな。負け組代表さんよお。>  
<負け組？それがFクラスのことなら、もうすぐお前が負け組代表だな。>

「はああつー」

明久の召喚獣、四度目の攻撃。

拳の先が暖かくなつた。

明久が己の手を見ると結構な量の出血があり、教室の床に血溜まりができていた。

「や、やっぱいよおーつ！ふえ、フュイトナゼーん！」  
「天和、もう少しだから！もう少しで・・・」  
「つー、フェイト殿、前に敵が！」  
「えつ！？」  
「危ないっ！（バシュウウツー、ギヤああああああつ・・・）」  
「あ、ありがと、なのは・・・」  
こじらじらも苦戦を始めていた。

「せつときからドンドンガリガリ」と、壁がつるせえな。何かやつてこ

るのか？」

「さあな。人望の無いお前に對しての嫌がらせじゃないのか？」  
「けつ。言つてろ。どうせもうすぐ決着だ。お前ら、一氣に押し出  
せ！」

「・・・形成を立て直す！一旦下がるぞ！」

「どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか！？」

「明久君、そろそろ！」

「うん、わかつてゐ！」

明久はキラに目配せする。

キラは黙つて頷く。

「おおおおおおおお！」

明久は腹の底から力をこめて雄叫びを上げた。

五度目、この先はない。

「あとは任せたぞ、明久、キラ。」

敵の本隊を引き付けた雄一が、壁の向こうからよく通る声でそう告げてきた。

午後三時ジャスト、作戦開始。

『だああああああああつしゃあああああああつーー!』

召喚獣に持てる力の全てを注ぎ込んで、壁を攻撃する明久。

ハナから狙いはこのBクラスに繋がる壁、キラとの戦闘は壁を破壊  
せせる召喚獣を呼び出す為だ。

「・・・ぐううー！」

全身に走る痛みに神経がきしむ。

が、明久やキラにしかこんなことはできない。

痛みが返る代わりに、物理干渉能力を持つ二人と焰の召喚獣しか。

ドーオッ……！

豪快な音を立て、Bクラスにつながる道が生まれた。

『ンなつーっ』

崩れた壁の向こうにあら、驚いて引きつった根本の顔。

Bクラスの戦力のほとんどは雄一率いる本隊を追って教室から出て  
いる。

またとない好機。敵の主戦力は出腹、代表の防備は薄い。

「（ここを逃せば勝けはない）くたばれ、根本恭一ーっーー！」

明久とキラは呆気に取られている根本に勝負を挑むために駆け寄つ  
た。

「このままいくぞ！Fクラス、キラ・ヤマトが・・・」

「Bクラス山本が受けます！試験召喚！」

サモン

「しまった、近衛部隊が！」

まだ残っていた根本の近衛部隊がその行く手をふさぐ。

二人と根本の距離は20メートル程度、広い教室のせいで随分と距離がある。

「は、ははっ！驚かせやがって！残念だつたな！お前らの奇襲は失敗だ！」

取り繕うように二人を笑う根本恭一。

確かに一人の奇襲は失敗だ。既に周りを近衛部隊に取り囲まれている。

こうなつた以上、点数に劣る明久や戦うのに危険なキラにはこの場を切り抜ける術はない。

だが、目的は達した。

ここで、急に話が変わるが教科の特性を説明する。

各教科にはそれぞれ担当教師がいて、その先生によってテスト結果にも特徴が現れる。

例えば、数学の木内先生は採点が速い。

例えば、世界史の田中先生は点数の付け方が甘い。

では、保健体育は？

保健体育は採点が速いわけでも、甘いわけでもない。

遠くにいる相手に戦闘を仕掛けられるわけでもなければ、豹しやすい先生であるとはいえない。

保健体育という教科の特性。それは、教科担当が体育教師であるが為の・・・

ダン、ダン、ダンッ！

出入り口を人で埋め尽くされ、四月とは思えないほどの熱気がこもつた教室。

そこに突如現れて生徒と教師、三人分の着地音が響き渡る。

エアコンが停止したので、涼を求めるために開け放たれた窓。エアコンが停止したので、涼を求めるために開け放たれた窓。の前に降り立つた。

そこから屋上よりロープを使って三人の人影が飛び込み、根本恭一並外れた行動力。

「・・・・・Fクラス、土屋康太・・・」  
「Fクラス、レオン・・・」  
「き、キサマラ・・・」  
『・・・Bクラス根本恭一に保健体育勝負を申し込む（。／！）』

「ムツツリイーイイイイイイイイツ！レオオオオオオオオンツ！」

明久らが近衛部隊を引き付けたので丸裸になつた根本恭一。

最早どこにも逃げ場はない。

『・・・試獣召喚。』

「ムツツリイー、加速を使えるかい？」

「・・・今は、あまり使えない。」

「なら、瞬殺でつ！」

「・・・了解。」

「TRANS - AMつ！」

『Fクラス　土屋康太　&　Fクラス　根本恭一  
VS　Bクラス　根本恭一  
保健体育　441点　&　1023点  
VS　203点』

刹那、切り捨てられた敵は細切れになつた。

赤く輝いた死神に跨つた忍者は手にした小太刀を一閃し、一撃で敵を切り捨てた。

今ここに、Bクラス戦は終結した。

次回、第七問 「戦果と告白とバンドの抽選」

第六問 「戦争と卑怯と『万死に値する』」 後編 その4（後書き）

今回はキラと明久が頑張りました。

ついに出た腕輪の力、アスランお手製の腕輪です。

今、締め切つた『酔わせるか投票』、フェイトとアリシアで決選投票を行っております！

期間は来週金曜まで！

お願いします！

次回は戦後対談と明久の・・・。レインはバンドの課題曲を引きこ行き・・・

お楽しみ！

**第七問 「戦果と相手とのバンドの抽選」（前書き）**

Bクラス戦後対談とバンドの抽選がある第七問です！

進みは非常に亀進行ですが・・・

では、どうや！

## 第七問 「戦栗と面白いバンドの抽選」

### 第八問

以下の問い合わせに答えなさい。

『女性は（）を迎えることで第一次性徵期になり、特有の体つきになり始める。』

姫路瑞希の答え

『初潮』

キラ・ヤマトの答え

『初潮（先生、これを男子に書かせるのは不味くないですか？）』

教師のコメント

二人とも正解です。キラ君の言い分もよくわかりますが・・・

吉井明久の答え

『明日』

教師のコメント

随分と急な話ですね。

レオンの答え

『初潮（先生、これを書かせるとかどつかしてるよ・・・）』

教師のコメント

・・・すいません。

高町なのは、フェイド・T・ハラオウン、アリシア・T・ハラオウンの答え

『答えたくありません!』

教師のコメント

・・・答えてください。

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる、生まれて初めての生理。医学用語では、生理の

ことを月経、初潮のことを初經という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43キログラムに達するころに初潮を見る者が多いため、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均十一歳。また、体重の他にも初潮年齢には人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される。』

#### 教師のコメント

詳し過ぎです。

「明久、キラ、随分と思い切った行動に出たのう・・・」

終戦後、Bクラスにやつてきた秀吉に、まずそんなことを言われた二人。

「うう・・・。痛いよう、痛いよう・・・。」

今、明久はとにかく痛がっていた。

100%全てが返るわけじゃないが、素手でコンクリートの壁を壊したわけだから、その痛みは並じゃない。

「何とも・・・、お主らしい作戦じゃったな・・・」

「お主ららしいって・・・、僕は作戦に乗っただけだから結局は明久君だけの作戦だよ?」

「で、でしょ? 僕一人で考えたんだから、もつと褒めてもいいと思うよ?」

「後のことを考えず、自分の立場を追い詰める、男気あふれる素晴らしい作戦じやな。」

「・・・遠まわしに馬鹿つて言つてない?」

学校の壁を破壊したわけだから、問題にならないわけがない。明久の放課後の予定は職員室でのハートフルコミュニケーションで埋まつた。

ちなみにキラは・・・

女子たちの懇願でそれが回避されていた。

「ま、それが明久の強みだからな・・・」

「だよね～、明久の強みはそれしかないもんね～。」

(明久・馬鹿が強み！？なんて不名誉な！)

「さて、それじゃ嬉恥ずかし戦後対談と行くか。な、負け組代表？」  
「…………」

床に座り込む根本。

わざわざまでの強気が嘘のよつこむとなしい。

「本来なら設備を明け渡してもいい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするといひんだが、特別に免除してやうんでもない。」

そんな雄一の発言に、ざわざわと周囲の皆が騒ぎ始める。

「落ち着け皆。前にも言ったけど、僕たちの田標はAクラスだよ？  
「いい、ゴールじゃない。」  
「つむ、確かに。」  
「「」はあくまでも通過点だ。だから、Bクラスが条件をのめば解放してやううかと思つ。」  
「…………」

その言葉で「Aクラスの皆はどう」か納得したかのような表情になつた。

Dクラス戦でも言ったこともあり、雄一やレオンの性格を理解し始めているのだろう。

「・・・条件はなんだ？」

力なく根本が言う。

「条件？それは・・・お前だ、負け組代表！」

レオンが根元に向けて叫んだ。

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き勝手やつてもらつたし、正直去年から田障りだつたんだよな。」

普通は凄い言い様だが、それを言われるほどのことを見はやつている。

だから周りの人間は誰もフォローを入れようとしない。本人もそれを分かっているようだ。

「そこで、お前らBクラスに特別チャンスだ。」

昨日の昼に雄一が言っていた、あの取引の材料を提案する。

「Aクラスに行つて、試合戦争の準備ができるいると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやつてもいい。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ。」

「・・・それだけでいいのか?」

疑うような根本の視線。当初の計画ではそれでよかつたが。

「そりそり、Bクラス代表がコレを着て言つた通りに行動したら見逃してもいいかな・・・?」

これは明久の要望の制服を手に入れるための手段だ。何となく雄一やレオンの個人的感覚も入っている気がするが・・・

「ば、馬鹿なことを言つないこの俺がそんなふざけたことを・・・!  
!」

根元が慌てふためく。

普通はそうだ。

「Bクラス生徒全員で必ず実行させよ！」

「任せて！必ずやらせるから！」

「それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな！」

Bクラスの仲間たちの温かい声援。

これを見るだけで根元が今までどういった行動をとってきたのかが分かる気がしてくる。

「んじゃ、決定だな。」

「くつーよ、寄るな！変たひつー？」

『素直に従わないと斬るよ・・・？』

いつの間にか根本の隣にいたフェイトとこのはが根元の首筋にそれぞれのデバイス（バルディツシユとアルセリオン）を突き付けていた。

更に・・・

「や、やめぐふつ！」

「雄一」とりあえず黙らせたよ。』

「お、おう、ありがとう。」

いつの間にか現れ、首筋に刃物を突き付けている一人や、たった一

撃で根元を氣絶させたレオンを見て流石の雄一も引いていた。

「じ、じゅあ着つけに移るとするか。明久、レオン、任せたぞ。」

「了解っ！」

「ういっす！」

ぐつたりと倒れている根本に近付き、制服を脱がせる。

「ひ、ひ・・・」

うめき声をあげる根本。

(明久・ま。まずい、眼を覚ますかもしれない・・・)

「ふんっー・」

「がふあっー・?」

「おおお・・・、フェイトが女の子らしからぬ声を出した・・・」

フェイトが根元の腹を思い切り殴った。

そんな光景に驚きを隠せなかつたレオンだった。

その後に見慣れた男子の制服を府袴、女子の制服をあてがう。

「うーん……。」れ、どうするんだろう?」

男子の制服と違つ為、順序などやり方が分からず頭を悩ます明久。

そう困つていたら……

「吉井君、私がやつてあげるよ。」

Bクラスの女子の一人がそう提案した。

「そう? 悪いね。それじゃ、折角だし可愛くしてあげて?」

「それは無理……。だって、土台が腐つてるし。」

(明久:ひ、酷い言われようだ……)

明久が何気なくそう思つたのは内緒の事実である……

「じゃ、よひしへ。」

明久はその女子に根本を託し、手に彼の制服を持つてその場を離れた。

根本改造組。

「さて、どう可愛くしてあげよつかなあ・・・？」  
「じゃあじゃあ、リボンとかつけたらどうかな？」  
「あ、それいいわねエルル！あ、ウイッグとかどうかな！？」  
「それいいね！」

アルティ、エルルを筆頭にした根本改造組による根本改造計画は着々と酷い方向に向かっていた。

(明久…えっと、多分、この辺に…)

明久は「」そと根本の制服を探つた。

彼の指の先に何かが当たる感触があつた。

「・・・あつたあつた。」

見覚えのあるをの封筒を取り出し、自分のポケットに入れる。

(明久：さて、この制服どうしよう・・・？・・・よし、捨てちゃ  
おつ！せっかくだから女子の制服の着心地を家まで楽しんでもらお。  
)

そんなことを考えながら、明久は皆より先にFクラスへ戻る。

根元の制服をゴミ箱に突っ込み、その後ポケットから例の封筒を取り出した。

「落し物は持ち主に、つと。」

瑞希の席に置いてある、彼女の鞄に入れておく。

「これで作戦完了」・・・

「吉井君！」  
「ふえっ！？」

背後からいきなり声をかけられて、不覚にも明久は間抜けな悲鳴をあげた。

「（なんかすゞく恥ずかしい！）な、なに？」

明久は慌てて振り向いた。

振り向いた先には瑞希がいた。

「吉井君・・・」

眼が潤んでいる。

「（今日の瑞希さん、泣き顔ばかりだな・・・）ビ、ビタつかした？」

鞄を勝手にいじつている姿を見られ、慌てる明久。

すると、そんな明久に瑞希は正面から抱きついた。

「ほわあああっ」と…?

「あ、ありがとうございます…わ、私はずっと、ビタしていいか、わかんなくて…」

ビタしていいのか分からるのは明久の方だった。

「（くそつー）これは新手の陽動作戦か?）と、とにかく落ち着いて。泣かれると僕も困るよ…」

「は、はい…」

精神の安定を図るために瑞希を引き離した明久。

（明久：つてしまつた！引き離してどうする－こんなチャンスは一度とないだろうが－）

「いきなりすいません…」

涙田を「ああ瑞希。

「（ああっ…言いたい…もう一度抱きついてお願いしたい…）・・・も、もう一度…・・・」

「はい？」

「（げつ…思わず口に出していた…何か他のことを言わないと…）・・・もう一度壁を壊したい…（…・・・って馬鹿あつ！僕の馬鹿あつ！お前はどうこのテロリストだよ…もう一度壁を壊してなんになるつていうんだよ…）」

「あ、あの、更に壊したら毎年せせられりやうと思こますよ…・・・？」

「（うん。わかってる。わかってるからそんなに氣の毒そつな田で僕を見ないで…・・・）・・・それじや、皆の所に行こうか。」

「あ、待ってください…！」

いたたまれない気持ちで逃げようとする明久を、瑞希が袖を握つて引き止める。

「な、なに？」

「あの…・・・」

（明久…まさか、良い病院を紹介してくれる気だらうか？くつ！前に僕が言つた台詞がそのまま返つてくるなんて、こんな屈辱はいつも通りだ…）

「手紙、ありがとうございました。」

「つむきがちに小さな声で囁く瑞希。

「別に、ただ根本君の制服から姫路さんの手紙が出てきたから戻してただけだよ。」

「それってウソ、ですよね？」

「いや、そんなことは……」

「やっぱり吉井君は優しいです。振り分け試験で途中退席した時だって、『具合が悪くて退席するだけでFクラス行きになるのはおかしい』って、私の為にあんなに先生と会いをしてもらっていたし……」

（明久：そう言えば、そんなこともあったなあ。あの時は先生に冷たくあしらわれたから、逆に熱くなっちゃったつけ。）

？

「え！？あ、いや！そんなことは！」

「ふふつ。誤魔化してもダメです。だって私、自己紹介が中断された時に吉井君が坂本君やヤマト君、レオン君に相談しているの、見ちゃいましたから。」

（明久：あ、あの相談を見られていたの！？）れじや、まかしきつがないじゃないか！）

「凄く嬉しかったです。吉井君は優しくて小学生の時から変わってなくて……」

「（な、なんか妙な空気だなあ……。今までに経験したことのないむずがゆさを感じる……。よく分からなければ、僕はこの空気に耐えられそうになじよー）そ、その手紙、うまくいくといいね！」

明久はとりあえず話題を変えよつとした。

「あ・・・。はいっ！頑張りますっ！」

そんな明久の言葉に応えたのは、瑞希の満面の笑み。

その笑顔を見て明久は思つ。

(明久：彼女は本当に雄二のが好きなんだな・・・。わかつて  
いたことだし、僕は雄二に敵わないと実感してるし・・・。悔しい  
けどしようがないか。)

そう思つた後・・・

「で、いつ告白するの？」

下世話な話を振つた明久。

(明久：ま、これくらいは許されてもいいよね・・・)

「え、ええと・・・、全部が終わつたら・・・／＼／＼

瑞希は真つ赤になりながらそう答えた。

「そつか。けど、それなら手紙より直接言つた方がいいかもね。」

「そ、そうですか？ 吉井君はその方が好きですか？」

「うん。少なくとも僕なら顔を合わせて言つてもらつ方が嬉しいよ。（手紙は根本君のせいで嫌な記憶になつていそうだし、姫路さん自身にとつても、きっとその方がいいだうじ。）」

「本当ですか？ 今言つたこと、忘れないでくださいね？」

「え？ あ、うん。」

明久の意見に瑞希は金言を得たかのように嬉しそうだった。

くご、この服、ヤケにスカートが短いぞ！？

くいいからキリキリ歩け。>

くせ、坂本め！ 良くも俺にこんなことを・・・>

く無駄口を叩くな！ これから撮影会もあるから時間がないんだぞ！

? >

くき、聞いてないぞ！？

くさつさと歩いて・・・。そうしないと斬るよ・・・？

くわ、わかつた！ わかつたからそれを向けるな！>

廊下からこきなり響いてきた言い争い。

「なんでしょうか？」

「なんだろうね？（伝令以外にいつの間にか撮影会までスケジュールに入れられたみたいだね・・・。雄一かハラオウンさんのどっちかの策略だと思うけど・・・、きっと根本君には一生忘れない素晴らしい思い出を背負うことになるね・・・）とにかく、頑張つてね。」

「はいっ！ありがとうございます！」

元気良く返事をして、瑞希は教室を出て行った。

・・・とても軽やかな足取りだ。

（明久・・・さて、僕も皆の所に行こう。）

瑞希の後を追い、明久も足を踏み出す。

「・・・ひとつ、その前に。」

明久は雄一の席に歩み寄り、雄一の鞄を取り出す。

「とりあえず、雄一の教科書に卑猥な落書きでもしておこう。」（僕がそう簡単に人の幸せを祝つてやる人間だと思うなよー。）

生徒会室。

「うつわ・・・僕を除いても9人いるじゃん・・・。予選会、何グループで行うの・・・？」

レインは一人、課題曲を決めるための集会に来ていた。

『それでは、今回のバンドのコンクールの説明と課題曲の選考を行います！』

そして、説明開始。

バンドのコンクールは、まず近い「ひよこ」予選会を開催、生徒による投票で決勝進出グループを決める。

曲は課題曲を含めて予選で6曲以上歌うこと。

「10グループで争うのか……。勝ちぬける……よね、きっと。」

レインは密かに勝てるかと思った。

『では、課題曲を決めます！』

そう言われた時に、生徒会室の中央に箱が置かれた。

その箱に生徒が集まり、くじを引き始めた。

「な、なんだよこの曲！？訳わからんねえよ！？」  
「人の名前のタイトルの曲なんてあるのかよ！？」

(レイイン…うつわ、変な曲もあるんだ…)

そしてレイインもくじをひ…

「あ、君たちは『』れね。ちょっと特別なメンバーだから、いつ  
で勝手にさめぬかやつたから。」

・・・けなかつた。

「ちよつ…？それ酷いよー手かなんで勝手に決められたの…？・・・  
もつあきらめてこれ見よつ・・・。・・・『ライオン』と『さりぬ  
く涙は星に』・・・？というか、なんで2曲？」

レイインは率直な意見を出した。

「・・・なんで2曲出す必要あつたのかな・・・？」

次回、  
「交渉と戦争と両雄激突」

## 第七回 「戦果と明日のバンドの抽選」（後書き）

今回は根元君が不幸になりました。

そしてバンドの課題曲ですが、剣 流星さんとキラーさんのリクエストを採用しました！

さて、悲鳴があがつた一曲は一体何だったのか。

それはバンド予選でお分かりするでしょう・・・

次回からついにAクラス戦に突入！

お楽しみに！

6月18日、決選投票締め切ります！

第八問 「交渉と戦争と両雄激突」 その1（前書き）

Aクラス戦開始の第八問その1です！

今回、ちょっとだけおまけがついてます。

では、どうぞ！

## 第八問 「交渉と戦争と両雄激突」 その1

### 第八問

人が生きていいく上で必要となる五大栄養素を全て書きなさい。

姫路瑞希、キラ・ヤマトの答え

1・脂質 2・炭水化物 3・タンパク質 4・ビタミン 5・ミネラル

教師のコメント

流石は一人、優秀ですね。

吉井明久の答え

1・砂糖 2・塩 3・水道水 4・雨水 5・湧き水

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

フェイド・T・ハラオウンの答え

1・キラ 2・水分 3・ビタミン 4・炭水化物 5・・・ 分  
かりません

### 教師のコメント

なぜヤマト君が栄養になってしまっているのがわかりません。

### 土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満の時は早発月経という。また、十五歳になつても初潮がない時は遅発月経、更に十八歳になつても初潮がない時を原発性無月経といい・・・』

### 教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終わりました。

### アルティ・ヤマトの答え

・・・五大栄養素・・・?何それ?

### 教師のコメント

あなたはここに来る前に料理学校へ行っていたのではないですか？

点数補給のテストを終えた一日後の朝。

あとはAクラスを残すのみとなつたFクラス面々は、もうじきお別れになる（予定の）Fクラスで最後の作戦の説明を受けていた。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能と言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があつてのことだ。感謝している。

壇上の雄一が素直に礼を言った。

「 ゆ、雄一、どうしたのや。らしくないよ？」

「 ああ。自分でもそう思つ。だが、偽うざる俺の気持ちだ。」

「 マジで？」

「 マジだ。」

明久やレオンが聞き返していた。

「 ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝つて、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突きつけるんだ！」

「 むむおおおおおおつー！」

「 そりだーつー！」

「 勉強だけじゃねえんだーつー！」

最後の勝負を前に、皆の気持ちが一つになつてゐる気がしたが・・・

「 ・・・戦いたくないなあ・・・。ルカ君がいるし、はやてちゃんもいるし、二ゴル君もいるし、アスラン君もいるし・・・」

「 そりだつたね・・・。私も戦いたくないや・・・」

なのはやフロイト、アリシアはははは半分ほど戦意喪失していた。

「皆ありがとうございます。そして残るAクラス戦だが、これは一騎討ちで決着をつけたいと考えている。」

先日の昼食時、雄一が言つていた話だった為明久は驚かなかつたが、クラスの面々は驚いたようで、教室中にざわめきが広がつた。

「どういふことだ？」

「誰と誰が一騎打ちをするんだ？」

「それで本当に勝てるのか！？」

「落ち着いてくれ。それを今から説明する。

雄一がバンバン、と机を叩いて皆を静まらせた。

「やるのは当然、俺と翔子だ。」

Aクラス代表の霧島翔子とFクラス代表の坂本雄一。

クラス間の戦争を代理で行うのだから、代表同士の一騎討ちは当然だろう。

・・・が。

相手は学年主席であり、Bクラスを圧倒する瑞希ですら点数ではかなりの差をつけられている。

「（うひゃあ悪いけど……）馬鹿の雄一が勝てるわけないつー？」

「馬鹿と学年主席じゃ確實に負けえつー!?」

思わず口に出ていた明久とレオンの類をカッターがかすめる。

（明久・レオン・殺す気か！？って、まさか。いくら雄一でも友達

を本気で殺そなんて考えるワケが・・・

「次は耳だ。」

(明久：あれ？僕は友達じゃないみたいだ・・・)

「まあ、明久やレオンの言うとおり確かに翔子は強い。まともにや  
りあえれば勝ち目はないかもしれない。」

「雄一：さあ、それ認めるならカッター投げる必要なかつたんじやな  
いの？」

「いや、投げないと気が済まなかつた。・・・まあ、その話は置い  
といて、勝ち目はなかつたかもしれないが、Dクラス戦もBクラス  
戦も同じだつたろう？ とともにやりあえれば俺たちに勝ち目はなかつ  
た。」

が、Fクラスは今こいつして勝ち進んできている。

「今回だつて同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に  
入れる。俺たちの勝ちは揺るがない。」

最初は勝てないと思つていた試合戦争を勝ちに導いてきた雄一の言  
葉だ。

無理な話に思えても、否定しようなどという人間はこのクラスには  
いない。

「俺を信じてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆さん見てやる。」

ମୁଣ୍ଡର କାଳିକାନାଥ ପାତ୍ର ହାତରେ ଦେଖିଲୁଛାମୁଁ ।

皆の意思を確認する必要はなさそうな雰囲気。全員が雄一を信じてい  
いるのだ。

「さて、具体的なやり方だが・・・、一騎討ちではファイールドを限  
定するつもりだ。」

「日本史だ。」「ファイルで？何の教科でやるつもりじゃ？」

(明久・日本史?別に霧島さんが日本史を不得手としているとも、雄二が得意としているとも聞いたことないけど・・・。・・・。ビックリして日本史なんだろう?・・・?)

「ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粹な点数勝負とする。」

「小学生程度のレベルで万点ありなの？」

「その条件でやつたらミスした方が負けるっていう注意力勝負になるよね。」

なのはが雄一の言った方法に疑問を持つ。

フェイドがすぐに捕捉を入れた。

「で、でも、同点だつたらきつと延長戦だよ？ そうなつたら問題のレベルを上げられちやうだらうじ、ブランクのある雄一には厳しくない？」

「確かに明久の言つ通りじや。」

「ブランクがある・・・。そうなると確かに坂本殿の方が不利かと思ひますが・・・」

「いやいや、勝ち目は少しあると黙つよおおおつー！」

レオンがいきなりカッターを投げられる。

「ちよつ！？ 危なつ！」

「おじおじ、あまり俺を舐めるなよ？ いくらなんでも、そこまで運に頼り切つたやり方を作戦などと言つものか。」

「え？ ジャ、じゃあ、その霧島さんの集中を乱す方法があるっていつの？」

「いいや。アイツなら集中なんてしていなくて、小学生レベルの

テスト程度の問題なら何の問題もないはずだ。」

「そう言えばそうだね・・・。先生の監視がある中で妨害できないだろうし・・・。」「

(明久・なのは・じゅあどりゅうして勝つんだろ?・)

「雄一、もつたいたいぶるでない。そろそろタネを明かしても良いじゃろう?」

「やうですよ・・・。」

Fクラスの面々も秀吉と優の言葉にうなづいていた。

「ああ、すまない。つい前置きが長くなつた。」

かぶりを振つて、雄一は改めて口を開いた。

「俺がこのやり方を探つた理由は一つ。ある問題が出れば、アイツは確実に間違えると知つてているからだ。」

「雄一、ある問題つてなんだよ?」

「その問題は・・・『大化の革新』。」

「『大化の革新』・・・? 誰が何をしたのかを説明しろ、みたいなものじゃないの?」

「それ、お受験校なら出てくるかもしけないけど小学生レベルででないと思つよ?」

「いや、そんな掘り下げた問題じゃない。もつと単純な問いただ。」

「実行したのは誰、とか?」

「いや、もつと単純だ。」

「それよりもつと単純というと……何年に起きた、とかのう?」

「おっ。ビンゴだ秀吉。お前の言つ通り、その年号を問う問題が出たら、俺たちの勝ちだ。」

(明久：大化の革新の年号だつて？そんな基礎的な問題を、あの霧島さんが本当に間違えるのかな？『鳴くよ（794）ウグイス、大化の革新』とすらすら答えられるのに。)

(なのは：あ、あれ？大化の革新つて何年にあつたんだっけ？えと、えと……『蘇我虫殺した大化の革新』だつたから……564年？)

「大化の革新が起きたのは、645年。こんな問題は明久ですら間違えない。」

(明久：お願い……僕を……見ないで……)

(なのは：あ、あれ？違つたかな……？)

「だが、翔子は間違える。これは確実だ。そうしたら俺たちの勝ち。晴れてこの教室とおさらばって寸法だ。」

(アリシア：……わざわざから気になつてているんだけど……)

「あの、坂本君。」

「ね、ねえ坂本。」

「ん？どうした、姫路にアリシア？」

「霧島さんとは、その……仲がいいんですか？」

「そうそう。さつきから坂本、翔子をさ、『あいつ』とか『翔子』とか呼んでたじやん。」

「顔見知りじゃないとそんな呼び方はしませんよね……？」

(明久・まさかとは思つけど、あの男・・・姫路さんに好かれているのみならず、才色兼備の霧島さんとまで良い関係なんてことはあるまいな・・・?)

「ああ。アイツとは幼馴染だ。」

「総員、狙ええっ!」

「なつ!?なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える!...?」「と、とりあえず皆は出でようか・・・」

「キラ!お前もか!?」

「黙れ男の敵!Aクラスの前にキサマを殺す!」「俺が一体何をした!?!?」

キラを除いた男子生徒の意見は言葉がなくても満場一致。

「遺言はそれだけか?・・・待つんだ須川君。靴下はまだ早い。それは抑えつけた後で口に抑え込むものだ。」

「了解です隊長。」

(明久・レオン・我らが仇敵め!男子高校生四十九人分の靴下をとくと味わえ!)

「ま、待て!だつたら焰も同罪だろうが!あいつはAクラスの水河が私が焰の嫁だと宣言しているだろうが!」

「お、おい雄二!俺に矛先を向けようとするな!」

「焰は後回しだ。まず先に雄二を殺る。」

「了解です!」

「あの、吉井君。」

「ん？ なに、姫路さん？」

「吉井君は霧島さんが好みなんですか？」

「そりや、まあ。美人だし。」

「・・・・・・・」

「え？ なんで姫路さんは僕に向かつて攻撃態勢を取るの！？ それと美波、どうして君は僕に向かつて教卓なんて危険なものを投げようとしているの！？」

「まあまあ。落ち着くんじゃ皆の集。」

パンパンと手を叩いて場を取り持つ秀吉。

「む。秀吉は雄一が憎くないの？」

「冷静になつて考えてみるが良い。相手はあの霧島翔子じゃぞ？ 男である雄一に興味があるとは思えんじゃろうが。」

(Fクラス男子四十九名……おお、そいつ言えば。)

「むしろ、興味があるとすれば……」

「・・・やうだね。」

男子の視線がある女子に集中する。

「な、なんですか？ もしかして私、何かしましたか？」

慌てる瑞希。

何もしていなことを証明するために、別の方を向く。

「……？私がどうしたの？」

「……？」

「え、あ、その、私に何か……？」

視線の先にいたのはなのは、フェイト、優だった。

(Fクラス面々：違う。何かしたわけじゃないんだ。何かされる可能性が大なんだ。)

「とにかく、俺と翔子は幼なじみで、小さな頃に間違えて嘘を教えていたんだ。」

幼なじみといふことに引っかかりを覚えるが、それを放置したFクラス面々。

「あいつは一度覚えたことは忘れない。だから今、学年トップの座にいる。」

一度覚えたことは忘れないほど頭がいい、でもそれが今回は仇になる。

「俺はそれを利用してアーヴィに勝つ。そうしたら俺たちの机は・・・

「

『システムデスクだ！－』

おまけ。

「…………水河さんとのことなんだナビ…………」

「そつ、それをほじくり返すな！」

『ああ、吐け！なせ水河さん』に『私が妻だ』などと訴われているの

卷之三

それは勝手はアーヴィングが語っているだけだ！」

「さうにゆかりあるかたにかの語りが、新方勝三に渡るか語如

「設せよ」と「  
たまふ」

「 ֆանգան եւ առ առ ու ու...」

焰はその後、Fクラスの嫉みに恐怖を覚えた。

ているだけだ  
・  
・  
・

第八問 「交渉と戦争と両雄激突」 その1（後書き）

今日はお知らせです！

フロイトとアリシア、どちらを酔わせるか、という決選投票は今日の23時59分に締め切ります！

感想は誰でも書けますので、気兼ねしないでどうぞ！

第八問 「交渉と戦争と両雄激突」 その2（前書き）

ついにAクラスに乗り込む第八問その2です！

アニメと原作での優子の違いに少し驚くきっかけ・・・

では、どうぞ！

## 第八問 「交渉と戦争と両雄激突」 その2

「一騎討ち?」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎討ちを申し込む。」

恒例の宣戦布告。

今回は代表である雄一を筆頭に、明久、瑞希、秀吉、ムツツリー一、レオン、キラ、フェイトら首脳陣勢ぞろいでAクラスに来ていた。

(明久：・・・毎回いつしてくれたらこうしてくれたら僕の制服は繕いだらけにならなかつたと思つんだけど・・・?)

「うーん、何が狙いなの?」

現在雄一と交渉のテーブルについているのは秀吉・・・の双子の姉の木下優子。

「もちろん俺たちFクラスの勝利が狙いだ。」

優子が訝しむのも無理はない。下位クラスに位置する者が、一騎討ちで学年トップに挑むこと自体が不自然なのだから。

何か裏があると考えるのが普通だ。

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせる」ことができるのはありがたいんだけど……、だからってわざわざリスクを冒す必要は無いかな・・・？」

「賢明だな。」

予想通りの返事。

「これからが交渉だ。」

「ところで、Cクラスの連中との試召戦争はどうだった？」

雄一が腕を組み、顎に手を当てながら聞く。

「時間は取られたけど、それだけだつたよ？何の問題も無し。」

秀吉の挑発に乗り、昨日Aクラスに攻め込んだCクラス。その勝負は半日で決着がつき、今CクラスはDクラスと同等の設備で授業を受けている。

「Bクラスとやりあつ氣はあるか？」

「Bクラスつて……、昨日來ていたあの……」

「ああ。アレが代表をやつてこむクラスだ。幸い宣戦布告はまだされていないようだが、さてさて。どうなることやら。」

「アレが代表のクラスに宣戦布告されて、最悪負けたりどんな気持ちになるのかな？」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三ヶ月の準備期間を取らない限り試召戦争はできないはずだよね？」

試召戦争の決まりの一つ、準備期間。

戦争に敗北したクラスは二ヶ月の準備期間を経ない限り自ら戦争を申し込むことはできない。

これは負けたクラスがすぐさま再選を申し込んで、試召戦争が泥沼化しないための取り決めだ。

「知っているだろ？ 実情はどうあれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』ってなっていることを。規約には何の問題はない。・

・ Bクラスだけじゃなくて、Dクラスもな。」

このことは設備を入れ替えたからこそできる方法である。

「・・・それって脅迫？」

「ちょっとちょっと、人聞きが悪いよー？ これはただのお願いだよ。」

「

(明久：なんだかレオンや雄一が根本君のように見える・・・。)

の交渉の仕方、悪役だもんね・・・

「うーん・・・、わかつたよ。何を企んでいるのか知らないけど、代表が負けるなんてありえないからね。その提案受けろよ。」

「え、本当?」

意外とあつさりしてこむ返事に驚き、会話に参加していない明久が声をあげてしまつ。

「だつて、あんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌だもん・・・」

(明久：ああ、そう言えば根本君は女子の制服で話をしに来たんだつけ。そのおかげで提案が通るなんてね・・・。これは思わず収穫だよ。)

「でも、こちらからも提案。代表同士の一騎打ちじやなくて・・・、・・・。そうだね・・・、お互い七人ずつ選んで、一騎討ち七回で四回勝った方の勝ち、っていうのなら受けてもいいよ。」

「う・・・・

能天氣そつに見えて、きつちり警戒している。

「なるほど。こつちから姫路やキラ、レオンに優が出てくる可能性を警戒しているんだな?」

「うん。多分大丈夫だと思つたが、代表が調子悪くて姫路さんやヤ

「マト君、レオン君に春原さんが絶好調だつたら、問題次第では万が一があるかもしないし。」

（明久：う、まるで皆が軽く見られているような発言だ……。でも、彼女は的外れなことを言つているわけじゃないね。それほど霧島さんは僕らと実力がかけ離れているんだし……）

「安心してくれ。ウチからは俺が出る。」

「無理だよ。その言葉を鵜呑みにはできないし。」

これは競争じゃなくて戦争だから、と付け足す。

「そうか。それなら、その条件を呑んでもいい。」

「……ま、確かにそれが一番の譲歩案だよね。」

と、二人の耳を疑つようの返事。

（明久：本気！？一騎討ち七回なんて、僕らに勝ち目はないよ！？）

「ホント？嬉しいな」

「けど、勝負する内容は一九九九で決めさせてもいい。そのくらいのハンデはあつてもいいはずだ。」

（明久：ああ、そりやつて交渉を進める気だつたのか。科目の選択権は僕らには必須だけど、一騎討ちの上科目を選ばせる、なんて虫のいい話を受けてくれるわけがない。だからこそその七人制なんだね。）

)

「え？ うーん……」

再び悩む優子。

クラスを代表しての交渉、この会話如何いかんで仲間全員の立場が変わる可能性がある為、慎重になるのは当然である。

「……受けてもいい。」

「うわっ！？」

(明久・レオン・び、びっくりしたあーっ！)

「……雄一の提案を受けてもいい。」

突然現れた静かな、だが凛とした声。

いつの間にか翔子が近くに来ていた。

(明久：物静かな人だとは知っていたけど、全く気配を感じさせないなんて……まるで武道の達人みたいだよ……)

「あれ？ 代表。いいの？」  
「……その代わり、条件がある。」「条件？」

「……うん。」

うなづいて、翔子は雄一・レオンを見た後に瑞希とフロイトを踏みするかのようにじりくりと観察した。

そして、顔を雄一に向けて言い放つ。

「……負けた方は何でも一つ言ひことを聞く。」

（明久：「、これは、二人の貞操と人生觀の危機だ…ビビビビ…じよう…もしそんなことになつたら…、ドキドキして夜も眠れない！デジカメを買えるほどお金なんて残つてないのに…」）

「…………（カチャカチャ）」

「ムツツリーー、まだ撮影の準備は早いよーと言つか、負ける気満々じゃないか！」

（レオン：おいおい、これはまずいぞ…）のままじや味方の士気が駄々下がりだよ…、まさか、これも計算の内だったのか！？だとしたら、霧島翔子、恐ろしい奴だ…）

「じゃ、いつよつ？勝負内容は七つのうち四つをうちに決めさせてあげる。二つずつで決めさせて~。」

全てを譲られることはなかつたが、優子からの妥協案が得られたFクラス。

(明久：姫路さん、ハラオウンさん、どうする？)

(瑞希：え？ 何がですか？)

(フェイト：・・・えっと、私もよく分からないんだけど・・・)

(明久：何が、って！ もし僕らが負けちゃつたら二人は・・・)

(瑞希：何のことだか分からないんですけど・・・、きっと大丈夫です。)

(フェイト：そうだよ。瑞希ならきっと大丈夫だよ。)

(明久：そんな簡単に・・・。いい？ もし負けたら、二人は霧島さんにお手伝い

「交渉成立だな。」

「ゆ、雄二！ 何を勝手に！ まだ一人が了承していないじゃないか！」

(明久：いくらクラス代表だからって、勝手すぎる！ これは一人の問題じゃないか！)

明久が雄二に食つてかかっている間・・・

(キラ：・・・えっと、話がよく分からないんだけど・・・。なんで康太君がカメラを準備しているんだろう・・・？)

事情がよく分からぬキラは、一人困惑していた。

「心配すんな。絶対に姫路に迷惑はかけない。」

自信満々の台詞。そこまで勝利を確信しているのだろう。

「・・・勝負はいつ?」

「そうだな。十時からでいいか?」

「・・・わかった。」

(明久：独特の雰囲気を持つ人だな。話し方だけならムツツリーこそつくりだし。)

「よし。交渉は成立だ。いつたん教室に戻るぞ。」

「そうだね。皆さんも報告しなくちゃいけないからね。」

交渉を終了し、Aクラスを後にするFクラス首脳陣。

彼らの試合戦争の終結は、すぐそこまで迫っていた。

おまけその1・Fクラス首脳陣が去った直後のAクラス

「……あれ、代表?さつきまでここに水河さんいたよね?」

「……涼なら雄一たちについて行つた。」

「そ、そりなんだ……」

「……『私の夫に会いに行くんだ』って言つてた……」

「お、夫!?」

おまけその2・Fクラス、焰の受難

「話は成立したぞー。」

「おお、おかげ・・・、ちょっと待て、なんでここに涼がいるんだ  
よ、おい。」

「ほついてきてるわけが・・・」

雄一が後ろを見ると・・・

誰もおらず・・・

「おい、誰もいないじゃ・・・」  
「焰つ！やつと会えたよつー！」  
「俺は会いたくなかったつー！」  
「・・・気がつかなかつた・・・」  
「・・・ちょっと確認するけど、君は？」  
「えつと、私、鍵宮焰の嫁の水河涼です！」  
「待て、俺はお前を嫁と認めた記憶は全くない！つかお前を嫁と認  
めたくない！」  
「そんなこと言わないでよ〜・・・」

明久たちの前で起きている夫婦漫才（？）。

「・・・殺せえええつー！」

「了解つー！」

「またここで団結かよおおおおつー！」

ダッ！！

「あつ！焰～！待つて～！」

タタタ・・・

「今こここ、異端審問会の開催を告げる・・・。異端者には・・・」

『死の鉄槌を…』

ダダダ・・・・・

「・・・・焰の明日はあるんだろ？か・・・？」

Fクラスの男子の殆どがいなくなつた教室で、レインがぼそつと呟いた。

## 第八問 「交渉と戦争と両雄激突」 その2（後書き）

次回は『二月語至上最も長い話（6月1~9日現在）』ですー。  
アニメを利用してますので、楽しめるかと。

次回、お楽しみに！

**第八問 「交渉と戦争と両雄激突」 その3（前書き）**

ついにAクラス戦が始まる第八問その3です！

どんな戦いになるのか、お楽しみに！

## 第八問 「交渉と戦争と両雄激突」 その3

「では、両名とも準備はいいですか？」

今回はここ数日の戦争で何度もお世話になつてゐる、Aクラス担任かつ学年主任の高橋先生が立会人を務める。

「ああ。」

「・・・問題ない。」

一騎討ちの会場はAクラス。

ここの方が広い上、腐つた畳のFクラスじゃ締まらないだろうからだ。

「それでは一人目の方、どうぞ。」

「アタシから行くよっ！」

Aクラスからは優子が。

対するFクラスからは・・・

「ワシがやるわ。」

秀吉だ。

(明久・さつと木下さんの苦手科目や集中力の乱し方を知っているはず。この勝負は秀吉が木下さんの心をじつ乱すかで……)

「とにかく、秀吉。」

「なんじゃ、姉上。」

「じクラスの小山さんって知ってる?」

「はい、誰じゃ?」

(レオン・雄一、これはまずい! 最悪秀吉が死ぬ可能性が出てきたー!)

(雄一・いやいや、流石にそれは無いだろ……)

(明久・あれ、じクラスの小山さんって、確かにこの前秀吉が……)

「じゃーいいや。その代わり、ちょっとこいつに来てくれる?」

「うん? ワシを廊下に連れ出してどうあるんじゃ姉上?」

(明久・レオン・確かに秀吉が(木下さん／秀吉の姉貴)のフリをして罵倒しまくった相手だったよつたよつた……)

<姉上、勝負は……どうしてワシの腕を掴む?>

<アンタ、じクラスで何してくれたのかしら? どうしてアタシがじクラスの人たちを豚呼ばわりしていることになつていいのかなあ……?>

<はつはつは。それはじやな、姉上の本性をワシなりに推測して……

・あ、姉上つ！ちがつ……！その関節はそつひては曲がらなつ……  
・つ！>  
▽

ガラガラガラ・・・

扉を開けて優子が戻ってくる。

「秀吉は急用ができたから帰るつてさつ。代わりの人を出してくれる？」

「い、いや……。ウチの不戦敗で良い……」

にこやかに笑いかけながらハンカチで返り血を拭う優子。

その光景には流石の雄一も何も言えないようだ。

「そうですか。それではまずAクラスが一勝、と。」

高橋先生がノートパソコンを操作すると、壁一面の大きなディスプレイに結果が表示された。

『Aクラス

木下優子

V S

Fクラス

木下秀吉

生命活動

DEAD』

WIN

(『Fクラス面々・まだ生きてますよ・・・)

そつ言いたいが突つ込めなかつた。

「では、次の方どうぞ。」

「なら、次は俺が行こう。」

「え、アスラン君が！？」

Aクラスからはアスランが出ると意思を示す。

「確かにアスランはレオンより少し劣るくらいの実力者・・・」

「じゃ、じゃあキラかレオンくらいしか勝てる見込みがないの！？」

「・・・そうなるが、相手にはルカもいる、キラを出すわけにはいかないか・・・」

「そんじゃ、僕が行くよ。」

「レオン！？大丈夫なの！？」

「大丈夫だよ、『死神軍師、ここにあり』、ってね・・・まあ、

はやてに恨まれる可能性があるかもしねりだけどね・・・」

「・・・だよね・・・」

「レオン、絶対勝てるよな?」

「うーん」

「・・・勝てるんだよな?」

「うううん」

レオンが出るといい、ふざけながら中央へ行った。

「レオン、まさかお前が来るなんてな・・・」

「アスランが出るなんて普通思つかい?それと同じだよ。」

「それもそうだな。」

「二人とも、そろそろ戦いを開始してほしいのですが・・・」

「あ、はい。サモン試獣召喚つ!」

「ほいほい。試獣召喚つと。」

二人の掛け声とともに魔方陣が展開し、それぞれの召喚獣が現れる。

「お、おい、ザラの召喚獣、ヤマトの召喚獣に似てないか!?」

「似ているがわずかに違つぞ!」

「どういうことなんだ!?」

「」

アスランの召喚獣、その姿はジャスティスガンダムを模した鎧だつたからだ。

ちなみにキラの召喚獣は、フリーダムガンダムを模した鎧だ。

一方レオンは・・・

「レオン、ふざけているのか？」

「いや、アスラン相手なら本氣で行かないとね。僕の本領、無防具での鎌だよ？」

「そう言えばそうだった・・・」

「だったら、いくよ！」

「こい！」

二人の召喚獣がお互いに突撃を始め・・・

「TRANS - AM！」

「腕輪の力か！？しまった、忘れてた！」

「さあ、こっちが一本取らせてもらうよ！」

「させるか！」

紅く光ったレオンの召喚獣とそのままの状態のアスランの召喚獣がぶつかった。

参考用の点数が表示される。

『Aクラス	アスラン・ザラ	VS	Fクラス
レオン			
数学	800点	VS	801点

「レ、レオンがギリギリだとおつ！？」

「も、もしかしてレオンが負けるなんてことあるのー？」

参考用の点数の状態に愕然とするFクラス人々。

△のレオンは・・・

「やべ、点数の補給すんの忘れてた・・・。しかもさっきのTRA  
NS - AMで200点ほど死んだ・・・」

「珍しいミスをしたな・・・。だが、手加減はしないぞ！」

「それでも奇跡を起こすのが僕なんだ！」

自爆状態にも関わらずどうにかしきりとするレオン。

そのまま戦いは進んでいた。

交錯する鎌と剣。

その一つが戦いが激化している」とを物語っていた。

「・・・もうめんどくさいからやめに決着を行ひつかー」  
「めんどくさいって・・・」  
「・・・ど、こうことでアスラン、 もうほつー」  
「ちょ、それはないだろー」  
「いや、ある!だから、やつと終われー」  
「そんなわけにいくかー」  
「..」

レオンの攻勢が始まった。

「おお、レオンが攻勢に出た！」

「そのままやつちまえ！」

「軍師、頑張れよーっ！」

Fクラスからのホール。

「・・・なあ、ルカ君・・・」

「は、はやて？」

「私、ちょっとイラついてきたんやけど・・・」

「お、落ち着いて、ね？」

「アスラン君・・・、頑張つてな・・・」

はやははルカに宥められていた。

「へへおつーじうか勝機を見つけないと・・・」

「勝機なぞ・・・、見つけてんじゃあ・・・、ねええええええつ  
！！！」

どこかで聞いたことあるかのよつた台詞と共に攻撃を仕掛けたレオ  
ン。

ド「オオオオオオオオオン！！

その攻撃で教室に響く轟音。

アスランの召喚獣は・・・

「あ、危ないな・・・」

奇跡的に当たつていなかつた。

「つー、いけつー。」

「げつ！？」

地面に鎌がめり込んで動けない状態のレオンの召喚獣に、アスランが突撃する。

「まざいつー、アスランとの点差が縮まるけど・・・やるしかない！  
Change mode, Mode:Deathscytheh  
e11!そのまま『ハイパー・ジャマー』つ！」  
「くそつ、姿を消したか！」

現在の点数が再び参考として表示された。

『Aクラス レオン	アスラン・ザラ VS	Fクラス
数学	538点	495点

「雄一、レオンの点が凄く減ってるよー? どうして? 」「腕輪の力だろ。現にレオンの召喚獣の姿が見えない。」

「あ、そつか。」

「さ、坂本殿! レ、レオンのしょ、召喚獣……? の姿がないよう

な気がするのだが! ?」

「……明久、お前以上に焦っている奴もいるようだ……」

「よかつたと受け取つていいのかな……」

レオンの状況に焦り始めているFクラス面々。

『そこおつー』

お互に声を出し、最後の突撃を仕掛けた。

姿を隠しているレオンの方が若干有利な気がするが、点数差としては明らかにアスランの方が上・・・

結果は・・・

『Aクラス アスラン・ザラ  
vs Fクラス フィリップ・アラン

数学 1点 vs 0点

』

「あ、アスラン君が勝つた～っ！」  
「ぎ、ギリギリだ・・・」

喜ぶはやてに焦るAクラス人々。

「嘘だろ！？レオンが負けただと！？」

「これは夢だ！夢に違いない！」

「いや、吉井君！これは現実だよ！」

「現実として受け入れるしかないみたいね・・・」

レオンの敗北に愕然とするFクラス人々。

「わり、負けちつた。」

高橋先生が勝敗を告げた。

「勝者、△クラスアスラン・ザラ！」

「ちょっと悔しがっている（・・・？）レオンと焦りが消えないアスラン。

「あっしゃー、負けた・・・。  
「あ、危なかつた・・・。」

「まさか負けるとは思わなかつたぞ・・・」

「レオン、あなた一体どうしたのよ・・・」

「そりだよ・・・。レオンらしくないよ・・・」

「おおう、蓮華と桃香からも責められた！？ちょっと想定外過ぎるよこれ！？」

「いえ、責めているわけじゃないけど・・・」

「いや、完全に僕の凡ミス。」

「凡ミスで済まされるかそれ！？」

言い争い、勃発。

「では、次の方どうぞ。」

「私が出ます。科目は物理でお願いします。」

Aクラスからは佐藤美穂が。

「よし。頼んだぞ、明久。」

「え！？僕！？（どどどどじょう！？）クラスを代表して勝負なんて！ここで僕が負けたら後がないのに……」「大丈夫だ。俺はお前を信じている。」

### 自信たっぷりの雄一の言葉

「（そうか……雄一のヤツ……）ふう……。やれやれ、僕に本気を出せってこと？」

「ああ。もう隠さなくともいいだろ。この場にいる全員こ、お前の本気を見せてやれ。」

「おい、吉井って実は凄いヤツなのか？」

「いや、そんな話は聞いたことないが……？」

「いつものジョークだろ？」

「そうそう、ジョークジョーク。」

味方であるはずのFクラスの面々の声。

（明久・ま、仕方ないか。今までの僕を見ていたら普通そう思つよね。でも……）

「吉井君、でしたか？あなた、まさか……」

対戦相手の佐藤が明久を見て何かに気付いたかのように戦<sup>のむ</sup>く。

「あれ、気付いた?」名答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃあいない・・・」

戦闘の為に袖をまくり、手首を振る明久。

「それじゃ、あなたは・・・。」

「そうさ。君の想像通りだよ。今まで隠してきたけれど、実は僕・・・」

「・・・」

明久は大きく息を吸い、この場にいる皆に告げる。

「・・・左利きなんだ。」

『Aクラス 佐藤美穂

V S

Fクラス

吉井明久

物理

389点

V S

62点

』

(明久：あれ？本気を出したのに負けるなんて……？)

「このバカ！テストの点数に利き腕は関係ないでしようが！」

「み、美波！ファイードバックで傷んでるのに、更に殴るのは勘弁して！」

「いや、殺せ！そこまでのバカは一度殺せ！」

「よし、勝負はこれからだ。」

「ちょっと待った雄二！アンタ僕を全然信頼してなかつたでしょ！？」

「信頼？何ソレ？食えんの？」

「ほ、本気を出した左で殴りたいいいいっ！」

明久は雄二に向かってそう吠えた。

「では、三人目の方どうぞ。」

「…………（スック）」

康太（ムツツリー）が立ち上がった。

科目選択権が初めて活きてくる。

なぜなら康太は総合科目のうち、その80%を保健体育で獲得する猛者。その単発勝負ならAクラスにも負けはないのだ。

「じゃ、僕が行こうかな。」

△クラスからは色の薄い紙をショートカットにした、ボーグッシュな女の子が出てきた。

(明久：誰だろ？あまり見たことはないんだけど……)

「一年の終わりに転入してきた土藤愛子です。よろしくね。」

(明久：身体の凹凸も少なくて、パツと見少年のようだ……)

「教科は何にしますか？」

高橋先生が康太に尋ねる。

「・・・保健体育。」

康太の唯一にして最強の武器が選択される。

「土屋君だけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」

愛子が康太に話しかける。

(明久：なんだろう？転校生だし、ムツツリーの実力を知らないのかな？随分と余裕みたいだけど……)

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？・・・キミと違つて・・・

実技でね

・・・実技・・・?

(レオン・お、おじおこ、これすぐここに問題発言じゃないのかい！？)  
(レイン・じ、実技・・・！？実技だと・・・！？)

「・・・・・・・つ！（ブシャアアアアアアアツ！）」

康太が鼻血を噴出した。

「マジックカードバイブル」

明久、康太の許に。

「・・・あ・・・・あ・・・・あ・・・・」

「あくせきシニ一ト：・・・なんて醜いことを！卑怯たそ！」

「そつちのキハ、吉井君だつけ？選手交代する？でも、勉強苦手そ  
うだね・・・。保健体育でよかつたらボクが教えてあげるよ？・・・  
もちろん・・・」

一拍置いて・・・

「実技でね」

『 @ @ @ ツーーー』

「お、おい、二人が地球圏外の言葉を言いながらぶつ倒れたぞ！？」

「吉井君！」

「アキ！」

瑞希と美波が明久に駆け寄る。

「余計なお世話よー」アキにはそんな機会永遠にないから…

「そうです！吉井君には金輪際必要ありません！」

「なんでそんな悲しいこと言うの・・・？」

明久は悲しそうな顔をしている。

「そつちの・・・えつと、レオン君だけ？キミはどう？」

「要らん！僕はムツツリーーの『師匠』だから…！」

『なにいつーーー？』

レオンの爆弾発言に驚愕が隠せないFクラス面々。

ホタツ

「ムツツリー」・・・?

（赤タ赤タ赤タ赤タ…）…・・・大丈夫 これしき…・・・

「武狀召喚」  
サモン

「試獣召喚。」

二人に似た召喚獣がそれぞれ武器を手に持つて出現する。

(明久：って！400点オーバー！？)

実践派と理論派、どちらが強いか見せてあげる。

愛子が艶っぽく笑いかけると同時に、腕輪を光らせながら召喚獣が動いた。

巨大な斧に雷光をまとわせ、ありえないスピードでマッシュリーの召喚獣に詰め寄る。

「あつ！？土屋君が負けちやうよー！？」

「なのは、彼なら大丈夫だよ・・・」

「フェイトちゃん、なんで言い張れるの・・・?」

「Bクラス戦でムツ・・・康太の力を見たからね。」

「・・・今フェイトちゃんムツツリーーって言いかけなかつた?」

「・・・言いかけた・・・」

「だいぶ染まつたね・・・」

「うん・・・」

なのはとフェイトの軽い漫才・・・

「ところでフェイトちゃん、いつの間にか土屋君のこと、名前で呼び捨てにしてたけど・・・、なんで?」

「それは・・・ね? 雄二が『仲間なんだから、皆呼び捨てにしう』って・・・」

ちよつとしたフェイトの告白だった。

「それじゃ、バイバイ! ムツツリーーへんつー!」

そして、剛腕で斧を振る・・・

「・・・ 加速。」  
「・・・ えつ？」

前に、康太の召喚獣の腕輪が光り、彼の召喚獣の姿がブレた。

それに戸惑う愛子。

それは愛子だけでなく・・・

「レ、レオン！土屋殿の召喚獣の姿が見えなくなつたぞ！？」  
「レ、レオン、どういうことなのか説明して！」  
「ちよ、愛紗、蓮華、ゆすら、ない、で・・・」

レオン、揺すられる。

「・・・ 加速、修了。」

ボソリと、康太がつぶやいた。

一呼吸置いて、愛子の召喚獣が全身から血を噴き出して倒れた。

土屋康太

保健体育

446点

V S

576点

』

(明久：つ、強い！下手をすると僕の総合科目並の点数だ！)

「Bクラス戦の時は出来がイマイチらしいからな。」

雄一が驚く明久に説明する。

「そ、そんな・・・・・このボクが・・・・・！」

愛子が床に膝をついた。

「これで三対一ですね。次の方は？」

淡々と作業を進める高橋先生。

「今度は僕が行く。今まで何もできなかつたから・・・・・  
「キラが行くのか・・・・・。フィードバックは大丈夫なのか?  
「この腕輪で戦わせてくれるなら大丈夫だけど・・・・・  
「・・・・・だそうだ。高橋先生、それについては問題ないだろうか?  
「・・・・・仕方ないですね。ヤマト君だけですよ?」

「・・・キラなら負けることはないね。相手がルカじゃなければ・・・」

Fクラス、キラが出る。

「相手はキラか・・・」

「キラ君で確か本当の首席なんやろ?誰が・・・」

「僕が行くよ。勝てるか分かんないけど。」

「るか、勝てるかどうかよりも善戦してくれ。」

Aクラスからはルカが出た。

「じゃ、ルカ、ちょっと設定するから待つててね。」

「あ、うん。」

「・・・Setting Bracelet start. Material interference level and Feedback level set 0%. Setting finish bracelet, Get set!」

キラの声で召喚フィールドが展開された。

セット状況は、物理干渉レベル・フィードバックレベル共に0%。

「では、試合開始！」

『<sup>サモン</sup>試獣召喚つ！』

二人の掛け声で現れる召喚獣。

キラのは『存知、フリーダムを模した鎧の召喚獣。

ルカのは・・・

「お、おい！あの姿何なんだ！？」

「あ、あの剣黒いぞ！？そして姫路さんの剣より『力い！』

全員が驚いていた。

その姿は、まるで『魔王・アスラ』のような武装だった。

「・・・ルカ君、ここが初お披露目だったみたい・・・」

「高町、知つてたのか？」

「私とキラ君、フヨイトちゃんだけが知つてるよ。」

なのはの言つた事実に思わず聞き出す雄一。

「キラ、悪いけど、勝たせてもらひつよー。」

「・・・ルカ、ごめん!」

お互いの召喚獣が突撃を開始する。

その突撃はお互い剣で防いだために失敗に終わる。

参考用の点数が表示される。

『Aクラス ルカ・ミルダ

キラ・ヤマト

総合科目 20500点

VS

Fクラス

VS

25000

点

「総合科目20000点オーバーだとー?」

「あの二人は化け物なのか!?」

「もはやあれは頂上決戦と言つても過言じやないぞー?」

Jの高得点同士の戦いにヒートアップする面々。

その間にも攻防は続く。

キラの召喚獣は速度を生かしてルカの召喚獣を惑わせ、その間にライフルを撃つ。

ルカの召喚獣はキラの速度を殺そうと予測攻撃をし、当たらなかつた場合に飛んでくるライフルを正確に回避する。

「ああああっ！」

突如としてキラの召喚獣が『H・M・F・B』の発射準備に入った。

「はあああっ！」

ルカの召喚獣もそれに呼応して気を練る。

「『J』の戦い、僕が勝つ！『魔王灼滅刃！』」

「負けるわけには、いかないんだ！でええええいつ！」

お互に攻撃が放たれた。

その攻撃は物理干渉レベル0%なのにも関わらず・・・

『うわあああああっ！？』  
『きやあああああっ！？』

周囲に突風を生み出した。

その突風が止み、辺りを覆っていた煙がはれ・・・

その場にいたのは・・・

ぐつたりと倒れたルカの召喚獣と少し離れたところに浮いていたキラの召喚獣だった。

『Aクラス キラ・ヤマト 総合科目	ルカ・ミルダ VS 0点	Fクラス VS 2点
-------------------------	--------------------	------------------

「勝者、Fクラス、キラ・ヤマトー！」

『アラタナホシナタマノハスニハ…』

キラ勝利の宣告にFクラスの面々が歓喜をあげた。

「・・・ル力君・・・」

「高町はこの戦い、見ない方がよかつたのかもしれないな・・・」

少ししごりを残してしまっていたが・・・

「これで二対一ですね。次の方どうぞ。」

「あ、は、はいっ。私はです。」

姫路さん 積極にてね

Fクラスからはついに瑞希が出る。残った中でどの教科でもオール

ラウンダ で戦える一人のうちの一人だ。

「それなら僕が相手をしよう。」

Aクラスから歩み出たのは・・・久保利光。

「やつぱり来たか、『とりあえずの』学年次席。」

学年としては第五・六席の実力者で、振り分け試験を瑞希・キラ・レオン・優がリタイア、ルカが実力を出せなかつた為、今彼は学年で次席の座にいる。

「ユージが一番の心配どころだ。」

雄一が心配するのには理由がある。

利光の実力は瑞希とほぼ同等、総合科目の点数差にして20点程度しかない。

瑞希は連戦で疲れている今、負ける可能性は否定できない・・・

「科田はどうしますか？」

高橋先生が一人に声をかける。

（明久：そう言えば、科田選択権はどうちにあるんだ？秀吉戦  
がつやむやになつていてよく分からないし・・・）

「総合科田でお願いします。」

利光が勝手に答えていた。

「ちょっと待つた！何を勝手に・・・」

「構いません。」

「姫路さん？」

クレームをつけようとする明久を止める瑞希。

「それでは、試合開始！」

「サモン試獣召喚。」

利光が召喚獣を喚び。

△ Aクラス  
久保利光

VS

？？？？点

△ Eクラス  
姫路瑞希

VS

4201点

△ Fクラス  
総合科目

「姫路さん・・・」

「・・・凄い点数！学年次席つてこんなに点数高いのー？」

「試験召喚！」  
サモン

△ Aクラス	久保利光
姫路瑞希	久保利光
4201点	VS
VS	VS
4613点	△ Fクラス

『よ、4500点オーバーっ！？』

全員驚詫。

「マ、マジか！？」

「いつの間にこんな点数を！？」

「この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……！」

驚きの声が至る所から上がる。

（明久：点数差400オーバー！？姫路さんが強いのは知つてたけどこれは尋常じやないよ！）

「いつの間にこんな実力を……！でええいつ！  
「私……決めたんです、頑張ろうって！」

お互いの召喚獣が突撃する。

「……私、このクラスが好きです。……人の為に頑張れる、皆がいるこのクラスが……私の好きな人がいる、このクラスが……。  
だから、私も頑張ります！」

そして……一瞬で決着がついた。

「凄いやアキ！」これで三対二まで追い上げたわ！――

瑞希が明久達の方へ向かって走つてくる。

「姫路さん・・・（こんな頭の悪い男だらけのクラスが好きなんだ・・・でも、その中に僕も含まれているからちょっと嬉しいな・・・）

「では第七回戦、最終ラウンドを始めます！」

このとき、高橋先生の表情に若干の変化が見られた。

瑞希の急成長に、あるいはFクラスがAクラスと渡り合つていろいろに心に戸惑つてているのだろう。

「さて。俺の出番だな。」  
「雄一・・・」  
「ホントに大丈夫なのかい？」  
「まあ見てなつて。」

雄一が中央に向かっていく。

「Fクラス代表、坂本雄一だ。」

「・・・Aクラス代表、霧島翔子。」

「では、教科は何にしますか？」

「勝負は、日本史の限定テスト対決をお願いします。内容は小学生レベル、方式は百点満点の上限あり！」

雄一の宣言で、Aクラスにざわめきが生まれる。

「テスト対決だと！？」

「上限ありだつて？」

「しかも小学生レベル。満点確定じゃないか。」

「注意力と集中力の勝負になるぞ・・・」

これでFクラスに可能性が出てきた。

勝利の可能性が。

それがわかったからこそ、Aクラスの面々はざわついているのだ。

「わかりました。では試験を用意します。対戦者は教室に集合してください。」

ノードパソコンを閉じ、高橋先生が教室を出ていく。

そんな先生の背中を見守り、雄一に近付く面々。

「雄一、後は任せたよ。」

ぐつと雄一の手を握る明久。

あとは雄一の勝負で全てが決まる。

「ああ。任せられた。」

明久の手を握り返す雄一。

「・・・・・（ペッ）」

康太が歩み寄り、ピースサインを雄一に向かた。

「お前には随分助けられた。感謝している。」  
「…………（フツ）」

康太は口に端を軽く持ち上げ、元の位置に戻った。

「坂本君、のこと、教えてくれてありがとうございました。」

「ああ。明久のことか。気にするな。あとは頑張れよ。」

（明久：僕のこと？雄一は何を話したんだろう？…？）

「はいっー。」

瑞希の元気な返事を聞いて、雄一は楽しそうにやんわりとした笑みを浮かべた。

その笑みは相手を思いやるような、優しい表情だった。

「・・・雄一、頑張れ。」  
「レオン、本当にありがとうな。」  
「いやいや、気にすんなって。」

最後にレオンと軽く言葉を交わした。

そして雄一はテスト場所である視聴覚室に向かつた。

視聴覚室。

「では、始めてください。」

一人の手により、問題用紙が裏返された。

Aクラス。

「吉井君、いよいよですね・・・」  
「そうだね・・・。いよいよだね・・・」  
「もし、あの問題が出なかつたらどうなるのじや？」  
「集中力や注意力に劣るなら、延長戦で負けるかもしだせんね・・・」  
「で、でも、もし出ているのならば・・・」  
「うん。僕らの勝ちだ。」

全員が固唾を飲んで見守る中、ディスプレイに問題が映し出される。

『次のように答えなさい。』

第一問

織田信長が長篠の戦いで手を結んだのは誰?』

(レオン：ううわ、フェイトやなのはに明久でも分かるんじゃないの?)

(明久：確か、徳川家康だつけ?)

(フェイト：え、えっと・・・家康と言つ名前なのは分かるんだけど・・・苗字が分からぬよ・・・)

(なのは：え、あれ? だ、誰だつたつけ? あれ、よくわかんないよ! 確か、豊臣秀吉だつたつけ?)

『第二問

アメリカ総領事ハリスとの間に、日米修好通商条約を結んだのは誰?』

「ね、ねえキラ、誰か分かる?」

「・・・井伊直弼・・・だつたかな・・・?」

『そ、そんなあつたり答えちゃうのー?』

「な、なのはちゃんも! ?」

『第三問

大化の革新は何年に起きた出来事?』

『つーーー。』

問題に田を見開く上クラス人々。

「出た!」  
「よしー!」

そして、終わりを告げるチャイムが鳴った。

「では、限定テストの結果を発表します。」

全員が固唾を飲んで結果を待つ。

「Aクラス代表、霧島翔子・・・・・97点。」

「くつ！」

「そんな・・・」

「翔子ちゃん・・・」

涙を流したり悔しがるAクラスの面々。

「Aクラス代表は満点を逃したぞー！」

「これで、私たちっ・・・！」

「うん！これで僕らの卓袱台が・・・っ！」

『システムデスクになるんだ！』

揃つたFクラス面々の言葉。

「続いて、Fクラス代表、坂本雄一・・・」

「最下層に位置した僕らの、歴史的な勝利だ！」

『.—おおおおおおおお』

教室を揺るがすような歓喜の声。

「・・・53點。」

『・・・・・』

この瞬間、Eクラスの卓袱台が・・・

みかん箱になつた。

次回、第九問 「告白と拉致とソロ曲練習」

## 第八問 「交渉と戦争と両雄激突」 その3（後書き）

今回は決選投票の結果です。

フェイトとアリシア、酔わせるなりどつち、ところ内密でやりました  
た決選投票、結果フェイトになりました。  
(一票しかなかつたので結果も何もないですが……)

次回は原作第1巻ラストです！

ソロ曲も決まります！

お楽しみに！

第九問 「告白と拉致とソロ曲練習」（前書き）

今回はAクラス戦後の話とボーカル一人のソロ曲が決まります！

どんな曲かはお楽しみに！

では、どうぞ！

## 第九問 「告白と拉致とソロ曲練習」

### 第九問

次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。

『（ ）年 キリスト教伝来』

霧島翔子の答え

『1549年』

教師のコメント

正解。特にコメントはありません。

坂本雄一の答え

『雪の降り積もる中、寒さに震える君の手を握った1993』

ロマンチックな表現をしても間違いは間違いです。

教師のコメント

高町なのはの答え

『1550年・・・?あれ?1548年?』

教師のコメント

わずか一年違いですね。もうちょっと頑張ってみましょう。

フェイド・ト・ハラオウンの答え

『えつと・・・確か1449年?』

教師のコメント

あなたも数字を一つ間違えているだけですね。もうちょっと頑張ってみましょう。

「大体よー53点つてなんだよー0点なら名前の書き忘れとかも考  
えられるのに、こんな点数なんて・・・」  
「いかにも俺の全力だ。」  
『この阿呆アホウがあーつ！』  
「アキ、鍵宮ー落ち着きなさいーアンタ達だつたら30点も取れな

瑞希が明久の後ろから抱き着いた。

「・・・殺せ。」

「ああ殺してやるー絶対殺してやるー。  
良い覚悟だ、殺してやる！歯を食い縛れ！」  
「吉井君、落ち着いてくださいー！」

床に膝をつく雄一に翔子が歩み寄る。

「・・・雄一、私の勝ち。」

いでしょうが！』

『それについては否定しない！』

『それなら、坂本君を責めちゃダメですっ！』

『止めないで美波！瑞希！この馬鹿には喉笛を引き裂くといつ体罰が絶対に必要なのに！』

『それは体罰じゃなくて処刑だよ！』

瑞希やなのはが身体を張つて三人を止める。

「・・・でも、危なかつた。雄一が所詮小学校の問題だと油断していなければ負けてた。」

『言い訳はしねえ・・・』

(明久・レオン・焰・団星なのか!)

「・・・ところで、約束。」

(全員：あ。そう言えば何でも言つことを聞くつて約束をしたんだつた・・・)

「・・・（力チャカチャカチャー）！」

康太は準備を始めていた。

明久も撮影の準備をしていた。

「わかっている。何でも言え。」

潔い雄一の返事。

（明久・自分のことじやないくせに格好付けて！）

「・・・それじゃ・・・」

翔子が瑞希に一度視線を送り、再び雄一に戻す。

そして、小さく息を吸つて・・・

「・・・雄一、私と付き合つて。」

言い放つた。

（全員・・・・・・はい！？）

「やつぱりな。お前、まだ諦めてなかつたのか？」  
「・・・私は諦めない。ずっと、雄一のことが好き。」

(明久：え？え？どうこうこと？)

(キラ：・・・一体、何が起きているんだ？)

(レオン：どうして翔子が雄一に交際を迫っているのかな？)

(焰：アイツは女子が好きなんじやないのかー？)

「その話は何度も断つただろ？他の男と付き合つ気はないのか？」  
「・・・私には雄一しかない。他の人なんて、興味ない・・・」

(レイン：つまり・・・霧島さんが男性に興味がないっていう噂つて、一途に雄一を思っていた結果・・・ってことなんだよね・・・？瑞希やフロイト達を見ていたのってさ、たんに雄一の近くにいる異性だつたからってこと？)

「拒否権は？」

「・・・ない。約束だから。今からテートに行く。」

「ぐあつ！放せ！やつぱこの約束はなかつたことに・・・」

ガツ！

「ぐうつ・・・」

バタッ！ドサツ！

ぐいっ！つかつかつか・・・

バタン！

翔子は雄一に一撃を打たれ、そして首根っこを掴み、教室を出て行った。

『・・・・・』

教室にしばしの沈黙が訪れる。

あまりの出来事に言葉が出ない。

「・・・」めんね姫路さん。前より酷い教室になっちゃって・・・  
「いいえ、良い教室ですよ。」

はにかんで言つ瑞希。

「私、大好きですよ、このFクラス。」  
「えつ・・・」

瑞希の言ひ方に驚く明久。

「それに・・・」  
「・・・え？」

私、明久君のことが好きなんです・・・

そつまつ瑞希の声は明久に聞こえなかった。

「それでと、それじゃアキ? クレープ食べに行こいつか。」

突如として美波が明久の腕を組み、クレープを食べに行こいつと誘つ。

「え、それって週末つて約束じゃ……」

「週末は週末、今日は今日。」

「そんなんあー！一度も奢らされたら、次の仕送りまで僕の食費があつ！」

「ダメですよ。」

「え？」「

瑞希も突如として明久の手を掴む。

「吉井君は、私と映画を見に行くんです。」

「え、ええっ！？姫路さん！？それは話題にすら上がつてないよ！？」

「はいっ！今決めたんです！」

「ほら早く！クレープ食べに行くわよー！（グイッ！）」

「どんな映画に連れてってくれるんですか？（グイッ！）」

二人とも明久の腕を引っ張る。

「そんなんあー！嫌あーつ！生活費が、栄養があーつ！助けて、あ、

ちよ、 @・・・・

「アソーッはもしかしたら、本物の馬鹿なのかのう・・・・  
・・・・・ん（「クン）。」

そしてキラ達は・・・

「それじゃ、バンドについての話なんだけど・・・。課題曲は2曲あって、『ライオン』と『きらめく涙は星に』ね。」

「OK、了解。」

「他にあるのか?」

「一応、ソロ曲なんだけど・・・、一人にかなりの無理を強いるかもしれないけど、良いかな・・・?」

『良いよ?』

「あ、ありがと・・・」

「それで、どんな曲をやるつもりなんだい?」

「えと、フロイトのソロは『ETERNAL BLAZE』と『Prairie』と『Dancing in the velvet moon』で、天ちゃんのは『imitation』と『空色ハイズ』と『VOICE -辿り着く場所-』としたんだけど・・・

「無理を強いる気がしないんだけど・・・。どこが強いるのかな・・・?」

「フロイトの『DANCE IN THE VERVET MOON』と天ちゃんの『imitation』が曲調が速いとかで難しいんだ・・・」

「絶対やる！」

「問題ないよ！」

「それで、練習はどうするんだ？」

「えっと、予選が近いうちにあって、それまでに課題曲2曲とあと5曲やるんだけど。」

「とりあえず今までの曲は演奏可能だよ。」

「俺もだ。」

「ボーカルは準備OKだよ。」

「こっちも。」

「じゃ、ソロでも練習する？」

「お願いしたいな・・・」

「私も・・・」

「じゃ、今日はもう遅くなるからフュイトのソロだけでいいかな・・・

・？・

「私はいいよ？」

「じゃ、天和、歌覚えるの付き合つて？」

「いいよ。」

「じゃ、これCOPね。」

(レイン以外：い、いつの間に・・・)

フュイトと天和はレインからCOPを受け取り、別室へ向かった。

「・・・とりあえず俺たちもフュイトのソロの難曲でも練習するか・

・・

「うん。えっと・・・『Dancing in the well  
et moon』だけ？それを練習しようよ。」

「そつだね。まずはそれを練習しようか。」

「俺はそれでいいぜ。」

「リーダーがそつ言つなら異存はないよ。」

「じゃ、それだけでも練習しよつー。」

そつ言つて、レインはじロをセッテし、曲をかけた。

フェイト・天和組は・・・

「・・・レイン君、すつじくいい曲を選んだんだね・・・。って、あれ? フェイトちゃん? どうしたの?」

「こ、この歌恥ずかしいよ・・・//」

「え? 何で? そんなことないじゃん。」

「そ、それはそうだけど・・・。あ、あのね、『捕まえて』ってところとか・・・」

「・・・フェイトちゃん、そういうこと覚えてるの?」

「そ、そういうひとつて・・・//」

「私はそんなこと考えてなかつたよ?」

「と、とにかく歌覚えよ!」

「そうだね。」

数分後・・・

「お前ら、そろそろ帰ることを考えた方がいいぞ？」

「あ、鉄人。」

「鉄人じゃない、西村先生と呼べ！」

「また見に来たんですか？」

「曲を演奏するのが聞こえてな。しかし、今まで練習していた曲とは違つて、かなり曲調が違つているな。」

「あ、これ新曲なんです。」

「それで、ハラオウンと張はどうしたんだ？」

「別室で歌の練習中。」

「そうか、二人見てくる、しつかりやるんだぞ？」

「あ、はい。」

別室・・・

《フロイト・・・・》

「・・・ 一体どんな歌なんだ・・・」

聞こえた歌詞に少し呆れていた鉄人・西村だった・・・

が、数分後に呆れ顔はできなくなつた。

《～～～～・・・》

「ふむ・・・・、やはり『聖祥の歌姫』と噂が立つのも頷けるだけある歌声だな・・・。」

西村先生も何度も頷いていた。

「さて、アイジラの状況を見るか・・・」

西村先生がレインたちのいる部屋に向かうと・・・

「サビ間違えてるー、煽、半音高こよ、何やつてんのー。」

「わ、悪いー！」

「レオンー、ちょっとスピードが速こよー。」

「「」「」ねえー。」

レインが問題児軍団 + キラに指示を飛ばしていた。

「・・・レインー、んな才能があるとは思わなかつた・・・」

素直な感想を思わず漏らした西村先生だった。

次回、番外編

「食費とナートとスタンガン（改）」

## 第九問 「告白と拉致とソロ曲練習」（後書き）

今回、天和のソロ曲は全てリクエストでまとめましたが、フェイトのソロ曲は一つだけリクエストしていない曲です！

『Dancing in the velvet moon』はどんなアニメで使われて、どんな曲なのかは探してみてください！

次回はアニメ入ります！

番外編 「食費とテートとスタンガン（改）」（前書き）

今回はアニメ再編した番外編です！

文量は過去最多になるところ事態ですが、出来るだけ笑えるようにしました！

では、どうぞ！

## 番外編 「食費とテートとスタンガン（改）」

EX問

今日は頭の体操です。

次の三つの漢字に共通する部首を答えなさい。

『不・十・士』

姫路瑞希、キラ・ヤマトの答え

『口』

教師のコメント

正解です。これは全国的に正解率がとても低い問題ですが、二人には簡単でしたね。

レインの答え

『口』

教師のコメント

残念ながら、不正解です。

泉のこののはの答え

『心』

教師の「メント

不正解です。

高町なのはの答え

『葦』

教師の「メント

新しい部首を創らないでください。そして、なぜこんな感じがかけたのかが先生は不思議に思つてます。

レオンの答え

『口』

吉井明久の答え

『口』

教師のコメント

名前を見ただけで×をつけた先生を許してください。それよりも君たちが正解していることが驚きです。

この話は、試験召喚戦争に負けた者の末路を描いた話である・・・。

明久・美波・瑞希は映画館に来ていた。

「…………」

明久は映画館の物品の金額を見て顔が固まっていた。

「……学割とはいえ、チケット一枚千円、コーラMサイズ300円、ポップコーンSサイズ400円……これがたった二時間で消費されるのか……！ 映画館……なんて恐ろしいところだ……・っ！」

かなりの驚愕のご様子。

「吉井君……」

「？ な、なに、姫路さん（ギギギギ）？」

明久は瑞希の方を音が出るかのような感じで首を捻つて見る。

「これ！ 見ませんか！？」

瑞希が指差していたのは、『世界の中心で僕の初恋2 発動篇』の宣伝だった。

「へえ～、良いんじゃない？」

美波が賛同。

「ねえ、これにしようよアキ？」

「そう・・・。じゃ、僕はいいから一人で行つてきなよ・・・」  
『ええ～つー?どうして（ですか）～!?』

二人が明久の発言に叫ぶ。

「じゃアニメにする?」

「いや、そういうことじゃなくて・・・」

明久がそう言つた瞬間・・・

「観念するんだな・・・。明久・・・。」

『つー?』

三人が声のした方を見ると・・・

「男とは・・・、無力だ・・・」

「ゆ、雄一……」

翔子と手枷を墳められた雄一がいた。

「・・・雄一、どれが見たい・・・?」

「早く自由になりたい。」

「・・・じゃあ、『地獄の黙示録 完全版』。」

「おい待て、それ3時間28分もあるぞ!?」

「・・・一回見る。」

「一日の授業より長いじゃねえか!?」

「・・・授業の間、雄一に会えない分の、埋・め・合・わ・せ。」

「ちつ・やつぱ帰る!」

「・・・今日は、・・・帰さない。(バチツ!バチバチバチバチ!)」

「

翔子がスタンガンを構え、雄一に向けた。

「な、なんだ翔子、それなつ!あべし!ちやつ・ちよつ!か!ばつ

!」

スタンガンを当てられ悲鳴を上げる雄一。

「・・・学生一枚、一回分・・・」

「はい学生一枚氣を失った学生一枚無駄に一回分ですね?」

翔子が一人分のチケットを頼んでいた。

「仲の良いカップルですねえ・・・」

「憧れるよねえ・・・」

「・・・はあ・・・」

翔子と雄一の仲の良さ（？）に眼を輝かせて羨ましがる一人に呆れてため息をついた明久だった。

翌日。

明久は朝食の準備をしていた。

「やつぱり・・・朝食はつ！」

明久は包丁を振り下ろした。

「軽く済ませてー、夕食はリッチにいきたいよねー。」

・・・容器から出したカツラーメンに向けて。

「うーん、こっちを朝食にしてー、こっちのちょっと大きい方を夕食にしよー。」

明久は一人暮らしを満喫していた・・・

ドンッ！

「うわっーーー！」

「はっ、はっ、はっ……あつー」

福原先生にも挨拶をし、ひたすらに走り続ける。

「はっ、はっ、はっ……あつー、おはよーいござこます、福原先生。」

「ああ、おはよーいござこます……」

坂を駆け上がる明久。

「はっ、はっ、はっ……」

誰かとぶつかつた。

その衝撃で、明久がぶつかつた相手が咥えていた食パンが宙を舞う。

「・・・痛たた・・・あつ！」

「痛つてて・・・つ！君はFクラスの吉井君！（・・・／＼）」

「君はAクラスの久保君！？」

「如何にも、学年次席の久保利光だ。・・・いけない、急がないと一限目の予習がなくなってしまう。じゃあ。」

「ねえ！」

「なんだい？」

「それ、いらないの？」

明久は落ちている食パンに眼を輝かせている。

「そう・・・だね。もう食べられないから」

「貰つていいかな！？」

「つ！？君は平氣なのかい！？」

「うん、平氣だよ！」

（利光：・・・口をつけたものが欲しいだなんて・・・）

（明久：つ！30秒以内に拾えれば大丈夫だ・・・）

お互いの思惑が違つてゐるが・・・

「・・・僕は、困るな・・・」

「どうして！？」

「大胆過ぎるよ君は！・・・人が・・・見てるじゃないか・・・」

「そうか・・・。それもそうだよね・・・」

「じゃあ、またの機会に・・・」

「う、うん・・・」

利光が去つて行つて・・・

（明久：・・・今だ！）

食パンに飛び込む明久。

グニヤツ。

「・・・ん?」

「あ・・・あ・・・あ・・・(ドサツー)」

「おや、何か踏みましたか・・・?」

「はい、僕の生命線を・・・」

現状に泣き崩れる明久だった。

玄関。

明久の下駄箱付近に瑞希は立っていた。

ちなみに、キラの下駄箱付近には優がいた。

「あ、おはよ。姫路さん、春原さん。」

「ええっ！？お、おはよついでございます、です、吉井君ー。」

「ふえっ！？お、ねはよついでございます！吉井君！」

瑞希は慌てて手に持っていた手紙を隠し、優は急に声をかけられた  
為に歎んでいた。

「ひー。」

瑞希はそのまま走り去つて行つた。

明久は瑞希の手にあつた手紙を見た。

(明久：あれつて、やつぱり雄一に出すラブレターなのかな・・・。  
でも、雄一には霧島さんがいるし・・・。)

「よお。珍しく速いな、明久。」  
「あ・・・」  
「昨日はどうだつた?」  
「今月の食費が一瞬にして映画の暗闇の中に消えた・・・。雄一は・・・?」  
「眼が覚めたら、繫がれた牛が殺されるシーンだつた。」  
「・・・は?」

雄一の物言いに言葉を失つ明久。

「隙を見て逃げ出そうとしたら、また電気ショックを喰らって氣を失い・・・、眼が覚めたらまた牛が・・・」

「・・・本当に一回見たんだ・・・」

「また逃げようとしたらまた氣を失つて、永遠に牛を殺すシーンで目覚め続けるんじゃないかと強迫観念に襲われて、・・・逃げられなくなつた・・・」

「・・・永遠に映画の最初は見られないんだね・・・」

雄一の話にそう考へた明久。

「・・・はあ、そんなことより、次の仕送りまでどいつも生きていこうや・・・」

溜息交じりにそつ考へる明久。

「あのゲームの山を売ればいいじゃないか。」

「なんてことを言つんだ！何物にも代えがたい、優秀な作品の数々を！食べ物なんかに変えられるわけないじゃないか！」

「・・・自業自得って言葉、知ってるか・・・？」

「雄一はまだ余裕があるからそんなことが言えるんだよ！僕なんか命に関わるんだよ！？」

明久はそう叫ぶ。

雄一はそんな明久の肩に手を置き……

「明久、お前は俺に命の危険がないと思つていいのか……？」

「……ごめん。」

「……いいんだ。」

お互いに俯き合つてそう言い合つ一人。

「おっす！……つてお前ら一体何やつてんだよ……」

「焰。」

「お前がこんな時間に来るなんて初めてだな……。遅刻常習犯の  
お前が……」

「うつせ！今の時間に来ないとアイツがつるせえんだよ！」

「アイツって……」

「……Aクラスの水河か……」

「……何も言わいでくれ……」

「……スマン……」

次いで焰も増えた。

「・・・まさかあれ以上、設備が酷くなるとは思わなかつたよ・・・」

「これというのも・・・」

『全て貴様のせいだ！』

明久と焰は同時に雄一を指差して叫んだ。

いつの間にか美波のスカートの中を撮ろうとしていた康太が、そう呴いた。

「だけどこいつは、作戦の要だつたのに小学生レベルのテストで百点を取れなかつたんだよ！？」

「坂本君を責めちゃダメですよ。」

「・・・」

瑞希が明久に制止を呼び掛ける。

「良いじゃないですか。私、この教室好きですよ？」

（明久：・・・やつぱり、姫路さんは雄一のことを・・・）

（瑞希：・だつて・・・、この教室、好きな席に座つていいし・・・

／＼＼）

明久は相変わらずの勘違いをし、瑞希は自分の胸元で指でハートマークを作ったりしていた。

そして数分後・・・

「よーし！ホームルームを始めるぞー！皆席に着け！・・・つてもう座ってるな・・・」

西村先生がFクラスに入ってきた。

「あれ、どうして西村先生が？」

美波がすかさず質問をした。

その後ろでは明久と瑞希が桃色の空気を作り上げていた。

「お前らがあまりにも馬鹿なので、少しでも成績向上を目指そようと、今日から福原先生に代わってこの俺が！Fクラスの担任を務めることになった！」

『なにいいいいいい！？』

「て、鉄人が担任に！？」

西村先生の突然の宣告ござわめき立つFクラス。

「容赦なくビシバシ行くから覚悟しとけー。」

Fクラス担任が西村先生に変わった瞬間だった。

屋上。

「・・・はあ・・・。これじゃ毎日が鬼の補習になるようなものじやないか・・・」  
「そりゃのう・・・。どうにか出来ないもののじやろつか・・・」  
「・・・無理かもしけないね・・・」

屋上にたむろつてゐる明久・雄一・秀吉・レイ恩。

「そうだ！もう一度召喚戦争をやつて、勝てばいいんだ！」

「それは無理な話だな。」

「どうして！？」

「あのさ明久、一度負けたクラスは3ヶ月宣戦布告できないルール  
だつたのを忘れてない？」

「3ヶ月…」

明久の心に大ダメージ。

「なあに、3ヶ月なんてあつという間だ。その間に新たな作戦でも  
立てるさ。」

「ああ～つ～どうしてこんなことに～！？」

「…いい」ともある。」

頭を悩ませる明久の方を叩く康太。

「…一枚五百円。」

康太が持っていたのは、『誰が、何時、何処で撮ったのか分からぬ』『女子更衣室の写真だつた。

「買つたあ～つ！」

「・・・毎度あり～。」

「つお～つ！ども～つ！更衣室だ～つ！」

「お前、食費は？」

ズドン！

雄一に突っ込まれ、座っていた工事用の遮蔽物」と落ち込む明久。

「つおおおおおおおおおおおお～！」

「何を悩んでおるのじゃ？」

叫ぶ明久に疑問を持つ秀吉。

パタン！

「男なら後悔しないって！」

「勇者だな……」

「うん……。写真に写つてたの、フェイトとなのはだつたから……、今日が命日の可能性も……」

雄一が呆れ、レインは明久の冥福をこっそりと祈っていた。

「これでとうとう、次の仕送りまで一日カツラーメン一個決定だ……！」

「……明久よ……、お主、何か忘れておらぬか……？」

「え？」

明久が秀吉の方を見た時……

「あつ、ここにいたんですね！？」  
「ねえねえアキ、週末の待ち合わせ、どうする？」  
「……待ち……合わせ？」

明久は首を傾げた。

「忘れたとは言わせないわよ！クレープ奢ってくれる約束でしょ？」「えつ！？そ、それって・・・昨日ので終わりじゃないの！？」

「昨日は昨日、約束は約束！」

「私も」一緒にいいですか・・・？』

(明久・えつ！？姫路さんも！？)

「実は、吉井君と一緒に見たい映画があるんです・・・／＼／＼

もじもじとしながらそういう瑞希。

明久は・・・

「僕の・・・食費がつ！－！」

泣いていた。

その後・・・

パリイイイインッ！！

ゴシャツ！

何かが割れた音がし、更に何かを殴ったかのような音がした。

「あの位置は・・・Fクラス！？何かあつたのか！？」

「分からん、じゃが、何かあつたのは確実じゃ！」

「行こう！」

明久を置いて屋上にいた全員は、すぐにFクラスに向かった。

「クラス・・・

「・・・おいおい、一体なにが・・・」

雄一が教室にいる面々に声をかけようとして・・・止めた。

教室の中央には・・・

「・・・(パパパパパパパパパパパパ)・・・」

(駆け付けた面々・ま、魔王だ!魔王が一人いる!)

物凄い黒いオーラを出したなのはヒュイトがいた。

「お、おいー焰！一体何があつたんだー…？」

雄一は倒れていた焰（鼻血出している）に話しかかる。

「お、おお、雄一か…何となく良いものを見たぜ…」「い、良いものってなんだ！？それとレオンは一体どうなつたんだ！」

雄一は少し興奮している。

まあ理由は焦りだが。

焰の話はこなんだった。

- 数分前 -

「ムツツリーー、この写真はどうだい・・・？」

「・・・・・・・・・（ブシャアアアアアツ！）

レオンが康太に写真を見せていて、康太が相変わらず鼻血を噴き出していた。

「ね、ねえレオン、なんの写真を・・・・・！」

「やばつ！見られた！」

なのはとフヨイトがレオンが持っていた写真を見てしまい、レオンは焦った。

「レオン君・・・、なんでこんな写真を持っているのかな・・・？」

「許さない・・・、こんなことされたことないから・・・」

「わー、やつばー・・・」

「バスターアアアアアアアアアアアアアアアツ！」

なのはが怒り任せにバスターを発射。

「うわっちーあつぶなー！」

レオンは難なく回避。

が・・・

「はあああっー！」

「わっ！ザンバーはまずいよー！」

フェイトがいつの間にかザンバーを持つて、振り下ろしていた。

「危なっー！」

レオンが後ろを向いて回避している間に一人はレオンの背後に立ち。  
：

「そんなことしちゃダメだつてことを知った上で・・・（ゴスッー）

「

「あだつー！」

「身の程を・・・（ドスツー）」

「痛い！」

『知れええええつ！（グシャツー）』

「ぎやああああああつー！」

『ブシャアアアアアアアアアアアツー』

なのはがレオンの背に一撃加え、フェイトがザンバーで切りあげる。

そして両サイドからの回し蹴りがレオンに炸裂・・・

「ぐえつふ・・・や、野郎共・・・、い、良いユメ、見れたかよ・・・  
・ガクツ。」

「・・・（グツー）」

なのはたちは気づいていないが・・・

男子達は一斉に気絶、鼻血を噴き出していた。

「ふ、一人ともー！」

「か、隠さなきや隠さなきや…」

『ふえ？』

怒りが収まり、アリシアや」のはが何を言っているのかが分からない二人。

そして・・・

『つ！（バツ！）・・・まさか、見えてた・・・？／＼／＼  
『・・・見えてた。多分、狙つてた・・・』  
『／＼／＼／＼つ！／＼／＼』

二人はレオンの方を向き・・・

ガスドコバキグシャドスゴシャメキバキッ！

かなりのオーバーキルをやつていた。

- 今 -

「……この惨劇も良く分かるな……」  
「……死して尚、一片の悔い……無し……」  
「焰！死ぬな！死ぬと水河が来るぞ！」  
「それは困る！」

焰、復活。

「ねえ明久君……、あの写真、持つてたら渡してくれないかなあ……？」

「正直に渡してくれるなら何もしないよ・・・？」  
「も、持つてない！持つてないから！」

『本当・・・？』

「いや、セツキムツツリーーから買つておったぞ？』

『殺す！』

「わあああっ！止めて！止めて～！」

明久はなのは・フヨイトに半殺しにされた。

週末・・・

「そつちが夕食で・・・」そつちが・・・はつ・」

明久、何かに気付く。

「最初は半分に切つて片方を食べ、次は残りを切つて片方を食べ、  
その次も半分に切つて片方を食べてつて繰り返していけば、一つの  
カップ麺を、永遠に食べ続けられるじゃないか・・・」

明久、謎の理論に逢着する。

「僕つて・・・天才かも・・・」

いろんな意味で満喫していた。

「やうはいっても・・・、無駄遣いは出来ないよなあ・・・」

明久は自分の財布を見ていた。

「待てよ?よく考えたら、女の子と映画に行つたりクレープ食べた  
りするなんて・・・これつて・・・デートなんじゃないか?」

一応気がつく明久。

「そうだよ!これはデートなんだ!罰ゲームなんじゃないんだ!そ  
れならちよつとやそつとの出費、全然怖くないや~っ!」

完全に吹つ切れたようだ。

「あっ、姫路さん！」

噴水の近くに立っていた瑞希を発見。

が。

「あれは・・・っ！」

何かを発見・・・

「・・・やつぱり、罰ゲームじゃないか・・・」

明久は落ち込んだ。

「何やつてんのアキ？」

「ん？」

明久は声のした方に振り向いた。

声のした方には美波が立っていた。

「・・・人生の不条理に打ちのめされていたんだよ・・・」  
「吉井君！？」

瑞希が明久の方を向いた。

「おはよう瑞希。その服可愛いね～。」

「ありがとうございます。でも、この服選んでて遅刻しちゃうやつでした。」

「ウチもセリ 艾まで何着ていつか迷ってたんだけね～。去年のラウスがまだ切れてラッキー！」

「へえ～、それはつまり「ああっ！？」去年から膝の関節があらぬ方向に曲がるうとして・・・ってまだ何も言つてないのにいいっ！」

「言いたいことはわかつてゐからこいつー！」

「ロープ、ロオオオブツ！」

「・・・見え、見え、見えつ！（パシャツ！パシャパシャツー！）」

「何でムツツリーーがここにー？」

「・・・自主トレ。」

「吉井君は何を見たいですか？」

「今日はアキが選んでいいよ。」

「僕が！？」

明久、驚愕。

「値段はどれも同じなんだよな・・・。それじゃ長い映画の方が得かなあ・・・」

明久が映画を選んでいたら・・・

「・・・雄一、どれ見たい？」

『つー?』

突如とした声に驚き、振り向く二人。

そこには・・・

「俺の自由は・・・叶え、られるのか・・・？」

相変わらず手枷を繋がれた雄一がいた。

「・・・じゃあ、『戦争と平和』。」  
「おいそれ7時間4分あるだろ！」  
「・・・二回見る。」  
「14時間8分も座つてられるか！」  
「・・・退屈なら、隣で寝ていい・・・（バチツ・バチバチバチ  
ツ！）」  
「それ気絶するだけだろ？があああ！・・・大丈夫。ずっと・・・  
・」の、の、ノーモア！」

翔子にスタンガンを当てられる雄一。

「学生一枚、二回分。」  
「はい。学生一枚また氣を失つた学生一枚無駄に二回分ですね？」  
「はつきり気持ちを伝えられる人つて羨ましいです・・・  
「憧れるよねえ～。」  
「短いのにしょ・・・」

翔子の行動に眼を輝かせる瑞希と美波。

明久は短い映画を見る決意した。

ラ・ペディス・・・

「アキはホントに食べないの？」

「おいしいですよ？」

「いや、実は僕、食べ物につるんで食べてね・・・。クレープは口

に合わないんだよ・・・」

(悪魔：拾つたパン食べようとする奴が言うか?)

(明久：ここで少しでも節約しないと、あすからの食費が・・・)

(悪魔：素直に金がないと言えばいいだろ・・・)

「ふーん、そう・・・。ウチのバナナクレープ多いから、ちょっと  
食べてもうおつと感つたのに・・・」

「えつ！？」

(悪魔……)

「私のストロベリークレープも、一口食べてみてほしかったのです  
が……」

(明久……ええええええええつー？)  
(悪魔……！ー！)

「口に合わないんじゃ……」「  
ですね……。残念です……」

(明久・悪魔・ああああああああ……)

(明久・僕の馬鹿あつ！なんてことをしてしまったんだ！)

(悪魔・言わんこつちゃない……)

(明久・折角の、姫路さんの口つつしクレープが……！)

(悪魔・いや、そういう企画じゃないだろ……)

(明久・今の一 口で、朝食以上のカロリーが摂取できたはず……  
！)

明久、暴走。

「ちょっとだけ……食べてみてよ……」  
「え？」  
「おいしいわよ～？」

「しょ、しょうがないなあ・・・」

「よ、吉井君！私のも食べてくださいー。」

「え？」

瑞希が張り合つた。

「IJつちが先よー。」

「先とか後とかの問題ではないと思つますー。」

『はいっ！あーん！』

「あ、あーん・・・」

二人から迫られ、ちょっと緊張している明久。

が・・・

<いけません、お姉さまあつー！（キン、カキン！）>

ドスンツ！

『つー..?』

いきなり飛んできて、美波と瑞希のフォークを弾いて壁に刺さった  
フォークに驚く三人。

「酷いです！お姉さまの甘い甘いクレープを、その口をつけたフォ  
ーク」と薄汚い家畜に『えるなんて！美春許せません！』

フォークを投げたのは美春だった。

「これ以上豚が、調子に乗つて狼藉を働かない様！」

「豚あ？」

「今、この場で成敗します！」

「え！？僕うつ！？」

利光は外を歩いていた。

「・・・つ！」

何かに感づき、参考書を顔の前に出した。

直後、三本のフォークが参考書に刺さった。

「・・・？」

参考書を退かした利光の眼に映つたのは・・・

「わああああーどいでどいでどいでどい・・・」

走る明久だった。

どつーー！

衝突。

『ぐつ・・・』

「・・・ああつ、クレープが！・・・まだ30秒以内に・・・（ヒ  
ュンヒュンヒュンー）ってうをわああああつ！」「

「待ちなさい豚野郎おおつ！」

「止めなさい美春！」

「待つてください、皆さん！」

四人が走り去った後・・・

「吉井君・・・、僕の顔を汚したね・・・」

その後、顔についたクリームを舐めていた。

明久・美波・瑞希は猿頭公園に逃げ込んだ。

「どうして僕がこんな目に！？」

「あの子は特別だか」  
「特別!ー?」

走っていたり・・・

「おお、明久。何をしておるのじや?」

「秀吉、いつひこー」

「うわあ、なんじやー?」

秀吉といふつた。

すかさず明久は秀吉を茂みに引き込んだ。

直後・・・

「豚野郎おおおおおおつー。」

美春が走ってきた。

「どーに行つたのですー? お姉さまに家畜の臭いを移そうものなら、直ちに火炙りにしてやつます!」

美春の過激発言。

『どー行つたんですのー?』

「ひいいい!」

「なつ、なんでウチを避けるのよー?」

「いや、火炙りって言つから・・・」

「よく分からんが、お主らは追つ手から逃げておるのか?」

秀吉が状況を把握しようと明久たちに話しかける。

ちなみに茂みの手前では、美春が「どつちー? じつち、そつち、どつちー?」と言っている。

「・・・そつなんだ。なんか逃げ切る良い方法はないかなあ・・・。  
せめて僕の召喚獣が使えればいいんだけど・・・」

「学園を離れると召喚システムが使えないんですね?」

「うん・・・」

(『豚野郎ー豚野郎、豚野郎豚野郎豚野郎おおおおおー』)

「そうじゃーちょうど今、演劇部の衣装を持ってあるーこれを着て  
変装する、といつのはどうじや?」

(『豚野郎、豚野郎豚野郎豚野郎豚野郎おおおおおおー』)

「変装・・・?」

数分後・・・

明久と秀吉が着ていたのは、女物のメイド服だった。

「秀吉用が男物のわけないじゃん！」

「なんだか凄く可愛いんですけど・・・//」

「何この敗北感・・・//」

「困っちゃうんだけどおーっ！」

『はうう～・・・／＼』

『見つけました！』

『ええつ！？』

突如として聞こえた美春の声。

「はあああつ！」

ついに美春に見つかった3人。

「おとなしくつ！・・・なんですか、その格好・・・」

「聞かないで！答えにくいから！」

「不潔です！不純です！女の格好さえすればお姉さまが好きになつてくれると思つたら大間違いです！」

「いや、君が大間違いだと思つ・・・」

「ウチは普通に男の子が好きだから・・・」

「神聖な美春達の仲を冒涜する豚め、決して許しません・・・」

「なんでそりなるのぉー・」

明久たちは秀吉を残して走り去ってしまった。

「逆効果じゃったの?・・・」

「・・・いや、これはこれで。」

いつの間にか康太がいた。

「アンタ鬼だ！」

「そうだ、良い考えがあります！文月学園へ逃げましょー！」

『学園へー!?』

レオンはいつの間にか乱入していた。

瑞希の提案に驚きを隠せない明久と美波。

「・・・つーそつか！」

閃いたかのように言う明久。

文月学園・・・

「・・・いた！」

明久たちは歩いていた竹内先生を発見。

「竹内先生は現国よ！？ウチ、全然戦力にならないんだけど…」

「今は贅沢を言つている場合じゃない！」

「とりあえず誰かを頼るしかないんだよ！」

『はあ、はあ、はあ・・・』

『竹内先生、模擬試召戦争をやらせてくれ！』

『え、あ、はい。承認します！』

現国のフィールドが展開された。

『サモン  
試獣召喚！』

それぞれの召喚獣が姿を現した。

「ああっ、酷い！私の愛を邪魔する気ですかー？」試験召喚サモンつ！

美春も召喚をした。

「姫路さんやレオンの召喚獣がいるから、怖いものなしだー！」の勝負、勝てる！」

「清水さん、ごめんなさい！」

「や、やめません！」

美春の召喚獣に切りかかろうとした瑞希の召喚獣。

だが、美春の召喚獣は飛び上った。

標的は・・・

「え、ウチにー！？」

美波。

そして美波の召喚獣は一刀のもとに切り伏せられ・・・

美春の召喚獣は瑞希の召喚獣に一撃貰い・・・

「まだまだまだあつ！オーバーキルでもしておくよおおつー。」

レオンの召喚獣に細切りにされた。

参考用の点数が表示される。

『	Dクラス	清水美春	VS	Fクラス
島田美波&姫路瑞希&吉井明久&レオン	132点	V S	16点	&
国語			3	
45点	&	68点	&	969点
				』

「零点になつた戦死者は補習ううううつ！！」

「ええ、つー今日はお休みなのにいづつ！」

「美春はお姉さまとなら、鬼の補修も天国です」

「・・・」

美波の顔が、美春の発言で青くなつた。

「お姉さまと一緒」

「私は嫌ああああああああ！」

西村先生に抱かれてながら美波が叫んだ。

「・・・吉井。お前・・・、目覚めたのか・・・？」

「・・・？」

西村先生が行つたことで、明久は自分の服装を改めて見た。

只今の明久の服装・・・

「・・・明久、思いつきりやつちやつたね・・・」

「・・・誤解ですか？！」

明久の絶叫がこだました・・・

次回、

「？？？？？？」

## 番外編 「食費とテートとスタンガン(改)」(後書き)

次回に「????????????」となっているのには理由があって、次回はだいぶ前の「計画」をついに始動させます!

お楽しみに!

番外編 「バカと猫と試召戦争」（前書き）

ついに！前々からの計画実行です！

猫とは誰か！？それを知りたければこの後の本編を読むか、活動報告（だいぶ前の）を見るべし！

では、どうぞ！

## 番外編 「バカと猫と誠召戦争」

### 第EX問

次の問い合わせに答へなさい。

『日本国憲法第一〇五条で記載されているものは何か?』

姫路瑞希の答え

『生存権』

教師のコメント

正解です。よく聞く為にすぐ出るはずですね。

キラ・ヤマトの答え

『国民の生存権、国の生活環境向上義務』

教師のコメント

いやあで詳しい答えが出るとは思いませんでした。すべて正解です。

泉戸こののはの答え

『存命権』

教師のコメント

結果としては合っているのですが、『存命』ではなく『生存』です。

フェйт・T・ハラオウンの答え

『存在権』

教師のコメント

あなたも近い回答でしたが、不正解です。

吉井明久の答え

『生き延びる権利』

## 教師の「メント

君の解答に生命の危機を感じます・・・

・・・・・事件は、いつも唐突に起きるものである・・・

「……………？」  
「……………？」

街の中を、見たことのないフードを着た何者が歩いていた。

「・・・タオは、一体なんでここに来たニヤスか？・・・はあ・・・腹減ったニヤ・・・」

歩いていたのは・・・

力力族の少女・タオカカだった。

「・・・?あれ?ここは・・・ビニーヤスか?」

タオカカがしばらく放浪していたら・・・

「んあ?ここは・・・『学校』とかいうとこニヤス・・・。乳の人  
がそう言つていたような・・・。」

タオ力力が見つけたのは、文月学園の校門。

「・・・なんか、楽しそうニヤス！入つてみるニヤス！」

タオ力力は一人、学園に入つて行つた。

「て、鉄人が来ないぞ！？」

HRの時間になる・・・と思ひきや。

「あ、明日は何が起るんだ！？大雨なのか…？台風なのか…？」

未だに教室に来ない西村先生に不安がこみ上げるFクラス面々。

「に、西村先生が来ないなんて…珍しいことだね…」  
「そ、そうだね…。…。…。フュイトちゃん、何聞ってるの？」

フュイトがMP3プレイヤーで曲を聴いていた。

「…え？あ、ええと、『めん、なのは。今は…と言えないから…』  
「…。…。うなの？すつじい気になるんだけど…。」  
「ホントに『めん！言えないの！』  
「なのは、深く追求しないであげて？フュイトも困つてるじ。」  
「…。…。そうだね。」

色々問題のある朝が進んで行つた。

(レオン……ちょっと補修室まで行ってみよ……!)

レオンは一人、教室をこっそりと抜け出して行つた……

「さてさてさて、何があるかな？何があるかな、何があるかな……  
・・・つと。着いた着いた。」

レオンが補修室をひっそり見てみたら・・・

「・・・誰もいない・・・だと・・・!?

ビニが聞いたことがあるかのような言い方をしてしまつぽビの驚  
愕。

「だったら・・・職員室なのかい!?

すかさず職員室に向かつたレオン。

職員[至前。

職員室では・・・

不思議な言い方をしてまでものびつかつ。

「ど～れどれ・・・っておいおい・・・猫かいネコかい？」

「だから・・・お前は一体何者なんだと聞いている!」

「だから~、タオはタオカカニヤス!」

「ど~」からが名前なのかが分からんから聞いている!」

「・・・鉄人さあ、パツと見拷問だよそれ・・・」

レオンはそんな光景を見ながらぼそっと突っ込んだ。

Fクラス・・・

「うつわ、鉄人が遅れている理由が分かるってな・・・」「あ、レオン。鉄人が遅れている理由つて？」

戻ってきたレオンに明久が（すつし）こうきうつきして聞いてきた。

「なんか・・・猫っぽいフードをかぶった・・・女の子・・・?に半分拷問的なことしてた。」  
『なにいつ!?』

Fクラスの男子殆どが変な覚醒をした。

「だけど、疑問符が付いている」と忘れんなよ?断言できなかつたんだし。』  
『すっかり忘れてた・・・』

意氣消沈。

数分後、西村先生がやつてきた。

「あー、今日は・・・吉井、ホームルームが終わったら補修室に来い。以上。」

「え！？僕まだ戦死してませんよ！？」

「補修のために呼んだんじゃない。今回なお前に用事があるからだ。」

「

そして西村先生は去つて行つた。

「明久、ついに年貢の納め時か？」

「雄二！なにげに死刑宣告的なこと言わないでよ！今回は補習のためじゃないって言つてたじやないか！」

「それじゃ、何があるのか見に行かないとな。」

「呼ばれたのは僕だけだよ？」

「ほとんど行く気だが？島田に姫路もな。」

明久が後ろを見ると、Fクラスの男子の面々と、美波、瑞希がいた。

「え・・・つと、なんで美波と姫路さんがいるの？」

「そ、それは・・・」

「アキが心配だからよ！心配して悪いの！？」

「い、いや、別にそんなことは・・・」

結局、Fクラスの殆どが明久についていくという奇妙な状況が生まれてしまった。

「鉄じ・・・西村先生、入りますよー。」

鉄人と言いかけて訂正し、補修室に入る明久。

「おお、吉井か。お前に頼みたかったことと「うのはな・・・彼女との試合戦争だ。」

「・・・あの、色々とすつ飛ばされているよつた気がするんだけど・・・」

「・・・すまん、俺が悪かつた。」

明久が何のことだか全く分からず、頭に疑問符を浮かべていることに謝罪をする西村先生。

「まず名を名乗ってくれ・・・」

「名乗る・・・ってどういう事ニヤスか?」

「・・・名前を言えってことだ・・・」

「おお、そういう事ニヤスか!」

明久の前にいた女の子・タオカカ・は勝手に自己完結していた。

「タオは、タオカカニヤス! そこのバカそうな人、なんて言つニヤスか?」

「ばつ、バカそうな人・・・」

タオカカのズバツとした言い方に泣き崩れる明久。

「明久、諦める。バツと見ても分かることだ、言われても仕方ない。」

「仕方ないってどういうこと！？初対面の人にはバカって言われたくないよ！」

「すまんな。タオカカといったか？このバカは明久だ。」

「ちよつ！バカって言わないでよ！」

「・・・かわいそうな、人なのか？」

再び泣き崩れる明久に、更に追い打ちをかけてしまつタオカカ。

「それで吉井、彼女と試召戦争をしてほしいということだ。頼めるか？」

「そこが既に分からんんですけど・・・」

「質問をしていたのはこっちだったが、逆にいつの間にか彼女のペースになっていてな。彼女が試召戦争に興味を持つたらしくてな・・・

・

「ええ、まあ、いいですけど・・・あ、でも、点数はどうなっているんですか？」

「模擬試召戦争、ということとあくまで体験だということで全教科100点ずつにしてある。」「ひ、100点・・・」

圧倒的な点差（明久的には）に愕然とし、驚きを隠せない明久。

「とりあえず科目は総合科目で行つからな。」

「そんなあ・・・・・」

明久はがっかりしていたが、タオカカはと言つと・・・

「さあバカの人！行く二ヤス！」

既に臨戦態勢に入つっていた。

「はあ・・・諦めるしかないんだ・・・。ええい！やけくそだ！試  
サモン  
獸召喚！」

明久は諦めて召喚獣を呼び出す。

「・・・？」

タオカカは全然動こうとしない。

「どうした、何故呼び出さない？」

「なんて言えばいい『ヤスカ?』」

「・・・試験召喚だ。」

「シャモン?」

「試験召喚だ!」

「試験召喚!」

ついにタオカカの召喚獣が呼び出された。

「あれ、武装なし?」

「タオの武器は、爪一ヤスよ?」

タオカカがそう言った刹那、タオカカの召喚獣が自らの手から爪を伸ばした。

「ほ、本当だ・・・」

そして、二人の勝負が始まった・・・

が。

「ていつ！（ズシャツ！）」

「さやああああ！？」

タオ力力の召喚獣に一撃食らった明久の召喚獣。

フィードバックダメージが強く、悲鳴をあげた。

参考用の点数が表示される。

『Fクラス	吉井明久	V	体験者
タオ力力		S	
総合科目	353点		
点数)』		500点(特別	

点差も元々そう差がなかつた為、あっさりと点数を削られる明久。

「おー！なんか、楽しいニヤス！」

タオ力力は楽しそうだ。

「楽しくないよー痛いから！」

明久的にはダメージがある為、楽しめない。

数分後・・・

『Fクラス

タオカ力

総合科目

点数)』

吉井明久

VS

体験者

0点

VS

325点(特別

「明久・・・そこまで雑魚だつたんだな・・・」

「初心者にも負けるなんて・・・どこまで雑魚なんだよ明久は・・・」

「見ないで・・・！こんな僕を見ないでえつ！」

雄一とレオンから責められ、明久が必死になつて隠れようとしていた。

「・・・あ！」

何かを思い出したのか、急に声をあげるタオカ力。

「タオがここに来た理由、思い出したニヤス！・・・偶然・・・  
「目的・・・？」  
「・・・そりばニヤス！」

そしてタオカ力は、開け放つていた窓から飛び出し、去つて行つた。

「・・・嵐のような子だつたね・・・」

「一体どうやってこんな所に来たんだろ?・・・」

残された者は、何かを言えるわけなく呆然と立ち去っていた。

「・・・吉井。」

「・・・はい?」

「・・・〇点になつた戦死者は補<sup>番</sup>へ・・・」

「そんなんああああああああああああああつ!?」

最後の最後で・・・

明久の悲鳴が、辺り一帯にこだました・・・

次回、  
「明久と暴徒とラブレター」

番外編 「バカと猫と試召戦争」（後書き）

はい！タオカカ出しましたーよつやくー。

少しやつつけ的な気がするのは放置の方向でお願いしますー。

次回は明久逃走劇！

お楽しみに！

番外編 「明久と暴徒とラブレター」（前書き）

またまた番外編です！

今回は明久・レオンの逃走劇、行きつく先は一体・・・？

では、どうぞ！

番外編 「明久と暴徒とラブレター」

『文月新聞

二年F組 吉井明久さんのコメント

『僕が小さな頃、祖父がよくこう言つていました。

『明久。泥棒でも何でもいい。一番を田指して精進しなさい。』

今、僕は天国にいる祖父にこのことを教えてあげたいと思います。

爺ちゃん・・・

これで、いいかい・・・?』

以上、

- ＼女裝が似合＼そつな男子ランキングNO.1＼
- ＼こいつにだけはバカと言われたくない生徒ランキングNO.1＼
- ＼モテそつな男子（同性愛纏）ランキングNO.1＼

の三回を達成した吉井明久さんからのコメントでした。

尚、女裝が似合＼そつな男子にノミネートされていた木下秀吉さんは審議の結果、アンフュアであるとの結論に達した為除外されています。

予定されていた第一特集

【須川亮、また失恋！？連敗の裏側にある真実とはー】

は都合により延期となりました。』

「うん……、ありえない登校時間だ……」

晴れ渡る空、澄んだ空氣、暖かな日差し。

いつもより一時間早いだけで、混み合はずの通学路はガラリと様相を変え、人の無い爽やかな散歩道のような雰囲気を醸し出していた。

「早起きは三文の徳つて言つて、何かイイコトがあるといいなあ。」

「

明久は前日、学園から帰宅した後昼寝のつもりで横になつたらそのまま朝まで眠つていたのだ。

そのため、いつもより一時間も早く眼が覚めたのだ。

「おっす明久。お前さんがこんなに朝早いなんてねえ……。明日は雨か?」

「おはようレオン。……朝からこななりそなこと言わなこでよ。」

・

レオンと会流。

「しつかしまあ、こんなに朝早く来ても何もやることないしな。」

・

「ホントだね。それで、こんな時間から何をしようかな。」

二人がそんなことを放しながら歩いていると、校門の近くに見知った後ろ姿を見かけた。

その姿は、鉄人　西村先生　だ。

「先生、おはようござります。」

「おひーっす。」

後ろから元気な元気な（元氣）レオンは普通に（普通に）声をかける。

「おひー、おはよう一部活の朝練か？ 感心だ。」

・

動きが止まった。

「先生？」

「・・・すまん、勘違いだ。」

「人違いですか？いやそんな、別に謝る必要なんて・・・」

「吉井、レオン、こんな早朝に学校に来て、今度は何を企んでいる？」

爽やかな笑顔から一転、警戒心をあらわにした表情になった・・・

「えっと・・・間違えたのは接する態度ですか？」

「お前らを警戒するのは教師として当然のことだが・・・。それはそうと、ちょうどよかつた。『観察処分者』のお前がいるなら手間が省けるからな。」

「げ。『観察処分者』ってことは、また力仕事ですか？」

「そういうことだ。古くなつたサッカーのゴールを撤去してくれ。」

「やれやれ、早起きなんてするんじゃなかつたなあ・・・」

明久はついつい溜息をつく。

「後悔するのは早起きではなく、観察処分を受けたお前の態度だと  
いうことに気が付くべきだと思うがな。」

呆れたように西村先生が明久の顔を見て溜息をつく。

「うう……。僕はそんなに悪いことなんてしていいのに……」「…………」

来い。  
レ

「一ノ二」

明久がグラウンドに向かおうとしたところ・・・

「 鉄人鉄人、今日は僕がやることでどうかな? ちょっとやってみたいことがあるし。」

レオン？ いきなり何を言し出すのや？

「うん、おまえの言ふ通りだ。」

「おいおい、そんな言い方するのかい？ちょっと幻滅。ま、見てなつての。」

サッカーゴールの方に歩いて行つた。

「てーつじーん! どこに持つていきやーこのーー?」「町外れの参拝場まで行つてこい。」「ちよつと! 何キロあると思つてんですか! ?

明久が西村先生にブーイングをするが・・・

「了解、五秒もあれば戻つてこれる位置だから。」

「えっと、レオン？ここからかなり離れているんだよ？」

「そんなことないよ。こんなもの、それだけあればっ！ぶるああああああああああ！」

「え！？ちょ、うわわわわわわ！し、信じられないよ！…というかどんだけ力があるんだよ！」

「そんじゃ、行ってきます！」

レオンが物凄い速さで行ってしまった。

「・・・信じられん光景を見たぞ・・・

「僕もですよ・・・」

唚然としていた二人だった。

五秒後。

「・・・I - l b e b a c k ! 僕は戻ってきた！」

「・・・本当に五秒で帰つてくるとはな・・・」

「驚きどけにかレオンが怖く見えてくるよ・・・」

「そんじゃ、教室にいこ？まだ誰もいないだろうじ。」

「うん・・・」

怯える明久を引き連れる（形で）レオンが玄関に入った。

（明久：意外とイイコトあつた！）

ちよつと喜んでいた。

外されたネットもレオンが高速で運んでくれたためにはつさりと教室に向かうことができそうだ、と思いつつ靴箱を開けた明久。

そんな明久を迎えたのは、普通に置かれていたラブレターのようないかだつた。

「なつ、なんじゅ」りやああつー?」

思わぬ事態に叫び声が出てしまつ。

(明久・おおお落ち着け、吉井明久!早合点は命取りになる一・ます  
はじつくつと中身を確認してから・・・)

「どうした、明久?」

「おわああつ!」

声を掛けられて咄嗟に手紙をポケットに隠す明久。

「(び、びっくりしたあーつー)あ、ああ。雄一か。おはよう。」「おひ。」

片手を上げて明久の挨拶に応えたのは、クラスメイトの坂本雄一。

「い、いやー、良い朝だねつ!凄くいいコトがありそつな朝だよね

つー

「・・・何を動搖している?」

「べべべ別に動搖なんて・・・」

「まさか、さつきチラシと見えた手紙のようなものは・・・」

「（くつ！見られていたか！まずいな。こんな手紙をもらつたことが発覚したら、クラスの連中は妬みで僕をボコボコにしようとするはず！）というか、なんで今日に限つてこいつは早く登校しているんだ！）た、ただのプリントだよ！それよりも速く教室に行かないとい！」

「・・・別に急ぐことはないだろ？・・・」

「まだやることあるんだからー！」

そそくさと走り去つた明久。

（明久：・・・）の手紙をビームで読もう・・・。人目につくといふだとイロイロとまざいしなあ・・・。どうしよう？）

「レオン、明久の奴、一体何を持っていたんだ？」  
「すまぬな、吾輩の位置からは見えなんだよ。」  
「・・・一体どこに誰の物まねをしていいんだ？」  
「・・・珍しくスベツた・・・」

落ち込んでいた。

「……あと、ものすりぐる氣になることがあるんだが……いいか？」

「……お好きなように……」

「キラの靴箱なんだが……」

「キラの靴箱が？」

「……物量法則的にもあり得ない膨らみ方をしているつての……」

「……雄一、キラを待つてみる？どうなるかが分かるし、なんでこんなことになってしまふのかが分かるから。」

「あ、ああ……。キラ以外にもフェイトやなのは、アリシアのもそうなつていてるぞ？」

「……この四人の運命は全く一緒……」

レオンは一人静かに呟いた。

数分後、なのはとルカが一人仲良く登校してきた。

「……ねえ、ルカ君、靴箱を開けるのが怖いんだけど……」  
「……嫌な予感がするのは分かるよ。だけど開けないと何もならないし……」  
「……覚悟する……」

なのはが靴箱を開けた瞬間・・・

「ザザザザザザザザザザ！」

「ああああああああああ・・・」

「な、なのは！？うわ、凄い量の手紙・・・」

「た、助けてえ～・・・」

「あ、う、うめんー待つてー！」

大量の手紙に埋もれたなのはを助けるために手紙を退かし始める力。

「信じられない髪らみ方をしていたのはこの為だったのか・・・  
「でしょ？中学の頃からずっとそうだったし。」

「・・・といつことはフロイトとアリシアとキラの靴箱も・・・  
「全く同じ・・・いや、多分キラとフロイトの場合是最もひどいことになるかもしないね・・・」

「おじおじ・・・・」

レオンの台詞に驚きしか隠せない雄一であった。

数分後・・・

誰もいない玄関で・・・

「うわああああああああ！？」  
『きやああああああああ！』

キラ・フェイト・アリシアが手紙に埋もれた。

明久は結局、良い場所を見つけることができず、ギリギリに戻つてくるしかなかつた。

「工藤。  
「はい。」

「久保。」

「はい。」

明久がチャイムと同時に教室に駆け込むと、間髪入れずに西村先生がやってきて出席を取り始めた。

「近藤。」

「はい。」

「斎藤。」

「はい。」

「はい。」

淡々と進む毎朝の恒例行事。西村先生の呼び声にクラスの面々は眠そうに返事をしていく。

静かな教室ににのどかなひとときが訪れている。

春の陽気の中、今日といつもと変わらない平穏な日々が・・・

「坂本。」  
「・・・・・明久がラブレターをもらつたよつだ。」

『殺せええつ！』

雄一の一言でブチ壊された。

「ゆ、雄二ーーいきなりなんて」とを言こ出すのやー。」

明らかに小声だったのにもかかわらず、クラスの誰もが聞き逃さなかつた様子（「ぐく一部は聞こえていなかつたよつだ）。

（明久・）の連中は本当に「どいかおかしいよー。）

「どういづ」とだー？吉井がそんな物を貰うなんて！..

「それなら俺たちだつて貰つていってもおかしくないはずだー自分の席の近くを探してみる！」

「ダメだー腐りかけのパンしか出でこない！」

「もつとよく探せ！」

「・・・出てきたつ！未開封のパンだー！」

「お前は何を探しているんだー？」

怒号が飛び交うFクラス。

クラスの殆どが嫉みに狂う光景が展開されていた。

「お前、うつー静かにしろー。」

・・・・・シン・・・

と、西村先生の一喝でクラスに静寂が舞い戻つてくる。

(明久：ふう、良かつた・・・)

「それでは出欠確認を続けるぞ。」

出席簿を捲る音が教室内に響く。

「手塚。」  
「吉井コロス。」  
「藤堂。」  
「吉井コロス。」  
「戸沢。」  
「吉井コロス。」

「皆落ち着くんだ！なぜだか返事が『吉井コロス』に変わっているよー！」

「吉井、静かにしろ！」

「先生、ここで注意するべき相手は僕じゃないでしょーうー？」のままだとクラスの皆は僕に蹴る殴るの暴行を加えてしましますよー！」

「新田。」

「吉井コロス。」

「布田。」

「吉井マジ殺す。」

「根岸。」

「吉井ブチ殺す。」

(明久：き、聞いてないし……なんて悪い扱いなんだ！？)

明久はそんな状況に嘆いていた。

そんな横では……

『はあああああ……』

キラ・フェイト・なのは・アリシアが盛大に溜息をついていた。

「お前ら……四人とも全く一緒にタイミングで盛大に溜息つくとか……一体どうしたんだ……？」

雄二が四人に聞いた。

『実は・・・』

また同じタイミングで話し始める。

そして・・・

ドサッ！

四人の机の上には、通常では信じられないような量で手紙の山が築かれていた。

「・・・今日の、朝だけですか・・・？」

『今日の・・・朝で・・・』

「おーい、この四人も手紙を貰っていたぞー。」

(明久：よし！こんな時に四人が……)

内心ほくそ笑んだ明久だが……

『そんなことを気にしている暇はないー』

「どこまで団結いいんだよ皆はあー！」

クラスの殆どは気にしていなかつた。

「よし。遅刻欠席はなしだな。今日も一日勉学に励むようだ。元気だ！」

出席簿を閉じ、教室を後にしようとする西村先生。

「待つて先生！行かないでー！可愛い生徒を皆殺しにしないでー！」

保身のために、なりふり構わず西村先生を呼び止める明久。

「吉井、間違えるな。」

西村先生が扉に手を掛けたまま告げる。

「お前は不細工だ。」

「不細工とまで言われるとは思わなかつたよバカ！」

「授業は真面目に受けるよう。元気！」

「先生待つて！せんせーい！」

明久の叫びも空しく、西村先生は教室を出て行ってしまった。

これでもう、クラスに満ちる殺意に歯止めをかけるものはない。

「アキ、ちよ～っと話を聞かせてもらひえる？」

グワシ、と関節が外れてしまいそうな勢いで美波が明久の方を掴む。

「あ、あはは・・・。み、美波、顔が怖いよ？」

「手紙を貰つたの？誰からのの？どんな手紙なの？」

愛嬌のある吊り眼がいつもより更に吊り上っている。トレーデマークのポニーテールが角に見えるほどに怖い表情だ。

「あー、えつと、そのー・・・（・・・正直言つて、咄嗟に隠したから手紙の内容なんて知らないよ・・・。ああ～つー早く一人になつて内容を確認したい！）

「いいからおとなしく指の骨を・・・じゃなくて、手紙を見せなさい。」

(明久：なんだ！？断れば僕の指の骨に一体何が起るんだ！？)

「あの、吉井君・・・」

明久の後ろから、鈴を転がすような声が後ろから聞こえてきた。

「ん？ なに？」

声の主は瑞希だった。

「その・・・できれば、ですけど・・・私にも手紙を見せて欲しいです・・・」

もじもじと困ったようにして頼む。

「その・・・ごめん。」

明久としては、そのお願いを聞き届けるわけにはいかないため、誠意を込めて謝った。

「でも、でも・・・」

それでも食い下がる瑞希。

「いくら姫路さんの頼みでも、コレばっかりは・・・」

「でも、私は吉井君に酷いことをしたくないんです！」

「ちょっと待つて！姫路さんまで僕に暴行を加えることが前提なの！？」

すっかり瑞希もFクラスに馴染んできたみたいだ・・・

「皆、ちょっと落ち着け。」

そんな中、パンパンと叩く音が教卓の方から聞こえてきた。

Fクラス代表であり、明久の悪友でもある雄一の声だ。

「今問題なのは明久の手紙を見るなどじゃない。」

雄一がクラスの面々に言い聞かせるように言葉を紡ぐ。

(明久：・・・さすが、腐つても友達は友達だな・・・)

「問題は、明久をどうグロテスクに殺すかだ。」

「前提条件が間違つてんだよ畜生！」

明久は荷物を引っ掴んで教室からダッシュで逃走。

「あのバカつ！一人で逃げたら速攻で殺されんだろが！」

レオンがその後を追つて教室から出て行つた。

「逃がすなあつ！追撃隊を組織しろ！」

「手紙を奪え！吉井を殺せ！軍師には一切手を出すな！」

「サー・チ&デス！」

「そこはせめてデストロイで！」

廊下に響いてくる声を聞いて、明久はFクラスは嫌な団結力を持ったクラスだと改めて実感した。

「明久つ！」

「レオン！？君も僕を殺しに来たの！？」

「そんなんじやない！今回は明久の味方だ！よく見ろ、武器なんて一切持つてないだろ！？」

「ありがと！」

レオンが明久の味方に付いた。

「いたぞ！吉井だ！空き教室に向かつたぞ！」  
「了解だ！見逃さないよう追つてくれ！」こつちは全部隊に連絡を取る！  
「オーケー！B部隊は正面から、C部隊は逆側から回つて挟み撃ちにするんだ！」  
「応つ！」

廊下を走つていると背中越しにそんな会話が聞こえてくる。

「おいおい、たつたこんな短時間で部隊編成を済ますとかさあ、どうだけ無駄にスペックが高い連中なんだよ・・・」

「・・・だね。」

空き教室に逃げ込んだ一人。

「吉井！観念して手紙をよこせー！」

「一人だけ幸せにならうなんて甘いんだよ！」

目の前に五人のクラスメイトが立ち塞がる。

(レオン……やつき聞こえてきた挟み撃ち部隊の連中かいな……)  
・

後ろからも追つ手が来た。

このままでは逃げ場がなくなる為、空き教室に逃げ込んだ一人。

「ちょっとここに水を撒いて……」

「何するつもりなの？」

「人間の丸焼きを作ろうつってね。」

レオンが仕掛けを作った直後、敵は全員明久を追つて教室に群がってきた。

教室に入つてくる瞬間、入り口が限られているために、お手は一か所にかたまらざるをえないため、一人にとつてチャンス以外の何物でもない。

そして最初の一人が教室に入つた瞬間・・・

「うわっ！？」

一人目が転んで、将棋倒しが起こったかのよつに転んでいく。

「な、なにがあつた！？」  
「み、水だ！ 慎重に進めばどうといふことはないぞ！」

一瞬戸惑つものの、すぐに次の行動に移る。する。

「（ぐつー残念ながら手遅れなのぞー）アディオス、皆の集ー保健室のベッドでくたばつてな！」

「そ、それは・・・！」

「離れろー！全員この水から離れろー！」

「じゃ・・・死ね！」

床にぶち撒けられた水にレオンが電撃を放った。

『ぎゃあああああああああああつーーー』

悲鳴を上げて倒れていく人々。

その中では焦げ臭い香りがする・・・

「明久ーもう電撃はないし、敵はいないーこの教室を後にするぞー！」

「わ、わかつた！」

「いや、撤収！」

二人は教室を後にした。

「どうだ？確かにこっちに来たはずだが……」

「気をつける。きっと近くに潜んでいるぞ。」

「F部隊とG部隊もやられたらしい。あっちには軍師がいる、油断はするなよ。」

旧校舎の古書保管庫。その中で緊張した様子のFクラスの面々が囁き合っている。

怒涛の勢いでクラスメイトを撃破してきたせいか、随分と一人を警戒している。

「明久……連中、背中を合わせて死角を潰してやがるぜ……」

「……動き辛いよ……」

「……おし、あの本棚まで一気に移動するよ。」

「み、見つからないかな……？」

「大丈夫。一氣について言つたじやん……」

そう言つてレオンは姿が見られていないのを確認し……

「・・・ Mode Change . Mode·BLITZ .

レオンが姿を変えた。

「それと・・・、『ワーリージュ』ロード 展開つと。」

そして、二人の姿が見えなくなつた・・・

「これで普通に歩いても大丈夫。81分は普通にバレないから。」「なんだ・・・」

そして、本棚に到着。

「・・・えいつ。」

適当な本を一冊抜いて、一人が潜む場所とは対角の場所にこつそりと放り投げた。

バサツ。

「なんだ！？」

「吉井か！？」

案の定、音に反応して全員が同じ方向を見る。

ついに、死角が出来上がる。

「せえ・・・のつ！」

「・・・ぶるああああああああああああああ！」

明久とレオンが一気に本棚に突進した。

「な・・・つ！」

「しまつ・・・

倒れてくる本棚とは逆の方向に注意がそれていた彼らの反応は鈍い。

結果、全員が本棚の下敷きとなつた。

「ハツハーハー！人の恋路を邪魔しようとするからそんな目に遭うのさ！」

脱出しようとがく連中を尻日に古書保管庫から退室する一人。

「おのれ吉井！裏切り者め！」

「覚えていろ！お前の幸せは必ずブチ壊す！」

「・・・本当、どこまで歪んだクラスメイトなんだろ？・・・」

「・・・邪念に歪みつくした哀れなクラスメイトだよ・・・」

二人はどどめに外からモップを使って出入り口を封鎖し、その上で痺れ罠を仕掛けた。罠の前には『近づかないでください。死にます』と書かれた立札を立てておいた。

「さてさて、残っている連中は・・・つとおおつ！？」

嫌な気配を感じて明久が飛びずると、やつさまで明久が立つてい

た場所にボールペンやシャープが突き立っていた。

「誰だつ！」

「…………裏切り者には、死を……」

「おいおい、ムツツリーーがここに来るかい？」

手に各種文房具を構え、康太が立っていた。

「ムツツリーー、覚悟！」

拳を固め、ダッシュをかける明久。

「…………次はカッターを投げる。」

「よし。まずは話し合いをしようじゃないか。」

「…………意思弱いなお前は。」

「…………わかった。」

「それじゃ、まずはそっちの要求を聞かせて欲しい。」

聞かせて欲しいと入ったものの、一人にはその要求は分かつている。

「…………」こちらの要求は……

康太が静かに要求を告げてくる。

「・・・・・グロテスク。」

「待つて！それは既に僕が処刑される方法の話になつていてる…これほど難しい交渉をしたことないよ！？」

「・・・・・交渉決裂。」

「くつ…やっぱりやるしかないのか！？」

構えられたカッターに意識を集中する明久。

「・・・・・大丈夫、目は狙わない…」

「ムツツリーー。それだけで安心できるほど僕はバカじゃないからね？」

「・・・・・そう。」

ヒュッ。

風切り音を上げてカッターが飛んでくる。その目標は…

「僕の右目…？う、嘘つきいいつ…！」

明久は咄嗟に手でカバーする。カッターは、かしやっと軽い音をたてて床に落ちた。

(明久：え？ 刺さつていない？ 刃を出していなかつた！？)

「…………隙あり。」

「つ！」

呆気に取られる明久に、一瞬で肉薄した康太。

「ムツツリーー！ 姫路さんの胸のサイズを知つてるか！」

咄嗟に身を守る為、康太の好むような話題を振る明久。

(明久：つまく食いついてくれ、ムツツリスケベ……！)

「…………そんなものは、常識……！」

(明久：ダメか！ 奴の注意を逸らせないのか！？ どうか、常識だつたの！？ 僕は知らないよ！？)

「…………はあ。ムツツリーーよ。」

「…………（ピタッ）師。」

「僕とキラの住んでる部屋のお隣さんの女の子の胸のサイズは知つているのかい？」

「…………つー

レオンが言つたことに動きを止めた康太。

「…………そんなこと、初耳だ……つー

「教えて欲しければ……」

「師よ、一体何をすればいい…………！」

「…………食いつきが凄いな…………」

レオンの一言半句に完全に食いついている康太。いつもの間はなく、  
聞き返しが素早い。

「僕らを見逃してくれるならば、教えてやるつ。」

「…………交渉成立。」

康太の買収は恐ろしいほどに簡単だつた。

「それじゃ、僕たちは先に行くね。」

この場を立ち去つとする明久を康太が手で制する。

「…………護身用に。」

そう言いながら明久に小さな袋を渡した。

「護身用……？」

「…………仲に刃物が入っている。こぞとこう時に使つとい！」

「

（明久……正直、そんな簡単にはものって持ち歩くもののじゃないと思つ……。けど、今の僕にはありがたいよ。）

実際、まだ曲者連中が残つているのだ。

「ありがとう。困つたら使わせてもらひよ。」

「…………（グッ）」

親指を立て、明久たちに背を向けようとした康太。

「さてムツツリー——よ。約定どおり、教えて進ぜよう……。  
「師よ……！」

レオンが約定のことを言い出し、すかさず身を翻した康太。

「サイズは……」にぎりかねる・・・

!

「ムツシリイーイイイイイイイイイー！」

レオンの呟きに鼻血の海に沈む康太、それに叫ぶ明久。

「・・・ムツツリーーーのことは残念だけど、僕はこの手紙をどうにかして読まないといけないんだ。」

明久はさらに逃走をしようとする。

「・・・そうだ。下見を兼ねて屋上に行こう。」

「明久、屋上だつたら告白定番スポットだよ？お前だつたら絶対行くつて思う野郎がいるはずだぜい？」

「大丈夫だよ。僕がそんな考えに巡り着くなんて思わないだろうから。」

「絶対いるから・・・」

二人はそうやつて屋上に向かい始めた。

現在地・・・2階。

目的地に向かう階段を上ったその踊り場で・・・

「アキッ！レオン！見つけたわよ！」

「げつ！美波！？」

明久の最大の天敵と遭遇。

「おおう、一触即発の気配つていうことを言つんだあー。」

ピコッピコしている明久と違い、レオンはまだ能天気に言っている。

明久は全身を緊張させながら、階段の踊り場で美波の出方を見る。そんな美波は意外にも落ち着いた足取りで明久に歩み寄り、こんな選択を迫ってきた。

「おとなしく手紙を渡して殺されるか、殺されてから手紙を奪われるか、好きな方を選びなさい。」

(明久……おかしい。僕が生きている選択肢が見当たらないよ?)

「さあ……はやく。」

「どうしてそんなにこの手紙にこだわるのさー美波には関係ないじゃないか!」

明久的にはほつきり言って相手が悪い。説得で切り抜けようとする。

「ウチには関係ないって、酷い……アキは本当にそう思つているの……?」

「え……?」

「つまつま……」

美波が急に傷ついたような表情になる。

それに啞然とする明久と、訳の分からない声を出すレオン。

「まさか、それって・・・」  
「だつて、今まで恥ずかしくて言えなかつたけど、ウチはアンタの  
・・・」

いつもと違つてしまらしい美波の様子に、何故か明久の鼓動が速くなる。

「アンタのせいで、『彼女にしたくない女子ランキング』の三位になつてるんだからあああっ！」

「さらばだつ！」

本能の赴くままに逃走行動へと移る明久。屋上を目指してはいたが、恐怖から逃れるために階段を三段飛ばしで駆け下りる。

「逃がすもんですか！人をこんな立場にしておきながら自分だけ幸せになろうなんて、そんなことは許さないわよー！」  
「まだ上に一人いて良かつたじやないかつ！」  
「いいわけないでしょーー？下には何人いると思つているのよー！」  
「（えつと、一年生は全員で三百人くらいだから・・・）せつと百五十人くらい？」

「ひやく」・・・? ビリしてくれんのよつー! 責任とつなさい! - 「

責任つて言われても! -

「とにかく、まずは手紙を渡しなせ! -」

「嫌だ! 絶対破かれるから! -」

「そんなことしないわ! 再発防止のためにコピーを取つて校内にば

ら撒くだけ! -

「そつちの方が酷い! -」

明久は本気で走つてゐるにも係わらず全然引き離せないことに焦つていた。

「ところで美波、階段を走つていてわかつたんだけど! -

「なによ! -」

「今日は白なんだねつ! -」

「なつ・・・! / / / -」

立ち止まり、スカートの裾を抑える美波。

(明久:バカめー) こんな状態で見る余裕なんてあるわけないじゃないか!

(レオン:明久、嘘言つて時間稼ぎするつもりだね・・・?)

「あああああつ! -」

その隙に一気に距離を稼いでいく。

階段、ダッシュが終わり、今度は廊下を駆け抜けた。

空き教室に逃げ込んだ。

動搖する美波の背中を押し、教室の隅に追いやる明久。

「どおおおおおつせいいいいい！」

教室の後ろに設置されている生徒用ロッカーを用い、レオンがバリケードを作った。

「う、うひー！卑怯よー出しなさいー。」

ガンガンと美波がロッカーを叩く音が響く。

女の子の力じや、こんな物は動かせるわけがない。

（明久…よつしゃあ！美波の無力化成功！）

再び廊下へ舞い戻る明久とレオン。

もつ少し、もう少しでこの手紙が読め、後から訪れるであろう幸せを想像していた明久は、屋上へと向かつ足取りは自然と軽くなつていた。

そして、一階を通過して二階の廊下。

「吉井、待つていたぞ。」

須川が立っていた。

「須川君。君まで僕の邪魔をするのかい？」

「もちろんだ。吉井にはここで死んでもいい。」

そう告げて、須川は背中から何かを取り出した。

「ぼ、木刀・・・」

「剣道部から借りてきたんだ。吉井を止めるためになつ！」  
「うわっ！とつと・・・！」

突然須川に切りかかられた明久。寸止めではなく、完全に振り切られる木刀。

それ有何とか横に跳んで避ける明久。

「吉井、手紙を渡すんだ。」

「くつ・・・」

明久は思わず唇を噛む。

(明久・まさか、武器まで持ち出してくるなんて・・・)  
(レオン・・・武器・・・?)

レオンが突如何かを閃いた。

「明久！アンタも武器を持つていいだろ？」「そつか！アレがあつた！」

康太が渡してくれた小さな袋を、ポケットから取り出す。

「くつ！丸腰じゃなかつたのか！」

自分の優位性が消え、焦り始める須川。

「よし！これで勝負は五分五分だ！」

「くそつ！俺はまだ負けたわけじゃない！」

須川が木刀を振り下ろすが・・・

「甘いっ！」

半歩横にステップして紙一重で回避する明久。

目の前には木刀を振り切つて無防備な須川が。

このタイミングを逃さず、持っていた爪切りで須川を・・・

「つて、爪切りで勝てるわけないじゃないかバカあつ！」

思わず爪切りを叩きつける明久。

「・・・吉井、お前って・・・本当にバカだなあ・・・」

「須川三等兵・・・たつた今君がモテない理由がわかつたよ・・・」

「なつー!?」

レオンの発言に驚く須川。

「君がモテないのは・・・その行動全てに原因がある!」「がつ・・・・、そん・・・・な・・・・」

膝から崩れ落ちる須川。

「明久!行くよ!さつさと逃げて、手紙を読むんだろ!?」

「そ、そうだった!」

明久たちは、崩れ落ちたままの須川を置いて、屋上に向かって行つた。

四階の廊下を越えて、階段を昇つて行けば・・・

「やはりこじまで来たか、明久。」

「吉井君、言つことを聞いてください。」

「雄一に姫路さん・・・・・」

屋上に続く階段、その前に立つのはラスボスの雄一と瑞希。

「どうして僕らがここに来ると?」

「屋上はこの学校の告白スポットだからな。単純なお前ならレオンの意見を無視してここに来ると思つていた。」

(明久：くそつ。流石は雄一だ。僕の思考を完全に読んでいるなんて・・・)

「トイレにでも行けば、誰にも邪魔されずに読めるはずなんだがな。・・・」

「『めん雄一』。僕、ちょっとお腹が痛いから先にトイレに行つくるね。」

「吉井君、ずっと氣がつかなかつたんですか・・・・?」

瑞希が心配そうな目で明久を見ている。

「（その視線は耐え難い！）・・・雄二、どうしてそこまで僕の邪魔をするのさ！そんなことをしても、雄二にとつてメリットは何もないはずなのに！」

明久の真剣な質問を受け、雄二も真剣な顔で答え始めた。

「そうだな。確かにお前の言つ通り、こんな行動に俺にとつて何のメリットもない。いや、それ以上に俺は、彼女が欲しいなんていう気持ち自体が全くなない。」

「だったら、どうして・・・？」

「そういう問題じゃないんだよ、明久。俺はただ、純粋に・・・」

迷いの無い目で雄二が言葉を紡ぐ。

「お前の幸せがムカつくんだよ。」

「アンタは最低の友達だ！そもそも友達かどうかも疑わしいよ！」

「さて明久。『おとなしく手紙をよこせ』なんて野暮なことは言わねえ。本気でかかるつてこい。」

雄二は学生服の上着を脱ぎ、ネクタイを外した。

「姫路。上着を持つていてくれるか？」

「あ、はい。」

瑞希に上着を渡して身軽になつた雄一は構えを取つて軽くシャドーをして見せた。

（明久・あの野郎・・・、本当に僕を殺るつもりだ・・・）

「吉井君、止めておいた方が・・・」

瑞希が近くに来て明久の表情を窺つている。

「心配ありがとう。けど、僕はやめる気なんてないから。」

「そうですか・・・分かりました。もづ止めません。」

「・・・ごめん。心配してくれたのに。」

「いえ・・・なんだか吉井君らしいです。」

「僕らしい？・・・つと。これ、僕のも「待ちいや明久！僕に渡せ

！」レオン！？」

明久が瑞希に渡そとした上着を瑞希が受け取る前に搔つ攫う。

「レオン・・・」

「僕が先に中身を見ちやる。」

「酷いよ…ですがにそれは酷過ぎるよ…」

「中身は何かな~つと。・・・・おおつ・・・・完全に。・・・・。瑞希、

破りたい？」

「もつと酷い！」

「・・・あれ?」、これってまさか・・・?」

瑞希は手紙を渡され戸惑っていた。

「姫路さん。」

「えつ! ?あ、はい。なんですか?」

「僕にはわかつてゐよ。優しい姫路さんは手紙にこめられた人の気持ちを踏みにじる」となんてできな~つてこと。だから、おとなしく・・・

「手紙を細切れにするんだ。」

「違うつ! そうじゃない! 雄一、卑怯だぞ! そつやつて僕の台詞みたいにつなぐのは反則だ!」

「はいっ! わかりました!」

「いや、『はいっ! じゃないよ姫路さんつてあああつーそんなに丁寧に手紙を裂かなくてモ! それじゃあもう絶対読めないよね! ?返してつ! 僕の幸せな未来と大切なラブレターとちょっと前の台詞を返してえつ!』

叫んでいる間にも破られていく手紙。それはもう既に原形を全く留めず、紙クズといつ名前で廊下中に散らばっていた。

「・・・まあか、本当に姫路が破るとほ思わなかつた。・・・すま

ん、明久。」

雄一が驚いた様子で瑞希を見て、その後明久に謝った。

驚いたのは明久もレオンも一緒だ。

そんなことは絶対しない子だと思っていたのだから。

「せめてものわびだ。」

そう言って廊下中に散らばった紙クズを集めて持ってきてくれる雄一。

「ありがとう、雄一。最後の可能性にかけて、この紙クズをつなぎ合わせ「・・・未練を絶つてやる。（シユボツ・・・メラメラメラ・・・）」ああ、暖かい・・・まるで僕の凍てついた心を溶かしてくれるような炎だよ・・・つてうそおつ！？ここまでやった拳句、容赦なく燃やすの！？もうこれ100パー読めないよね！？僕の幸せな未来はどこへ行つたの！？」

「明久。お前は知らなかつただろうが「なに！？なんでもいいから早く水を持って来て！」俺はお前の幸せが大嫌いなんだよ。  
「知ってるよバカ！ちくしょー！」

明久の必死の消火活動も空しく、手紙は綺麗サツパリ灰になつてしまつた。

「坂本君は手紙の主が誰だか気にならないんですか?」

灰になつた手紙を見て、何故か安心したかのような声で瑞希が雄一に話しかけている。

「全然興味がないな。俺は明久の幸せを妨害できたらそれでいい。もつとも・・・」

は、はい。なんですか？」

誰かの手紙とか  
七星はいたかな

「羅一之書」三氏正皮之集  
六  
[卷之六]

「そ、そろそろ、その……！」

「雄」！その話、もうと詳しく

८०८ - शुभ रात्रि

「・・・姫路。明久の首が真後ろを向いているぞ。」

「う、ごめんなさいっ！私、大変なことを…」

ナビからいは。

朦朧とした意識の中、雄一の示した方向に耳を傾ける明久。

<吉井いいつ！絶対殺すううつ！>

『ガンホー！ガンホー！』

（明久……願わくは、無事明日の太陽が拝めんことを……）

（瑞希……まさか、おとしちゃつたと思ってた手紙が吉井君の靴箱に入っていたなんて……！きっと拾った人は親切でやつてくれたんだろうけど……。私のせいで酷い目に遭わせてごめんなさい、吉井君。でも、前に吉井君が言つてくれたように、この気持ちは手紙じゃなくて……直接伝えたいから。

だからもう少しだけ……

待つていて下さい。  
(

次回、番外編「バンドの予選のボーカル組の奇策」

番外編 「明久と暴徒とラブレター」（後書き）

今回、小説3・5巻の『僕と暴徒とラブレター』を基にしています。

色々とややこしいところがありましたが、どうにか・・・

そして、なんと10000文字越え・・・

次回はボーカル組が・・・？

お楽しみに！

**番外編 「バンドの予選のボーカル組の奇策」（前書き）**

凄い更新遅れてしまいすいませんでした！

かなり突貫工事的な今回は一応奇策です！

## 番外編 「バンドの予選のボーカル組の奇策」

「…………」

明久が暴徒に殺されかけたその日の放課後、レインは音楽室で悩んでいた。

「レイン、どうしたんだい？」

「レオンかあ……。いやせ、実は……」

レインはレオノに悩みを告げた。

最後の一曲をどうしようか、といつじとを……

「……そ�言えば最後の一曲、決めてなかつたよね……」「でしょ?だからそれで困つて……」

「二人がそう話していたら、音楽室の扉が開いた。

「二人とも早いね。一緒にクラスなのになんでこんなに違うのかなあ？」

天和が来た。

「ああ、天ちゃんか……」  
「……なんか、お葬式ムード？」  
「そんなわけあるかい！」  
「お葬式って……」

雰囲気が一気に吹き飛んだ。

「でさ、一体何の話だつたの？」  
「最後の一曲を決めていなかつたつてこと……」  
「ああ、そゆことか。それなら私とフュイトちゃんと話し合つて決めたことがあるんだけど……」  
「何それ？ 聞いてないよ？」  
「だつて、皆に内緒で決めたもん。フュイトちゃんはしづしづだけどね。」

(レオン・天和……、無理やり押しきつたな……)

「私には無理かもしけないけど、フュイトちゃんの方が予選を切り抜ける歌う力があるからね。」

「そうは思わないけどさ……。それで? 何を決めたの?」

「それはね? ……あー、皆が来てから言つね。」

「何その焦らし! ? めっちゃ気になつてつづづづしちゃんだけど! ?」

『皆が来てから言つ』という天和にレオンは軽く暴走状態になる。

「お前は落ち着け!」

「へふつ!」

結局レインに制止させられ暴走は終了。

数分後、メンバー全員が揃つた。

「それで、予選最後の曲を全く考えてなかつた、といつ事態になつ  
ちゃつて……」

「レイン……じつかりしろよ……」

「あはは……」

「それで、予選最後の曲を全く考えてなかつた、といつ事態になつ  
ちゃつて……」

「レイン……じつかりしろよ……」

「あはは……」

レインの面白に焰は半ば呆れ氣味にいい、キラは苦笑い。

「で、天ちゃんとフュイトが最後の曲を決めてくれたらしいんだけ  
ど……」

「はあ……」

「大丈夫だつて! フュイトちゃんならできるから!」

片隅で落ち込むフュイトを励ます天和。

「つかフュイトがそつなる理由つて天和じゃないの?」

事情を知るレオンはそつまやいた。

「天ちゃん、とにかく何を決めたか言つてくれない？」

「え？あ、うん！えっとね、最後の曲は・・・、フェイトちゃんにソロで歌つてもいい、って決めたの！」

『えつ！？』

天和が投下した爆弾発言。

全員が驚かない訳がない。

「それで、一応候補に挙げた曲が・・・」

「ちょ、ちょちょちょ、ちょっと待つて？フェイトがソロ？」

「そだよ？」

話を続ける天和に話を切る勢いでレオンが話を持ちかけた。

「だ、だつてさ？フェイトのソロは隠し玉だよ！？一気に暴露していいの！？」

レオンが焦るのも無理はない。

フェイトの歌唱力はそれ程なのだ。

「・・・いや、むしろ隠し玉として扱わない方がいいかも？それで、予選通過できればもっと聞かせられると訴えれば・・・！」

「お、おお、レインが策士の顔になつた・・・」

焰が驚きを隠せないとこった言葉を発した。

「OK、それで行こー! とかそっちの方がいいーそれで曲はー?」

「うええー! え、えっと、候補を決めただけなんだけど・・・、『PHANTOM MINDS』に・・・」

急にぐぐっと顔を近づけたレインに驚いてしまい変な悲鳴を上げてしまつたものの、それでも候補を伝えた天和。

「『PHANTOM MINDS』・・・ね・・・」

「あり・・・だな。」

「問題は何もないし・・・、あれはフェイトちゃんしか歌えないだ  
るつじ・・・」

上からレオン・焰・キラ。

が、キラが言った瞬間。

「私、ソロ頑張るー絶対!」

フェイトが覚醒した。

「・・・今まであんな鬱状態だったのにキラが言つた瞬間あんなに  
覚醒するとかないよ普通は・・・恋は盲目、といつ話じやないつ  
て・・・」

レオンはこんな突っ込みをした・・・

「あ、バンドナガ『ラムダーナズ』に勝手にしたナビ・・・・、よかつた?」

レインせ感の感の全員に聞いたが・・・

「俺達のコーダーが決めたもの、文句なんか言えるかよ?・・・

「そうやア。それでも十分いいと感つよ?・・・

「わっか・・・、嘘、あつがとー・・・

そして、『ラムダーナズ』の練習が本格的に始まつた・・・

次回、番外編『予選会!』

番外編 「バンドの予選のボーカル組の奇策」（後書き）

最後がやけに『けいおん!』風味なのは気にしないでください。  
次回はガチ予選やります! が、連載をかなり抱え込んでしまった  
ため、不定期更新になりますのでご了承ください・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9986j/>

---

バカとクロスとつたなき物語

2011年8月3日21時17分発行